

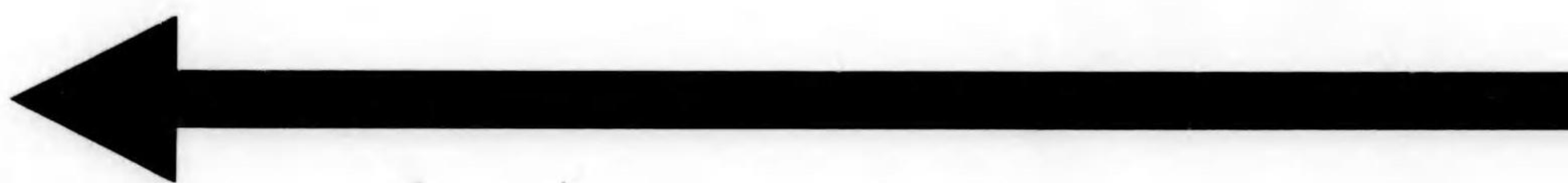
少年叢書
漢文學講
義廿三編

日本外史講義

二



始



少年叢書 漢文學講義

定價各冊金十五錢

- | | | | |
|-----|------------|------|-----------|
| 壹編 | 增訂十八史略講義上 | 貳編 | 增訂老子莊子講義全 |
| 二編 | 增訂正文章軌範講義全 | 參編 | 春秋左氏傳講義一 |
| 三編 | 增訂續文章軌範講義全 | 肆編 | 春秋左氏傳講義二 |
| 四編 | 增訂十八史略講義下 | 伍編 | 春秋左氏傳講義三 |
| 五編 | 增訂四書講義全 | 陸編 | 春秋左氏傳講義四 |
| 六編 | 增訂唐宋八家文講義一 | 柒編 | 三體詩唐詩選講義全 |
| 七編 | 增訂史記列傳講義一 | 捌編 | 易經書經講義全 |
| 八編 | 增訂史記列傳講義二 | 玖編 | 詩經講義全 |
| 九編 | 增訂史記列傳講義三 | 拾編 | 日本外史講義一 |
| 十編 | 增訂史記列傳講義四 | 壹拾壹編 | 日本外史講義二 |
| 十一編 | 增訂附項初本紀列傳 | 壹拾貳編 | 日本外史講義三 |
| 十二編 | 增訂唐宋八家文講義二 | 壹拾參編 | 日本外史講義四 |
| 十三編 | 增訂唐宋八家文講義三 | 壹拾肆編 | 韓非子講義全 |
| 十四編 | 增訂唐宋八家文講義四 | 壹拾伍編 | 武經七書講義全 |

(第二卷の始)

日本外史講義卷之五

賴襄 子成原著 興文社編輯所講義



新田氏前記

楠氏

北畠氏

兒島氏

菊地氏

土居氏

名和氏

得能氏

大正 2. 12. 27 内交

外史氏曰。予修將門之史。至於平治。承久之際。未嘗不舍筆而歎也。嗚呼。世道之變。名實之不相讐。一至於此歟。古之所謂武臣者。勤王云爾。如源氏。平氏。莫不皆然。至於平治之後。乘綱維之弛。以逞鷓臯之欲。有暴悍無忌者焉。有雄猜匪測者焉。雖所爲不同。而其蔑王憲營私利一耳。然猶有可言。曰。王族也。將家也。至於北條氏。以將門屬隸。而坐制朝廷。天下之事。不復忍言也。且夫承久之事。孰曲孰直。筆而傳之者。皆出北條

特105
910

氏盛時。今安考信焉。況君臣之際。寧可較曲直也。乃指斥馮怒。極其凌辱。視萬乘之尊。不啻如孤豚。嗚呼。八洲生民。誰不被先王之遺澤。當時所謂武士者。狂其豢養。供其使喚。雖名位族望遠出。其右者。奔走驅馳。甘爲之役。之不暇。氣類所召。習以爲常。豈可勝言哉。即稱爲公卿者。平時趨蹌朝廷之上。取天子之爵秩。以驕天下。而及於此際。未嘗畫一策以救危難。袖手傍觀。以聽其所爲。是曷尤於武人邪。雖時勢有所未可。君德有所未洽。以致乎此禍。而亦臣子之罪矣。

【修將門之史】...將門は武門といふに同じ。修將門之史とは、即ち此外史を著述するを云ふ。【平治】...二條帝の時の年號。その元年に藤原信賴、源義朝、亂を起す。【承久】...順德帝の時の年號。その三年に北條義時、京都を攻めて三帝を遷す。【舎筆】...筆を置く、筆をさし置く。【世道之變】...世間の道徳が變遷したること。【名實之不相稱】...當に當る也。對する也。名實之不相稱とは、武臣の名ありて武臣の實なく、君を犯し權を竊むを云ふ。【綱維之弛】...綱は大綱なり、維は係なり、弛はゆるむ、解ける也。綱維之弛とは、之によりて自由を網羅を取り捌くことを得べき一筋の大綱が弛みとけたるが如く、上御一人にて下萬民を率ふはしむべき朝廷の政令がゆるみたるを云ふ。【鳴鶴】...音シケウ。母を食ふといふ惡鳥なり。以て凶惡に譬ふる也。【暴悍無忌者】...暴は虐なり、悍は性急なり、無忌は憚る所無きなり。手荒く、氣強くして、人々を忌み憚ることなき者。平清盛を指す。【雄猜匪測者】...雄は、武なり、猜は音サ、疑ふ也、匪は非なり。雄武にして邪推がかくして、その心の測れざる者。源朝を指す。【萬玉憲營私利】...萬は、ないがしろにす、輕んじ侮る。天子の法度を輕侮し、自己の利得を謀り成す。【王族】...源氏は清和帝の系、平氏は桓武帝の統。【將門屬隸】...武門の家來、即ち天子の又家來に當る。北條氏が世々源氏に屬せるを云ふ。【坐制朝廷】...北條氏が天子の廢立、攝政の進退をなせしを云ふ。【不復忍言】...餘りの事に再び話し出され兼ねるはと也との意。【安考信】...北條氏に阿諛して筆記せしものなるべければ、今日に至りては、其事實の真相を考へ定むること難きを云ふ。【君臣之際】...君と臣との關係、天子と北條氏の關係を云ふ。【較】...相くらべる。【指斥馮怒】...天子を指しつけて惡口し盛んに怒を肆にする。馮怒の二字は、左傳の昭公五年の條に、今君奮馮電馮怒とあるより出づ。馮は盛なり。一説に、馮は滿なり。【凌辱天子】...天子をおしつけ恥辱を與へる。【萬乘之尊】...天子の御位を云ふ。【八洲】...古者、日本を稱して大八洲國と云ふ。【狃其豢養】...豢は音クワン又はケ。穀を以て獸を養ふ也。當時の武士が、鳥獸が人に飼養に徒されたまひ、禍を云ふ。

【外史氏曰く、予(山陽)武門の歴史を著述して、平治、承久の頃に至つたときは、書きかけた筆をさし置いて歎息しない事は無い。あゝ、世間の道徳が變遷して亂れて仕舞ひ、名と實との相應せざることを、かほどまで成つたものであるか。昔を回顧すれば、古の武士といふ者は、天子の御爲めに骨を折つて力を盡すばかりであつて、源氏でも、平氏でも、皆左様で無い者は無かつた。然るに、平治の後に至つては、朝廷の法度の弛みたるにつけて込んで、鳴鶴などの惡鳥にも比すべき怨を思ふ存分にほしまゝにすることになつて、其中には、手荒く氣強くして一向人に遠慮せぬ清盛の様な者も有り、心武く邪推深くして心の奥の測られぬ頼朝の様な者もあつて、其等の人の行つたところの事はそれと異つて居るけれども、其等の人が、朝廷の法度を輕んじ侮り、私の利益を謀り成すのは、同じい事であつた。併しながら、其等の人々はまた話に成るところがある。其等は、其等の人が王族であり、將家であつたので、此に至るも亦自然の勢とも謂はれぬこと無し。けれども、北條氏に至つては、將家の家來(即ち朝廷から言ふときは又家來)の身分でありながら、その癖、すはつて居つて朝廷を押し付けて、天子の廢立、攝政の進退などの主動者となつて居るので、こゝに至つては、天下の事は、再び話し出され兼ねるほど、情ない有様である。其上に、承久の變亂の事は、朝廷、北條氏との執れが正しくないのか、執れが正しいのか、此事を筆記して後世に傳へた歴史の類は、いづれも皆、北條氏の勢力の盛んな時に出来たものであるから、今日に於ては、どうして、其信實なる事情を考へ定むることが出来やうか。まして、君と臣との關係では、どうして、執れが正しくないか執れが正しいか、と云ふ事を比較して見て、彼れ此れ言ふべきものでは無いのである。然るに、北條氏は、天子を指しつけて惡口し盛んに怒を肆はし、いかに云ふ事を比較して見て、彼れ此れ言ふべきものでは無いのである。御方を見ること、一匹の豚ほどに思はぬと云ふべき位である。あゝ、この日本國中の人民は、誰が御代々の先王の殘されたる御恩澤を蒙らぬのがあらうか。然れども、其時の所謂武士といふ者は、北條氏に養はれて居るのに慣れて、北條氏の命令使役に服従して、官當門閥が遙かに北條氏より勝れて居る者と雖も、北條氏の爲めにかけ廻り、得心して追ひ使はれて居ることに一生懸命になつて居つて、同類相呼び合つて、慣れては普通の事となつたのであつて、御話になつたものでは無い。そして又、一方に於ては、公卿と云つて居る者たち、平生事無き時には、朝廷の上にて、上手に立ち廻つて居り、天子の官位俸祿を戴いて、天下に威張つて居つたが、此承久の變亂の時、任せて置いた。して見れば、是れは、是れは、どうして武人のみを咎むべきであらうか。當時、時勢も未だ宜しからず、君主の御徳も未だ十分に行き渡らぬところがあつたので、此災禍を招き致したのであらうけれども、しかし、亦、朝廷の臣子(即ち公卿たち)が惡かつた爲めに、斯の如き事に立ち至つたのである。

自是以來。百餘年間。廢立黜陟。一仰其處分。而朝廷蹙蹙。如被束縛。至於

窺其顔色以爲憂喜。何其甚也。余聞後鳥羽上皇之徙隱岐也。因石窟縛屋。纒庇風雨。十有九年乃崩。蓋父子三帝隔絕千里。各居窮海。終天不得相見。是其心何嘗一日忘北條氏哉。則元弘之事。萬不可已也。而其勤王之功。余以楠氏爲第一。微楠氏。則西狩之駕。吾見其與承久歸一轍而止而已。

【自是以來百餘年間】……承久年間より北條高時滅亡の時頃までを云ふ。【廢立黜陟】……天子を廢したり立てたり、公卿諸官を遷退任免すること。【處分】……處置。【蹙蹙】……縮小の貌。ちぢまる也。【窺其顔色以爲憂喜】……北條氏の顔色を見て、心配したり喜んだりする。【底】……おほふ。よける。【父子三帝】……承久の時、北條義時、後鳥羽上皇を隱岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に、後、阿波に徙す。【窮海】……窮極なり。遠き海。終天】……此世の有らん限り。【元弘之事】……元弘は後醍醐帝の時、後醍醐帝が北條氏を討ちたまひしを云ふ。【微】……無かりせば。【西狩之駕】……狩は巡狩。後醍醐帝が隱岐に徙されたまひしを云ふ。【歸一轍】……轍は車の跡なり。歸一轍とは前と同様になるを云ふ。

何哉。彼北條氏雖失於政。其權力有嬰甚焉。藉累世之威。而加積弱之餘。百萬虎狼隨其指呼。魚咻中國。莫之或撻。天下方以承久爲戒。重踵屏

息。莫敢言勤王之事。而楠公獨以眇眇之軀。唱義其間。當其衝路。挫其爪牙。以鼓舞四方義士之氣。使之一時踵起。殄戮元惡於斧鉞之下。報列聖之深仇。雪累世之大恥。天下萬姓。再得仰日月之光。雖曰屬皇運之泰。而非公爲之唱。焉能至此。是烏知非天生斯人。以匡濟世道哉。

【藉】……依る。累世之威】……九代の間續ける威勢。【積弱之餘】……だんぐ衰弱せし後の朝廷。【百萬虎狼】……諸國の猛將悍卒に喩ふ。【指呼】……さしづ。【魚咻】……音ハウキウ。詩の大雅に、魚于中國とあり、鄭氏箋に、自ら誇り氣健なる貌と云へり。咻は然と通ず。【中】……都近く。【撻】……觸る。迫り近づくなり。【以承久爲戒】……鳥羽上皇の關東征討の謀に與かりし者は皆罪せられしを以て自ら戒と爲す。【重踵屏足】……足を重ねて立ち、息を殺して、極めて恐懼して居る。【眇眇】……音ベウウ。微細の貌。【其間】……北條氏を恐れて勤王の事を言ふ者無き間。【衝路】……攻め寄る路。正面。赤坂、千早の籠城を指す。挫其爪牙】……挫は毀折なり、取りひしむ也。鳥は爪を以て身を守り、獸は牙を以て身を守る。北條氏の輔佐たるものを取りひしむ。【鼓舞】……はげまして引き立つる。【踵起】……引き續いて立つ。【殄戮】……音テンリク。残り無く滅ぼす。【元惡】……悪人の首領。高時を指す。【斧鉞】……音フエツ。鉞は大斧。古者支那にて出征の際大將に賜ふ武器なり。【列聖之深仇】……後鳥羽帝以來の深き仇。【萬姓】……萬民。【日月之光】……天子の聖徳に喩ふ。【皇運之泰】……泰は大に通ずるの時なり。天子の御運が開け通ずるの時。【唱】……首唱、さきがけ。【烏】……ウ。【天生斯人】……楠公を指す。【匡濟】……たすく。

後之論者。或有比之唐張巡者。巡戴全盛之唐室。拒狂胡之偏師。有一二顔

爲之先。有許遠爲之助。而不過遮蔽江淮。守城致死。以公視之。勢之難易。功之大小。豈可同日而語也。要之位不滿其器。莫能展其才。而終能以躬殉國。靖獻先王。餘烈所及。不獨其子孫。自公卿。自將士。各執弓箭。以勤王事。概皆聞楠氏之風而起者也。嗚呼。如楠氏者。真可謂不愧武臣之名矣。余故敘楠氏之事。以繼源平氏云。

【張巡】唐の玄宗のときの人。安祿山の亂のとき、睢陽城を守り、江淮を制して、戰死せし人。「唐室」……唐の帝室。「狂胡」……狂妄なる胡人。安祿山は胡人なるが故に斯く云ふ。「偏師」……片をなすの軍隊。全軍に非ず。「二顔」……河北の顔真卿、顔杲卿の二人、張巡よりも先に義兵を擧ぐ、「許遠」……許遠は張巡と共に睢陽城に籠城せし人。「江淮」……二水の名。張巡、許遠と睢陽城を守り。賊將甲子奇之を攻む。城中糧盡く。巡遠諒りて曰く、睢陽は江淮の保障なり。若し之を棄てば、賊必ず長驅せん。堅守して救を待つに如かずと。遂に固守せしが、城陷るに及んで、二人之に死せり。「視」……くらす。「位不滿其器」……楠公は五位の判官たりしが故に、位が公の器量に釣り合はぬと云ふなり。「展」……十分に揮ふ。「以身殉國」……國家の爲めに討死する、漢川にて戰死せし事を指す。「靖獻」……書籍の微子篇に、自靖、人自獻。于先王とあり、註に、靖は安なり、各其義の盡す可き所を盡し、以て自ら其志を先王に達し神明に愧づるなからしむるのみと云ふ。茲では、先王即ち後鳥羽帝以後の御歴代の爲めに、盡すべき職分を盡すの意なり。「餘烈」……残れる忠烈。「公卿」……忠顯、顯家の諸公を指す。「將士」……菊池、土居、得能の諸氏を指す。

楠氏。本姓橘氏。出於敏達天皇。天皇曾孫曰諸兄。爲左大臣。賜姓橘。橘氏後裔。或降在民間。其居河内者。以楠爲氏。楠氏始著於後醍醐天皇之時云。

【敏達天皇】……欽明天皇の第二皇子、人皇第三十世。「著」……あらはる、世に知らる。
【橘氏】……本姓は橘氏であつて、敏達天皇から出たものである。天皇の曾孫の諸兄と曰ふ人が、左大臣となつて、橘と云ふ姓を賜はつた。橘氏の子孫の中に、降つて民間に居るものもあつたが、其子孫の河内に居つた者は、楠を以て氏として居つた。楠氏は、始めて後醍醐天皇の時に世に知られるやうになつたと云ふことである。

天皇於後鳥羽爲玄孫。後鳥羽二子。順德。土御門二帝。竝爲北條氏所徙。以崩。後嵯峨帝以土御門之皇子爲北條氏所立。而常痛先帝之蒙塵。欲俟時報之。而後深草龜山相繼即位。皆帝之子也。帝謂後深草優柔不足與有爲。而愛龜山有英氣。可以繼其志。故遺詔。龜山之後。永承皇統。故後宇多以龜山太子立即位。而北條氏立後深草之皇子。又立其皇孫承其後。後宇多上皇遣大納言藤原定房責其再違遺詔。乃立上皇皇子。實後二條帝。遂建兩統更立之議。及帝崩。又立後伏見之弟。時後宇多次子尊治。幼有英質。龜山上皇奇之。遣定房諭北條氏而立之。是爲後醍醐天皇。

【玄孫】……曾孫の子。後鳥羽——土御門——後嵯峨——龜山——後宇多——後醍醐。「蒙塵」……天子が亂に逢うて出奔するを云ふ。天子は九重の中に居り、外に出づるとき道を清めて行く。然るに亂に逢うて外に出づるときは、道を清むるに及ばず、故に蒙塵と云ふ。「優柔」……

……やさしくして柔弱なること。【英氣】……すくられたる氣象。【兩統更立】……後深草、龜山二帝の系統が代るく御位に即くこと。【英質】……萬人にすくられたる氣質。
後醍醐天皇は、後鳥羽天皇から見るときは、玄孫に當られる。後鳥羽帝の二人の皇子、順徳、土御門の二帝は、いづれも北條氏の爲めに、遠國に徙され給うて、崩御になつたのである。後醍醐帝は、土御門帝の皇子であつて、北條氏の爲めに立てられたのであるが、平生、先帝が亂に逢うて遠國に徙されたことを痛ましく御思ひになつて、然るべき時機を待つて遺恨を報いやうと御思ひになつて居つた。そして、後深草、龜山の二帝が相繼いで御位に御即きになつたが、皆、後醍醐帝の皇子であらせられた。然るに、後醍醐帝は、同じ御子であるけれども、後深草は、やさしく柔弱な御方であるが、一處に大事を爲すことは出来ないと御思ひになり、そして、龜山の方には、すくられたる氣象があつて、北條氏に報いやうとの御志を繼いで事に當ることが出来るのを愛せられて、それ故に、龜山の子孫が末長く天子の系統を承け繼ぐやうにせよと、御遺言の御詔をなされた。それ故に、後宇多帝が龜山帝の皇太子を以て御位に即かれた。然るに、北條氏は、後深草帝の皇子（伏見帝）を立て、又、その皇孫（後伏見帝）を立て、其後を御承け繼ぎなされるやうにしたので、後宇多上皇は、大納言藤原定房を御使者として御遣はしになつて、北條氏が二度までも後醍醐帝の御遺言の御詔に違つたのを御譴責なされた。そこで、北條氏は、後宇多上皇の皇子を立てたが、それは實に後二條帝である。かくて、北條氏は、とうとう、後深草、龜山の二帝の御系統が代るく御位に御即きになるといふ議を定めた。後二條帝が崩御になるに及んで、北條氏は又、後伏見帝の弟（花園帝）を立てた。其時に、後宇多上皇の第二の皇子尊治親王は、御幼少の時から、すくられた氣質があらせられた故に、龜山上皇は、之を立すべしと思召して、定房を御遣はしになつて、北條氏を論じて、此御方を御立てなされた。これが後醍醐帝である。

當_レ天皇之時。北條高時失_レ政。其家宰長崎高資等恣_レ權。將士離_レ心。多_レ背叛者。天皇陰謀。乘_レ是時討_レ滅之。乃勵_レ精求_レ治。置_レ記録所。親聽_レ訟訴。與_レ大納言藤原資朝。右少辨藤原俊基等謀。稍延_レ攬_レ豪傑。置_レ酒款語。破_レ禮節。結_レ驩心。目曰。無_レ禮講。美濃人士岐頼兼。多治見國長與焉。頼兼族頼春。娶_レ齋藤利行女。利行。六波羅府吏也。一夕。頼春偶與_レ妻語。泣下。妻問_レ何泣。頼春告_レ實。妻走告_レ其父。父告_レ之六波羅。府發_レ兵襲_レ頼兼。國長。二人力鬪不克。自殺。高時聞_レ之。遣_レ兵來執_レ資朝。俊基。帝因賜_レ誓書。事得_レ寢。乃釋_レ俊基。流_レ資朝。而

帝志益_レ銳。與_レ皇子護良謀。收_レ結南都。叡山僧徒。高時又覺_レ之。捕_レ僧圓觀等。再執_レ俊基。遂與_レ宰高資定議。欲_レ廢_レ帝如_レ承久故事。遣_レ二階堂貞藤。潛_レ兵西上。夜至_レ六波羅。府將北條仲時。北條時益。得_レ高時書。未_レ發_レ封也。帝謀_レ知之。乃用_レ護良計。御_レ監輿。逃_レ之南都。使_レ大納言藤原師賢服_レ袈衣。詐稱_レ帝。赴_レ叡山。僧徒大喜來_レ聚。一夕得_レ萬人。而仲時。時益。謂_レ帝猶在_レ宮中也。遣_レ兵索_レ之。不獲。則收_レ大納言藤原宣房等四人而去。以_レ萬人攻_レ叡山。護良等擊_レ卻之。而僧徒知_レ帝非_レ眞。悉散_レ去。

【家宰】……家令、即ち内管領、勳精……勳は勉力なり、精は眞氣なり。凡そ物の至純を精といふ。勳精とは精力を勵ます也。【記録所】……天下の訴訟を裁判する役所。【右少辨】……辨は八省を分掌し、庶事を承りて下に達し、太政官内を亂判し、文案を署し、稽失を勾へ、被管の諸司の宿直を監す。左右あり、左は中務、式部、治部、民部の四省、右は兵部、刑部、大藏、宮内の四省を管す。左右に各、大辨、中辨、少辨あり。太政官中の重職なるを以て、才名ある人を以て之に任ずるを常とす。【延攬】……引き寄せて氣を取る。【款語】……打ち解けて談話する。【結驩心】……驩は歡と同じ。互に打ち解けたる心をつ結び合はす。【講】……集會の義なり。無禮講とは、禮儀を構はぬ集會の意。【土岐頼兼多治見國長】……此時二人は京師に居り、故に此集會に與れるなり。【事得寢】……事がそれなりに済んで仕舞ふことが出来た。【釋俊基流資朝者】……俊基を釋して京師に還らせ、資朝を佐渡に流す。【收結】……人心を取り收め結び固める。【僧圓觀】……法勝寺に住し帝の謀に與れる者【承久故事】……天皇を徙したる先例。【謀知之】……間諜を入れおきて此事を知る。【監輿】……竹を編めて作りたる輿。微賤なる者の乗物。【袈衣】……音コニイ。天子の御服。
後醍醐天皇の御時に當りて、北條高時は、政治上の失策が多く、その家の内管領なる長崎高資等が、權力をほしいままにしたので、將士どもは北條氏から心を離し、之に背き謀叛するものが多かつた。そこで、天皇は、人知れず、この時につけ込んで北條氏を討ち滅ぼして仕舞はうと御企てになつた。そこで、精力を勵まして、天下の治平ならんことを御心掛けなされ、記録所と云ふ役所を置いて、御自身で天下の訴訟を御聽きなされ、大納言藤原資朝、右少辨藤原俊基など、御相談なされて、だん／＼に豪傑どもを味方に引き寄せ、宴會をして打ち解けて物語り、禮儀作法には構はぬことにして、豪傑どもを打ち解けたる心をつ結び合はせるやうにして、名づけて無禮講と曰つた。美濃の人士岐頼兼、名治見國長なども其仲間に加はつて居つた。頼兼の一族なる頼春は、齋藤利行の娘を娶りて妻として居つたが、利行は六波羅の役

所の役人であつた。ある晩に、頼春は、偶然、妻と話して涙を流したので、妻は、何故に御泣きなされるかと問うた。頼春は、かくくの次第である、事實を話した。そこで、妻は、急ぎ行きて其父利行に告げた。其父利行は、之を六波羅に告げた。そこで、六波羅の役所では、兵士を繰り出して、頼兼、國長を不意撃した。二人は力を盡して闘つたけれども、勝ちおぼせることが出来ずして、自殺して仕舞つた。高時は、此事を聞いて、兵士を派遣して、來つて資朝、俊基を捕へた。帝は、それに就いて、異心無き旨の御誓の書面を賜はつたので、事はそれなりに落着くことが出来た。北條氏は、そこで、俊基を釋して京都に還し、資朝をば佐渡に流した。かくて此度の御企は失敗であつたけれども、帝が北條氏を滅ぼさうとの御志はますます鋭くて、皇子護良親王と御相談なされて、南都、叡山の僧徒を味方に引き入れなされた。高時は、又、此事を感付いて、僧圓觀等を捕へ、再び俊基を取り押へ、とうとう内管領高資と評議を決定して、帝を廢して承久の時の先例の如く遠地に徙し奉らうと思つて、二階堂貞隆を派遣して、兵士を人知れず繰り出し、西の方京都に上らしめ、夜、六波羅に到着した。六波羅の役所の頭領なる北條仲時、北條時益は、高時からの書状を得たけれども、未だ封を開いて見なかつたうちに、帝は間諜によりて此事を御承知になつたので、そこで、護良親王の計略を用ひ、下賤の者の乗るところの竹與に御乗りになつて、逃げて南都に御出になり、大納言藤原師賢をして天子の御衣を着ていつはり帝と稱して叡山に赴かしめた。叡山の僧徒は、大に喜んで來り集つて、一晚にして一萬人ほどに及んだ。そして、仲時、時益は、帝はまだ御所の中に御出になること、思つて、兵士を派遣して帝を獲させたいけれども、見付からなかつたので、そこで、大納言藤原宣房等四人を召し取りて立ち去り、萬人の兵士を引き連れて叡山を攻めた。護良親王等が、撃つて之を退却させた。さうする中に、僧徒は、此處に御出になる帝は本當の帝では無いと云ふ事を知つて、悉く解散して去つて仕舞つた。

當是時。帝在笠置山。仲時。時益聞之。遣兵來攻。未至。帝下詔四方。赴難。莫復應命者。帝憂迫。適夢紫宸殿南有大樹。樹下設虛位。童子來垂泣。白曰。天下無地容陛下。獨有此座而已。既覺。自念。文木從南楠。當有姓楠人。出扶朕以定禍難。因召山僧。訪之曰。地方豪傑。豈有姓楠者乎。對曰。金剛山之西。有楠正成者焉。正成之父。嘗憂無子。與其妻祈於志貴山。而生焉。少字多聞。長以材武名。嘗平土寇。以功爲兵衛尉。帝曰。是也。使中納言藤原藤房往召正成。正成即決意赴之。從藤房詣行在。帝使藤

房言曰。討賊之事。朕一以託汝。因命坐問計。正成感激。對曰。天誅乘時。何賊不斃。東夷有勇無智。如較於勇。舉六十州兵。不足以當武藏。相模。較於智乎。則臣有策焉。雖然。勝敗常也。不可以少挫折變其志。陛下苟聞正成未死也。則毋復勞宸慮。乃拜辭還。實元弘元年八月也。

【笠置山】山城の東南相樂郡に在り、南は大和に接す。【詔】天子の命なり、臨時の大事を詔とし、尋常の小事を敕とす。【憂迫】憂は愁なり、迫は逼なり。ひとくさしせまつて苦になる。【適】たまく、丁度其時に。【虛位】空位。坐して居る人無き御座。【泣】なみだ。【文】文字。【金剛山】河内に在り。【志貴山】大和平群郡に在り、西は河内に接す。毘沙門堂あり。【少字】幼名。【土寇】土民の一揆。【命坐】著座することを命ずる。【感激】感じはげむ。【東夷】關東の夷狄、北條氏の兵を云ふ。【如】若し。【策】謀計。【少挫折】小なる敗戦を云ふ。【宸慮】音シンリョ。天子の居る宸と云ふ。慮は思ひ謀る也。天子の御心。【問計】この時に當りて、帝は、笠置山に居らせられた。仲時、時益は、之を聞いて、兵士を派遣して來つて攻めさせることにしたが、未だ到着しなかつたうちに、帝は、詔を四方に御下しになつて、兵を起して危難を救ひに參れと仰せられたけれども、また敕命に應じて參る者は無かつたので、帝は、ひとくさし居られた。丁度其時に、夢を御覺になつたが、其夢は、御所の紫宸殿の南の方に大なる樹があつて、其樹の下に、空虚なる御座が設けてあつたが、二人の童子が來つて涙を流して、申し上げるには、この廣大なる天下の中に、陛下を御容れ申すべき場所を御座りませぬ。たゞ此御座があるばかりで御座りませぬと申し上げた。帝は、その夢が御覺めになつてから、御自分御考なされるには、文字の上から言へば、木の字が南の字に從つて居るのは、楠の字である。されば姓を楠といふ人があつて出で來つて朕を扶助して禍難を平定してくれるのであらうと御考になつて、そこで、此山の坊主を召し出して之に御問ひなされるには、此あたりの家業に、楠といふ姓の者があるかと御問ひなされた。すると、此山の坊主が御答へ申し上げるには、金剛山の西に、楠正成と云ふ者が御座りすと申しましたが、成長いたして後、材藝武勇を以て名聲高く、以前に土地の一揆を平定致した事がありましたので、幼名は多聞になりましたと申し上げた。帝が仰せられるには、是れであると仰せられて、中納言藤原藤房をして往いて正成を召し出させた。正成は、即座に決心して御召に應じて出掛けて、藤房に從つて行在所に參つた。帝は藤房をして言はしめられるには、賊徒を征討する事は、朕、一切汝に任せると仰せられて、そこで、著座することを命じて、賊を討つたの謀を御尋ねになつた。すると、正成はひとくさし感じ入りて、御答へ申し上げるには、此度陛下が賊徒を御誅罰なされる事は、時機の宜しきに叶つて居りますれば、如何なる賊といへども斃れない者は御座りませぬ。關東の夷狄は、勇氣は御座りまするが智慧は御座りませぬ。若し勇氣を比較しまするときは、全國六十州の兵士を擧げまして、武藏、相模二國の兵士に匹敵することは出来ませぬ。けれども、智慧を比較いたしますときは、私に計略が御座ります。併しながら、戰爭の勝つたり負けたり致します事は、あたりまへの事で御座りますから、小い敗戦がありますとて、其を以て志を變へることがあつては成り

ませぬ。陛下、苟くも正成が未だ死んで居らぬと御聞きになりますとときは、聖運遂に開かるべき事と御思ひになつて、御心を煩はしあそばされぬ様に御願申上げますと曰つて、そこで、御暇乞申上げて、還つた。其時は實に元弘元年八月の事であつた。

正成於是城于赤坂。將以奉乘輿焉。而賊兵已圍行在。參河人足助重範善拒。備後人櫻山茲俊起兵應之。高時乃遣北條貞直。足利高氏等六十三將。以武藏相模等五州兵十餘萬騎西上。未至而笠置陷。重範被擒。錦織俊政。石川義純死之。帝與藤房奉神器逃。

【赤坂】……河内に在り。【乘輿】……天子の乗る所の車輿。敢て至尊を斥言せず、故に斯く云ふ。【神器】……三種の神器。正成は、こゝに於て河内の赤坂に城を築いて、まさに天子を御迎へ入れ申さうとした。然るに賊軍は、もはや、笠置山なる行在所を圍んだ。參河の人足助重範が善く拒ぎ戦つた。備後の人櫻山茲俊が兵を擧げて官軍に應じた。高時は、そこで、北條貞直、足利高氏等六十三人の大將を派遣して、武藏、相模、五箇國の兵士十餘萬騎を引き連れて、西の方京都へ上らしめた。その大軍が未だ到着しないうちに、笠置は落城して、重範は生捕にされた。錦織俊政、石川義純は、そこで討死した。帝は、藤房と、もはや、三種の神器を御持ちになつて、御逃げ出しになつた。

於是貞直等諸軍徑赴赤坂城。城纔成。取農粟充糧焉。兵僅五百人。正成分其三百。以弟正季。族和田正遠將之。出城葺山而俟。東軍。東軍至。望見其城。可方百餘步。乃憫笑曰。此可隻手掀耳。爭下馬。肉薄攻之。正成令士卒齊射。立斃千餘人。東兵沮卻。卸甲且息。而伏兵自左右起。正成以二百騎。關門突出。三面合擊。東軍大驚擾亂。棄器械而走。且日。東軍分爲二。一備伏。一圍城。正成豫築復垣。繩懸其外垣。敵蟻附焉。乃斷繩。敵與

垣俱墜。乃投大石巨材。殺七百餘人。居四五日。東軍修攻具。蒙楯而進。鐵鉤鉤垣。垣殆崩。正成令城兵人執長柄杓。沃沸湯。敵焦爛而退。

【徑】……たゞちに。【農粟】……農民の所有せる米穀。【葺山】……葺は音へい。敵と通ず。山の陰に隠れて敵から兵の多少を見すかされぬ様にする也。【可隻手掀耳】……隻は奇なり。掀は高く擧ぐる也。片手にて指し上げられるほどだ。【肉薄】……城を攻むるときに極近くまで押し迫ること。【沮卻】……氣を吞まれて退却する。【卸甲】……鎧を脱ぐ。【復垣】……二重の塀。【蟻附】……蟻の如く附く。【鐵鉤】……鐵を以て作りたる熊手。【鉤垣】……垣に引つ懸ける。【長柄杓】……柄の長い柄杓。【沃】……澆灌なり。そゞ、あびせる。【沸湯】……にえ湯。【焦爛】……火傷(ヤケド)する。

【圍城】……そこで、貞直等の諸の軍勢は、たゞちに赤坂城の方に行つた。城はやつと出来上つたばかりで、農家の所蔵せる米穀を徵發して兵糧にあつて、居つた位であつた。兵士は僅に五百人しか無かつた。正成は、その中の三百人を分けて、弟の正季と一族の和田正遠とを以て之に將として、城を出で、山に散はれて敵から兵士の多寡を見すかされぬやうにして、關東の軍勢を待たせて置いた。關東の軍勢は到着して、其城を眺めるに、まことに小さい城で、方百餘歩ばかりしか無かったので、氣の毒げに笑つて曰ふには、これは片手で指し上げることが出来るほどだと曰つて、争うて馬から下りて、城の極近くまで押し迫りて之を攻めた。すると、正成は、士卒をして一齊に射させて、即座に千餘人を斃した。關東の兵士は氣少しく衰へて退却し、鎧をぬいで、まさに休憩しやうとすると、伏兵が左右から出で來り、正成は二百騎を引き連れて城門を開いて突き出で、三方から一處に攻撃したので、關東の軍勢は大に驚いて隊伍を亂し、兵器の類を打ち棄て、逃げ走つた。明るる日に、關東の軍勢は、二手に分れて、一手は伏兵に備へることにし、一手は城を圍んだ。正成は前以て二重の塀を築いて、繩をその外の塀に懸けて釣り上げて置いた。敵はその塀に、蟻の如く群り附いたので、そこで、外の塀を釣り上げて置いた繩を断ち切つた。すると、敵の軍勢は、攻め道具を用意し、楯の後に隠れて進み、鐵製の熊手を以て城の塀に引つかけたので、塀は殆んど崩れかゝつた。正成は、そこで、城兵をして人ごと柄の長い柄杓(ヒシヤク)を持つて沸え切つて居る湯をあびせかけた。敵兵は火傷をして引き退いた。

東兵於是築營環城。爲持久計。而城内餘五日食。正成謂衆曰。吾先天下舉大事。固不圖生。雖然。天子在焉。吾未可以死也。吾今佯死。敵則去。去則復起。使彼疲奔命。是全驅以亡敵之術也。衆曰善。乃鑿坑填尸。以薪蔽之。乘風雨。夜稍稍逃出入。金剛山。畱一人。誠曰。度我遠而舉火。火起。

敵爭上城。見坑中積尸。謂正成既死也。引兵東去。使湯淺定佛代守其城。櫻山氏兵聞之潰散。茲俊自殺。

【環城】四方から城を取り巻く。【持久計】久しく圍んで居る計。【不圖生】生存しやうとは思はぬ。【疲奔命】命令を奉じて彼處此處に奔走して疲れる。【術】手段。【壘坑填尸】穴を穿り死骸を埋める。【潰散】積れる水の潰ゆるが如く、衆の散亂する。

關東の軍勢は、是に於て、陣營を築いて四方から城を取り巻き、長く陣營して圍んで居る計畫をした。然るに、赤坂城の内では、僅に五日間の兵糧を餘すのみとなつた。そこで、正成は、部下の者共に向つて曰ふには、われは、天下の人々よりも先に、大事を起したのであるから、勿論無事で生存して居らうとは思つて居らぬ。けれども、天子様が御出でになることであるから、われは未だ死ぬることは出来ぬ。われ、今、伴りて死んだ風をしたならば、敵は去つて仕舞ふであらう。敵が去つて仕舞つたならば、われは復た出で来て、敵をして奔走の爲めに疲れさせるやうにしやう。これが、我が身を全うしてそれで敵を亡ぼすの手段である。と曰つた。部下の者共が曰ふには、宜しう御座いますと曰つた。そこで、穴を穿りて屍骸を埋め、薪を以て其上に敷ひかぶせて置いて、風雨の時を好機會として、夜、ぼつくと逃げ出して、金剛山に入ることにし、一人を垂め置きて、これに注意して曰ふには、われ等が城を出て餘程遠く行つた頃を見計らつて城に火を付けよと曰つて置いた。やがて、火の手が舉ると、敵が争うて城に上つて、穴の中に積み込んである屍骸を見て、正成はもはや死んで仕舞つたと思ひ込んで、兵士を引き連れて、東の方へ去つて仕舞ひ、湯淺定佛をして代つて其城を守らせて置いた。櫻山氏の兵は、此事を聞いて、ちりちりばらばらに散り去つて仕舞ひ、茲俊は自殺した。

賊執帝于宇治。奉于平等院。遂欲徙之六波羅。帝令備行幸儀。乃往。賊乃立後伏見。帝子量仁即位。實光嚴帝。請帝傳神器。弗聽。請帝削髮。又弗聽。每日沐浴。拜皇祖如常禮。賊畏憚之。僧良忠謀奪帝。不成。二年二月。高時徙帝于隱岐。其禮比承久頗厚。參議源忠顯、嬪藤原氏從。而賊將佐佐木高氏等以兵三千護送。由山陽道。兒島高德又謀奪之。復不成。

【宇治】山城に在り。【平等院】宇治に在り。【沐浴】髪を洗ひ身を洒ぐ也。【皇祖】天照大神。【常禮】平時の禮儀。【頗厚】餘程手厚し。【嬪藤原氏】嬪は女官なり。三位局。

賊北條氏、後醍醐帝を宇治にて取り押へ、平等院に御連れ申して、とうとう帝を六波羅に徙し奉らうとした。帝は、行幸の儀式を備へさせて、そこで往かれた。賊は、そこで、後伏見帝の皇子量仁親王を立て、御位に即かせ奉つた。これは實に北朝の光嚴帝である。そこで、賊は、後醍醐帝に三種の神器を光嚴帝に御傳へなされるやうにと請うた。けれども、御聞き入れにならなかつた。賊は、又、帝に髪を御剃りにするやうにと請うた。けれども、又、御聞き入れにならなかつた。帝は、毎朝、髪を洗ひ身を洒いで、皇祖天照大神を拜せらるゝこと、平時の禮式の如くであつた。賊は、帝の威儀に畏れて氣が置けた。僧の良忠が帝を奪はうと企てたが、成功しなかつた。二年二月に、高時は、帝を隱岐國に徙し奉ることにした。其遷幸の禮式は、承久の時と比較するときは餘程手厚くて、參議源忠顯、女官の藤原氏が御供して行つた。そして、賊の大將佐々木高氏が兵士三千人を引き連れて、護衛して送り届けることになつて、山陽道を通つて行つた。兒島高德が、又、途中で帝を奪ひ取りうと企てたけれども、また成功しなかつた。

兒島氏本三宅氏。世居備前兒島。兒島範長者爲備後守。子高德。稱備後三郎。帝之在笠置也。範長高德欲赴援。聞笠置陷楠氏敗。乃止。已而聞帝西遷。高德謂其衆曰。吾聞志士仁人。有殺身以成仁。見義不爲無勇也。蓋要奪駕以舉義。衆奮從之。伏舟坂山而待。久之不至。遣人候之。曰。駕向山陰道。乃問道至杉坂。則已過矣。衆乃散去。高德悵恨。不能去。乃變服尾駕而行。數日。欲一見帝有所言。而不得聞。於是夜入帝館。白櫻樹而書之。曰。天莫空勾踐。時非無范蠡。日日護兵聚視。不能讀也。乃奏之。帝熟視之。欣然心知有勤王者也。

【帝西遷】後醍醐帝が西の方隱岐に遷されたまひしを云ふ。【其衆】家の子郎黨。【志士仁人有殺身以爲仁】論語の魯靈公の篇の語。と爲を成に作る。註に、志士は有志の士。仁人は成徳の人なり。理當に死すべくして生を求むるときは、其心に於て安からざる所あり。是れ其の心の徳を害すれば也。理當に死すべくして死するときは、心安くして徳全しとあり。【見義不爲無勇也】論語の爲政の篇の語。註に、知りて爲さざるは是れ勇なき也とあり。【要】遮り止むる。【舟坂山】播磨に在り。【候之】伺望なり、伺ひ見る。【問道】

…わき道。〔杉坂〕…美作に在り。〔畏恨〕…なげきうらむ。嘆息して残念に思ふ。〔尾駕〕…天子の御乗物のあとをつけて行く。〔間〕…隙間。〔帝館〕…帝の御旅館。美作の院庄なりしと云ふ。〔白〕…しらける。木の皮をむきて白くする。〔天莫空勾踐時非無范蠡〕…史記に云ふ、吳王夫差、越を夫椒に敗る。越王勾踐、兵を以て會稽山に棲み、吳の大夫種に賄賂を贈りて國に歸り、後、范蠡と謀りて、吳を伐つて之を滅ぼせり云々と。按ずるに、高徳、勾踐を以て帝に比し、范蠡を以て自ら喻へしなり。天、勾踐を見捨て、其志を無効にすること無かれ、今の時と雖も、古の范蠡の如き謀臣なきに非ずとの意。〔熱視〕…つくづく見る。〔欣然〕…喜ぶ貌。

〔關〕兒島氏は、本、三宅氏であつて、代々、備前の兒島に居つた。兒嶋範長と云ふ者が備後守となつた。その子の高徳は、備後三郎と稱して居つた。後醍醐帝が笠置に居られたときに、範長と高徳とは、出掛けて行つて御受け申さうと思つて居つたが、その中に、笠置は落城して仕舞ひ楠氏は敗北したと云ふ事を聞いたので、そこで、止めにした。とかくする中に、帝が隱岐國に遷されたまふといふ事を聞いたので、高徳は部下の者共に向つて曰ふには、われ聞くに、有志の者仁徳ある者は自分の身を殺して仁の徳を成すことがある。又、人の爲すべき正しき道があるのを見て、其事を行はぬのは、勇氣が無いのであると云ふ事を聞いて居る。されば、帝の遷幸を遮り盡め帝の御乗物を奪ひ取り、して義兵を擧げることにしては、どうかと曰つた。すると、部下の者共は奮激して其言葉に従ふこととした。そこで、高徳は人々と共に、舟坂山に待ち伏せて、帝の御乗物の来るのを待つて居つた。久しく待つて居つても御乗物が來なかつたので、念の爲めに人を派遣して物見させた。すると、其者が還つて來て曰ふには、御乗物は豫定の道を変へて山陰道の方へ向はれたと曰つた。そこで、高徳等は、わき道から急いで杉坂に行つて見ると、御乗物は、もはや通過して仕舞つた後であつた。部下の人々は、そこで、解散して去つた。高徳は、嘆息して残念に思つて、立ち去ることが出来なかつた。そこで、服装を變へて、見えがくれに御乗物のあとをつけて行くこと數日であつて、一たび帝に御目に懸つて心中を申上げやうと思つたけれども、然るべきとき間を得なかつた。こゝに於て、高徳は、夜、帝の御旅館に忍び入つて、櫻の樹の皮をけづり取つて、之に詩の句を書き付けたが、その意味は、天は勾踐の志を無効にするな。今日の場合にも昔の范蠡のやうな忠臣が無いことは無いと曰ふのであつた。あくる日、護衛の兵士どもが、寄り集つて之を見つけたけれども、讀むことが出来なかつた。そこで、之を帝に奏上した。すると、帝は、之をとくと御覽になつて、御喜になつて、御心中で、王事に骨折つて居る者があることを御知りになつた。

帝至隱岐居國府島。高時遙令隱岐守護佐佐木清高將兵監護焉。又流藤原以下公卿六人。殺藤原俊基等四人。藤原資朝在佐渡。其子國光自京師赴省。父已爲本間三郎者所殺。國光夜斬三郎而去。高時遂流皇子尊良。宗良恆良。殺恆性。獨第三子兵部卿護良逃奔吉野。於是四方無復勤王之師矣。

〔國府島〕…太平記には國分寺に作る。〔監護〕…監督護衛。〔流藤原以下公卿六人〕…中納言藤原藤房を常陸に、參議藤原季房を下野に、大納言藤原師賢を下總に、前大納言藤原原敏を下野に流せる等。〔殺俊基等四人〕…中納言藤原資朝を佐渡に、右中辨藤原俊基、參議平成輔を相模に、中納言源具行を近江に殺す。〔省父〕…父の安否を伺ふ也。〔流皇子〕…尊良を土佐に、宗良を讃岐に、恆良を但馬に流し、恆性を越中に殺す。〔吉野〕…大和に在り。

〔關〕後醍醐帝は隱岐に御到著になつて、國府島に居らせられた。高時は、遙に、命令を傳へて、隱岐の守護佐々木清高をして兵士を引き連れて監督護衛させることにした。又、藤原藤房以下の公卿六人を流し、藤原俊基等四人を殺した。藤原資朝は佐渡に居つて、其子の國光が、京都から出掛けて行つて父の安否を問うたが、父は已に本間三郎といふ者に殺されて仕舞つた後であつたので、國光は、夜、三郎を斬つて立ち去つて仕舞つた。高時は、とうとう、皇子尊良親王、宗良親王、恆良親王を流し、恆性法親王を殺して仕舞つた。たゞ第三の皇子の兵部卿護良親王だけは、逃げて吉野に行かれた。こゝに於て、天下には、また王事の爲めに骨折る軍勢は無くなつて仕舞つた。

四月。正成出金剛山。以五百騎攻赤坂城。城將湯淺定佛徵糧於紀伊。正成遮奪之。充苞以甲。使三百人荷至城下。別分兵追之。城兵望見。謂敵且奪我糧也。開門納之。三百人取甲於苞而甲。吶喊起鬪。正成奪門而入。定佛不知所爲。乃降。正成并其兵。將七百騎。徇河內。和泉。悉下之。比及渡部。得二千人。進陣于天王寺。

〔充苞以甲〕…充は盈つる也。苞は又包に作る。俵の中に糧を入れる也。〔甲〕…よろひを着る。〔吶喊〕…いっつと聲を揚ぐる也。〔徇〕…となふ。宣令なり。布令を廻す。〔渡部〕…攝津に在り。〔天王寺〕…攝津に在り。

〔關〕四月に、正成は、金剛山を出で、五百騎の兵士を引き連れて、赤坂城を攻めた。城を守る敵の將湯淺定佛は、兵糧を紀伊から徵發した。正成は、途中で遮り留めて其兵糧を奪ひ取り、米俵の中に糧を入れて、三百人の者共をしてそれを荷うて城下に至らしめ、別に兵士を分けて之を追つかせさせた。すると、城の中の兵士は、それを望み見て、これは敵がまさに自分等の兵糧を奪ひ取らうとするのであると思つて、門を開いて城中に入れた。すると、三百人の者共は、糧を米俵の中から取り出して、糧を着て、どつと鬪の聲を揚げて、俄に起つて打合を始めた。正成は門を奪ひ取つて城中に押し入つた。定佛は、如何にすべきかを知らず、そこで、降参して仕舞つた。正成は、其兵士を一處にして、七百騎を引き連れて、河内、和泉に布令をまはして、悉皆之を降服させた。かくて、渡部に及ぶころには、二千人となり、進んで天王寺に陣取つた。

北條氏自徙天子。謂天下無復足虞也。及正成起。則大驚。六波羅二帥遣隅田通倫。高橋宗康。將五千騎擊之。正成分兵爲四隊。伏其二隊。而以羸兵一隊。扼渡部橋。而陣。敵望見易之。輒競渡。羸兵佯走。敵追北。過天王寺。陷於伏。急麾兵卻。我兵疾擊乘之。敵兵卻走。不可復制。爭橋而溺者無數。京師爲之謠曰。渡部之川。墜橋決田。二帥愧之。更命宇都宮公綱。以紀清兩黨五百騎代赴。正成族和田某請逆戰。曰。我已勝五千。何有於五百。正成默然。良久曰。勝敗之機。在離同。不在衆寡。公綱素負勇名。而以寡兵承敗。其將士同心於死。可知也。我藉使克之。能無失亡。吾受大任。前途甚遠。而首傷我士。後誰爲我用者。吾將不戰而屈之也。遂拔營而去。公綱代營焉。既夜。望四面皆炬火。漸多漸近。乃不釋甲。而待者三晝夜。兩黨懼。請歸曰。楠氏兵日加也。公綱乃引歸。

【虞】……ちんばかる、心配する。【二帥】……二人の首領、即ち仲時、時益を云ふ。【羸兵】……音ルキヘイ、弱き兵士。【扼】……搦と同じ。防ぎ止める。【易】……あななる、輕蔑する。【競渡】……われがちにと先を争うて渡る。【離】……さしまねく、指揮する也。【渡部之川墜橋決田】……太平記に、「渡部の水いかに早ければ高橋落ちて隅田(スダ)流らん」とあるを、支那の諺歌の體に依りて譯したるなり。橋は高橋の略、田は隅田の略、即ち二將の姓なり。【紀清兩黨】……古の兵團の記號にして、武藏の七黨の二なり、宇都宮氏に屬す。【何有】……甚だ敵し易きを云ふ。【離同】……人心の離散と合同と。【承敗】……高橋隅田の二人が敗れたる後を承くる也。【藉使】……たとひ。【大任】……任は職なり。國賊を討滅すべき重大なる任務。【前途甚遠】……今日ばかりでは無い、これから先が餘程遠い。【首】……その手初に。【拔營】……

陣營を引き拂ふ。【炬火】……たいまつ。

北條氏は、後醍醐帝を隱岐に徙し奉つてから後は、天下の事はもう心配するだけの事は無いと思つて居たが、正成が起つたに及んで、大に驚いた。そこで、六波羅の二人の頭領なる仲時、時益は、隅田通倫、高橋宗康を派遣して、五千騎を引き連れて、正成を撃たせることにした。正成は、その兵士を分つて四隊となし、其三隊をば伏兵として置いて、そして、弱い兵士の一隊を引き連れて、渡部橋を防ぎとめて陣を取つた。敵は、之を望み見て、輕蔑して、すぐに先を争うて橋を渡つた。すると、我が弱い兵士は、いつはつて逃げ出した。敵は、その逃げ走るを追つかけて來り、天王寺を通り過ぎて、伏兵に引つかつたので、急に兵士を指圖して退却させやうとした。我が兵士は、之に附け込んで手ひどく撃つた。敵の兵士は、退き逃げ走つて、再び制止せよと出来ずして、先を争うて橋を渡らうとして河に落ちて溺れたる者が、數の知れぬほど多くあつた。そこで、京都の人々は、落首をして曰ふには、渡部の水の流は高橋といふ橋を落し、隅田といふ田を流して仕舞つたと曰つた。二人の頭領即ち仲時、時益は、之を恥づかしく思つた。そこで、更に、宇都宮公綱に言ひ附けて、紀の黨と清の黨との兵士五百騎を引き連れて、代つて出かせた。すると、正成の一族なる和田某が、之を迎へて戦はうと請うて曰ふには、我が軍は、すでに先頃の五千騎の多數の兵士にさへ勝ちましたとなれば、此度の五百騎位の少數の兵士と戦ふことは、何でも無いこと、御座りませうと曰つた。正成は、黙つて居ることや、暫くにして曰ふには、凡そ戦争に勝つたり負けたりするきつかけと云ふ者は、その兵士共の心が離れて居るか一致合同して居るかと云ふ事に因るものであつて、兵士の數の多い少いに因るものではない。公綱は、本來、武勇の名聲を背負うて居るものであるが、それが、今、少數の兵士を以て、先に隅田、高橋の二人が敗北した後にいついて出掛けて來るのであるから、公綱の將士は、皆、死ぬことに心が一致して居ることは、分り切つた事である。そこで、我が軍が、たとひ之に勝ちおほせる事が出来るとしても、いくばくかの兵士を失ひ亡ぼすことが無くては相濟むまい。われは、賊黨を討ち滅ぼすべき大任務を受けて居ることであつて、まだ行末は餘程遠いことである。然るに、若し其手初に、身方の士卒を損害するときは、後日に至つて、誰が我が用に立つ者があらうか。それ故に、われは、戦はずして敵を屈服させやうと曰つて、とうとう天王寺の陣屋を引き拂つて去つて仕舞つた。そこで、公綱は、代つて陣取つた。はや夜になつてから、四方を望み見ると、どこもかしこも松明ばかりで、その數は段々多くなり、又だん／＼近くなつた。そこで、公綱等は、今にも敵が攻め來ることがあらうと知れぬと恐れて、鎧をぬがずして待つて居ること三日の間であつた。そこで、紀の黨と清の黨とは心に恐れて、京都に歸らうと請うて曰ふには、楠氏の兵士は日々増加するのであると曰つた。公綱は、そこで、兵士を引き連れて京都に歸つた。

正成復軍天王寺。數出耀兵。令軍中禁鹵掠。遠近歸心。多來屬者。正成威振京畿。寺舊藏有上宮太子讖文。正成請僧發視之。文有曰。當人皇九十五代。天下一亂而主不安。此時東魚來吞四海。日沒西天三百七十日。西鳥來食東魚。海內歸一。二三年。如彌猴者掠天下三十餘年。大凶變歸一。

元。正成指而諭衆曰。所謂九十五代。非今上耶。東魚乃高時。而爲西鳥所食。則終歸族滅耳。日沒西天。三百七十日。上之復辟。蓋在明春。諸君勗之。衆皆奮厲。

【釋兵】…續は續と同じ、かやかす。兵威を示す也。【函掠】…音ロリヤク。函は膚と通ず、搜獲なり。掠は奪取なり。押取狼藉。【上宮太子】…聖德太子、用明帝の皇子、本名は厩戸皇子、推古帝の皇太子となる。【義文】…音シンブン。未來記、將來の諭を言へる文、名づけて聖德太子未來記と云ふ。【東魚】…高時に喩ふ。【日沒西天】…帝隆岐に遷幸したまふに比す。【西鳥】…官軍の諸將を云ふ。殊に楠氏に喩へしなるべし。【彌猴】…音ビコウ。手長猿。即ち足利尊氏を斥す。【掠天下三十餘年】…南北兩朝對立の間を云ふ。【歸一元】…南北朝合して一統となるを云ふ。【復辟】…復はかへる、辟は君なり。再び天子の御位に還らせたまふを云ふ。【勗】…勉むる、精を出す。

【開闢】宇都宮公綱が去つた後、正成は、再び天王寺に陣取つて、度々打つて出で、兵威を示し、軍中に命令して押取掠奪を禁止したので、遠い處も近い處も心を寄せて、來つて其部下に就く者が多くして、正成の威勢は京都五畿内地方に盛んであつた。天王寺の古來所藏してある者の中に、聖德太子の未來記があつたが、正成は僧に請うて之を開いて見た。その文中に次の様な事が書いてあつた。人皇第九十五代の時に當りて、天下一たび戦亂が起つて、天子は御安泰で居られず、この時に、東の方の魚が來つて四海を呑んで仕舞ひ、太陽が西の空に沈んで居ること三百七十日の間、そこで、西の方の鳥が來つて東の方の魚を食つて仕舞つて、天下は統一すること三年である、そこで、手長猿の様な者が天下を掠め奪つて居ること、凡そ三十餘年にして、その大騷亂は變じて一統の世となつて書いてあつた。正成は之を指して部下の者に共に諭して曰ふには、第九十五代といふのは、今上天皇陛下の事では無いか。東方の魚といふのは、高時であつて、そして、これは西の方の鳥に食はれるとあるからには、仕舞ひには一族とも滅亡して仕舞ふとであらう。日が西の空に沈んで居ること三百七十日といふので見れば、主上が再び御位に御還りになるのは、大體、來年の春の事であらう。されば、諸君は、精を出して天子の爲めに盡されよと曰つた。其部下の者共は、皆奮ひ勵んだ。

當是時。皇子護良起。兵據吉野。又諭赤松則村勤王。八月。則村起兵播磨。於是京畿警聞交至鎌倉。高時乃檄東北二道。大發兵。以子時治。族高直。大臣貞藤將之。而宰高資監焉。西擊正成等。正成相金剛山之千窟城。之城挾山帶壑。周回一里。高數百仞。中有五泉。雖旱不涸。造槽蓄之。養以

黃土。雨則引屋溜於槽。乃使別將守赤坂。而自徙金剛山。

【警聞】…非常なる出來事の報知。【東北二道】…東海、東山、北陸の三道。【高直】…大佛氏。【大臣貞藤】…將軍家の大臣二階堂貞藤。【宰高資】…内管領長崎高資。【相】…視る、見定める。【挾山】…山を城の中に取り込む。【帶壑】…水の無き谷を城の外に引きめぐらす。【仞】…八尺。【槽】…大なる桶。養以黃土…養とは、水の性を養ふ也。へなつちを桶に塗りて水を澄ます。【屋溜】…屋は屋宇、溜は溜と通ず。屋根の雨たれを云ふ。【別將】…平野將監なり。拒守すること十餘日にして、力盡きて北條氏に降れり。【開闢】この時に當りて、皇子護良親王は、兵を擧げて吉野に立て籠りなされ、又、赤松則村に、兵を起して王事に骨折るやうに御諭になつた。八月、則村は、播磨に於て兵を起した。こゝに於て、京都畿内地方に於ける非常なる出來事の報知が、かほるく鎌倉に到着した。高時は、そこで、東北の三道に布令をまはして、大に兵士を徵發し、子の時治、族の高直、將軍家の大臣貞藤を以て之が大將として、そして、内管領の高資が軍目付となつて、西の方へ上つて正成等を撃たせることにした。正成は、金剛山の千窟を見定めて、其處に城を築いた。その城は山を中に取り込み、谷を外にめぐらし、周圍は一里ばかり、高は數百尋あり、城の中には、水の湧き出づる所が五箇所あつて、早のときでも水がなくなる事は無く、大きい桶を造つて其水を貯蓄し、その桶の底にへなつちを塗つて水の性の悪くならぬやうにし、又、雨が降るときは、屋根から落つる雨たれをも桶の中に受けるやうにした。そこで、別の大將をして赤坂を守らせ置いて、正成自身は、金剛山の新築の城に引き移つた。

三年。二月。東兵自三道上。分爲三軍。攻金剛山。及吉野。赤坂。赤坂城兵力拒。殺傷過當。賊絕其水道。城遂陷。吉野受圍七日。乃陷。吉野。赤坂既陷。關東三軍皆萃于金剛山。而西南諸道兵。應高時徵者亦會焉。稱八十萬。合勢攻正成。正成以千餘人拒之。賊兵四面仰攻。呼聲動天地。正成令士卒。投大石。隨亂射之。無復虛箭。軍監高資令十一史記死傷。三晝夜不闕筆。乃令諸軍。勿復薄城。時大旱。賊火箭射城。正成以機注水。使不能焚。賊將高直議曰。葺爾山巔。不容有水。得非乘夜出汲乎。前攻赤坂。絕水而

克此計可襲也。遣名越某將三千人。柵守東溪。久之母出汲者。正成瞰其倦怠。夜出兵擊走之。奪其幟而還。日日樹之壁上。呼曰。此名越公所贈。有公徽號焉。我無所用。願奉還之。名越慚恚。舉族薄城。城上豫橫懸大木。及敵薄而發之。因射斃四千餘人。賊益畏憚。休戰。築長圍環守。城兵困之。正成乃作藁人數十。被以甲冑。夜列城下。兵伏其後。乘曉霧大。闕賊相告曰。城兵窮蹙出戰也。舉軍競進。我兵頗發矢。輒退入城。而敵集於藁人。則巨石已碎。其頭立死五百餘人。賊不敢復薄城也。

【分爲三軍云々】……大佛高直は金剛山を攻め、二階堂貞隆は吉野を攻め、阿曾時治は赤坂を攻む。【殺傷過當】……敵の兵を味方よりも多く殺傷したる也。【吉野陷】……此時護良親王の臣左馬權頭村上義光戦死す。【萃】……集まる。【虚箭】……むだな矢。【十二史】……十二人の書記。【不聞筆】……聞は欄なり。晝夜書き續けて、筆をさしおき止む。【薄城】……薄は迫なり。城ぎはに攻め寄する也。【火箭】……火矢。あたるときは火を發する矢。【以機注水】……機はポンプの如き水を注ぐ器。注は灌なり。機を以て水をそそぎかける。【最爾】……小き貌。さ、やかなる。【山嶺】……山のいたゞき。【不容】……可からず。【可襲】……前の仕方の通りに爲すべし。【名越某】……越前守。柵守東溪……逆茂木を立て、東の溪を守るなり。【敵】……うかゞみ。見下す。【倦怠】……退屈しておこたる。【幟】……音シ。旗。樹……立つ。【徽號】……旗じるし。【長圍】……城の周圍に長き土堤を築く。【藁人】……わら人形。【大開】……開は音コウ。大にときの聲をあふる。【窮蹙】……困窮して苦む。【巨石】……大なる石。

三年二月に、關東の軍勢は、東海、東山、北陸の三道から上つて、分れて三軍となつて、金剛山及び吉野と赤坂とを攻めた。赤坂城の兵士は、力のあらん限り拒ぎ戦つて、敵を殺し傷めることが味方よりも多かつたが、賊兵即ち關東の兵士が、赤坂城の水を汲む道を絶ち切つたので、城はとう／＼攻め落された。吉野は、賊兵の爲めに圍まれて居ること七日にして、そこで攻め落された。吉野も赤坂も最早落城したので、關東の三軍は皆金剛山に聚まり、その上、西南の諸道の兵士にして高時の徵集に應じた者、亦、此處に來り會して、その兵數は八十萬と號して、力を合はせて正成を攻めた。正成は、僅に千餘人を以て之を拒ぎ守つて居つた。賊の兵士は四方から上を向いて攻め寄せ、其呼ばる聲は、天地を震ひ動かすとも云ふべき程であつた。正成は士卒に言ひ附けて、大なる石を投げ下し、同時に散々に之を射させたが、少しもむだな矢は無かつた。賊の軍目付の高資が、十二人の書記をして死傷者の名前を記録させたが、三日三夜の間、筆をさしおいて休む

といふ事は無かつた。そこで、これでは成らぬといふので、諸軍に命令して、再び城に近づき攻むることの無いやうにした。その時に大早であつたので、賊は、火矢を以て城を射た。すると、正成は機軸を以て水を注ぎかけて、城に焚えつくことの無いやうにした。賊の大將の高直が評議して曰ふには、こんな小さな山の頂上に、水が有るべき筈は無い。夜の暗黒な時にまざれて城から出て水を汲んで來るのであるか。知れぬ。以前に赤坂を攻めた時に、水を汲む道を絶ち切つたので、勝ちおはせることが出來たのであるが、前の通りに、此の水を汲む道を絶ち切るといふ計を遣つて見るが宜しいと曰つて、名越某を派遣して、三十人を引き連れて、東の谷川に逆茂木を立て、守らせた。随分久しく時日を経過したけれども、城の中から出掛けて水を汲む者は無かつた。正成は、彼等が退屈して怠つて居るのを見下し伺つて、夜、兵を繰り出して撃つて之を退却させ、その旗を奪ひ取つて還つた。明くる日に、その旗を城壁の上に立て、大い聲を呼ばりて曰ふには、此旗は、名越殿から贈られたものであるが、何分、名越殿の旗じるしがあるので、此方では用は立たぬ。どうぞ之を御返し申したいもので、御座ると曰つた。すると、名越は、慚ぢ且つ怒りて、一族残らず、城に近づき攻めた。城の上には、前以て横に大きい木をつるして置いて、敵が來り近づくに及んで、之を切り落し、それに續いて射つて四千餘人を斃した。賊兵は、ますます畏れ氣が引けて、戦を休んで、城の周圍に長い土手を築いて、城を取りまいて番をして居つた。城中の兵士は、これに閉口した。正成は、そこで、藁人形數十を作つて、これに鎧兜を著させて、夜、城の下に立てなちらべて、兵士は、その後にかくれて居つて、朝早く霧深き時につけ込んで、大に闕の聲をあげた。賊兵は相互に語り合つて曰ふには、これは城の兵士が困窮閉口したので、出掛けて來て戦ふのであると曰つて、全軍、先を争うて進んだ。我が兵士は、相應に矢を射て、すぐに退いて城の中に引つ返した。そして、敵兵が藁人形に寄り集まつて來るときは、大きい石が落ちて來て、その頭を打ち砕いて、即座に死んだ者が五百餘人もあつた。かくて、賊兵は再び城に來り近づくことを敢てしなかつた。

三月。高時遣使者。督促諸將進攻。諸將合議。命工造雲梯。長二十丈。跨壑架壁。銳兵六千。欲緣乘城。正成令投大炬。唧筒注油。以燒雲梯。烟燄噴起。賊兵前後喧騰。梯遂中斷。陷壑焚死者數千人。諸道豪傑望正成之風。多應官軍者。護良又命大和土寇。絶敵糧道。敵兵多逃亡。敵中有新田義貞。請護良令稱疾東歸。謀攻鎌倉。於是。六波羅一帥。又遣宇都宮公綱。以千餘人來援。急攻拔柵。鑿城趾。正成應機拒之。敵竟不能拔。

【督促】……督は董なり、促は催なり。催促する。【雲梯】……かけはし。城を攻むる具にして、高く上ること雲に齊しとて、かく云ふ也。【跨壑架壁】……谷を越して城壁に掛けわたす。【銳兵】……命知らずの勇兵。【緣】……攀ち上る也。【大炬】……大なるたいまつ。【唧筒】……ぼん

ぶ。龍吐水。煙噴起。煙を噴き出して燃え上る。喧騰。がやぐやと騒ぎ立つ。風。威風。土寇。地方の一揆。令旨。聖城趾。聖は穿つ也。趾は址と通ず。城のもとを掘りて、石垣を崩さんとする也。應機。敵の攻め方に随つて防戦の方法を變化する也。

三月に、高時は、使者を派遣して、諸の大將共を催促して、進んで攻めさせた。諸の大將共が、共に相談して、職工に言ひ附けて、かけはしを作らせたが、その長さは二十丈あつて、谷を越して城壁に架け渡すやうにして、命知らずの勇士六千人が、それに攀ち上りて城に乗り込まうとした。正成は、大きい松明を投げ、ばんぶを以て油をそ、ぎかけさせて、そのかけはしを焼いた。すると、煙を噴き出し焔が燃え上つたので、それに攀ち上つて居つた賊兵は、前後でがやぐやと騒ぎ立て、居つたが、さうする中に、梯はとうとう中程から焼け切れて仕舞つた。谷の中に落ち込んで死んだ者が數千人あつた。そこで、諸道の豪傑どもが、正成の威風を望んで、官軍に應ずる者が多かつた。護良親王は、又、大和の地方の一揆に言ひ附けて、敵の兵糧を運搬する道を絶ち切りしめられた。そこで、敵兵は逃亡する者が多かつた。敵の軍の中に、新田義貞といふ者があつたが、護良親王の令旨を請ひ受けて、病氣と言ひ立て、關東に歸つて、鎌倉を攻めやうと企てた。このに於て、六波羅の二人の頭領即ち仲時、時益は、又、宇都宮公綱を派遣して、千餘人を引き連れて來り援けさせ、手きびしく攻め立て、城の外の逆茂木を攻め取り、城の土臺を掘りくづさうとした。正成は、其時々臨んで相應なる謀を出して、之を拒いだので、敵は、とうとう城を攻め落すことが出来なかつた。

北條氏以天下多勤王者慮帝逃出戒佐佐木清高益嚴防備而清高族義綱守中門竊謀脫帝未敢發一夜宮女傳帝旨賜酒守兵義綱因白曰上未聞之乎楠正成據金剛山舉義兵高時以百萬兵攻之三閱月不能拔也播磨備前伊豫將士竝起應之或謀迎駕或窺京師是皇運將回之秋也而如聞高時兇懼陰謀不良上宜急艤千波港幸出雲伯耆之間臣伴追而從之帝不輒信因賜其宮女以察之義綱志益固帝乃令先往出雲誘其族人來迎義綱往爲族鹽治高貞所拘留帝以其久不返遂決意夜僞稱嬪御與源忠顯徒行逃出叩一民家問港所在

主人熟視帝狀貌知非常人也乃負帝至港託諸舟人舟人亦有感喜色忠顯告以實揚帆而南天明顧見數十艘近則清高也舟人伏帝與忠顯於船底覆以鯨魚而坐其上清高來索舟人曰何索曰先帝逃矣舟人曰果有是事嚮京裝者一人乘船發港因指曰在彼清高赴之帝遂達名和港依名和氏

【防備】……防禦警備。義綱……富士名氏。【三閱月】……閱は歷る也。三箇月を越す。【播磨備前伊豫將士云云】……赤松則村は嚴邪山に屯し、伊藤惟幹は塞を三石に築き、兒島高德は備前に起り、土居通治、得能通言は、義を四國に唱ふ。【將回之秋】……あとに戻らうとする時。【兇懼】……心亂れて大に恐る、也。【陰謀不良】……不長は不善なり。今や勤王の師竝び起るを懼れて、陰に弑害を謀るを云ふ。【艤】……音ギ。ふなよそひする、舟を整へる也。【千波港】……隱岐に在り。【濟】……なる、成就する。【不輒信】……容易には信用しない。【拘留】……音へて引き留めらる。【嬪御】……女官。【叩】……た、戸を叩いて呼び起す。【感喜】……有りがたき事と思つて喜ぶ。【鯨魚】……音シヤウギヨ。乾魚。【先帝】……北朝の光厳帝に對して云ふ。【京裝】……京都風の服裝をしたる者。【名和港】……伯耆に在り。

北條氏は、天下に王事に骨折る者が多くなつたので、後醍醐帝が隱岐から御逃げ出しになることを氣遣つて、隱岐の守護佐々木清高に注意して、ます、防禦警備を嚴重にした。然るに、清高の一族なる義綱は、中門を守つて居つたが、ひそかに帝をのがさうと企て、居つたけれど、未だ思ひ切つて事を起すことをしなかつた。ある夜、宮女が、帝の御思召であるを傳へて、酒を番兵に賜はつた。義綱が、それを好き折と思つて、申上げて曰ふには、陛下は、まだ御聞きになりませぬか。楠正成が、金剛山に立て籠つて義兵を擧げましたので、高時が百萬の兵士を繰り出して之を攻めたけれど、三箇月かゝりまして、未だ攻め落すことが出来ませぬ。そこで、播磨、備前、伊豫などの將士どもが、竝に兵を起して、陛下の御乗物を御迎申さうと企て、居るものも有りませぬ。京都を攻めやうと思つて、隙間をつねらつて居るものもありませぬ。これは、陛下の御運が元にかへらうとする時、御座ります。そして又、聞くところによりませぬれば、高時は、心亂れて大に懼れて、なされるが宜しう御座ります。私は、わざと追ひかける様な風をして御供いたしましたるならば、此事は屹度成就するで御座りませぬ。申上げたけれど、帝は、此言を容易には御信用にならなかつた。そこで、その宮女を義綱に賜はりて、その志の果して信實なるや否やを偵察させやう。義綱の志は益々堅固であつた。帝は、そこで、義綱をして先づ出雲に出掛け行つて其一族の者どもを誘引して來りて御迎へ申す事にさせられた。義綱は、出掛けて行つたが、その一族の鹽治高貞の爲めに拘へて引き留められた。帝は、義綱が久しく引つ返して來ないので、とうとう御心を決して、夜、いつはりて女官であるを稱して、源忠顯と與に徒歩して御逃げ出しになり、一軒の百姓家を叩き起して、港は何處かと御問ひなされた。その家の主人は、帝の御様子を一つと見て、普通の人では無いことを知つて、そこで、帝を背負ひ

申して、港まで至り、これを船頭に頼んだ。すると、船頭も亦有り難く思つて居る氣色があつたので、忠顯は、本當の事を告げ知らせ、帆を張りて南の方へ向つた。夜の引き明け頃に、後を振り返つて見ると、數十艘の舟が見えた。近づき見て見ると清高の舟であつた。船頭は、帝と忠顯とを船の底に隠して、其上に乾魚を覆ひかぶせて、そして其上に坐つて居つた。清高が来てさかすかと、船頭が曰ふには、何を御さがしなさるのかと曰つた。清高が曰ふには、先帝が御逃げになつたので、それを索すのだと曰つた。すると、船頭が曰ふには、ほんに、左様な事がありました。先刻、京都風な服装の人が二人、船に乗りて港を出發されましたよと曰つて、そこで、あらぬ方を指して示して曰ふには、あちらの方へ行かれたと曰つた。清高は、欺かれて其方へ向つて行つた。かくて、帝は、とうとう名和港に到着して、名和氏にたよりられた。

名和氏。本村上氏。世居伯耆名和。承久之役。有名和行秋者焉。與孫行高從官軍。事敗奪邑。行高四子長高。長重。長生。氏高。皆有武幹。帝至名和港。令忠顯登岸問塗人豪族可倚者。答以長高。忠顯乃踵其家。家方宴。忠顯直入傳詔。長高未答。長重進曰。人之所重。名而已矣。今忝受帝者自托。事無成否。皆足以揚大名於天下。長高乃決意。計奉帝于船上。令長重等五人環甲走迎。帝跪御舟傍。帝欣然。長重被薦于甲背。負帝上山。藉木葉進食。長高欲移倉粟于山。募村民能運一擔者。賞錢五百。一日致五千餘石。乃盡燒其宅。率百五十騎以護行在。因樹植柵。列扉爲垣。氏高造布旗數百。煤印近國諸豪章識。張之山上。明日。清高以兵三千自山前後來攻。望見旗章。不敢進。我兵蔽林而射。射殺一將。敵八百騎乃來降。清高在山後。未之知也。更兵急攻。會日且入。大雷雨。長重。長生乘而疾擊。

擠賊于谷。鑿千餘人。清高單舸逃去。帝授長高左衛門尉。兼伯耆守。賜名長年。子弟拜官有差。義綱。高貞以千餘騎至山陰。山陽豪族來屬數十姓。而兒島高德從備前往。

【武幹】……武技に長せる也。【塗人】……塗は途に通ず。塗人とは、路上を行く人。【倚】……倚頼、たよる。【踵】……至る。【帝者自托】……托は託、通ず。帝たる者の直接の御依頼。【無成否】……成功するとも成功せぬとも。【船上】……伯耆に在り。【環甲】……よろひを著る。【煤印】……ひげまづく。兩足を屈めて膝を地に著ける。【薦】……こも、藁のこも。【藉】……しく、下じきにする。【擔】……一荷。【扉】……戸を立立てならる。【煤印】……煤は墨煙。【書】……に書き付ける。【音】……しる。【音シヤウシ】……蔽林。……林の蔭にかくれる。【擠】……おしおとす。【鑿】……皆殺しにする。【早舟】……一つの早舟。【差】……音シ、次なり。次第、種々の等級。【名和氏】……名和氏は、本と村上氏で、代々伯耆の名和に居つた。承久之の戦役に、名和行秋と云ふ者があつて、孫の行高と、もに官軍に附いて居つたが、事が失敗したので領地を取り上げられた。行高に四人の子供があつて、それは長高、長重、長生、氏高であるが、皆武藝に長じて居つた。後醍醐帝が隠岐から逃れて、名和港に御著きになつて、源忠顯をして岸に上陸させて、道行く人に、近邊の豪族で依頼することの出来る者は誰かと問はしめられた。すると、長高が其人であると答へた。忠顯は、そこで、長高の家に至ると、その家は丁度酒盛をして居つたが、忠顯は、直に内に入って御詔を傳へた。すると、長高は未だ御返事をしないうちに、弟の長重が進み出で、曰ふには、人の重んずるところのもの功しないに拘らず、どちらにしても、大なる名譽を天下に掲げるに足ること御座いますと曰つた。長高は、そこで、決心して、帝を船上山に迎へ奉らうと計畫して、長重等五人をして鎧を着て急いで行つて帝を御迎へ申させた。長重等は御舟の傍にひげまづくくと、帝は御喜ばしげな御様子であつた。長高は、藁のこもを鐵の背に被りて、帝を背負ひ申して山に上り、木葉を下にして御座をこしらへ、そして、食事を差し上げた。長高は、倉の米を山の上に運搬しやうと思つて、村の人民を募集し、能く一荷を運送した者には、錢五百文を褒美として與へると云つたので、一日にして五千餘石を運んだ。そこで、残らず其家を焼いて仕舞ひ、百五十騎を引き連れて、それで、行在所を護衛することとし、立木をたよりとして逆茂木を立て、戸びらを立てて垣根となした。氏高は、布の旗數百本を造つて、近傍の諸國の諸豪族の紋所を煤で書いて、之を山の上に立て列ねた。明るる日に、清高は、兵士三千人を引き連れて、山の前と後とから來つて攻めたが、旗じるしの大將を射殺したので、八百騎の敵兵は、そこで、來り降つた。清高は、山の後に居つたので、未だ此事を知らなかつたが、兵を更めて手きびしく攻めかゝつた。折しも日が暮れやうとして、大に雷雨となつたので、長重、長生は、之につけ込んで逃げ去つた。帝は、長高に左衛門尉を授け、伯耆守を兼ねしめ、名を長年と賜ひ、その子弟もが官職を拜命すること、次第等級があつた。義綱、高貞は、千餘人の騎士を引き連れて到着した。山陰、山陽の豪族の來つて附き従ふ者、數十姓に及び、そして、兒島高德は、備前國から出掛けて行つた。

帝令高德等從源忠顯攻六波羅。長年子義高初應高時徵。圍金剛山。聞長年應官軍。拔歸亦從忠顯。忠顯行收兵。得二萬人。遇但馬守護太田守延擁皇子恆良來會。合兵軍于峯堂。僧良忠軍男山。赤松則村軍山崎。皆奉兵部卿護良令。與叡山僧徒約。將戮力入京師。而忠顯欲專功。獨進敗走。守延死之。高德。義高留而力戰。忠顯在峯堂。恒怯不安。欲卻軍避敵。使使召還高德等。高德切諫止之。自以三百騎守七條橋。備敵夜襲。夜半。顧望峯堂。炬火稍熾。乃恠而還。遇丹後人荻野朝忠。曰。大將逃矣。高德往視其營。則錦幟仆地。鎧裝狼藉。高德取錦幟。追及朝忠。收潰兵守高山寺。

【擁】…奉ずと云ふが如し。り立てる。【峯堂】…京都の西に在り。僧良忠…大塔宮の候人也。候人は寺院に事ふる俗吏の名。【男山】…山城に在り。【山崎】…山城に在り。【恒怯】…音キヤウケフ。恒も亦怯なり。おそる、びくびくして心が落ち付かぬ也。【炬火稍熾】…熾は音セン。火の消ゆる也。たゞつ火がだん／＼消える。【營】…陣營。【錦幟】…錦の御旗。天子の御旗。【狼藉】…狼が草を藉いて臥す。去るときは穢亂す。故に物の散亂するを狼藉と云ふ。【高山寺】…丹波に在り。

帝は、高德等をして、源忠顯に従つて六波羅を攻めさせられた。長年の子の義高は、初め高時の徵集に應じて、金剛山を圍んで居つたが、父長年が官軍に應じたこと云ふ事を聞いたので、引き拂つて歸り、これも、忠顯に従つた。忠顯は行く／＼兵士を收めて三萬人となり、又、但馬の守護の太田守延が、皇子恆良親王を奉じて來り會するに出つたので、兵士を合はせて、峯堂に陣取つた。僧良忠は男山に陣取り、赤松則村は山崎に陣取り、いづれも皆、兵部卿護良親王の令旨を奉じて、叡山の坊主共と約束して、まさに力を合はせて京都に入り込もうとして居つた。然るに、忠顯は、自分ばかり手柄を立てやうと思つて、ひとり進んで敗走し、守延はそこで死んだ。高德、義高は、留まつて力の限り戦つた。忠顯は、峯堂に居つたが、びく／＼して落ち付いて居られずして、軍を退却させて敵を避けやうと思つて、使者を遣りて高德

等を召し還さしめたが、高德は、熱心懇切に諫めて之を止め、自ら三百騎を引き連れて、七條橋を守り、敵が夜に乗じて不意撃をするのに備へて居つたが、夜半に至つて、後をふりかへりて峯堂を望み見ると、松明の火がだん／＼消えて行くので、そこで、不審に思つて引き還した。その途中で、丹後の人荻野朝忠に出つた。朝忠が曰ふには、大將は逃げられたと曰つた。そこで、高德は、往つて其陣營を視ると、錦の御旗は地上に倒れて居るし、鎧や裝束はそこらぢうに散らばつて居つた。高時は、錦の御旗を取り收め、朝忠に追ひ着き、散らばつた兵士を集めて、高山寺を守つて居つた。

高時聞金剛山久不拔。遣足利高氏。名越高家。助攻。率萬騎至京師。忠顯則村。破殺高家。高氏家聲素著。得新帝密旨。欲犯行在。意持兩端。比及丹波。聞高家敗死。乃屬官軍。返攻京師。將士競附之。獨高德不欲附。與朝忠別由。若狹路。入京師。五月。從諸將圍六波羅。結城親光出降。忠顯恐金剛山賊兵解圍來救也。急攻之。伯耆。出雲兵聯車數十輛。積以屋材。傅城火之。城兵逃亡相踵。一帥遂東走。死近江。而金剛山之圍始解矣。

【名越】…一に北條に作る。【家聲】…家の評判。【新帝】…光嚴帝。【意持兩端】…どちらにつかぬかと二心を抱く。【聯】…つらぬ、つなげ合はす。【傳】…つゞく。【死近江】…番馬驛にて自殺す。

高時は、金剛山の城が久し／＼攻め落されぬことを聞いたので、足利高氏、名越高家を派遣して助けて攻めさせるとし、一萬騎を引き連れて京都に至らせた。忠顯と則村とが、高家を破つて殺して仕舞つた。高氏は、その家の名聲がもとから世間に知られて居つたが、新帝即ち光嚴帝の御内命を受けて、伯耆なる後醍醐帝の行在所を犯さうと思つて居つたけれども、心の中に、どちらに附かうかと二心を抱いて、決して兼ねて居つた。丹波に到着した頃に、高家が敗れて死んだ事を聞いたので、そこで、官軍に附くことにして、引つ返して京都を攻めた。諸將士どもは、先を争うて高氏に附いたけれども、獨り高德だけは附くことを好まずして、朝忠と一處に、別に若狹路から京都に入り込み、五月に、諸將に従つて、六波羅を圍み攻めた。結城親光が出で、降参した。忠顯は、金剛山を圍んで居る賊兵が圍を解いて來つて六波羅を助けることになつては困ると思つて、手きびしく六波羅を攻めかけた。伯耆、出雲の兵士は、車數十臺を連ね合はせて、その上に、家の材木を積み立て、城に押し付けて火を附けたので、城中の兵士は、逃げ出すものが引き續き、二人の頭領即ち仲時、時益は、とう／＼東の方へ走つて、近江に於て死んで仕舞つた。斯くて、金剛山の圍は、やつと解けることに成つた。

捷報伯耆。天皇議還闕。親筮之。遇師之蒙。曰。大君有命。開國承家。小人勿用。乃決議。二十三日。車駕發名和氏。長年帶劍侍右。百官戎服。至播磨。得新田氏捷報。高時已伏誅矣。正成乃以七千騎迎謁于兵庫。天皇親勞之曰。今日之事。皆汝忠戰所致。正成曰。不賴陛下威靈。臣安得脫重圍。再覩天日哉。詔使正成先驅歸闕。廢新帝而復位。於是大索賊餘黨。詔以藤原師基爲大宰帥。討鎮西探題北條英時。未發。菊池氏與少貳氏。大友氏並馳使報鎮西之捷。

【元寇】……宮闕、御所、【筮】……音セイ。著（メトギ）を以てうらなふ。師之蒙……師は坎下坤上なり。蒙は坎下艮上なり。師の上六の爻變じて蒙となる也。大君有命開國承家小人勿用……師の上六の爻辭。その大意は、戰爭が終りて、天子が論功行賞の御命令ありて、功の大小に應ずる者をば國を開いて候となし伯となし、功の小なる者をば之をして家を承けて卿となり大夫とならしむ、小人には之を用ふる事勿れとの義。戎服……戎は兵なり。軍服。捷報……勝利を得たる報告。迎謁……出迎へて拜謁する。兵庫……攝津に在り。【勞】……慰勞、ねぎらふ。【威靈】……威光神靈。【覩天日】……天子に拜謁するを云ふ。【先驅】……先がけ。【大宰帥】……大宰府の長官。【鎮西探題】……西海道の軍事を總督する官。

【元寇】……後宇多天皇弘安四年の蒙古の入寇を云ふ。【世襲】……代々相續する。【武時】……剃髮して寂阿と號す。【貞經】……剃髮して妙慧と號す。【貞宗】……剃髮して具爾と號す。【依違】……附くが如く附かざるが如く、ぐづぐづして明白ならざるを云ふ。【奴輩】……やつぱら。【櫛田】……肥前に在り。【牛鬼】……牛の幽霊と云ふ意にて、妖神を云ふ。【龜】……音セウモン。物見標のある門。城門の上に樓を造りて遠望する所。【内城】……本丸。

が、少貳氏、大友氏と共に、一所に使を馳せて、九州に於て勝利を得て英時を滅ぼした事を報告して来た。

菊池氏。本藤原氏。其先政則者。防元寇有功。及子則隆。賜肥後菊池郡。世襲。後十餘世。曰武時。是歲三月。武時與少貳貞經。大友貞宗。謀應官軍。謀泄。北條英時在大宰府。召武時。武時欲先發。使使少貳。大友約期。貞宗依違不答。貞經亦聞京師官軍數失利也。遂斬其使。送首於英時。武時大怒曰。吾誤矣。與此奴輩謀事。奴輩不在。吾寧不能戰乎。乃以百餘騎發。過櫛田祠前。馬俄不前。武時曰。何物牛鬼敢沮義兵。顧射其龜。馬輒前。前攻英時。戰譙門外。克之。前逼内城。英時將自殺。會貞經。貞宗以六千騎來救。武時乃遣歸長子武重。自與次子四人進戰。死之。已而貞經。貞宗聞京師平。金剛山圍解。則懼。合議攻陷探題府。殺英時。長門探題府。亦爲土居得能氏所攻陷。

【元寇】……後宇多天皇弘安四年の蒙古の入寇を云ふ。【世襲】……代々相續する。【武時】……剃髮して寂阿と號す。【貞經】……剃髮して妙慧と號す。【貞宗】……剃髮して具爾と號す。【依違】……附くが如く附かざるが如く、ぐづぐづして明白ならざるを云ふ。【奴輩】……やつぱら。【櫛田】……肥前に在り。【牛鬼】……牛の幽霊と云ふ意にて、妖神を云ふ。【龜】……音セウモン。物見標のある門。城門の上に樓を造りて遠望する所。【内城】……本丸。

菊池氏は、もと藤原氏であつて、その先祖の政則といふ者が、元寇を防いで手柄があつたので、その子則隆に及んで、肥後の菊池郡を賜はつて、代々領地として相續した。後、十餘代にして武時と曰ふものがあつた。この歳の三月に、武時は、少貳貞經、大友貞宗と與に、官軍に應ずることを相談したが、その相談が泄れ聞えた。北條英時は大宰府に居つたが、武時を呼び寄せた。すると、武時は、此方から先に事を起

さうと思つて、使を少貳と大友とに遣はして、期日を約束させやうとしたが、貞宗は、くづくして返事をせず、貞經も亦、京都の官軍が度敗北したといふ事を聞いたので、とうとう、武時からの使者を斬つて、首を英時に送つた。そこで、武時は大に怒つて曰ふには、われは誤であつた、彼奴らと大事を相談したのは、彼奴らが居なくても、われは、戦ふことの出来ないといふ事は無いと曰つて、そこで、百餘騎を引き連れて出發した。柳田神社の前を通つたが、馬が俄に進まなくなつたので、武時が曰ふには、如何なる妖神なれば、敢て義兵に對して邪魔するのであるかと曰つて、ふり返つて其ほこちを射ると、馬が直に進み出した。そこで、進んで英時を攻め、物見橋の外で戦つて、之に克ちおはせて、進んで本丸に押しかけた。そこで、英時は將に自殺しやうとした。折節貞經と貞宗とが、六千騎を引き連れて來りて英時を救うたので、武時は、そこで、長子の武重を家に歸らせ、自分は次の子供四人と一處に進み戦つて討死した。とかくする中に、貞經、貞宗は、京都が平定して金剛山の圍は解けたと云ふ事を聞き及んだので、そこで懼れて、相談して、探題の役所を攻め落して、英時を殺した。長門の探題の役所も亦、之と前後して、土居、得能氏等に攻め落された。

土居、得能氏、皆出於河野氏。河野與兒島同姓。世著於伊豫。承久時、河野通信者死王事。其庶子分爲兩家。曰土居曰得能。及元弘時、有土居通治、得能通言。皆勇毅好義。是歲二月、竝起兵應官軍。略地土佐。長門探題北條時直以兵艦三百來攻。通治、通言逆戰星岡。大敗之。四國兵多來屬焉。乃議于今治。欲東攻六波羅。聞金剛山圍解。車駕歸闕。則往兵庫謁焉。時直既爲一人所敗。走歸英時。英時已死。則從少貳島津氏而降。於是天下大定。而金剛山潰。兵聚般若寺。猶數萬人。正成與源定平將畿兵攻之。時治、高直、貞藤、高資、公綱等六十人率衆降。皆處斬。獨公綱以特旨宥罪。

【著於伊豫】……伊豫で名高い。【勇毅】……毅は果決なり。勇氣ありて決斷早きこと。【略地】……地を攻め取る。【星岡】……伊豫に在り。

【今治】……伊豫に在り。【島津氏】……駿河守忠治。【般若寺】……大和に在り。【畿兵】……畿内の兵士。【特旨】……特別の御恩召。【土居、得能の二氏は、いづれも河野氏から出たもので、河野は、兒島と同姓であつて、代々伊豫に名高くあつた。承久の時に、河野通信と云ふ者があつて、王事の爲めに死んだ。その妾腹の子が分れて、兩家となつたが、一を土居と曰ひ、一を得能と曰つた。元弘の時に、土居通信、得能通言といふ者があつて、皆、勇氣があつて決斷が早く、正義を好んで居つた。この年の二月に、一所に、兵を起して官軍に應じ、土佐の土地を攻め取つた。長門の探題の北條時直が兵艦三百艘を以て來り攻めた。通治と通言とは、星岡に迎へ戦つて大に之を敗つた。四國の兵の來り附く者が多かつた。そこで、今治に於て舟を整へて、東の方六波羅を攻めやうと思つた。その中に、金剛山の圍が解けて天子の御乗物は御所に御歸りなるといふ事を聞いたので、兵庫に出掛けて行つて拜謁した。時直は、すでに、通治、通言の二人の爲めに敗られて仕舞つて、逃げ走つて英時の許にたよりとしたが、英時は、はや死んで仕舞つたので、そこで、少貳、島津氏にたよりて降参した。こゝに於て、天下は大分平定した。しかし、金剛山にてくづれ散らばつた兵士が、般若寺に集まつたのが、まだ數萬人あつた。正成が、源定平と與に、畿内の兵士を引き連れて之を攻めた。時治、高直、貞藤、高資、公綱等六十人が、部下の者を引き連れて降参した。皆、斬罪に處せられた。たゞ公綱だけは、特別の御恩召を以て罪を赦された。

建武元年。帝論賞戰功。以正成爲攝津。河内守護。名和長年爲因幡。伯耆守護。正成任檢非違使。左衛門尉。特與長年。竝直決斷所。聽斷訟獄。令天下休兵務農。武人領邑。安堵如故。

【直】……當直する。出勤する。【聽斷】……とりさばく。【安堵】……堵は障なり。安堵は、もと住居に居んずることにて、遷り動かざるを云ふ。【如故】……もとの通りである。

建武元年に、後醍醐帝は、此度の戰功を評議して賞賜し、正成を以て攝津、河内の守護となし、名和長年を因幡、伯耆の守護となし、又、正成を檢非違使、左衛門尉に任命して、特別を以て、長年と共に、決斷所に當直出勤して、訴訟を取りさばかしめ、天下に令して兵事を休め農事を務めしめることにし、武人の領地は、變動は無く、すべて元の通りにして置かれた。

帝以京師之復爲足利氏之功也。歸闕之日。首超擢之。至是又管四大國。尊氏猶缺望。陰有異心。帝以高時邑自奉。以泰家邑賜皇子護良。以貞直邑賜三位局。二位局即嬪藤原氏。有殊寵。內謁漸行。時諸皇子皆復故。而

恒良爲藤原氏所生。又生成良。義良。意害護良。尊氏潛與合謀。遂構陷之。

【超擢】…順序を飛び越して拔き上げる。【管】…其國の守護となる。【四大國】…武藏、遠江、常陸、下總。【缺望】…望む所に満たずと思ふ。不足に思ふ。【泰家】…高時の弟。【貞直】…高時の一族。【殊寵】…他にすぐれたる御寵愛。【内調】…奥むきよりの頼み。女官などによりて取り入れを頼むこと。【害】…思む。邪魔にする。【構陷】…無實の事を附け加へて讒言して罪に陥し入れる。【帝】…京都の回復した事を以て足利氏の手柄であると御思になつたので、御所に御歸りになつた日に、第一に順序を飛び越えて尊氏を引上げられたが、こゝに至りて、又、四つの大國の守護となされた。尊氏は、それでもまだ、不足に思つて、ひそかに謀叛の心を起した。帝は、高時の領地を以て御自分の御賄料となされ、泰家の領地を以て皇子護良親王に賜はり、貞直の領地を以て三位の局に賜はつた。三位の局といふは、即ち女官の藤原氏の事で、特別の御寵愛があつたので、奥向からの頼み入れが、だんぐりに行はれるやうになつた。此時に、諸の皇子は皆、それ、本の如くになられたが、その中に、恒良親王は、藤原氏の生んだので、藤原氏は又、成良親王、義良親王を生んだが、心中に護良親王を邪魔に思つて居つた。そこで、尊氏が、人知れず、藤原氏と共に謀を合はせて、とうとう、護良親王を、色々と無實な事を附け加へて讒言して罪に陥し入れるやうにした。

當是時。帝寢倦。政。足利氏資望獨盛。新田氏亞之。正成以下充驅使而已。是歲。春。北條憲法作亂。據飯盛山。赤橋重時起伊豫。正成討憲法。土居得能氏討重時。纔平之。而帝游宴自如。益徵珍異。鹽治高貞獻千里馬。帝出觀之。以爲祥瑞也。藤原藤房諫曰。天馬母用於平生。近日賞罰無信。工役繁興。文臣內諛。武臣外怨。而奸雄窺釁其間。天馬之出。焉知非亂兆哉。帝變色入。藤房驟諫。弗聽。遂舍官遁去。帝驚使追之。不及。年春。藤原公宗結北條氏餘黨。陰謀大逆。名和長年等奉詔誅之。

【寢】…漸く。【資望】…地位と人望。【亞】…追ひ使ふ。【飯盛山】…河内に在り。【自如】…平生とかはらぬ。【珍異】…めづらしき者。【千里馬】…一日に千里を往くと云ふ名馬。【祥瑞】…目出たきしるし。【天馬】…もと、翼ありて天上を飛行すると云ふ獸の名なり。假りて、名馬を指す。【平生】…無事の時。【工役繁興】…大内を營み、馬場殿を建築するなど、大工事が、頻繁にはじまる。【奸雄】…姦悪なる英雄。暗に尊氏を指せるなるべし。【亂兆】…天下の騷動の起るしるし。【騾】…しばく。【藤原公宗】…北條記に見ゆ。【大逆】…大謀叛。公宗、北山の別荘に浴室を設けて、帝の臨幸を請ひ、帝を弑せんとせしことあり。【亂】…この時に當りて、帝は、そらくと政治に御あきになつた。足利氏の地位と人望とが、ひとり飛び離れて盛んであつて、新田氏が之に次いで居り、正成以下は、追ひ使はれる役目に充てられるばかりであつた。この年の春に、北條憲法が亂を起して、飯盛山に立て籠り、赤橋重時は、伊豫に起つたので、正成は憲法を撃ち、土居得能二氏が重時を撃つて、やつとの事で之を平定した位であつたのに、帝は遊んで宴會をなされて居つて平常と變つたことは無く、ますます珍らしい者を召し寄せられた。そこで、鹽治高貞は、一日千里を行くといふ名馬を獻上した。帝は御出ましになつて、それを御覽になつて、めでたいしるしであると思ひなされた。そこで、藤原藤房が御諫言申上げて曰ふには、天馬などと云ふ者は、平生無事の時に用は無いもので御座ります。近頃賞罰はあてにならず、色々な大工事は頻繁に始まり居ります。文官は宮中に在りて媚を諛ひ、武官は宮外に在りて怨んで居ります。そして、姦悪なる者、其間に在つて隙間をつけねらつて居ります。して見れば、天馬など、云ふ者が出来ましたのは、目出たところか、天下の騷亂のしるしでは御座りませうまいかと申上げた。帝は、御顔色を變へて内に入られた。かくて藤房は度々御諫言申上げたけれども、御聞き入れにならなかつたので、とうとう官職を棄て、遁れ去つて仕舞つた。流石に帝は御驚きになつて、後から藤房を追つかけさせられたけれども、追ひつゝ出来なかつた。二年の春に、藤原公宗は、北條氏の殘黨と相結託して、ひそかに、大逆を企てたが、名和長年等が、詔を奉じて之を誅殺して仕舞つた。

夏。北條時行等作亂關東。攻陷鎌倉。帝命尊氏往平之。尊氏遂據鎌倉。反。帝震怒。冬。遂詔菊池武重等諸將。從新田義貞。東伐尊氏。正成與名和長年。居守京師。直義拒箱根之險。武重時爲肥後守。以其兵先登。仰攻卻敵。追北陣。山腹。諸軍乃繼進。而別軍攻竹下。敗退。大友貞宗。鹽治高貞叛。降足利氏。諸軍崩潰。武重以四百騎扶義貞而西。赤松則村等。竝起應尊氏。帝賜天馬於使者。召還義貞。天馬途斃。

【攻陷鎌倉】…此時足利直義は成良親王を奉じて、鎌倉に在り。【震怒】…天皇の怒。【箱根】…相模に在り。【竹下】…駿河に在り。【崩潰】…山のくづれるが如く、川の潰ゆるが如く、兵士の逃散するを云ふ。【召還義貞】…義貞は此時に退いて尾張に屯す。【此年の夏、北條時行が、亂を關東に起して、鎌倉を攻め落したので、帝は、尊氏に言ひ附けて、出掛けて往つて之を平定せしめられると、尊氏は、とうとう鎌倉に立て籠つて謀叛した。帝は大に御怒りなされ、冬、とうとう、菊池武重等の諸將に詔して、新田義貞に従つて、東の方

へ出掛けて尊氏を征伐せしめられ、正成は、名和長年と、もに、京都に留まつて守つて居つた。尊氏の弟の直義が、箱根の險岨なる要害を以て居つた。武重は其時に肥後守であつたが、その部下の兵士を引き連れて先登して、下から山の上へ向つて攻め立て、敵を追ひ退け、逃げ走るを追つかけて、山の半腹に陣取つたので、諸軍は、そこで、其後について進んだ。然るに、別軍が、竹下を攻めたが、敗れて退いた。そこで、大友貞宗、鹽治高貞は、叛いて足利氏に降参して仕舞ひ、諸軍は、大くづれになつて大敗軍となつた。武重は、四百騎を引き連れて、義貞を扶けて、西へ引き返した。此時に、赤松則村なども、竝に兵を起して尊氏に應じた。そこで、帝は、例の千里の馬を使者に賜はつて、義貞を召し還させやうとされたが、その千里の馬は、途中でたふれて仕舞つた。

延元元年。正月。尊氏直義入犯京師。正成以兵五千守宇治。名和長年與源忠顯結城親光以二千守勢多。皆受制於新田氏。新田氏先失大渡。山崎之守尊氏乃入京師。結城親光佯降。欲刺尊氏。不成而死。帝幸叡山。正成聞之。徑赴行在。名和長年欲一視宮闕而行。還入京師。賊軍填塞。長年十七戰而至。大内則諸殿已爲賊兵所毀。長年下馬向闕。伏泣久之。終赴行在。信濃人勅使河原某在大渡。未知帝所之。謂其二子曰。吾亡朝之臣。何顏事逆臣哉。亦還京師。自殺于羅城門。賊焚宮闕。進據園城寺。以逼叡山。山徒英憲。祐覺等贊拒守之計。祐覺又受詔以舟七百艘泛湖。迎北畠氏兵入援。

【宇治】…山城に在り。【勢多】…近江に在り。【受制】…指圖を受ける。【大渡】…山城に在り。【山崎】…山城に在り。【徑】…た
だちに。【填塞】…音テンソク。充滿する。【勅使河原】…丹三郎。【逆臣】…足利尊氏を指す。【羅城門】…京城の南門。【泛湖】…泛は
汎と通ず。浮ぶ也。湖は近江の琵琶湖。
延元元年正月に、尊氏と直義とが、入つて京都を犯さうとした。正成は、五千人の兵士を引き連れて宇治を守り、名和長年は、源忠顯、結

城親光と與に、二千人の兵士を引き連れて勢多を守り、いづれも皆、新田氏の指圖を受けて居つた。新田氏が第一番に、大渡、山崎の二箇所の守備を失つて敗れたので、尊氏は、そこで、京都に入り込んだ。結城親光は、佯りて降参して、尊氏を刺し殺さうと思つたが、失敗して死んで仕舞つた。後醍醐帝は、比叡山延曆寺に行幸して難を避けられた。正成は、此事を聞いて、たゞちに比叡山なる行在所に赴いた。名和長年は、一たび御所の様子を見てから行在所に行かうと思つて、引き返して京都に入つたが、賊軍が京師中に充滿して居つたので、長年は十七度も戦争して、やつと大内裏に到着して見ると、諸の御殿は、もはや賊軍の爲めにこぼされて仕舞つて居つたので、長年は馬から下りて御所に向つて、地に俯伏して泣くこと稍暫くにして、仕舞に叡山なる行在所に赴いた。信濃の人勅使河原某は、大渡に居つたが、未だ帝が御出でになつた所を知らなかつたので、その二人の子供に向つて曰ふには、われは、滅亡せんとする朝廷の臣民であるから、どの顔を以て逆賊足利に事へることをしやうかといつて、これも亦、京都に引き返して、羅城門に於て自殺した。賊兵は、御所を焼き拂つて、進んで園城寺に立て籠つて、叡山に逼つた。叡山の僧徒なる英憲、祐覺等は、行在所を拒守するの計畫に與かりて盡力して居つた。祐覺は、又、詔を受け、舟七百艘を以て、琵琶湖に浮んで、北畠氏の軍勢を迎へて入り援けしめることにした。

北畠氏。姓源。出於具平親王。世爲名卿。及元弘時。有顯家焉。帝復位。以從三位參議拜陸奥守。與父親房。奉義良親王。出鎮東邊。結城宗廣世居陸奥。與其子親光。先歸官軍。於是受命副顯家。顯家年甫十七。固辭。乃詔曰。文武不可岐。貴戚掌軍。古之制也。顯家赴任。東邊無虞。尋任鎮守府將軍。及帝討足利尊氏。詔顯家會軍。顯家至鎌倉。則尊氏業已西矣。顯家并程追之。東北兵爭附顯家。凡五萬人。至近江。攻六角氏賴觀音寺城。拔之。斬首五百級。遂至叡山。諸將因會議。戰。或欲速襲之。正成等然之。即夜。顯家與諸將。攻破園城寺。新田義貞遂復京師。而夜爲賊所返襲。敗還。尊氏復入。

【具平親王】……村上帝の皇子。【名卿】……名高き公卿。【親房】……准后親房は、大納言師重の子。神皇正統記、職原抄等を著す。【副】……貳なり、輔佐なり。【文武不可岐】……文武と武事とは一途にして分つ可からず。【貴戚】……貴族。【無虞】……平穩にして、非常の事變なき也。【業已】……すでに。【井程】……井は兼ぬる也、程は行程なり。二日路を一日に行くと云ふ。【圍城寺】……細川定禪之に據る。【返襲】……引き返して不意撃する。

北高氏は、姓は源と云ひ、具平親王から出たもので、代々名高い公卿であつた。元弘の時に及んで、顯家といふ者があつたが、帝が隱岐から京都に還つて御位に復られて後、從三位參議を以て、陸奥守に拜命せられたので、父の親房と、義長親王を守り立て、出で、東方の邊境即ち奥羽地方を鎮撫することになつた。結城宗廣は、代々陸奥に居つたものであるが、その子親光と與に、第一番に官軍に歸服したので、こゝに於て命令を受けて顯家を輔佐することになつた。顯家は、その時に、年がやつと十七であつたので、固く辭退した。そこで、詔して仰せられるに、文事と武事とは元と一途で、分つことの出来ない者であつて、貴族たる者が軍事をつかさどることは、古昔の制度であるとして許されなかつた。顯家が任地に赴いてから、奥羽地方は平穩にして、心配すべき事變は無かつた。間もなく、鎮守府將軍に拜命せられた。その後、帝が足利尊氏を御討ちになるに及んで、顯家に詔して、征討の軍に會合するやうにされた。顯家が鎌倉に到着すると、尊氏は、もはや既に西の方京都の方へ向つた後であつた。そこで、顯家は、大急ぎで、二日路を一日に行つて、之を追つかけた。東北の地方の兵士は、先を争うて顯家に附いたので、凡て五萬人となつた。かくて近江に至つて、六角氏頼を觀音寺城に攻めて、之を攻め落し、首を斬ること五百級であつた。と云ふ。諸將は、そこで、集會して戰の評議をした。速に賊を不意撃しやうと思ふ者があつたので、正成等は之を尤と思つた。そこで、其夜に、顯家は、諸將と與に、賊が根據地として居る圍城寺を攻め破つた。かくて、新田義貞は、とうとう京都を取り戻した。然るに、夜、賊が引つ返して不意撃をしたので、義貞は敗れて引つ返した。尊氏は、再び京都に入り込んだ。

當是時。諸道賊軍悉聚京師。凡數十萬人。而官軍不滿十萬。諸將分將之。復攻京師。兵各可一萬。正成將五百騎。軍于糺林。縱火于出雲路。尊氏令上杉憲顯。足利高經等。以東國騎兵五萬。來衝擊之。正成豫造楯數百。鈕而聯之。自蔽以射。賊卻。輒縱騎乘之。賊辟易逃走。顯家。義貞。遂擊走尊氏。而日暮。義貞欲留陣京中。正成往說之曰。今日我軍克。而少所獲。以寡兵屯京中。鹵掠四散。盍懲前日之敗。使敵復振。後難爲力也。我且引

還。養銳再舉。以驅敵於數百里外。是全勝之策也。義貞然之。乃皆退陣坂本。尊氏收諸軍。復入京師。正成素蓄一卒善泣者。日日教其卒與僧數人。行物色原隰。賊兵問故。輒泣曰。昨日之戰。七將皆沒。將獲尸葬之。尊氏聞而大喜曰。彼戰勝而退。有以也。乃索義貞。正成首。獲稍肖者。梟之。以示於衆。其夜。正成遣卒數千。執炬北走。累累不絕。尊氏軍望見。謂官軍喪其將領。而潰去也。急分其兵。四出要擊。在者不復設備。正成與諸將合兵。夜發。味爽。直薄尊氏軍。縱火鼓譟。尊氏軍大潰而走。委甲蔽野。官軍不甚追賊。前者顧後者。以爲追兵也。往往自殺。死亡大半。二月。尊氏直義走于湊川。官軍追擊。與直義戰于豐島。勝敗未決。正成後至。遶出敵後。直義不戰而走。會土居通治。得能通言。以舟師來援。擊破賊先鋒大友貞宗兵。復擊走直義。尊氏終令赤松則村守播磨。而航海走鎮西。

【糺森】……京都の北に在り。【出雲路】……京都の北に在り。【圍擊】……つ、か、り、撃つ。【鈕而聯之】……鈕は音チウ。鐵の蝶つがひの如き者にて柄をつなぎ合はせる。太平記には、一枚楯の輕々としたるを五六百帖ばかり合せて、板の端に懸金と壺とを打つて敵の驅けんとするときは、此楯の懸金を懸け、城の楯楯の如く、一二町が程につき井べて、透間より散々に射させ、敵引けば、究竟の懸武者を五六百騎ずつりて、同時にばつと驅けさせる間云々とあり。【辟易】……音ヘキエキ。勢におされて避け退く也。【鹵掠四散】……分捕せんが爲めに四方に散らばる。【前日之敗】……賊に返襲せられしを云ふ。【養銳】……士卒の銳氣を養ふ。【蓄】……養ふ、扶持を與へて置く。【善泣者】……門杉平次とも杉原七郎兵衛とも云ひ傳ふ。世に謂はゆる楠の泣き男なり。【物色原隰】……隰は音シフ。澤地。原や澤邊などに行き容貌衣服など

を自あてにさがし求むる也。【七將】……楠、新田、脇屋、北島、結城、名和、千草(源忠顯)の七人を云ふ。【有以】……以は故。わけがある、尤至極である。【執炬】……松明を持つ。【累累】……引き續く貌。【將領】……大將首領。【在者】……後に残れる者。【味爽】……明け方。【委甲敵野】……脱ぎ棄てたる鎧が野一杯ある。【往往】……「ならざるを云ふ。【湊川】……攝津に在り。【豊島】……攝津に在り。

この時に當りて、諸道の賊軍は、悉く皆、京都に集まつたので、その軍勢は凡そ數十萬人であつた。然るに官軍は、十萬人にも足らなかつたが、諸將がこれを分つて引き連れて、復た京都を攻め、その兵数は各二萬ばかりづつであつた。正成は、五百騎を引き連れて、糺森に陣取つて、出雲路に火を附けた。尊氏は、上杉憲顯、足利高經等をして東國の騎兵五萬人を引き連れ來つて眞一文字に突きかゝらせた。正成は、前以て楯數百枚を造つて、それを蝶つがひの様な者で連ね合せて置いて、其陰に隠れて弓を射出したので、賊軍は少し退却した。すると直に、正成は、騎兵を繰り出して之に付け込ませたので、賊軍はその勢に驚きおそれて逃げ走つた。顯家と義貞とが、とう／＼尊氏を攻撃して敗走させた。しかし、日が暮れたので、義貞は京都の中に留まつて陣取らうと思つた。正成は出掛けて行つて義貞に説いて曰ふには、今日、我が官軍は勝利を得たけれども、討ち取つた獲物が少く御座いましたから、今、少數の兵士を以て京都の中に屯營するときは、其兵士が財物などを分捕しやうと思つて四方へ散らばつて仕舞ふでございませう。前日の敗軍に御懲りなさうぬか。また敵の爲めに返り襲はれるとも成りませう。敵の勢が再び、んになることがありませんと、後には奈何ともすることが出来難くなりませう。されば、今、我が軍は、しばらく引き還して、士卒の銳氣を養つて、再び出掛けて來て、そして敵を數百里の外に逐ひ拂つて仕舞ふやうにするのが、全勝を得るの謀で御座いますと曰つた。義貞は、之を尤至極と思つて、そこで、退却して坂本に陣取つた。そこで、尊氏は、諸軍を引き纏めて、また京都に入り込んだ。正成は、平素から、一人の泣くことの上手な兵卒をかゝへて置いたが、明くる日に、其兵卒に言ひ含めて、數人の僧侶と共に途を行きながら原や澤地を尋ねまはらせた。賊兵は、其仔細を問うた。その男が、そこで泣いて曰ふには、昨日の戦に、七人の大將が皆討死したされたので、其屍骸を捜し出して之を葬らうといつたので御座ると曰つた。尊氏は、それを聞いて大に喜んで曰ふには、彼れが昨日の戦に勝利を得たにも拘らず退却したのは、尤な事であつたと曰つて、そこで、義貞、正成の首をさがし求めさせて、其容貌のいくらか似て居る者を見付け出して、義貞、正成の首であると云つて、之を獄門にかけさらし、以て大勢の者に示した。其夜、正成は、士卒數千人を遣はし、松明を持つて北の方へ向つて走りしめたが、長く引き續いて居つた。尊氏の軍勢は、之を望み見て、官軍は其大將を失つたので散り散りばら／＼になつて逃げ去るのであると思つたので、急に其兵士を分けて、四方に出掛けて其途中に待ち受けて撃たせることにし、其跡に残つて居る士卒共は、安心して、また格別の備をしなで居つた。すると、正成は、諸將と兵を合はせ、夜の間に出發して、明け方に、直に尊氏の軍に迫り、火をつけて陣太鼓を鳴らし関の聲を揚げた。尊氏の軍は、大に崩れ亂れて逃げ走り、脱ぎ棄てた鎧が、野原一面にあつた。官軍はあまりに賊軍を追つ掛けたわけでは無いが、賊兵の前のは後の者を振りかへり見て、それをば自分を追つかけて來る敵兵であると思つて、自殺した者も隨分少からず、死亡した者も半以上であつた。二月に、尊氏、直義は、湊川に走つた。官軍は、それを追つかけて行つて攻撃し、直義と豊島に戦つたが、その勝敗は未だ付かなかつたが、正成は少し後れて到着して、ぐるりと廻りて敵の後に掛けたので、直義は戦はずして逃げ走つた。其時丁度、土居通治、得能通言が舟い／＼を引連れて來り助けたので、賊の先鋒なる大友貞宗の兵を撃ち敗り、また直義を撃ち走らした。尊氏は、終に赤松則村をして播磨を守らせておいて、そして、自分等は、海を渡つてはる／＼と九州地方まで逃げ走つた。

菊池武敏。武重弟也。時在肥後。聞少貳頼尙發兵迎尊氏也。將三千人追之。至水木渡。頼尙已濟。餘衆待舟。武敏擊殲之。遂攻少貳貞經于内山。斬之。遂與尊氏戰于鞆濱。有叛降者。武敏敗。歸菊池城。城尋陷。武敏逃匿山中。於是九國悉附尊氏。

【水木渡】……筑前に在り。【濟】……水を渡る。【一】……一人。【残らず討ち取ること】。【内山】……筑後に在り。【鞆濱】……筑後に在り。此役、阿蘇大宮司、宇治惟直、秋月備前守等戦死す。【叛降者】……松浦氏、浦上氏等なり。菊池武敏は、武重の弟であるが、その時に肥後國に居つて、少貳頼尙が兵士を繰り出して尊氏を迎へると云ふ事を聞いたので、三千人を引き連れて、之を追つかけて水木渡まで到着したが、その時に頼尙は已に川を渡つて向の岸に着いて居り、残れる軍勢が舟を待つて居つたので、武敏は撃つて之を残らず討ち取つて仕舞ひ、とう／＼少貳貞經を内山に攻めて、之を斬り、とう／＼尊氏と鞆濱で戦つたが、叛いて尊氏に降服する者が有つたので、武敏は敗北して、菊池城に歸つた。其城も間もなく攻め落されたので、武敏は、逃げて山中に隠れた。こゝに於て、九州地方は、残らず、尊氏に附いて仕舞つた。

尊氏之西也。正成欲窮追之。義貞遷延。及三月乃發。攻赤松則村于白旗城。城固不拔。義貞弟義助說之曰。嚮楠氏據金剛山。北條氏舉天下兵攻之。不克。竭力一城。而顧失天下。君盍鑿焉。聞尊氏已并九國。且東上。君宜分兵圍城。而急拔舟坂。以徇山陽。義貞乃令義助攻舟坂。舟坂賊兵據險不下。初尊氏犯關。山陽皆應之。獨兒島高德以孤軍攻福山城。不克。其兵連叛。乃逃三石山。及聞義助攻舟坂。則喜。遣間使告曰。三石之南有

開道。可以出舟坂之背。吾起兵于熊山。使賊分兵。公則一軍由開道夾攻之。必拔舟坂。舟坂拔。則西國無不服者矣。義助大喜。與約期。先期一夜。高德與父範長上熊山。倉卒不及聚族人。兵僅二百。天明。舟坂賊果分三千人。七道來攻。高德防戰重傷。終奮擊走賊兵。而義助潛軍出賊後。遂拔舟坂。遣一將據福山。

【窮追】……追ひつめる。【遷延】……ぐづぐづする貌。【白旗城】……播州に在り。【蓋鑿】……手本となされてはどうか。【舟坂】……備前に在り。【孤軍】……孤立して援兵無き軍勢。【福山城】……備後に在り。【連】……しきりに引き續いて。【三石山】……備前に在り。【間使】……間隙に投じて行く故に間使と云ふ。しのびの使。【熊山】……備前に在り。【開道】……他の道、うら道。【倉卒】……俄に、あはて。【尊氏】尊氏が西へ向つて走つたときに、正成は、之を追ひつめやうと思つたが、義貞は、ぐづぐづして居つて、三月になつてから、やうく出發して、赤松則村を白旗城に攻めたけれども、城の要害堅固にして、攻め落されなかつた。そこで、義貞の弟義助が、義貞に説いて曰ふには、さきに、楠氏が金剛山に立て籠つたときに、北條氏は、天下の兵卒を殲らさず集めて、之を攻めたけれども、勝つことが出来なかつた。かく一つの城に力のあらん限りを盡して居るうちに、かへつて天下を失つて滅亡して仕舞つた。あなたは、それを手本になされては如何ですか。聞くところでは、尊氏は、もはや九州を併せて、今や東の方へ上つて来やうと致して居ると云ふ事であるが、さすれば、あなたは、兵士を分つて此城を圍み、そして一軍を以て大急ぎで舟坂を攻め落して、それを以て山陽道に示して歸服せしめるやうにするが宜しう御座いますと曰つた。義貞は、そこで、義助をして舟坂を攻めさせたが、舟坂の賊軍は、險阻なる要害に立て籠つてなかく下りなかつた。初め、尊氏が御所を犯したときに、山陽道は皆之に應じたけれども、たゞ兒島高德だけは、孤立して援くるもの無き軍勢を以て福山城を攻めたけれども、勝利を得ず、その部下の兵士どもが引き續いて高德に背いたので、そこで、三石山に逃げたが、こゝに至つて、義助が舟坂を攻めて居るといふ事を聞くに及んで、高德は喜んで、しのびの使を派遣して義助に告げて曰ふには、三石の南の方に、うら道があつて、それから舟坂の後に居ることが出来ます。私は、兵を熊山に起して賊をして其方へ軍勢を分けさせるやうに致しませう。あなたは、其間に、一軍を分つて開道から進ませて、之を挟み撃にするときは、屹度舟坂を攻め落すことが出来ませう。舟坂が落城するときは、西方の國々は、歸服せぬ者はありませんまいと曰つた。義助は大に喜んで其期日を約束した。その期日の前の夜に、高德は父範長と與に、熊山に上つたが、何分俄の事で、一族の者共を集め寄せる時日も無かつたので、兵士は僅に二百人であつた。夜明け頃に、舟坂に立て籠つて居る賊兵は、果して三千人を分けて、七道から來り攻めた。高德は防ぎ戦つて、重い手創を受けたが、結局奮ひ撃つて賊の軍勢を走らせた。そして、義助は、ひそかに軍勢を繰り出して賊の後に掛けて、とうとう舟坂を攻め落し、一將を派遣して福山に立て籠らせた。

赤松則村馳使告尊氏曰。白旗城陷。則公雖有衆。莫所用之。尊氏乃大舉東上。水陸並進。福山城陷。義助引兵退。菊池武重殿之。賊舟師上陸。陣西川尻。高德聞之。欲合於義助。踰山而東。創劇。範長託之僧寺。以八十餘人東走。會義貞已釋白旗圍。赤松氏兵三百騎。見範長過。呼曰。敗卒盍釋甲降。範長笑曰。嚮尊氏百方招我。我輒毀其書投火。今曷降汝輩哉。潰其陣。出賊傳呼敗卒過。士兵羣起。範長悉亡其兵。所餘者六人。曰。悔我不舉族來。乃伏刃死。

【殿之】……軍行に後に在るを殿と曰ふ。しんがり。【陣西川尻】……太平記等の書に據れば、西川尻に陣するは、範長、高德にして、賊兵に非ず。傳寫の謬ならんか。【創劇】……きずの痛み重りたる也。【毀】……壊破する也。【傳呼】……彼れより此れに呼び傳へる。【士兵】……土地の農兵。【伏刃】……刃を地に立て身を其上に伏して自殺する也。【則公】赤松則村は、急使を馳せて、尊氏に告げて曰ふには、白旗城が落城するときは、あなたは、如何程の大軍がありましても、役に立てること出来ませうまいと曰つた。尊氏は、そこで、大軍を引き連れて、海陸兩方から進んだ。それで福山城は落城したので、義助は、兵士を引き連れて退却し、菊池武重が、そのしんがりと成つた。賊の海軍は、陸に上つて、西川尻に陣取つた。高德は、此事を聞いて、義助と一處にならうと思つて、山を越えて東の方へ向つたが、先頃受けた手創がひどく痛んだので、範長は、高德を寺に預けて、八十餘人を引き連れて、東の方へ向つて走つた。折節、義貞は、白旗城の圍を解いて仕舞つた時であつたので、赤松氏の軍勢三百騎は、範長が通り過ぎるのを見て、呼ばりて曰ふには、敗北した士卒どもは、なぜ鎧を脱いで降参しないのかと曰つた。範長は笑つて曰ふには、さきに尊氏が色々としてわれを引き寄せやうとされたが、われは、いつでも必ず、其手紙を破りて火で焼いて仕舞つた位であるのに、今、どうして汝等に降参するところがあらうぞと曰つて、其陣を打ち崩して出た。賊は、敗北した士卒が通り過ぎると、それからそれへと呼び傳へたので、土地の農兵が群がり起つたので、範長は、残らず其部下の兵士を失つて、餘すところは僅に六人であつた。範長が曰ふには、われが一族の者を残らず引き連れて來なかつたことを後悔すると曰つて、そこで、刃に俯伏して死んで仕舞つた。

賊軍乘勝而進。義貞軍兵庫飛書告急。朝廷震動。時北畠顯家已歸鎮。京

師兵寡。帝命正成行援義貞。正成奏曰。尊氏新舉九國而來。其鋒甚銳。我以疲兵格鬪。無他奇道。其敗必矣。爲今計者。陛下復幸叡山。召還義貞。縱賊入京師。而臣歸河內。絕其糧道。則賊兵日散。我兵日聚。於是夾而攻之。可一戰而破也。義貞之計。蓋亦出此。顧慮人言耳。戰道非一。要歸於勝。願朝廷再計之。諸公卿皆然之。獨參議藤原清忠不可。曰。賊雖衆盛。不過如前役。王師有天命。宜防之外也。帝從之。正成退謂其子弟曰。事已至此。何必抗議。五月十六日。與弟正季。子正行等。辭闕而西。至櫻井驛。正行時年十一矣。正成遣歸之河內。誠之曰。汝雖幼已過十歲。猶能記吾言。今日之役。天下安危所決。意吾不復見汝也。汝聞吾已戰死矣。則天下盡歸。足利氏可知也。慎勿計較禍福。嚮利忘義。以廢乃父之忠。苟使我之族隸而有二人存者。則率以守金剛山舊址。以身殉國。有死無他。汝所以報我莫大於此。因以帝所嘗賜寶刀授之訣別。正行請從共死。正成叱之起。正行揮涕而去。

【飛書】……急飛脚を立てる。【震動】……ふるひ恐れて動揺する。【歸鎮】……鎮守府に歸りたるを云ふ。【格鬪】……うちあひた、かふ。闘の字は戦の字に比すれば小を意味する也。【奇道】……常に異なりたる手立。【顧慮人言耳】……一戦をもせずして歸り來つては世人の笑と

なるべきによりて之を遠慮して歸らざるなりとの意。【前役】……前日尊氏が鎌倉より西上せし戦役を指す。【天命】……天の助。【宜防之外】……一歳の内二度まで叡山に幸するときは、何によつて萬乗の重きを示さん、故に之を都の外に防べしとの意。【抗議】……反對の議論をなす。【櫻井驛】……攝津に屬す。現今、田間に一松樹并に石碑あり、楠公訣別の舊跡なりと云ふ。【誠】……警戒の辭を誠と云ふ。【計較】……計は籌策なり、較は比較なり。はかりくらべる。【乃父】……汝の父。正成自ら云ふ。【以身殉國】……身を棄て、國の爲めに盡す。【寶刀】……菊作の刀なりと云ふ。

【譯註】賊軍は、勝つた勢に乗じて進んで來たので、義貞は兵庫に陣取つて、急飛脚を以て危急なることを報告して來た。朝廷は、ふるひ恐れて動揺した。その時に、北畠顯家は、もはや鎮守府に歸つて仕舞つたので、京都には兵が少かつた。後醍醐帝は、正成に命令して、出掛け行つて義貞を助けさせられた。すると、正成が奏上して曰ふには、尊氏は、新に九州の兵を澤山に引き連れて來ましたので、其鋒先は大層鋭いこととて御座ります。されば、我は、疲れたる兵士を引き連れて打ち合ひた、かひまして、他の尋常に異なりたる手立が御座りませぬときは、我が軍が敗れますことは、きまつた事で御座ります。今日の計は、陛下が再び比叡山に行幸なされ、義貞を呼び返して、賊の思ふままに京都に入らせまして、そして私は河内に歸りまして、賊の兵糧運送の道を絶ち切りするならば、賊の兵士は閉口して、日増しに解散し、我が兵士は日増しに聚まつて來まじやう。そこで、兩方から挟み撃ちにして攻めするならば、一度の戦争で賊を破ることが出來まじやう。義貞の謀も、大體、亦、此の如くで御座りませぬ。その事を申出でませぬのは、人の噂を氣遣かつて居るからで御座りませぬ。戦争の仕方は、一つに限つたといふ譯では御座りませぬ。つまり、勝ちさへすれば善いので御座ります。願はくは朝廷に於きまして、今一度御考下さいと曰つた。諸の公卿たちは、皆之を尤至極と思はれたれども、たゞ參議藤原清忠のみが之を善しとせずして曰ふには、賊は其數多く其勢盛であるとしても、前の戦の時位のことであらう。その上、天子の御軍には、天の助もあることである。されば賊軍をば都の外で防がば宜しいと曰つた。帝も之に従はれた。正成は、退いて、その子弟共に向つて曰ふには、事どもはや斯る次第に成つたからには、何も是非とも反對の議論を申し立てねばならぬと云ふ事は無いと曰つた。五月十六日に、弟の正季、子正行など、共に、御所に御暇乞して西方へ向つて、櫻井驛に到着した。正行は其時に十一歳であつた。正成は、之を河内に遣り歸さうとして、之に教訓して曰ふには、汝は、幼少ではあるけれども、すでに十歳を越して居ることであるから、それでも能く吾が言ふ事を記憶して居れよ。今日の戦は、天下の安泰になるか危急になるかの定まる所である。思ふに、吾は討死をするに相違あるまいから、此後再び汝を見ることはあるまい。汝若し、吾が已に討死して仕舞つたと云ふ事を聞いたならば、天下は殘らず足利氏に附くのは分り切つた事である。其時に當りて、慎んで、禍と福とをはかりくらべて、利の方へ向ひ附きて、正義を忘れて、そして、汝が父の忠義のするやうな事をしては相成らぬ。いやしくも我が一族の者來る者などにして一人でも生存して居る者があるならば、それを引き連れて金剛山の昔の城址を拒守して、身を捨て、國の爲めに盡し、死ぬるばかりである。汝が我に報ゆることは、此れよりも大きい事はないのであると曰つて、就いては、帝がかつて賜はつたところの寶刀を授け與へて、眼乞して別れた。正行は従つて是非とも一處に死なうと請うたけれども、正成は、それを叱りつけて起ち上つたので、正行は、落つる涙を拂つて立ち去つた。

正成兵庫に下向の事

【参考】左に太平記の一章を録して參考に資す。

尊氏卿、直義朝臣、大勢を率して、上洛の間、要害の地に於て、防ぎ戦はんために、兵庫に引き退きぬるよし、義貞朝臣、早馬を進らせて、内裏

に奏聞ありければ、主上大に御騒ぎありて、楠判官正成を召されて、急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力を合せて、合戦を致すべしと仰せられければ、正成長りて奏しけるは、尊氏卿已に筑紫九國の勢を率して上洛候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。御方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乗りたる大勢に懸け合ひて、尋常の如くに合戦を致し候はば、御方必定打ち負け候ひぬと覺え候ふなれば、新田殿を京都へ召し候ひて、前の如く山門へ臨幸成り候ふべし。正成も河内へ罷り下り候ひて、畿内の勢を以て、河尻を差し塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵糧をつかり候ふ程ならば、敵は次第に疲れて落ち下り、御方は日々隨ひて馳せ集り候ふべし、其時に當りて、新田殿は山門より推し寄せられ、正成は弱手にて攻め上せ候はば、朝敵を一戦に滅す事ありぬと覺え候。合戦は兎ても角ても始終の勝こそ肝要にて候へ。能々遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候ふと申しければ、誠に軍旅の事は、兵に譲られよと、諸卿會議ありけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、正成が申す所も、其謂れありといへども、征討のために差したる節度使未職を成さざる前に、帝都を捨てて、一年の内に二度まで山門へ臨幸ならんこと、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ處なり。縱令尊氏筑紫勢を率して、上洛すとも、去年東八箇國を順へて上りし時の勢にはよ過ぎず、凡戦の始より、敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻めに滅さん事、何の仔細かあるべきなれば、只時を替へず、楠罷り下るべしと仰せ出されける。正成此上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都を立ちて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成、是を最期の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ様ありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を授けしけるは、獅子子を産みて三日を經る時、數千丈の石壁より是を擲ぐ、其子獅子の機分あれば、救へざるに中より跳ね返りて、死する事を得ずといへり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に強らば、我が教誡に違ふ事なれ。今度の合戦は天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、是を限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りとて、一旦の身命を助らんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死に残りてあらん程は、金剛山の邊に引き籠りて、敵寄せ來らば、命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是れ汝が第一の孝行ならん事と、泣々申含めて、各東西へ別れにけり。昔の百里奚は、穆公晋の國を伐ちし時、戦の利なからん事を鑒みて、其將孟明視に向ひて、今を限の別を悲み、今の楠判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんとを愁へて、其子正行を強めて、其將孟までの義を進む。彼は異國の良弼、是は吾朝の忠臣、時千載を隔つといへども、前聖後聖一揆にして、有り難かりし賢佐なり。正成兵庫に著きければ、新田左中将總て對面し給ひて、叔慮の趣を尋ね問はれる。正成長りて、所存の通りと勅定の様とを、委しく語り申しければ、誠は敗軍の小勢を以て機を得たる大敵と戦はんこと叶ふべきにてはなけれど、去年關東の合戦に打ち負けて、上洛せし時、路にて猶支へざりし事、人口の嘲り通る、時を得ず。それこそあらめ。今度西國へ下されて、數箇所の城郭一も落し得ずして、結局敵の大勢なるを聞きて、一支もせず、京都まで遠引したらんは、餘にいふがひなく存する間、戦の勝負を見ずして、只一戦に義を勤めばやと存するばかりなりと宣ひければ、正成重ねて申しけるは、衆愚の愕々たるは、一賢の唯々に如かずと申し候へば、道を知らざる人の譏をば、必ずしも御心に懸けらるまじきにて候。只戦ふべき所を見て進み、叶ふまじき時を知りて退くこそ、其將とは申し候ふなれ。さてこそ、暴虎馮河死而無悔之者不與と、孔子も子路を誡められし事の候。其上元弘の初には、平大守の威猛を一時にくだかれ、此年の春は尊氏の逆徒を九州へ退けられ候ひし事、聖運とは申しながら、偏に御計略の武徳に依りし事にて候へば、合戦の方に於ては、誰か福(サミ)し申し候ふべき。殊更今度西國より御上洛の事、御沙汰の次第、一々に道に當りてこそ存じ候へと申しければ、義貞朝臣誠に顔色解けて、通夜の物語に、數盃の興を

ぞ添へられける。後に思ひ合すれば、是を正成が最期なりけりと、哀なりしことなり。

正成乃至兵庫。慰勉義貞。訣飲終夜。當是時、尊氏將水軍。直義將陸軍。陸軍稱五十萬。正成率手兵七百。陣于湊川。以當之。義貞以三萬騎。陣于和田崎。以扞水軍。水軍先鋒過而東。義貞拔軍循之。而尊氏全軍已上和田崎矣。正成顧謂正季曰。我腹背受敵。不可遁也。先破前者。而後接背者。如何。正季曰。然。於是兄弟竝突入陸軍。七離七遭。欲獲直義。直義馬傷而墜。我兵垂及。有一敵將。遮鬪而逸之。尊氏亦分兵來援。包我軍後。正成兄弟回馬當之。血戰十六合。盡亡其騎。所餘七十三騎。猶可以潰圍而死。而何爲。曰。願七生人間。以殺國賊。正成欣然曰。是獲吾心。耦刺而死。正成年四十三。宗族十六人。從士五十餘人。悉死之。菊池武重在義貞軍。使弟武吉來視湊川戰狀。會正成且死。不忍去。亦死之。

【兵庫】…攝津に在り。【慰勉】…なぐさめはげます。【訣飲】…訣別の酒宴、わかれの酒盛。【和田崎】…兵庫の東に在り。【扞】…ふせぐ。【循之】…之に引き添うて行く。【腹背】…前後。【接】…接は交なり。接戦する。【一敵將】…樂師寺十郎二郎。【逸】…遁れる。【血戰】…血まみれになつて戦ふ。【十六合】…十六度。【潰圍】…潰は、つひやず、衝き散らす也。圍を突きくづす。【國賊】…足利氏を指す。【獲吾心】…吾が思ふ所も同じとの意。【耦刺】…音グウセキ。耦は偶なり、二人相對偶する也。刺は傷なり、穿なり。刺し違へること。

正成は、そこで、兵庫に到着し、義貞を慰めはげまして、夜すがら最後の酒宴を催した。この時に當りて、尊氏は、水軍の將となり、直義は陸軍の將となり、陸軍は五十萬と稱して居つた。正成は手勢僅に七百人を引き連れて、湊川に陣取つて、そして陸軍に當ることとし、義貞は、三萬騎を引き連れて、和田崎に陣取つて、そして水軍を禦ぐことにした。すると水軍の先陣は、すでに和田崎を通り過ぎて東の方へ向つて進んだので、義貞は、その陣地を引き拂つて、敵の水軍の先陣と並行して進んで行つた。すると、其間に、尊氏の全軍は、もはや和田崎に上陸して仕舞つた。正成は、振り返つて正成に向つて曰ふには、われは、前と後に敵を受けることになつたから、逆も通れることは出来なうであらう。そこで、先づ前の敵を破つて、そして後に、後の敵に接戦しては、どうだと曰つた。正成は、宜しう御座ると曰つた。こゝに於て、正成、正季の兄弟は、相違んで敵の陸軍を目掛けて突き入り、七たびも離れて七たびも逢ひ、是非とも直義を討ち取らうと思つた。直義は、その乗つて居る馬が負傷したので馬から落ちた。我が兵士は、殆んど直義に及ばうとした。一人の敵の大將があつて、逆り闘つて直義をのがれさせた。尊氏も、亦兵を分けて來り援けさせて、我が軍の後を取り巻いた。正成兄弟は、馬を回して之に當り、血まみれになつて戦ふこと十六度にも及んで、残りず其騎兵を失つて仕舞つて、残るところは七十三騎となつた。それでも圍を衝きくづし通れることが出来はした。ちうけれども、正成は、其心に生きることを願はなかつたので、そこで、走つて湊川の北の百姓家に入つて、坐つて鎧をぬいで見ると、その體には十一箇所の手創を負つて居つたが、願ひて正成に向つて曰ふには、死んでからどうするかと曰ふと、正成が曰ふには、願はくは七度人間に生れて來て國賊を殺して仕舞ひたいと思ひますと曰つた。すると、正成は喜ばしげな様子で曰ふには、吾もさう思ふと曰つて相互に刺し違へて死んで仕舞つた。正成は年が四十三歳であつた。一族の者十六人、家來五十餘人、残りずそこで死んで仕舞つた。菊池武重は、義貞の軍隊の中に居つたが、弟武吉をして來つて湊川の戦争の様子を視させたが、折しも正成がまさに死なうとするときであつたので、立ち去るに忍びずして、武吉も亦そこで死んだ。

義貞敗退。尊氏入京師。送正成首於河内。一家聚哭。正行起入室。其母尾而闕之。則執父所授刀。將自殺。母徑入奪刀而泣曰。汝何惑焉。乃父之遺歸汝。豈教汝自殺也。汝啣遺命。歸來告我。而女先忘之。惡能任王事。正行大悟。自是以討國賊復父讐爲志。常與兒童嬉戲。爲馳逐狀。曰。追足利也。爲斬首狀。曰。獲尊氏元也。楠氏族黨多死湊川。而河内。紀伊之間。猶有義故存者。皆思戴正行。

【尾而闕之】……後から附いて行つてのぞき見る。【徑入】……徑は直なり。たゞちに室に入る。【啣遺命】……啣は銜と通ず。口に物を含む

こと。父の遺言の命令を承り奉じて。【任王事】……天子様の御役に立つ。【嬉戲】……兒童の遊び。【馳逐狀】……敵を追つかける眞似。【元】……首。【義故】……恩義を忘れざる故舊。

義貞は敗れ退いて、尊氏は京都に入り込んだ。尊氏は、敵ながら正成の忠節を感じて、正成の首を河内に送つた。一家の者共は集まり嘆いた。すると、正行は起つて一室に入った。其母が、後から附いて行つてのぞき見ると、正行は、父正成が與へたところの刀を持つて、まさに自殺しやうとして居つた。母は、直に其室に入つて、其刀を奪ひ取つて泣いて曰ふには、御前は、どうしてそんなに迷つて居るのか。父上が御前を送り歸しなされたのは、御前に自殺せよとの事では無からう。御前は、父上の御遺言の御言ひ附けを承はりて、歸つて來て私に告げたのに、御前が第一にそれを忘れたのか。こんな事では、どうして天子様の御役に立つことが出来やうかと曰つたので、正行は大に悟つた。是より後、正行は、國賊を征伐し父の讐を報ゆるを以て其志となし、平生、子供等と遊び戯れるにも、敵を追つかける眞似をしては、これは足利を追つかけるのであると曰ひ、首を斬る眞似をしては、これは尊氏の首を討ち取るのであると曰つて居つた。楠氏の一族徒黨は、多くは湊川で討死したけれども、河内、紀伊の間には、まだ、恩義を忘れぬ故舊が残つて居つて、それ等の者共は皆、正行を首領として事を起さうと思つて居つた。

【参考】左に太平記の一章を録して参考にあずす。

正成首送故郷事

湊川にて討たれし楠判官が首をば、六條川原に懸けられたり。去んぬる春も、あらぬ首をかけたらしければ、是も亦さこそあらめといふ者もかりけり。

うたがひは人によりてぞ残りける、まさしげなるは楠が首。

と狂歌を札に書きてぞ立てたりける。其後尊氏卿、楠が首を召して、朝家、私、日久しく相馴れし舊好の程も不便なり。跡の妻子ども、今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめとて、遺跡へ送らければ、情の程こそありがたけれ。楠が後室子息正行を見て、判官今度兵庫へ立ちし時、様々申し置きし事も多かる上、今度の合戦に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限の別なりとぞ、かねてより思ひ置けたることなれども、貌を見れば、それながら、目塞り色變じて、替りはてたる首を見るに、悲の心胸に落ちて、歎の泪せきあへず。今年十一歳に成りける帯刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有様、母が歎のせん方もなげなる様を見て、流る、泪を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、即ち妻戸の方より行き見て見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を、右の手に抜き持ち、袴の腰を押し下げて、自害をせんとぞ居たりける。母急ぎ走り寄りて、正行が小腕に取りつき、涙を流して申しけるは、柄檀は二葉より芳しいへり。汝をさなくとも、父が子ならば、是程の理に迷ふべしや。小供心にも能々ことさまで、思ひて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めしことは、全く跡を訪はれたためにあらう。腹を切れとて、残し置きしにもあらう。我假令運命盡きて戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死に残りたらん一族、若黨どもをも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して、君を御代にも立て進らせよといひ置きし處なり。其遺言具に聞きて、我にも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひ進らせんことあるべしと覺えずと、泣々諫め留めて、抜きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。其後よりは正行、父の遺言、母の教訓、心に染み肝に銘じつ、或時は童部共を打ち倒し、頭を捕る眞似をして、是は朝敵の頭を捕るなりといひ、或時は竹馬に鞭を當て、是は將軍を追ひ懸け奉るなど、いひて、はかなき手ずさみに至るまでも、只此事をのみをわ

とせしむる、心の中こそ恐しけれ。

當是時、天子避賊於叡山。名和、菊池、土居、得能氏、皆從義貞、扞禦。源忠顯戰沒。官軍遂出攻京師。路人指名和長年曰、正成、忠顯等既死、獨有此人、及戰大敗。長年退至大宮巷、自閉後門、與二百人力戰死。

【扞禦】……ふせぐ。大宮巷……宮城の東に在り。閉後門……退き走るべき路を絶ちて必死を示す也。

この時に當つて、天子は賊を叡山に御避けなされ、名和、菊池、土居、得能氏は皆義貞に従つて賊を禦いだ。源忠顯は戦死した。官軍は、とうく出で、京都を攻めた。路行く人が名和長年を指さして曰ふには、正成、忠顯などは皆、もはや討死して仕舞はれて、今はたゞ此人ばかり残つて居られると曰つた。戦ふに及んで、官軍が大に敗れた。長年は退却して大宮巷にまで至つたが、自ら其處の後の門を閉ぢて仕舞つて、退き走らぬ決心をして、二百人の者共と與に、力を盡して戦つて討死した。

冬、尊氏佯降、請帝還闕。菊池武重等從之。皇子宗良走遠江。懷良走大和。義貞以詔奉皇太子恆良及尊良親王之北國。土居通治、得能通言等從之。通言與族通繩、殿會大雪。至鹽津、迷失道。適值賊兵將士凍飢、不能操兵。三百人皆植刀于地、伏之自貫而死。通治與諸將守金崎城。城陷、力戰自殺。尊良薨。太子被虜、入京師。

【鹽津】……近江に在り。【値】……あふ、出遇ふ。【不能操兵】……兵器を手を持つことが出来ぬ。【植刀于地】……刀を地上につき立てる。

【金崎城】……越前に在り。

冬、尊氏は、佯つて降参して、後醍醐帝に請うて京都の御所に御還りになるやうにしたので、菊池武重等が御供をした。皇子宗良親王は遠江に走られ、懷良親王は大和に走られ、義貞は、詔を以て皇太子恆良親王及び尊良親王の御供をして、北國に出掛けて行き、土居通治、得能通言等が、之に従つて行つた。通言が、その一族の通繩と與に殿（シナガリ）をした。折しも大雪が降つたので、鹽津まで至つて、迷うて道が分らなくなつた。丁度其時に、賊兵に出遇つたけれども、大将も士卒も、寒さの爲めに凍え且つ飢ゑて、兵器を手執ることが出来なかつた。

たので、三百人の者共は皆、刀を地上につき立て、其上に俯伏して、自ら貫き通して死んで仕舞つた。通治は、諸將と與に金崎城を守つて居つたが、城が攻め落されたので、力の限り戦つて自殺して仕舞ひ、尊良親王は薨去せられ、皇太子は虜にせられて京都に入られた。

帝之還闕也。尊氏已擁立新帝之弟。是爲北朝光明帝。請帝傳神器焉。帝弗聽。尊氏囚帝于花山院。殺從行者僧祐覺等。拘執其餘。獨二條景繁得侍。景繁潛進計。逃幸大和。帝夜服婦人衣。由壞牆出。扶上馬。景繁荷神器從。夜方黑。逢赤電照路。比曉。達穴生。遣景繁諭吉野僧宗信。宗信營助將軍護良者。於是先衆來迎。正行聞而大喜。與從弟和田正朝等馳赴之。護駕入吉野。河内紀伊將士相踵來衛。官軍復振。帝思正成死王事。追贈正三位左近衛中將。敍正行正四位下。爲帶刀。遂襲父官。任檢非違使左衛門尉。兼河内守。於是建行宮于吉野。號令四方。

【擁立】……もり立て、位に即かしむること。【拘執其餘】……拘執は、とらへて禁錮する也。菊池武重、大館氏明、江田行義、宇都宮公綱等を拘執せし也。【壞牆】……くづれたる築地（ツイヂ）。【赤電】……稲妻。穴生……大和に在り。【僧宗信】……吉水院の主。【相踵】……引き續いて。【帶刀】……帶刀舎人の略稱。春宮に侍して非常を警衛する官。【襲】……繼ぐ。【建行宮于吉野】……吉水院を以て行宮と爲したまふと云ふ。

後醍醐帝が御所に御還幸に相成つたときには、尊氏は、もはや、新帝光嚴帝の御弟君をもり立て、御位に即かしめて居つた。これは北朝の光明帝である。尊氏は、三種の神器を御傳へ下さるやうにと後醍醐帝に、請うたけれども、帝は御聞き入れにならなかつた。そこで、尊氏は、帝を花山院に押し込めて置き、從つて行つた者なる僧祐覺等を殺し、其他の人々をばとらへて禁錮して置いた。たゞ三條景繁のみが帝地の崩れた所から御逃げ出しになつて、人に扶けられて馬に御乗りになり、景繁は、神器を肩に荷うて御供した。夜は其時に眞暗であつたが、稲妻が道を照らしたので、途中で御迷にも成らず、夜明け頃に、穴生に御著きになつた。そこで、景繁を御遣はしになつて、吉野の僧宗信を御諭しになつた。宗信といふは、以前に征夷大將軍護良親王を御助け申上げた事のある者である。こゝに於て、宗信が、多くの人々より先

に來つて帝を御迎へ申上げた。正行は、此事を聞いて大に喜んで、從弟(イトコ)の和田正朝等と與に、大急ぎで出掛けて参り、御乗物を護衛して、吉野に入り込んだ。河内、紀伊の將士どもが、引き續いて來つて護衛したので、官軍は、また盛んになつた。帝は、正成が王事の爲めに骨折つて討死した事を御思ひになつて、正三位左近衛中將を御贈りになり、正行を正四位下に敘し、帶刀となされたが、とうとう父の官職を繼ぎ、檢非違使左衛門尉に任せられ、河内守を兼任した。こゝに於て、行在所を吉野に建て、其處から號令を四方に出すことになされた。

先是。菊池武重從帝被拘。候守者懈。逃歸據菊池。帝因拜皇子懷良爲征西將軍。赴菊池。大館氏明亦逃如伊豫。土居通治子通郷。得能通言子彈正。迎而起兵。北畠顯家弟顯信。亦起兵於伊勢。而顯家討國內叛者。據靈山。明年秋。顯家欲入援行在。得結城宗廣等兵。奉義良親王。軍白河關。兵來屬者數萬人。進與尊氏子義詮。相拒利根川。齋藤實永亂流先渡。全軍繼之。水激於西岸。賊兵漂溺。敗走。顯家追北。攻義詮於鎌倉。走之。三年春。與宗良親王合兵。偕赴京師。賊兵大起擁後。顯家回戰于青野原。破之。聞尊氏遣高師泰來迎。乃轉出伊勢。師泰尾擊。顯家回戰于雲津川。破之。至南都。結城宗廣曰。避敵於行宮。不若攘賊於王城。顯家從之。逢賊兵逆擊。顯家敗走。乃使兩親王赴行宮。自收敗兵。軍安部野。五月。高師直來襲。顯家與二十餘騎。衝圍而死。名和義高死之。宗廣走歸吉野。

【候守者懈】…番人のなまけて居るのを見すまして。【靈山】…今の磐城に在り。【白河關】…今の磐城に在り。【利根川】…武藏と

上野との界を流る、坂東太郎と稱す。【亂流】…河を横切つて渡ること。【激於西岸】…大軍が渡る勢によりて河水が動揺して西の岸に打ち上げる。【漂溺】…たゞよひおぼる。【青野原】…美濃に在り。【尾擊】…跡を付けて來り撃つ。【雲津川】…伊勢に在り。【避敵於行宮不若攘賊於王城】…敵を憚りて南に避けて行宮に詣るは、臆病なることにして、賊軍從つて之を圍むべし。それよりは、直に進んで京都を回復し賊軍を迫り拂ふを勝れりとすとの意。【兩親王】…義良親王、宗良親王。【安部野】…攝津に在り。

菊池に立て籠つた。帝は、そこで、皇子懷良親王を拜命して、禁錮されて居るのを見すまし、逃げて歸つて、肥後の居つたのを逃げ出して伊豫に行つた。土居通治の子の通郷、得能通言の子の彈正が、氏明を迎へて兵を起した。北畠顯家の弟の顯信も、兵を在所を御援け申さうと思つて居つたところへ、結城宗廣等の兵士を得たので、義良親王を導き立て、白河關に陣取つた。兵士の來つて附き従ふ者が數萬人あつた。そこで、進んで尊氏の子の義詮と、利根川を間に夾んで相拒いで、しばしの間睨み合つて居つた。すると、齋藤實永が、河を横切つて一番に渡つたので、其勢によりて、河の水が西の岸へ打ち上げたので、賊兵は漂ひ溺れる者があつて、敗北して逃げ走つた。顯家は、逃げるのを追つかけて、義詮を鎌倉に攻めて之を逃げ走らせた。三年の春に、顯家は、宗良親王と兵を合はせて、一處に京都に行つて迎へ撃たんとして居るのを聞いて、そこで、道を轉じて伊勢に出た。師泰は、あとを付けて攻め寄せた。顯家は引き返して雲津川に戦つて、師泰を破り、進んで奈良に到着した。そこで、結城宗廣が曰ふには、敵を畏れ憚りて之を避けて行在所に行くよりは、直ちに進んで京都に攻め入つて賊を追拂ふ方が宜しいと曰つた。顯家は此言葉に従つて、京都へ向つたが、賊兵が途中にて迎へ撃つので、直ちに進んで安部野に陣取つた。五月に、高師直が來つて不意撃をしたので、顯家は、二十餘騎と共に、敵の圍を破らうとして、討死して仕舞ひ、名和義高も、そこで死んだ。宗廣は、逃げ走つて、吉野に歸つた。

師直遂圍顯信於男山。顯信善拒。出擊少利。賊縱火登城。城兵擊走之。已而糧竭。潰圍走河内。帝初遣廷臣將兵救顯信。又詔北國將士援之。義貞欲驟赴援。兒島高德從在軍中。說曰。前日之敗。以賊絕我糧道。今無若遣數千人據叡山。取糧北陸。而時出擾京師。是深根固蒂之策也。請貽書山徒焉。義貞從之。山徒肯之。義貞遣義助赴之。望男山火。逡巡而去。

尋義貞戰死。結城宗廣請及顯家餘威未盡收東邊兵。帝令宗良親王先發。至遠江待之。遂以顯信襲兄官職。與親房及宗廣奉義良親王。海路赴任。遇颶於天龍洋。舟四散。親房抵常陸。宗廣至安濃津。顯信與義良親王。抵篠島。宗廣病死。四年三月。顯信奉親王歸吉野。

【少利】……一に不利に作る。【疾速に】……前日之敗……さきに叡山にて敗れしは、高氏、高經等をして我が糧道を絶たしめしに因る。【北陸】……北陸道。【深根固帯】……基礎を強くする。帯は果實のへた也。【胎】……贈る。【逡巡】……驚き却く貌。【義貞戦死】……越前の藤島に於て流矢に中りて死す。【餘威未盡】……顯家はすでに死せしも、その威勢がまだ残つて居る。【襲兄官爵】……陸奥守鎮守府將軍を繼がしむ。【颶】……音グ。海中の大風。【天龍洋】……遠州灘。【抵】……至る。【安濃津】……伊勢に在り。【篠島】……伊勢に在り。【宗廣病死】……宗廣病んで將に死なんとする時、僧あり佛名を唱ふるを勸む。宗廣唱つて曰く、我年七十、百事完足せり。但賊首を見ざるを是れ恨む。切齒して卒す。勢州安濃郡藤方村に、其靈社あり、結城神社と云ふ。其傍に墳墓あり、結城神の墓と云ふ。【師直は】……とうく進んで顯信を男山に圍んだ。顯信は上手に拒いで、時々城から出て戦つたけれども、勝利を得なかつた。賊が火を附けて城に攀ち上つたが、城兵は、撃つて之を退却させた。とかくする中に、城中には兵糧が無かつたので、仕方無く、賊の圍を突きくづして河内に走つた。後醍醐帝は、はじめ、朝廷の臣下の者を派遣して、兵士を引き連れて顯信を救はしめられ、又、北國の將士に詔して之を援けることに致された。義貞は、早速出掛けて行つて援けやうと思つたが、兒島高德が義貞に従つて其軍中に居つたが、義貞に説いて曰ふには、先頃叡山にて敗北いたしましたのは、賊が我が兵糧運搬の道を絶ち切つたからで御座ります。されば、今は、數千人の兵士を派遣して叡山に立て籠らせ、兵糧を北陸道から取り寄せて、そして時々出掛けて京都を騒がすのが、一番宜しう御座ります。これは、基礎を固くするの道で、御座ります。どうか御書面を叡山の坊主に送つて御覽なされと曰つたので、義貞は其言に従ふと、叡山の坊主どもは之を承諾した。そこで、義貞は、弟の義助を遣はして其處へ出掛けさせると、義助は、男山に火が揚つたのを見て、驚き却いて去つて仕舞つた。間もなく、義貞は戦死して仕舞つた。結城宗廣は、顯家の残つて居る威勢が未だ無くなつて仕舞はない内に、東方の邊境即ち奥羽地方の兵を取りまとめたいと請うたので、帝は、宗良親王をして先づ出發して、遠江國に至つて、あとから宗廣が來るのを待たせることになされて、とうく顯信を以て兄顯家の官職を繼いで、陸奥守鎮守府將軍となされたので、親房及び宗廣と與に、義良親王を奉じて、海路から任地即ち陸奥國に出掛けに行くことになつた。然るに天龍洋に於て大風に遇つたので、舟はちりちりになつて仕舞つて、親房は常陸に至り、宗廣は安濃津に至り、顯信は、義良親王と與に、篠島に至つた。その中に、宗廣は病氣で死んで仕舞つた。四年三月に、顯信は、義良親王を奉じて吉野に歸つた。

先是皇太子。及成良親王。皆爲尊氏所鳩弒。乃立義良爲皇太子。八月。

帝獲疾大漸。乃遺詔曰。朕憾不滅國賊。平天下。雖埋骨於此。魂魄常望北闕。後人其體朕志。竭力討賊。不者非吾子孫。非吾臣屬。按劔而崩。帝已崩。群臣氣沮。欲逃散。僧宗信力言止之。已而正行與正朝率兵二千來衛。衆情大安。於是相與俱奉太子。拜神器。卽位。是爲後村上天皇。頒先帝遺詔於四方。

【鳩弒】……鳩は毒鳥なり、大さ鴉の如し、蛇を食ふ、其羽毛を酒に浸して之を飲むときは、立ちどころに死すと云ふ。故に毒殺を鳩弒と云ふ。弒は下より上を殺す也。【大漸】……病勢大に進んで危篤に瀕する也。【憾】……うらむ、残念に思ふ。【於此】……吉野を指す。【北闕】……京都を指す。【體】……體認する、善く覺えて居ること。【按劔】……劔の柄を撫でる。【氣沮】……落膽する。【力言】……丹精を込めて辯ずる。【衆情大安】……大勢の人々の心が大に落ち著く。【頒】……布告する、四方に觸れまはす。【遺詔】……これより先きに、皇太子恒良親王及び成良親王は皆、尊氏の爲めに毒殺せられた故に、義良親王を立て、皇太子となされた。八月に、後醍醐帝は、御病氣に罹られて、だんぐに御病勢が進んで御危篤となられたので、そこで、御遺言なされて仰せられるには、朕は、國賊を滅ぼし天下を平定するに至らなかつたことを残念に思ふ。今死んで骨をば此吉野の地に埋めて置いて、朕が魂魄は常に京都を望んで居る。後に残れる者どもは、朕が志望を善く覺えて居つて、力を盡して賊を征伐せよ。然らざる者は、吾が子孫では無い、吾が臣下では無いぞと仰せられて、劔の柄に御手を掛けて、崩御になつた。帝がすでに崩御なされたので、群臣どもは大に落膽して、逃げ出して解散しやうと思つたが、僧の宗信が、力を盡して述べ立て、之を止めた。とかくする中に、正行が、正朝と與に、兵士三千人を引き連れて來つて護衛したので、人々の心は大に落ち著いた。こゝに於て、相與に、皇太子義良親王を奉じて、三種の神器を拜して、御位に御卽きなされるやうにした。これは後村上天皇である。そこで、先帝の御遺言の詔を、天下に觸れまはされた。

興國元年。春。土居通郷。得能彈正等。奏請得一將帥。會新田義助戰敗。與兒島高德等。來詣吉野。因詔義助赴伊豫。無幾何。病死。高德等逃歸備前。五月。賊將細川賴春來攻河江。通郷。彈正。推金谷經氏爲將。舟師赴救。值

賊海上戰不利。轉攻取柄城。拒賊十餘日。聞賴春已陷河江。將攻世田。勸經氏救之。選死士三百。選凶日而發。與賊七千戰於千町原。盡亡其卒。與經氏等十七騎潰圍走備後。自是西南官軍不振。

【新田義助戰敗云々】……義助、美濃の根尾城を保ちしに、賊土岐頼遠、頼康、攻めて之を陥る。義助、餘衆を收め、開行して吉野に至る。帝慰勞すること甚だ至る。【河江】……伊豫に在り。【柄城】……備後に在り。【世田】……伊豫に在り。【選凶日】……わざと悪日を擇ぶ。【千町原】……伊豫に在り。【七】……うしなふ。【不振】……其勢衰へたり。

興國元年春、土居通郷、得能正等が、奏上して、一人の大將を得たいと請うた。折しも、新田義助が戦ひに敗北して、兒島高德等と與に吉野に來たので、そこで、義助に詔して伊豫に出掛けて行かめられた。義助は、間もなく病氣で死んだので、高德等は逃げて備前に歸つた。五月、賊の大將細川頼春が、來つて河江を攻めたので、通郷と彈正とは、金谷經氏を推し戴いて大將として、舟軍を以て出掛けて救はうとしたが、海上に於て賊兵に出つくはして戦つたけれども、勝利を得なかつたので、そこで、路を轉じて備後の柄城を攻め取つて、其處に立て籠つて賊兵を拒ぐこと十餘日であつたが、頼春はずでに河江を攻め落して仕舞つてまことに世田を攻めやうとして居るといふ事を聞いたので、經氏に勸めて之を救はしめることにし、決死の士三百人を選んで、わざと悪日を選んで出發し、賊兵七千人と、千町原に戦つて、殘らず其部下の士卒を失つて仕舞つたので、經氏等十七騎と與に、賊の圍を突きくづして、備後に逃げ走つた。これより、西南の地方の官軍は、其勢大に衰へた。

是歲。北畠顯信居白河。親房居小田。賊將高師冬以大兵來攻。親房請援於結城親朝。親朝宗廣子也。宗廣臨死遺言討賊。而親朝送款於尊氏。以故不輒援。數月。城將出降。親房走保關城。親房從子顯時保大寶城。賊陣二城間。父子數出力戰。而城且陷。親房閒使告顯信。使率親朝子弟來救。親朝擁之不遣。四年春。親房手書切諭。親朝弗聽。遂降賊。親房走歸吉野。

自是東北官軍不振。顯信留居陸奥。於是四方勤王之師。所在耗散。而足利氏勢威擅天下。

【小田】……常陸に在り。【送款】……よしみを送る、内通する。【輒】……たやすく。【關城】……常陸に在り。【從子】……兄弟の子、即ち甥。

【大寶城】……常陸に在り。【父子】……從父從子。【閒使】……しのびの使。【擁】……さへぎりとさむ。【手書】……自筆の手紙。【切諭】……切は

剽切なり。痛切に言ひ諭す。【耗散】……耗は音カウ、減る也。人數が減少して解散する。【關城】この年に、北畠顯信は、白河に居り、親房は小田に居つたが、賊の將高師冬が、大軍を引き連れて攻め寄せたので、親房は、結城親朝に援を請うた。親朝は宗廣の子である。宗廣は死せんとするときに、賊軍を征伐せよと遺言して置いた。然るに、親朝は、尊氏に内通して居つたので、それ故に、たやすくは來り援けなかつた。數月にして、小田城の主將は、出で、賊に降参した。親房は、止むを得ず、逃げて關城に立て籠り、親房の甥の顯時は、大寶城に立て籠つて居つた。賊は、關と大寶との二城の中間に陣取つた。をち親房と甥顯時は、たゞ城から出掛けて力の限り戦つた。けれども、城が落城せんとしたので、親房は、忍びの使を遣りて、顯信に告げて、親朝の子弟を引き連れて來つて救はせやうとしたが、親朝は、顯信をさへぎりとさめて出掛けさせなかつた。四年春、親房は、自筆の手紙を以て、懇切に説諭したけれども、親朝は聞き入れずして、とうとう、賊軍に降参して仕舞つた。そこで、流石の親房も、如何ともすることが出来ずして、逃げて吉野に歸つた。是れから、東北地方の官軍も、其勢大に衰へた。顯信は留まつて陸奥に居つた。こゝに於て、四方の勤王之軍勢は、どこもかしこも、人數は減り、散りくづつて仕舞ひ、足利氏の勢力威權は、天下を獨占して居る情態となつた。

正行在金剛山。漸保聚義。故時出兵攝津。縱火挑賊。正平二年秋。尊氏令細川顯氏將三千騎來攻。未至金剛山七里。止舍。聞正行且攻箭尾城也。欲俟其離山而絕其後。正行謀知之。以七百人行火聚落。爲向箭尾而還伏于譽田林。敵望火起。輒趨山下。亂隊疾馳。過林遇伏起。大駭敗走。退守天王寺。山名時氏以六千騎來援。軍于住吉。正行曰。先破時氏。則顯氏不戰而走。分兵二千爲五隊。進向住吉。時氏分兵當之。正行視

北軍塵起。曰。敵陣四處。而衆倍於我。我不可分兵也。乃復合五隊爲一。疾行擊時氏麾下。時氏被創。走歸顯氏。顯氏軍亂走。過渡部。溺者無數。京畿震駭。正行援溺卒五百人。與衣甲禮而遣之。多願留仕者。

【保聚義故】……恩義を重んずる故舊の者共を扶持し且つ召し集める。【正平】……後村上帝の時の年號。【箭尾城】……河内に在り。【謀】……開謀を遣りて之を探る。【聚落】……落は居なり。人の聚まり居る所を聚落と云ふ。村里。【譽田林】……河内に在り。【趨】……小走りに馳する也。【天王寺】……攝津に在り。【住吉】……攝津に在り。【震駭】……ふるひ驚く。

正行は、金剛山に在りて、段々に、恩義を忘れざる故舊共を扶持し召し集めて、時々兵士を攝津に繰り出して、火を放つて賊軍に戦を仕掛けた。正平二年の秋に、尊氏は、細川顯氏をして三千騎を引き連れて攻め寄せさせることにした。顯氏は、金剛山の手前七里のところに止まつて陣取つて、正行がまさに箭尾城を攻めやうとして居ることを聞いたので、正行が金剛山から打つて出で、仕舞つてから、其のあとへ還らうとする途を絶ち切らうと思つた。正行は、開者を入れて此謀を知つたので、七百人を引き連れて、途すがら村落に火を放つて、箭尾に向ふやうなふりをして、そして引き返して譽田の森に待ち伏せて居つた。すると、敵は、火の起るのを望み見て、これは正行が金剛山を離れたのであると思ひつめて、すぐに山下に馳せ赴かんとして、隊伍を亂して大急ぎで馳せ行き、森のところを通ると、伏兵が起るのに遇つて、大に駭いて敗北して逃げ走り、退却して天王寺を守つて居つた。山名時氏が、六千騎を引き連れて來り援けて、住吉に陣取つた。正行が曰ふには、先づ時氏を破つたならば、顯氏は、應病風に吹かれて居ること故に、戦はずして逃げ走るであらうと曰つて、兵二千を分つて五隊となし、進んで住吉に向つた。時氏は兵士を分けて之に當ることにした。正行は、北軍に塵の起るのを望み見て曰ふには、敵は四箇處に陣取つて居つて、そして其人数は我が軍に倍して居るほどの多數であるから、我は、兵を分つて之に當つてはならぬと曰つて、そこで、先に分つた五隊を合はせて一隊となして、急いで進んで時氏の旗もとを撃つた。時氏は負傷して、逃げて顯氏の陣に入り込んだ。すると、顯氏の軍は隊伍を亂して逃げ走り、渡部を通るときに、溺れて死んだ者が數の知れぬほど多かつた。之を聞いて、京都近傍は、怖れ騒いだ。正行は、溺れたる士卒五百人を救ひ上げて、衣服や鎧を與へて、丁寧な挨拶して之を去らしめた。その中には、正行の方に留まつて仕へたいと願ふ者も多かつた。

正行遂進逼京師。尊氏大懼。乃發二十餘州兵。以高師直統諸將帥。以擊正行。正行與弟正時。率諸宗族詣行宮。因中納言藤原隆資。上言曰。先臣正成。嘗以微力。挫強賊。以安先帝宸憂。及天下再亂。逆賊四襲。遂致命於

湊川。臣時年十一。命歸河内。囑以收合餘燼。報復國讐。臣年已壯矣。而稟性羸弱。常念不及。今力戰。以有待之身。罹無虞之疾。上爲不忠之臣。下爲不孝之子。而今賊渠帥大舉來犯。是真臣致命之秋也。非臣獲彼首。則授臣首於彼。臣生死決於今日。切希得一拜天顏。而行隆資入奏。帝揭簾臨視將士。前正行。勞之曰。曩日兩捷。大殺賊勢。甚慰朕心。朕深嘉汝世忠。今賊悉銳而來。眞安危之決矣。雖然。兵之進退。貴於從宜。朕以汝爲股肱。汝其自愛。正行俯伏。垂泣而出。辭訣後。醍醐帝廟。題族黨百四十三人姓名於廟壁。然後上途。帝使隆資援之。

【挫強賊】……挫は摧折なり、くじく。強賊は北條氏を斥す。【宸憂】……帝居を宸と云ふ。天子の御心配。【逆賊】……足利氏。【致命】……討死する。【囑】……託なり。言ひ含める。【收合餘燼】……燼は火の燃え残り也。残りし宗族等をまとめ集める。【國讐】……國家の仇。亦足利氏を指す。【已壯】……壯は支那にては三十才を云ふ。若くさかんなるを云ふ。【稟性羸弱】……生れつき弱きを云ふ。羸は音ルキ、弱き也。【有待之身】……まゝならぬ凡夫の身。有待は佛語にて、凡夫は、獨脱自在を得たる賢聖とは異なり、外界の事物境遇の助くるあるを待つて始めて事を成すを得べき憐れむべきものなるが故に、有待の身と謂ふなり。この有待をば、國家の仇を報いんと好き機會の到著するを待つての義に解するの一説ありて、一應尤なるが如しといへども、元來此一節は、太平記の「有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に犯され早世仕事候なば、唯君の御爲めには不忠の身と成り、父の爲めには不孝の子と可成にて候間云々」とあるを漢譯したるものなるべければ、前説を勝れたりとすべし。【罹】……かゝる。【無虞之疾】……思ひも寄らぬ病氣。【渠帥】……音キヨスキ。渠は大なり、帥は將なり。賊の大將帥直を斥す。【致命之秋】……身命を棄てるべき時節。【天顏】……天子の御顔。【揭簾】……掲は高く擧ぐる也。御簾を高く捲き上げる。【臨視】……上より見おろす。【前】……進める。【勞】……いたはる。慰勞する。【譽田林、天王寺の兩戦に勝利を得たるを云ふ。【殺】……そぐ、減少する。【世忠】……代々の忠義。【悉銳】……悉は盡なり、銳は利なり。銳き兵士を悉皆繰り出す。【安危之決】……朝廷の安泰なるか危急なるかの決定する境目。【股肱】……大切なる臣と爲すとの意。股は、肱はひざ。股と肱とは、一身の助となり使役をなす重要な處なるが故に、忠臣良將に比するなり。【辭訣】……死別の御暇乞を申上げる。正行、衆を率めて後醍醐天皇の廟を拜し、和歌を如意輪堂の壁に題して曰く、返

らじと兼ねて思へば梓弓無き数に入る名をぞ尋むると。【題】……書き記す。【廟壁】……後醍醐帝の御影を安んずる如意輪堂の壁。
 正行は、とうく進んで、京都に逼らんとした。尊氏は、大に懼れ、そこで、中國、四國、東山、東海の二十餘國の兵士を繰り出して、高師直を以て、諸の大將どもを統べさせて、正行を撃たせることにした。正行は、弟正時と、一族の者共を引き連れて、行在所に参つて、高師直を安んじ奉り出したが、その後天下が再び亂れて逆賊足利氏の軍勢が四方から襲ひ來るに及びまして、とうく湊川に於て討死致した。私は其時に十一歳で御座りましたが、命令して河内に歸らせまして、そして、私に言ひ附けますに、残れる一族徒黨を取りまといめて國家の讐なる足利氏に報いて怨を復すことを以てしました。今日に至りましては、私は年が最早壯年とも成りました。然るに、私の生れ付は至つて體が弱う御座りますから、私は平生思ひますに、今の時に於て力を盡して戦ひませすして、何分凡夫の身の事で御座りますから思ひも寄らぬ病氣にでも罹ることでも御座りましたならば、上は不忠の臣となり、下は不孝の子となること、思うて居ります。然るに、今、賊の大將が、大軍を引き連れて來つて御所を犯さうとして居ります。是れはまことに私が命を棄てます時で御座ります。私が彼れ賊將の首を討ち取りませぬならば、私が首を賊將に與へますることでも御座りませう。私が生きるか死ぬるかは、今日に於て決定いたします。つてこの旨を奏上した。すると、後村上帝は、御簾を高く捲き上げて、將士どもを御見おろし遊ばされ、正行をして座席を進ませて、慰勞して仰せられるには、先達ての二度の勝利によりて、大分賊の勢力をそぎへらしたので、大層朕が心を慰めた。朕は深く汝が代々の忠義を嘉賞する。今日、賊軍が、銳き兵士を残らず繰り出して來るのは、まことに朝廷の安泰と危急との分け目である。然れども、戦陣の進退懸引は、その時々の場合に應じて適當なる處置をなすを貴ぶものであるから、必ずしも是非とも死なねばならぬと云ふ譯は無い。朕は汝をば手足の如く思うて居ることであるから、汝も亦汝が身を大切にしていれば、必ずしも是非とも死なねばならぬと云ふ譯は無い。朕は汝をつむき伏して、涙を垂れて退出し、後醍醐帝の御廟に参詣して御暇乞を申し上げ、一族徒黨百四十三人の姓名を御廟の壁に書き記して、然る後に出發した。後村上帝は、隆資をして之を援けしめることになされた。

正行吉野へ参る事

（上異）楠帶刀正行、舍弟正時一族打ち連れて、十二月二十七日、芳野の皇居に参じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成危弱の身を以て、大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す處かねて思ひ定め候ひける歎に依りて、遂に攝津湊河に討死仕り候ひ訖ぬ。其時正行十一歳に罷り候ひしを、合戦の場へは伴はで、河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即け進せよと申置きて死して候。然るに正行、正時、已に壯年に及び候ひぬ。此度我と手を碎き合戦仕候はずば、且は亡父の申し、遺言に違ひ、且は武略のいふがひなき誇に落つべく覺え候。有侍の身、思ふに任せぬ習ひにて、病に犯され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候ふ間、今度、師直、師泰に懸け合ひ、身命を盡し、合戦仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候ふか、正行、正時が首を彼等に取り候ふか、其二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らんために、参内仕りて候ふと申しもあへず、涙を鑿の袖にかけて、心其氣色に顯ければ、傳奏未奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく、諸卒返らじとかねて思へばあづさ弓なき数に在る名をぞとむむる。

と一首の歌を書き留め、逆修のためと思しめて、各鬘髮を切りて、佛殿に投げ入れ、其日吉野を打出で、敵陣へとぞ向ひける。

明年正月。北軍至四條。分爲五隊。四隊在前。左右相向。而師直中軍遙居其後。兵凡八萬騎。正行使隆資綴賊前軍。而自將三千騎。直指其中軍。賊前隊馳而遮之。正行以先鋒擊破而過。賊隊又至。與我後軍戰。我後軍終敗走。正行不顧。以三百騎直前。賊將細川清氏、仁木賴章等。更進遮。正行盡破之。乃聚其騎。馬皆重傷。乃舍馬。踞隴而餉。賊衆環視。不敢迫。開其走路。皆合於中軍。正行餉畢。起謂衆曰。必與師直決死。進衝其中堅。我兵殊死戰。無不一以當百。賊軍披靡。正行進逼師直。師直臣僞稱師直死。正行大喜。拋首于空。而手承者二。軍士有告其實者。正行投頭于地。賊且罵曰。汝亦無雙國賊矣。已而曰。其勇可嘉也。自斷袖裏首。置

隴上復進索師直望見其幟欲追之正朝曰彼騎我步不可及也若不若
 佯走誘之乃與殘兵五十餘人負楯以北師直不肯追令其裨將以數百
 騎尾擊之正行大呼返戰追走復逼師直相去數步而我兵自晨至晡三
 十餘合力索莫能起正行注目於師直勉衆前進敵連射之正行身被箭
 如蝟乃呼曰已矣勿爲賊所獲與正時相刺北向而斃年二十一餘兵
 皆自刃駢斃

【北軍】……師直の軍。【四條驛】……河内に在り。【緩】……音テイ。其軍を牽制する也。喰ひ止める、ひきあしちふ。【遮】……さへぎり止む
 る。【踞籠而餉】……物に據りて坐するを踞と云ふ。籠は通じて壁に作る、田の中の高處なり。餉は兵糧なり。田の高き處に腰を掛けて兵糧を
 食ふなり。【開其走路】……逃げ路をあけて置く。【衝中堅】……衝は突く也。中堅は本陣。中軍の將は中に居りて堅銳の兵を以て自ら輔く、故
 に中堅と云ふ。【殊死】……必死になりて。【披靡】……震ひ靡る、貌。さつと開き散ずる。【師直臣】……上山高元。【手承】……首を空中に投げ
 て、これを手にて受け取る、小兒の鞠を弄ぶが如し、喜の狀なり。【一】……一に三に作る。【啖】……音アイ。あ、怒み罵る聲なり。【北】……
 北に居る敵を平げんと欲して、死せんとするに北へ向ひしなるべし。【年二十二】……延元元年正成戦死せしとき、正行十一歳なれば、正
 平四年には、二十四歳なるべし。【駢斃】……相斃んでたふる、也。

【開】……明くる年の正月に、北軍(即ち賊軍)は四條驛に至つて、分れて五隊となり、その四隊は前に居りて、左右から向き合つて居り、さうして、
 師直の本陣は、遙に引きさがつて後に居つた。兵士はすべて八萬騎あつた。正行は、隆資をして賊の前軍を喰ひ止めさせて置いて、さうして自
 分は三千騎を引き連れて、直に敵の本陣を目標けて進んだ。賊の前部隊が馳せ來りて之をさへぎり止めやうとした。正行は、先陣を以て
 之を撃ち破つて通り過ぎた。賊の一隊が又來つて、我が後陣と戦つたので、我が後陣は、とう／＼敗れて走つた。正行は、そんな事には頓著
 せず、三百騎を引き連れて、直に進んで行つた。賊將の細川清氏、仁木頼章等が、かはる／＼進んで、正行の軍をさへぎり止めやうとして闘
 つた。正行は残りず之を撃ち破つて、そこで、部下の騎兵を聚めたが、馬は皆重傷を負つて居つて、とても役に立てることが六つかしいの
 で、そこで、馬を棄て、仕舞つて、田の中の高い處に腰を掛けて辨當を食べて居つた。賊の軍勢は、それを取りまいて視て居つたけれど
 も、格別近づき通らうとせず、正行の爲めに逃げ路を明けて置いて、皆、本陣に一處になつて仕舞つた。正行は辨當を食べて仕舞つて、起ち

上つて、その部下の者共に向つて曰ふには、是非とも師直と死を決して闘はうと曰つて、進んで敵の本陣に衝きかゝつて、我が兵士は必死
 になつて戦つて、一人を以て百人に當らぬものは無い位であつた。賊軍はその勢におされて、さつと披きなびいた。正行は進んで師直の陣
 近まで逼つた。師直の臣が偽りて師直と稱して死んだ。正行は、大に喜んで、其首を空中に投げ上げて、手玉に取ることにたゞであつた。正
 行の兵士に、その首は本當の師直の首ではないと、事實を告げたものがあつたので、正行はその首を地に投げ付けて、足で蹴飛ばし、且つ罵
 つて曰ふには、えッ、汝も亦無雙の國賊である、憎むべき奴だと曰つたが、さうする中に、又曰ふには、けれども其勇氣は敵ながら賞賛す
 べき者であるといつて、自分で袖を断ち切つて、其首を包んで、田の高い處の上に置いて、また進んで師直をさがした。師直の旗を望み見た
 ので、之を追つかけやうと思つたが、正朝が曰ふには、彼れは馬に乗つて居るし、我は徒歩であるから、追つかけたとて、追ひ付くことは
 出来ませぬ。それよりは、伴りて逃げ走つて之をおびき寄せ、御座りませと曰つたので、そこで、残つて居る士卒五十餘人と
 與に楯を背負うて逃げた。けれども師直は追つかけやうとせず、其副將をして數百騎を引き連れてその跡をつけて撃たせることにした。
 正行は、そこで、大に呼ばり引つ返して戦つて、逃げ走るを追つかけて、また師直に逼り近づいて、其距離が數歩に過ぎぬほどになつ
 た。然るに、我が兵は、夜明けから日暮に至るまで、三十餘度も打ち合つたので、精力が盡き果て、起きあがることも出来ないほどであつ
 た。正行は、師直に目を著けて、部下の人々を勵まして進むと、敵はつゞけざまに射かけたので、正行は、其身に箭を受けて居ることが數回
 毛の如くであつた。そこで呼ばりて曰ふには、最早これまでである。賊の手にかゝるやうな事があつてはならぬと曰つて、正時と差しち
 がへて、北へ向つて斃れて仕舞つた。年は二十二歳であつた。残れる兵士は、いづれも皆、自殺して、相斃んで死んだ。

和田賢秀正朝弟也。獨混敵卒。伺擊師直。楠氏卒湯淺者。降在賊軍。識見
 賢秀。從後斬之。賢秀瞋眼視湯淺。湯淺懼。後獲病死。正朝欲還奏狀。有
 一賊呼曰。忍獨亡乎。正朝笑而返之。賊乃走。如此者數。賊數騎至。正朝遂
 死。於是百四十三人悉死之。賊軍進犯行宮。帝逃入穴。生賊縱火索之。
 正行弟左衛門尉正儀出兵於石川。與高師泰相持。師直則不敢深入。引
 兵而去。四年。畠山國清來代師泰。正儀益堅守。

【混】……雜る、まぐれ込む。【湯淺】……太郎左衛門。【識見】……見知る。【瞋眼】……怒つて目を見張る。【一賊】……阿保忠實。【索】……さ
 がし求む。【石川】……河内に在り。【相持】……對陣する。
 【和】和田賢秀は、正朝の弟であるが、ひとり敵の士卒の中にまぐれ込んで、師直をねらひ撃たうとした。すると、楠氏の雜兵の湯淺某と云ふ

西に在り。【大宮】……京都に在り。【從子】……兄弟の子、甥。【巷戰】……小路にて戰ふ。巷は街巷なり。直を街と云ひ、横を巷と云ふ。【接橋爲梯】……接は交なり。梯は梯子なり。橋をつぎ合はせて、裏に打ち付けし棧を以て梯子となす也。【北朝三帝】……光嚴、光明、崇光。

五年に、足利直義は、尊氏と仲が悪かつたので、そこで、來つて降参した。朝廷の評議では、これを納れて大將となされた。國清等は之に附いた。六年に、正儀に詔して、直義を助けて、尊氏を京都に撃つて、之を敗走させた。とかくする中に、直義は、叛いて去つて、とうとう關東に逃げ走つた。尊氏は、出掛けて行つて直義を撃たうと思つた。けれども、楠氏が自分の出掛けて行つた後をつねらつて京都に攻め寄せ、御承知であつて、そこで、子義詮をして伴りて降参させて、後村上帝に京都の御所に御歸りになるやうに請うたが、帝は、その内實の事情を御承知であつて、亦、伴りて之を御許しになつた。尊氏は、そこで、關東に向つた。七年正月に、正儀は、その一族なる和田正忠等と與に、兵士七千人を引き連れて、御乗物を奉じて、男山に陣取つた。兒島高德は、その時には、髪を剃つて入道して居つたが、來つて吉野に居つて、内密の御詔を受けて、出かけて行つて東北地方の諸の大將を催促し、又、宗良親王を拜命して征東將軍となし、共に來つて援けさせることに致された。北畠顯能は、顯信の弟であつて、伊勢守となつて居つたが、兵士數千人を引き連れて、先づ第一番に來り援けて、鳥羽から討ち入つた。正儀と正忠とは、五千人を引き連れて、夜、桂川を渡つて、大宮に至つた。すると、夜の引き明け頃に、賊の大將細川顯能が來り迎へて戦つたが、我が軍勢は、之を圍んで攻撃して、その甥の八郎を斬つた。細川賴春が、引き續いて至つて、小路にて戦ひ合つた。正儀は、橋をつなぎ合はせて梯子として、屋根の上に入りて、射おろしたので、賊兵が退却しかけた。そこで、之につけ込んで騎士を繰り出して進ませた。賴春は、乗つて居る馬が驚いたので、落馬した。すると、正忠の兵士が、槍を以て賴春をさし殺した。義詮は、とうとう近江に逃げ走つた。後村上帝は、人をして北朝の三帝を引き連れ申して我が軍の中に置かしめられた。この時に當つて、關東に於ては、將軍宗良親王は、新田氏の一族の者共を引き連れて、尊氏を武藏國に於て撃たれたが、勝利を得られなかつた。

義詮得兵三萬。返陣東山。顯能三退其陣。賊軍進攻男山。帝召正儀。正忠等拒戰。正忠年十六。入奏曰。建武以來。臣族類大半爲此賊所殺。今日之戰。公討國賊。私復家仇。不斬其一將。不復還謁。與正儀合兵三千。據荒坂。細川清氏。土岐康貞。以六千騎仰攻。康貞有驍名。先衆而進。正忠揮薙刀。斬之。乃還謁。遂與正儀拒變科。不利。左兵衛督藤原康長夜襲敗賊營。而賊圍男山益密。正儀。正忠受詔還河内。聚兵夾攻。會正忠疾作暴卒。正

儀未發。賊急犯行在。帝擐甲上馬。潰圍南走。賊兵追之甚急。藤原隆資以下三百餘人死之。箭及御鎧。藤原康長力戰。得達吉野。委神鏡於路。名和長生收之而返。將軍宗良。及新田。桃井氏自東北。土居。得能氏自西南。竝入援。聞男山陷。皆返。

【東山】……京都に在り。【國賊家仇】……ともに足利氏を指す。【荒坂】……河内に在り。【驍名】……武勇の評判。【薙刀】……音テイタウ。なぎなた。【更科】……河内に在り。【益密】……一層すまなく圍む。【暴卒】……にはかに死ぬ。【擐甲】……鎧を着たまふを云ふ。【委】……棄て置く。【神鏡】……八咫鏡。【收】……拾ひ上げる。【新田桃井氏】……新田左衛門佐義興、新田武藏守義宗、脇屋左衛門佐義治、桃井播磨守直常等なり。【而返皆返】……返は一に還に作る。

義詮は、兵士三萬人を得たので、引き返して東山に陣取つた。北畠顯能は、三たび、其陣をだんぐりに後の方へ退けた。賊軍は進んで男山に攻め寄せたので、後村上帝は、正儀、正忠等を御召しになつて、拒ぎ戦はしめられた。正忠は、年十六歳であつたが、入つて奏上して曰ふには、建武年間以來、私の一族徒黨は、過半此賊（即ち足利氏）の爲めに殺されました。されば、今日の戰爭は、公には國家の賊を討つので御座りますし、私の爲めには一家の仇をかへすので御座ります。それ故に、賊の一將を斬りませんならば、再び引き返して拜謁いたしませんと曰つた。かくて、正儀と兵士三千人を一處にして荒川に立てこもつて居た。細川清氏、土岐康貞が、六千騎を引き連れて、下から仰ぎ攻めた。康貞は、武勇の評判あるものであつたが、衆に先だつて進んだ。正忠は、なぎなたを揮つて之を斬つて仕舞つた。そこで、還つて拜謁して、とうとう正儀と與に、更科を拒いだけれども、負けた。左兵衛督藤原康長が、夜、賊の陣屋を不意撃つて敗つた。けれども、賊兵が男山の行在所を圍み攻めることは一層隙間なくなつたので、正儀と正忠とは、詔を受けて、河内に引き返して、兵士を召し集めて、兩方から賊を挟み攻めて、男山の圍を解くやうにしやうとした。折しも正忠が病氣になつて俄に死んだので、正儀は、未だ出發しなかつた。其中に、賊兵は、きびしく男山の行在所を攻め犯したので、後村上帝は、鎧を着て馬に乗り、圍をつきくづして南に御走りになると、賊兵が之を追つかけること甚だ手きびしくして、藤原隆資以下三百餘人が、そこで死んで、賊の射る矢が、天子の御鎧にまでも及ぶほどであつて、藤原康長が、力を盡して戦つたので、漸く吉野に達することが出来た。けれども、その混雜の爲めに、神鏡を途中に落した。名和長生が、それを拾ひ上げて返つて來た。將軍宗良親王と、及び新田、桃井氏は東北地方から、土居、得能氏は、西南地方から、ともに入つて援けやうとしたけれども、男山が攻め落されたと聞いたので、皆、引き返した。

是役也。賊將山名時氏有功而無賞。怒而來降。足利直冬亦降。請攻京師。

詔令諸將助攻。十一月。正儀等擊賊將佐佐木秀綱于渡部。敗之。八年。六月。諸軍攻京師。正儀以弓手五百挑戰。時氏繼之。遂擊走義詮。時氏等以兵寡引還。十年。直冬。時氏復發兵擊尊氏。走之。正儀。時氏。與義詮戰于播磨。糧盡引還。

【弓手】……弓を射る兵士。

この戦に於て、賊將山名時氏は、手柄が有つたけれども、賞與が無かつたので、腹を立て、來つて降参した。足利直冬も亦降参して、京都を攻めたいと請うたので、詔して、諸將をして之を助けて京都を攻めさせた。十一月に、正儀等は、賊將佐佐木秀綱を渡部に撃つて、之を敗つた。八年六月に、諸軍が京都を攻めたときに、正儀は、弓手五百人を引き連れて、戦を仕掛け、時氏が其後よりつき、とうとう撃つて義詮を敗走させた。けれども、時氏等は、兵士が少いので引き上げて還つた。十年に、直冬、時氏は、また兵士を繰り出して、尊氏を撃つて之を敗走させた。正儀、時氏は、義詮と、播磨に於て戦つたが、兵糧が無かつたので、引き上げて還つて來た。

是歲。將軍宗良。與仁科。足助諸族起兵。少應者。北畠顯信爲結城氏所攻。走歸吉野。遂西走。依菊池。武光。武光。亦武重弟也。及武重死。嗣統其衆。屢討賊黨大友。少貳氏。十二年。武光討一色直氏于筑前。大克之。大友氏時。少貳賴尙等。皆降武光。時尊氏已死。義詮遣兵助氏時。賴尙擊武光。武光方討畠山國久于日向。氏時據高崎。絕其歸途。武光不顧。進攻國久。走之。乃還。氏時不敢要擊。十四年。賴尙以兵六萬來攻。武光發八千人。奉將軍懷良。夾筑後河而陣。武光以銳兵先涉。賴尙卻保大原。武光夜遣子

武政等。潛兵。因河水亂軍聲。以襲之。獲賴尙二子。因大戰。懷良被創。北畠顯信等死之。武光身先士卒。馬傷胃裂。斬一敵將。奪其馬與胃。復進。竟大破之。西南官軍復振。

【宗良】……此時信濃に在り。【仁科】……源賴信の三男頼季の後裔。【足助】……源滿仲の弟滿政の後裔。【少應者】……味方となる者が少かつた。【亦武重弟也】……上に武敏は武重の弟なりと云へる故に、此に亦と云ふ也。武家系圖には、武重の子となす。【高崎】……豊後に在り。【絶其歸途】……武光の歸る路に兵を出して往來することの出来ぬやうにする也。【因河水亂軍聲】……水の聲によりて人馬の聲をまぎらす也。

この年に、將軍宗良親王は、信濃に居られて、其地の仁科、足助の諸豪族と兵を起されたが、味方となる者が少かつた。北畠顯信は、結城氏に攻め寄せられて、逃げ走つて吉野にたより込み、とうとう西の方へ走つて、菊池武光にたよつた。武光も、武重の弟であるが、武重が死ぬるに及んで、武重に嗣いで其部下の者共を統率し、度々、賊の徒黨なる大友、少貳氏を討つたのである。十三年に、武光は、一色直氏を筑前に征伐して、大に勝利を得たので、大友氏時、少貳賴尙等は皆、武光に降参した。この時には、尊氏はすでに死んで仕舞つて、義詮は、兵士を派遣して、氏時、賴尙を助けて、武光を撃たせよとした。其時に武光は畠山國久を日向に征伐して居つたが、此時氏時は高崎に立て籠つて、武光の歸る途を絶ち切つた。武光は、そんな事には頓著せず、進んで國久を攻めて、之を敗走させて、そこで引き返した。けれども、氏時は、其途中に待ち受けて撃つことを敢てしなかつた。十四年に、賴尙は、兵士六萬人を引き連れて來り攻めた。武光は、八千人を繰り出して、將軍懷良親王を奉じて、筑後川を間に挟んで陣取つた。武光は、強い兵士を引き連れて、先づ筑後川を渡ると、賴尙は退いて、大原に立て籠つた。武光は、夜、その子武政等を派遣して、ひそかに兵士を繰り出して、河の水音を以て人馬の音をまぎらして、不意撃つて、賴尙の二子を討ち取つた。そこで、大に戦つて、懷良親王も創を負はれ、北畠顯信等は、そこで死んだ。武光は、自身に士卒に先だつて進んで、その馬は傷つき胃は裂けたが、敵の一人の將を斬つて其馬を奪ひ取つて之に乗り、その胃をも奪ひ取つて之をかぶり、また進んで攻め立て、とうとう大に賊を破つた。こゝに於て、西南地方の官軍は、再び勢が盛んになつた。

賊將畠山國清建議大舉滅楠氏。以奪官軍根本。正儀與和泉守和田正武。詣行宮。奏曰。聞國清舉關東之甲。已至京師矣。而臣知其莫能爲也。兵道有三。曰。天時。地利。人和。明歲。大將軍星在酉。而彼自東來。違天時也。

我所居負山帶河。形勢深阻。毋論千窟之圍。爾後敵五來皆敗。違地利也。國清借公營私。爲等儕所嫉。違人和也。三者皆違。雖有百萬。何能爲。請徙御金剛山。臣等拒石川。使別將出龍門。時出輕兵。出沒散合。使敵不知我所在。東兵慄悍。氣屈而退。退即追之。必大克。帝從之。明年春。正儀等修平岩。箭尾。龍泉三城。益樓堞。張形勢。而自居于赤坂。義詮。國清合兵三十萬。入犯。軍于筒山。以逼楠氏。以一軍自龍門入。大納言藤原隆俊擊克之。賊變。兵來攻。隆俊大敗走。帝遣將軍興良援之。興良叛。應義詮。燒行宮。據銀嵩。帝令前關白藤原師基討走之。龍泉城將措疑兵而退。賊不敢迫。至五十餘日。乃攻取之。遂攻陷平岩。箭尾。合軍圍赤坂。正儀欲退守金剛山。正武曰。子知鼠乎。見人則竄。世將笑曰。南人抗天下。而鼠鬪而已。何不一戰以挫賊鋒。然後退爲未晚也。乃選二百人。約以暗號。夜出斫結城氏營。大戰不克而入。令衆唱號坐作。有四敵卒雜焉。捕斬之。乃與正儀退入金剛山。賊軍引還。正儀。正武出絕渡部橋。攻譽田城。國清復來攻。又退入山。會國清與仁木義長相惡。賊中大騷。我兵爭起。國清東歸。

正儀攻水速城。拔之。官軍乘勝連下諸城。義長來降。

【崑山國清】……鎌倉の執事。【關東之甲】……關東の兵士。【莫能爲】……格別な事を爲すことは出来ぬ。【天時地利人和】……孟子の公孫丑章句下の語。【明歲大將軍星在西云云】……曆家の言ふところによれば、大將軍星は、太白の精なり。此星の在る所を、塞がると爲す。この方に向つて軍を起すときは必ず敗ると言ふ。明年庚子の歳は、西方塞に當る。而るに賊は東より來る、故に天の時に違ふものなれば、必ず敗るべしと云ふ也。【形勢深阻】……土地の有様、谷が深くして山が險しい。【千窟之圍】……正成が千窟に據りしとき北條氏の兵が之を圍みたれども、克つこと能はざりしを云ふ。【借公營私】……公儀の名を借りて私の利益をはかる。【等儕】……同輩共。【賊】……ねたむ。【御】……臨御なり。【龍門】……紀伊に在り。【出沒散合】……兵士を繰り出したり、隠れたり、分散したり、集まつたりする。進退定まらざることを。【樓堞】……性勇急なり。氣早くしてたげきこと。【氣風】……退屈する。【平岩】……河内に在り。【箭尾】……河内に在り。【龍泉】……河内に在り。【修】……修復する。【樓堞】……樓は城樓なり。堞は城上の女牆なり。矢くら及び屏。音ロウテフ。【張形勢】……いかに多勢であるやうに見せ掛ける。【筒山】……大和に在り。【興良】……護良親王の御子。【銀嵩】……大和に在り。【措疑兵】……偽りの軍勢を置く。【竄】……匿る。逃ぐる。【南人】……南朝方。【鼠鬪】……鼠の如く鬪ふ、事あれば直ちに逃げんとするを云ふ。【暗號】……合ひ言葉。【斫】……きる、切り込む。【唱號】……合ひ言葉を唱へる。【渡部橋】……攝津に在り。【譽田城】……河内に在り。【水速】……河内に在り。

【關東】 賊の大將、崑山國清が建議して、大軍を繰り出して楠氏を滅ぼして仕舞つて官軍の根本を奪はうとした。そこで、正儀は、和泉守和田正武と與に、行在所に參つて、奏上して曰ふには、聞きますところでは、國清は關東の兵士を殘らず引き連れまして、すでに京都まで到着したと云ふ事で御座ります。けれども、私は、國清が迎も格別な事を致すことは出来ない事を承知いたして居ります。その譯は、戰爭の道は三つ御座ります、それは天の時、地の利、人の和で御座ります。明年は、大將軍星が西の方に當りて居ります。然るに、彼れ國清は東の方から此星に向つて來ますので、第一に天の時に違へるもので御座ります。我が居ります所の金剛山は、山を後にし、河を前にめぐらし、土地の狀勢、谷は深くして山は險しく御座りまして、正成の時の千窟の圍の事は申します迄も無く、其後敵が五たび來り攻めましたが、何れも、何時も皆敗北いたしました。然るに今また此處に攻め寄せやうと云ふので、御座りますから、これは第二の地の利に違へるもので御座ります。元來國清は、公儀の名を借りて私の利益を謀つて居りますので、同輩の者共に嫉妬せられ居ると云ふ事で御座りますので、これは第三の人の和に違へるもので御座ります。三つの者が皆違つて居りますので、同輩の者共に嫉妬せられ居ると云ふ事で御座りますので、これは第一に出かすことが出来ませうか。つきましては、願はくは陛下は徒つて金剛山に臨御遊ばされ、私共は石川を拒ぎまして、別の大將をして龍門に出掛けさせて、時々身輕に出で立つた兵士を繰り出して、出たり隠れたり散らばつたり集まつたり致させて、敵をして我が軍の居る所を知らせないやうに致しますときは、關東の兵士は、性質氣風よくたげよくし、御座ります故に、氣がくたびれて退却するで御座りませう。退却しますときに、すゞに之を追つかけてますときは、屹度大勝利を得るで御座りませうと曰つた。後村上帝は、此言葉に御從ひになつた。明年春に、正儀等は、平岩、箭尾、龍泉の三つの城を修復し、やぐら及び塀を益し築いて、如何にも大軍を立て籠つて居るやうに見せ掛けて、そして自分は赤坂に居つた。義詮、國清が、兵士三十萬人を合はせて、入つて犯さうとして、筒山に陣取つて、楠氏に逼り、一軍を以て龍門から討ち入つた。大納言藤原隆俊が之を撃つて勝利を得た。すると、賊は新手の兵を以て來り攻めたので、隆俊は、大に敗北して走つた。帝は、將軍興良親王を派遣して之を援けしめられたが、興良親王は叛いて、義詮の味方となつて、行宮を焼き拂ひ、銀嵩に立て籠られた。帝は、前關白藤原師基をして討たしめられて、之を敗走させた。龍泉の城を守つて居つた大將は、にせの軍勢を置いて退却したが、賊

はむざとは攻め寄せ、五十餘日経過して後、始めて之を攻め取り、とうく攻めて平岩、箭尾の二つの城をも攻め落して、軍を合はせて、赤坂を圍んだ。すると、正儀は、退いて金剛山を守らうと思つたが、正武が曰ふには、貴公は鼠を知つて居られるか。鼠は人を見ると直に逃げて隠れて仕舞ふもので御座る。賊が此城を圍むと、一戦をも爲さずして金剛山に退却するときは、世間の人は笑つて、南朝の人は、天下を相手に引き受けて居りながら、鼠の様な喧嘩をして居ると曰ふであらう。どうして、一たび戦つて賊の鋒先を挫くことを致されぬのか。さうして後に退却しても遅くは無いのだと曰つて、そこで、三百人をすゞり抜いて、合ひ言葉を約束しておいて、夜城を出掛けて結城氏の陣屋に切り込んで、大に戦つたけれども、戦利を得なかつたので、城に入つた。かくて、部下の者共をして暗號を唱へて立ち居をさせたところに入つた。やがて賊軍が兵士を引き上げて還らうとする、正儀と正武は、城を出で、渡部橋を喰ひ止めて、譽田城を攻めた。國清が、また來り攻めたので、又退却して金剛山に入つた。折節、國清と、仁木義長とが、仲が悪くなつたので、賊の中が大にむかひと騒いだので、我が兵士は争ひ起つた。そこで、國清は、關東に歸つた。正儀は、水速城を攻めて之を抜き取つた。官軍は、勝つた勢に乗じて、引きつゞいて諸城を下した。義長も來つて降参した。

帝北幸住吉。詔征東將軍宗良發兵入援以岐蘇早雪不果。十五年征西將軍懷良與菊池武光以兵二千出宰府少貳賴尙大友氏時與松浦黨謀夾攻武光武光縱反間因襲松浦軍敗之賴尙等亦走。

【宗良】……此時に當りて、信濃に在り。【岐蘇】……信濃の木曾。【早雪】……早く雪が降る。【反間】……敵の間諜を求めて、反つて之れを利用して、我が用をなさしむる也。

後村上帝は、北の方、住吉に行幸遊ばされ、征東大將軍宗良親王に詔して、兵士を繰り出して入つて援けしめられたけれども、木曾の地は寒くして早く雪が降るので、入つて援けることを果さずして仕舞つた。十五年に、征西將軍懷良親王は、菊池武光と與に、兵士三千人を引き連れて、大宰府に出でられた。少貳賴尙、大友氏時が、松浦の黨と相談して、武光を挟み撃にして攻めた。武光は、敵のまはし者をもく利用して、そこで、松浦の軍勢を不意撃して、之を敗北させた。賴尙等も亦逃げ走つた。

去歲之役賊將赤松光範有功而佐佐木道譽譖之奪其攝津守護國人憤怨正儀正武伺知之九月以兵五百出軍于天神林佐佐木秀詮與弟氏詮以千餘騎渡神崎橋正儀等使人行呼曰南軍自西來矣秀詮聞之

回馬西嚮徑田單列而行正儀遣輕卒三百夾射之賊兵爭徑欲還正儀正武薄擊走之斬秀詮氏詮溺水者二百餘人正儀援之給衣遣歸細川清氏亦與道譽惡遂來降奏曰義詮兵西拒山名時氏東拒仁木義長臣請乘虛復京師帝諮之正儀正儀對曰王師嘗攻京師五得而五失今苟欲得之臣一人力可辨何假清氏爲獨病復失之耳行宮君臣皆戀故都遂令正儀與清氏共攻京師義詮不戰而走未幾義長敗時氏退而義詮軍振欲犯行宮絕我軍後我軍留京師二十六日而還清氏戰死讚岐四國悉叛正儀正武議曰近日之勢不可坐視須一戰以振諸國官軍氣也八月以騎八百士兵數千軍神崎株瀨二處賊分兵阻水拒之正儀等張篝火其營而潛兵涉三國渡遠出賊背賊謂北軍來援也天明顧視其旗皆菊水菊水者楠氏號也而大驚潰去正儀正武進拔赤松氏一城火兵庫而還

【去歲之役】……義詮、清氏が、楠氏を赤坂に攻めしを云ふ。【譖】……音シン。讒言する。【天神林】……攝津に在り。【神崎橋】……攝津に在り。【徑田】……徑は行き過ぐる也。田を横切りて通る也。【單列】……一列にならざる。【給】……給與する、あたへる。【可辨】……事足る、間に合ふ。【何假清氏爲】……清氏の力を借りるには及ばぬ。【病】……うれふる、心配する、苦にする。【戀】……慕念なり、したはしく思ふ。【坐視】……居ながら視て居る。【振】……引き立て、盛んにする。【神崎株瀨】……竝に攝津の尼崎の東北に在り。【篝火】……篝火は籠なり。かゝり火。【號】……

……記號、紋所。兵庫……攝津に在り。
開闢 去年足利氏が赤坂を攻めた戦役には、賊將赤松光範は手柄があつた。それにも拘らず、佐々木道譽が光範を讒言して、その攝津の守護の職を奪ひ取つて仕舞つたので、攝津の國の人は憤り怨んで居つた。正儀、正武は、其事を伺ひ知つて、九月に兵士五百人を引き連れて、天神林に陣取つた。賊の佐々木秀詮が、弟義詮と與に、千餘騎を引き連れて、神崎橋を渡つた。すると、正儀等は、人をして歩行きながら大きい聲で呼ばりて曰はせるには、南朝の軍勢が西の方から來ると曰はせた。秀詮は、之を聞いて、まこと、思うて、馬を回して西の方へ向ひ、田の中を横切つて一列にならんで行つた。すると、正儀は、身輕に出で立ちたる兵卒三百人を派遣して、兩方から夾んで之を射たので、賊兵は、田の中の小路を我先にと争うて、引き返さうとした。そこで、正儀、正武は、逼り撃つて之を敗走させ、秀詮、氏詮を斬つた。水に溺れた者が二百餘人もあつた。正儀は之を救うて衣服を與へて、送り歸した。細川清氏も亦、道譽と仲が悪かつたので、とう／＼來り降参して、奏上して曰ふには、唯今、義詮の兵は、西は山名時氏を拒ぎ、東は仁木義長を拒いで居る際、御座りますから、私願はくは、京都の兵士が多く無い隙間につけ込んで京都を攻めたいと思ひますと曰つた。後村上帝は、之を正儀に御相談になつた。正儀が答へて申上げるには、王師は以前に京都を攻めまして、五たび取り戻したと思ひますと曰つた。今でも、荷も之を取らうと思ひますならば、私一人の力でも間に合ふことで御座ります。何も清氏の力を借りるには及ばぬことで御座ります。たゞ、一たん取りましてまた失ふやうになることを苦にいたして居りますと申上げた。行宮の君臣は、いづれも皆、もとの都即ち京都をなつかしく思うて居られたので、とう／＼正儀をして清氏と共に京都を攻めさせられた。義詮は、戦はずして逃げ走つた。何程の日數も立たないうちに、義長は敗れ、時氏は退却し、而して義詮の軍は再び盛んになつたので、行宮を犯して我が軍が後へ返る路を絶ち切らうとした。そこで、我が軍は京都に歸まつて居つたこと二十六日にして引き返した。やがて、清氏は讃岐に於て戦死し、四國は残らず叛いて仕舞つた。正儀と正武とは相談して曰ふには、近頃の形勢は、じつとして視て居ることは出来ない有様である。一たび戦争してそれで以て諸軍の官軍の意氣を振ひ立てねばならぬのであると曰つて、八月に、騎兵八百人、土地の農兵數千人を引き連れて、神崎と株瀬と二箇處に陣取つた。賊は兵士を分けて河を隔て、之を拒いだ。すると、正儀等は、夜、篝火を其陣營に焚いて、いかに軍勢が居るやうに見せ掛けて置いて、そして、ひそかに兵を繰り出して三國の渡をかちわたりして、ぐるりとまはりて、賊の後に出了た。賊は、北朝の軍勢が來つて自分を援けるのであると思つて居つた。夜明けになつて、ふりかへつて其旗を見るに、皆菊水の旗であつた。菊水といふは楠氏の旗じりであつた。そこで、賊兵は、大に驚いて、隊伍を亂して退き去つた。正儀、正武は、進んで赤松氏の領内なる一城を攻め取つて、兵庫に火を附けて、引き返した。

於是北畠顯能與仁木義長並略伊勢。菊池武光略筑紫。義詮遣足利氏經充鎮西探題。武光使弟武義族重經將兵逆擊之。武義傷走。重經更進。斬少貳賴資。武光繼至。軍于豐後府。擊走氏經。十九年。大内弘世以周防長門叛降義詮。并厚東氏邑。厚東怒。降於武光。與弘世戰豐後。走之。已

而武光病卒。子武政襲肥後守。山名時氏。仁木義長亦降義詮。官軍不振。

【略】……取る也、方を用ふることも少くして取るを略と云ふ。
開闢 こゝに於て、北畠顯能は、仁木義長と與に、並に伊勢を平らげ、菊池武光は筑紫を取つた。義詮は、足利氏經を派遣して、鎮西の探題の職に當らせた。武光は、弟武義、一族の重經をして兵士を引き連れて氏經を迎へ撃たせた。武義は手創を負うて走り、重經が代つて進んで、少貳賴資を斬つた。武光が引き續いて到着して、豐後の國府に陣取つて、氏經を撃つて敗走させた。十九年大内弘世が、周防、長門を以て叛いて義詮に降参し、厚東氏の領地を并呑したので、厚東氏は怒つて、武光に降参し、弘世と豐後に戦つて、之を敗り走らせた。とかくする中に武光は、病氣の爲めに死んで、子武政が、肥後守を相繼した。山名時氏、仁木義長も亦、義詮に降参した。官軍は又衰へた。

二十三年。天皇崩。皇太子寬成即位。是爲長慶天皇。天皇建德二年。賊將細川賴之大舉入寇。和田正武率楠氏族。堅守諸城。賊軍引還。文中二年。細川氏春復入寇。大納言藤原隆俊死之。天皇讓位於皇太弟熙成。是爲後龜山天皇。天皇幼聰敏。人冀興復。而楠氏衰。國勢日削。義詮既死。子義滿嗣。勢益張。我將士多叛。降北朝。紀伊諸城陷。二年。關東賊兵屢攻。征東將軍宗良於信濃。宗良不能拒。走歸吉野。東北無復官軍。征西將軍懷良猶依菊池氏。保守一隅。先是。明主朱元璋使使來征西府。以其書辭無禮。卻不納。明主更貽書於北朝。北朝納之。以征西府梗其往來。遣今川貞世充探題。來攻。菊池武政與其子武朝。相繼拒戰。屢克之。已而懷良與武政。武朝。前後皆病卒。西南無復官軍。

【手記】【聰敏】……聰は耳敏なり。敏は捷なり。聞き分け善くして事にさときこと。【冀興復】……王室の興りてもとの様に成ることを心待ちする。【保守一隅】……一方の片隅に立て籠り守る。【朱元璋】……支那の明の太祖。【卻不納】……差し戻して受け取らぬ。【貽】……遺る。【梗】……塞ぐ。

二十三年に、後村上天皇が崩御になったので、皇太子寛成親王が御位に即かれた。これは長慶天皇である。天皇の建徳二年に、賊の大將細川頼之が、大軍を引き連れて、討ち入つて寇をなしたが、和正武が、楠氏の一族を引き連れて、堅く諸城を守つて居つたので、賊軍は引き上げて還つた。文中二年に、細川氏春が、また討ち入つて寇をなした。大納言藤原隆俊は、そこで討死した。長慶天皇は御位を皇太弟熙成親王に御譲りになった。これは後龜山天皇である。天皇は、御幼少の時から、聰明にして氣が早く付かれる御方であつたので、人々は、王室の再興することを心待ちにして居つた。然れども、楠氏はだん／＼に衰へ、國の勢力は日にまし削り減らされて居つた。北朝の方に於ては、義詮はもはや死んで仕舞つて、子義満が相續し、その勢力がますます盛んになつた。我が將士は多く叛いて、北朝に降参し、紀伊の諸城は攻め落された。三年に、關東の賊兵が、たび／＼征東將軍宗良親王を信濃に攻めたが、宗良親王は之を拒むことが出来なくて、走つて吉野に逃げ込まれたので、東北地方には、もう官軍は無いやうになつた。征西將軍良親王は、また菊池氏にたよつて居られて、西南の片隅に立て籠つて居られた。これより先に、支那の明主朱元璋（即ち明の太祖）が、使者を征西將軍府に來らしめたが、その書面の文句が無禮であつたので、差し戻して受け附けなかつた。明主は、更に書面を北朝に贈つた。北朝は之を受け納められた。けれども、南朝方の征西將軍府が北朝と明との往復を塞ぎ妨げて居るので、北朝に於ては、今川貞世を派遣して鎮西探題の職に當らしめて、來つて征西將軍府を攻めた。菊池武政が、その子武朝と、相繼いで拒ぎ戦つて、たび／＼之に勝利を得た。とかくする中に、懷良親王は、武政、武朝と、もに、相前後していづれも皆病氣で死んで仕舞はれたので、西南地方にも、もう官軍は無いやうに成つて仕舞つた。

於是。義滿專圖楠氏。天授四年。遣山名氏清等入寇。楠氏族橋本正時。神宮正種等力拒。不克而退。六年。和田正武病卒。弘和二年。正儀亦卒。當是時。官軍所保。獨金剛山一城而已。元中九年。義滿使畠山義深將數千騎來攻金剛山。四絕糧道。城兵僅數十人。飢不能戰。賊急薄之。城兵逃走。匿十津川。自正成築城焉。凡六十年。乃爲賊兵所陷。義滿乃使大内義弘來講和議。約傳神器於北朝。則兩統更立。遂許之。是年冬。遂備法駕。發吉

野。御于大覺寺。以父子禮。授神器于後小松帝。

【四絶】……四方から絶ち切る。【十津川】……大和に在り。【講】……謀る也、相談する。【法駕】……正式に天子の行幸の儀式を備へたる御乗物なり。

こゝに於て、義滿は、専ら楠氏を滅ぼさんことを計畫して、天授四年に、山名氏清等を派遣して、討ち入りて寇をさせた。楠氏の一族なる橋本正時、神宮正種等が、力を盡して拒いだけれども、勝利を得ずして退却した。六年に、和田正武は病氣の爲めに死んだ。弘和二年に、正儀も亦死んだ。是の時に、官軍が立て籠つて居るのは、たゞ金剛山の城一つであつた。正中九年に、義滿は、畠山義深をして數千騎を引き連れて來つて金剛山を攻めさせた。畠山義深は、兵糧を運搬する道四方から絶ち切つた。金剛山の城の兵士は、わづかに數十人であつたが、兵糧缺乏の爲めに、空腹にして戦ふことが出来なかつた。そこを目標けて、賊兵は急に之に逼り攻めたので、城兵は逃げ走つて、十津川に隠れた。正成が此城を築いてから、凡そ六十年にして、始めて賊兵に攻め落されたのである。金剛山の城が落城したので、最早南朝の味方たる者は無くなつた。義滿は、そこで、大内義弘をして來つて和議の相談を申し込ませて、南朝が三種の神器を北朝に御傳へになつたならば、南朝北朝の兩系統が、かはる／＼御位に御即きになることにしやうと約束したので、南朝では、とう／＼之を御許しになつた。この年の冬に、後龜山帝は、とう／＼正式の行幸の御儀式を整へて、吉野を御出發になつて、大覺寺に臨御せられ、父子の禮を以て、三種の神器を後小松帝に御傳へになつた。南北兩朝は、こゝに合一したのである。

後七年。義弘揚兵於和泉。擊足利氏。楠正秀以兵百餘屬之。正秀者。蓋正儀子也。菊池氏。北畠氏餘孽亦來屬焉。戰敗散歸。後十二年。後小松禪位。後龜山皇子當立。足利氏乃立後小松皇子。是爲稱光帝。楠氏及北畠氏。竝訴之。欲如約。足利氏弗聽。則竝起兵。足利氏約。帝後當傳於南朝皇子。乃止兵。及稱光崩。無嗣。足利氏復索北朝皇族。立之。後龜山天皇之子曰小倉者。自京師走伊勢。依北畠氏起兵。戰敗講和。歸京師。削髮入萬壽寺。

【後七年】……後小松帝の應永六年。【楠正秀】……小三郎と稱す、後に左馬頭となる。大日本史には正勝に作る。【餘孽】……音ヨケツ。餘類と云ふが如し。妾隷の子又庶子を孽子と云ふ。【後十三年】……後小松帝の應永十九年。【北畠氏】……滿雅。

【南朝】南北朝合一して後七年にして、大内義弘は、兵を和泉國に揚げて、足利氏を撃つた。楠正秀が、百餘人の兵士を引き連れて之に附いた。正秀といふのは、蓋し正儀の子である云ふと云ふ。菊池氏、北畠氏の餘類も亦、來り附いた。戦が敗れて義弘も死んだので、分散して歸つた。その後十三年にして、後小松帝は御位を御譲りになつた。南北朝の兩系統代るく立つと云ふ事であつたから、後龜山帝の皇子が御位に御即きになるべき筈であつたのに、足利氏は、そこで、後小松帝の皇子を立てた。それは稱光帝である。楠氏と北畠氏とは、いづれもその不都合を訴へて、約束の通りにしやうと思つたけれども、足利氏は聞き入れなかつた。そこで、楠氏と北畠氏とは、いづれも兵を起した。すると、足利氏は、稱光帝の後には、南朝の皇子に御位を傳へるやうにする約束したので、そこで、兵を止めた。其後、稱光帝が崩御になつて御跡嗣が無かつた時に及んで、足利氏は、また、北朝の皇族をさがし求めて、之を御位に御即かせ申上げた。そこで、後龜山帝の皇子で、御名は小倉宮と申す御方が、京都から伊勢に走つて、北畠氏にたよつて兵を起されたが、戦が敗れたので、和睦をして、京都に歸つて、髪を剃つて、萬壽寺に入られた。

後十餘年歲癸亥。足利氏内亂。楠二郎收南國兵。得三百人。奉萬壽寺金藏主者爲主。分兵爲二隊。二郎自將一隊。而越智某將一隊。夜入大内。取三神器。内侍鏡爲東門衛士所奪。寶劍遺於清水寺側。獨擁神璽。據叡山中堂。足利氏管領畠山基國遣兵來攻。二郎與越智皆戰死。金藏主自殺。二郎者不詳其所出也。二郎殘兵以神璽奉後醍醐帝曾孫某。保吉野。歲戊寅。赤松氏遺臣二人詐來仕。弑皇曾孫。從者追殺一人。其一人遂奪璽而去。

【後十餘年歲癸亥】……後花園帝の嘉吉三年なり。南北朝合一の後別に南朝の正朔なきが故に干支を以て稱する也。【楠二郎】……正光。【南國】……大和、紀伊等。【金藏主】……小倉宮の子、名は尊義。藏主とは禪家の職名。萬壽寺は京都に在る禪寺なり。【大内】……大内理。【内侍鏡】……内侍所。内侍所は、溫明殿にして、此處に三種の神器を安置し、内侍の女官が之を奉侍す。村上天皇の天徳二年秋、禁中に火事ありしとき、溫明殿の神鏡自ら飛揚して、南殿の櫻樹の上に懸り、内侍之を袖に承けて、以て免るゝことを得たり。是後、神鏡を稱して内侍所と爲す。【神璽】……八坂瓊曲玉。【清水寺】……京都の東山に在り。【中堂】……根本中堂。【歲戊寅】……後花園帝の長祿二年。【赤松氏遺臣二人】……馬島三郎太郎、中村八郎なり。八郎は戰死し、三郎太郎は璽を奪つて去れり。その功によりて赤松氏を再興す。

【楠二郎】後十數年たつて癸亥の歲に、足利氏に内亂があつたので、それに付け込んで、楠二郎が、南國の兵を寄せ集めて、三百人を得て、萬壽寺の金藏主を奉じて主君と仰ぎ、兵を分けて二隊となし、二郎自身は一隊を引き連れ、そして越智某が、他の一隊を引き連れ、夜、宮城の内に入つて、三種の神器を奪ひ取つた。内侍所の神鏡は、東の御門の番兵に奪ひ返されて仕舞ひ、寶劍は、清水寺の側で置き、たゞ、神璽だけを持つて、叡山の根本中堂に立て籠つた。すると、足利氏の管領畠山基國が、兵士を派遣して來り攻めさせたので、二郎と越智とは、いづれも皆戰死し、金藏主は自殺した。二郎と云ふのは、楠氏であるけれども、其系圖は明瞭には分らぬ。二郎の殘兵が、神璽を持って、後醍醐帝の曾孫某を奉じて、吉野に立て籠つた。戊寅の年に、赤松氏の遺臣が二人、詐りて來つて仕へ、帝の曾孫某を弑した。從者が追つかけて行つて其一人を殺したが、他の一人は、とうとう、神璽を奪ひ取つて去つて仕舞つた。

先是。後村上天皇子泰成生圓胤。爲圓滿院僧正。蓄髮受名義有。癸亥之難。楠二郎之弟某。奉義有起兵。據八幡。迎擊畠山氏兵。大破之。細川氏來攻。楠氏不利。退入紀伊。據湯淺城。歲丙寅。畠山氏將游佐來攻。楠氏又擊破之。丁卯冬。游佐復聚兵來攻。城終陷。義有遇害。楠某死之。楠氏之事終於此。母復所覩。

【圓滿院】……近江の大津に在り。【癸亥之難】……楠二郎の騷動。【八幡】……山城に在り。【湯淺城】……紀伊に在り。【歲丙寅】……後花園帝の永享八年。【游佐】……河内守と稱す。畠山持國の家臣。【丁卯】……後花園帝の文安四年。【蓄髮受名義有】……これを義有と改めた。癸亥の年の騷動に、楠二郎の弟の某が、義有を奉じて兵を起し、八幡に立て籠つたが、畠山氏の兵が來り攻めんとするのを迎へ撃つて、大に之を撃つた。細川氏が來り攻めると、楠氏は勝利を得なかつたので、退却して紀伊に入り、湯淺城に立て籠つた。丙寅の歲に、畠山氏の將游佐某が、來り攻めたが、楠氏は又之を撃ち破つた。丁卯の歲の冬に、游佐氏が、また兵を寄せ集めて來り攻めたので、城はとうとう、落城し、義有は殺害せられ、楠某はそこで討死した。楠氏の事は、これで御仕舞で、また何も見えて居ることは無い。

名和兒島土居得能氏。蓋先楠氏而亡。後楠氏而存者。菊池。北畠氏。菊池氏數世。至義宗者乃亡。北畠氏十餘世。至具教者乃亡。此二氏者自楠

氏衰。皆降。足利氏。或曰。楠正儀亦降。足利氏。蓋有深謀焉。史乘散佚。不可考。信要之。正成宗族。與後醍醐皇統。相爲終始。楠氏亡而後。二百餘年。權中納言源光國。立石于湊川。題曰。嗚呼忠臣楠氏之墓。

【正義宗者乃亡】……義宗、其老臣紀親則を殺す。諸將怨み叛きて、相共に其主義宗を逐ふ。菊池氏はに於て亡びぬ。【至具教者乃亡】……正親町帝の永祿十二年八月、織田信長、北畠氏を伐ち、大河内を圍む。城中糧絶きて、成ぎを行ひしが、後遂に殺さる。【深謀】……ふかき計畫。日本政記に議論あり。參看すべし。【史乘】……記録の書。昔の史記を乗と云ふ。【散佚】……音サンイッ。散らばつて無くなる。【相爲終始】……始め終りを一所にする。【源光國】……徳川氏、水戸侯なり。石を立てしは、東山帝の元祿元年の事なり。【楠氏】……氏は當に子に作るべし。蓋し傳寫の誤なるべし。

【關】名和、兒島、土居、得能氏、大體、楠氏より先に亡びたるものらしい。楠氏より後まで存して居つた者は、菊池、北畠氏である。菊池氏は其後數代にして、義宗と云ふ者の時に至つて亡びて仕舞つた。北畠氏は、十數代續いて、具教と云ふ者の時に至つて亡びて仕舞つた。此菊池、北畠の二氏は、楠氏が衰へてから、いづれも皆、足利氏に降参したので、それで長く續いたのである。或る人の説には、楠正儀も亦足利氏に降参したと云ふが、大體、これには深いはかりごとがあつたのであらう。けれども、當時の記録の書類が散らばつて無くなつて仕舞つて居るので、其正確なることを考へ定むることは出来ない。之を要するに、正成の一族は、後醍醐帝の御系統と、始め終りを一處にして居る。即ち楠正成は後醍醐帝の時に起り、楠氏の一族滅亡せしときに、後醍醐帝の系統も亦絶たしたのである。楠氏が亡びてから後二百餘年たつて、權中納言源光國が、石碑を湊川に建て、嗚呼忠臣楠氏之墓と書き付けられた。

外史氏。曰余數往來攝播間。訪所謂櫻井驛者。得之山崎路。一小村耳。過者或不省其爲驛趾。蓋經足利織豐數氏。世故變移。道里驛程。從輒改耳。余於是低回不能去。顧望金剛山巔立雲際。想見公舉義之秋。及其子孫據以扞護王室也。

【攝播】……攝津、播磨。【訪】……問ひ尋ねる。【山崎】……山城に在り。【過者】……通過する者、旅人。【不省】……氣がつかぬ。【驛趾】……昔の宿場のあと。【織豐】……織田、豊臣。【世故變移】……故は事故なり。移は易なり。世の有様がうつりかはる。【低回】……廻遊の貌。行きつ

とどつ、去りかねるを云ふ。【巔立】……音キョクツツ。山が高く聳え立つ。【雲際】……雲のきは。【扞護】……ふせぎまもる。【調】外史氏論じて曰く、余、たびく攝津、播磨の間を往復したので、其ついでに、謂はゆる櫻井驛といふ者を問ひ尋ねて、之を山崎街道に見付け出したが、一つの小さい村に過ぎないもので、通り過ぎる旅人は、それが昔の宿場のあとであることには氣の附かぬ者もあつた。大體、足利氏、織田氏、豊臣氏などの時代を経過して、世の中の有様が移りかはりて、道路、村里、宿場なども、それに従つて改まつたからである。余、こゝに於て、往きつとどつして、其處を離れ去ることが出来かねて、ふりかへりて、金剛山が雲のきは高く聳え立つて居るのを望み見て、楠公が義兵を起された時の事、及びその子孫が其處に立て籠つて朝廷を防ぎ護つて居つた事を想ひ出したのである。

觀公詣行在對天子。曰。臣而未死。賊不患不滅。夫以一兵衛尉。而居然以天下之重。自任。豈非感激值遇。以身許國哉。故能以赤手障江河。回天日於既墜。何其壯也。公聚北條氏精銳於一城之下。而使新田足利之屬擣其空虛。以殪其渠魁。帝之復辟。醜爵任職。宜以公爲首。而纔能與結城。名和輩比肩。其失於舉措。足以知中興之無成矣。

【兵衛尉】……正成嘗て土寇を平らげて其功を以て兵衛尉と爲ると云ふ。【居然】……安き也。おちついて居ること。【值遇】……音チケウ。値も亦遇ふ也。天子の御見出しに遇ひたるを云ふ。【赤手】……から手、素手。【障江河】……江河の大なる流を支障する。賊の大軍に當るにたとふ。【回天日於既墜】……大陽の既に西に没したるを引きかへす。後醍醐帝の隱岐に遷されたるを京都に復し奉りしを云ふ。【精銳】……すべり抜き強き兵士。【一城】……千宿城を指す。擣其空虛……擣は衝く也。兵士が大抵出拂つてからあきとなりたる鎌倉の北條氏を撃つる也。【渠魁】……高時を斥す。渠は大なり、魁は首なり。【復辟】……再び天子の御位に上られしを云ふ。【醜爵】……醜は酬と同じ。報ゆる也。爵位を與へて功勞に酬ゆる也。【首】……第一。【比肩】……大抵同じ位なるを云ふ。【失於舉措】……舉は動なり、措は音リ、施し布く也。事の處置を間違へ誤まる。

【補】楠公が、はじめ、笠置の行在所に參つて、天子に御答申上げたのを見るに、その言葉に、私にして未だ死な、いで居りますならば、賊が滅びないのを心配するに及びませぬ、必ず滅びるに相違ありませぬと曰つて居る。そもく、一個の兵衛尉の微賤なる官職に在りながら、しかも落ち著きはらつて、天下の重きを自分に引き受けて我が責任として居るのは、なんと、天子の御見出しに預つたことに感激し、自分の身命を國家の爲めに棄て、構はぬと思つて居つたからではないか。それ故に、から手を以て江河の大なる流にまたふべき賊の大軍を支へ、すでに西に没した大陽を引きかへし、後醍醐帝を隱岐國から京都に御還りになるやうにすることが出来たのである。何とさかんな事では無いか。楠公が、北條氏のすべり抜き強き勇銳なる士卒を一箇の金剛山の城の下に聚めて居つたので、そして、新田氏、足利氏など

の類をして、兵士が大部分居らなくなつて空虚となつて居る鎌倉を衝き攻めて、其かしら高時を斃さしめたのである。されば、帝が、隱岐から御還りになつて再び天子の御位に上られて、爵位を以て功勞に報い、官職に任命するには、楠公を以て第一番とせらるべき筈であつた。然るに、やつとの事で、結城、名和などの仲間と肩をならべることが出来る位であつた。その處置に間違のあつたので、それで以て帝の中興の事業が逆も成就することは無いことを知る事が出来る。

及足利氏叛。朝廷方倚新田氏爲重。公特充禰裨。供其驅使。亦以其門地有不若焉爾。然京師大捷。殆致掃殄者。非因公之策邪。嚮使帝以其所任新田氏者。以任於公乎。曷至使犬羊狐鼠之賊蹂踐吾朝廷哉。

【倚】……たよる、またれる。【爲重】……たよりとする。【禰裨】……禰は小なり、裨は補助するなり。副將。【驅使】……追ひまはし使ふ。【門地】……家柄。【掃殄】……掃は除く也。殄は音テン、絶つなり。拂ひ盡し亡ぼし盡す。【犬羊狐鼠之賊】……犬羊狐鼠にも比すべきさまで強からぬ、意氣地なき賊。足利氏を指す。【蹂踐】……音ジウセン。ふみにじる。犬羊狐鼠が野や島をふみあらずに喰へて云ふ也。

然觀其臨死戒子。又曰。吾死。天下悉歸足利氏。夫知天下之不可爲。而猶留其子孫。以衛天子。其設心。雖古大臣。何以遠過。故子孫能守其遺訓。護正統天子於彈丸黑子之地。以防四海寇賊者。及三朝五十餘年之久。一門之肝腦。而竭諸國家之難。至其漸盡灰滅。而後足利氏始得大成。其志於天下。蓋朝廷不能大任楠氏。而楠氏所以自任。莫以加焉。世之論

中興諸將。尙視其資望大小。而不深揆其實。亦與當時之見等耳。不有楠氏。雖有三器。將安託焉。以繫四方望哉。笠置夢兆。於是益驗。而南風不競。俱傷共亡。終古莫以恤其勞。悲夫。

【不可爲】……興復の事の爲すこと能はざるを云ふ。【設心】……心掛。【遺訓】……のこし置かれし訓誡。【正統】……筋目の正しい。【彈丸黑子之地】……地の狭小なるに喩ふる也。はじきだま、はくろ程の小さい土地。史記の虞卿列傳に、此彈丸之地とあり。漢書の賈誼列傳に、淮陽之比大諸侯、僅如黑子之著面とあり。【三朝】……後村上長慶、後龜山を云ふ。【一門】……一族。【肝腦】……肝臟、腦髓。精力智慮と云ふが如し。【竭諸】……諸はコレと訓ず。【漸盡灰滅】……漸は音シ、氷の解くる也。氷の解けて無くなり、火の灰となりて消ゆるが如く、一門の滅亡せしを云ふ。【莫以加焉】……これより上に出づるとは出来ぬ。此上は無い。【資望】……門地人望。【不深揆其實】……揆は度る也。とく其實の事情をばかり考へぬ。【與當時之見等】……今世の論者も延元時代の議者と同等の識見なりとの意。【四方望】……四方の勤王の士の期望。【笠置夢兆】……夢兆は夢の前表。後醍醐帝が笠置にて見たまひし夢を云ふ。【驗】……しるし、實際の効驗。【南風不競】……南朝の氣勢の振はざるを云ふ。左傳の襄公八年の條に、晉人、楚の師あるを聞く。師曠曰、害あらず。吾しばく、北風を歌ひ、又南風を歌ふ。南風競はず。死聲多し。楚必ず功なからんとあり。南風は南方の歌なり。南方の歌は弱くして振はずして、北方の歌に及ばずとの意。こゝにては、假りて云ひたる也。【俱傷共亡】……楠氏が南朝と終始を同じくせしを云ふ。【終古】……末世までも、永世。【恤】……愁む。

前に述ぶる如く楠公は不遇であつたけれども、それにも拘らず、楠公が死せんとするときに臨んで子正行を訓誡したのを見るに、其言葉に、われが死んだならば、天下は残らず足利氏に従ふであらうと曰つた。夫れ、天下の事が到底回復することは出来ないことを知つて居りながら、それでも猶ほ、その子孫を留めて天子を護衛せしめるやうにして置かれた。その心掛は、古昔の大臣といへども、どうして、これよりも遙かに勝れて居るものが有らうか、とて有りはせぬ。それ故に、子孫が、能く楠公の遺しおかれた訓誡を守つて、血筋の正しい天子を彈丸黒子ほどの小さい土地に護衛して、それで、天下の寇賊を防禦すること、三代五十餘年の久しい間に及び、楠氏の一族の精神智慮を一切擧げて、これを國家の大難の爲めに傾け盡して仕舞つたのである。楠氏の一族が氷の解けて無くなり火の滅えて灰となるが如く、残らず滅亡して仕舞ふに至つて後に、足利氏は始めて大に其志望を天下に成就することが出来たのである。大體、朝廷に於ては、楠氏に十分に任せられなかつたけれども、楠氏が自分自身に其任務として居つたところの事は、此れより上は無いほどのものであつた。即ち楠氏は天下を以て自分の責任として居つたのである。世間の人が、建武中興の時の諸將を論ずるに、今でもまだ、家柄人望の大小を見て論ずるので、深く其實際の事情をばかり考へないのであるが、これでは、矢張りその當時の人々の識見と違はないので、決して正當なるものでは無い。若しあの時に楠氏が居らなかつたならば、三種の神器があつたとしても、はた、いづくに預けまかせて、天下の勤王の人々の望をつなぎ留めることが出来やうか。笠置山に於て後醍醐帝が御覽になつた夢の前表は、まさしく實際の効驗があつたのである。然れども、南風競はず、南朝の御威勢は甚だ振はずして、楠氏と南朝とは、ともに傷つき共に亡びて仕舞つて、後々の世までも、楠氏が王事に盡した功勞を哀れと思ふ者が無いのは、實に悲しむべきことである。

抑正閏雖殊卒歸於一。能熙鴻號於無窮。使公有知。亦可以瞑矣。而其大節巍然。與山河並存。足以維持世道人心於萬古之下。比之姦雄迭起。僅傳數百年者。其得失果何如哉。

【正閏】……南朝は正統、北朝は閏位。閏とは、月に閏月あるが如く餘分なる義なり。【卒歸於一】……南北朝合一せしを云ふ。【熙】……廣む。照らし明かにす。【鴻號】……鴻は大なり、號は名號なり。大なる御名、天子の名號。【睨】……音メイ、目を閉づる也。【巍然】……高大なる貌。【維持】……つなぎたもつ。【姦雄】……姦邪なる英雄。【迭】……たがひに。かはる。【傳數百年者】……足利氏を指す。【論】……南朝は正統、北朝は閏位であること云ふ區別はあつたけれども、その後、とうとう合同して一つとなつて、萬世一系の皇統の大なる尊號を億萬年の後までも廣くかゝるかすことが出来たのであるから、楠公の靈魂若し未だ死せずして之を知ることがあるならば、安心して目を閉ぢても善いのである。楠公の大なる節義は、高大にして、山や河のちん限り存在して居るので、それで世道人心を萬世の後までも維きたもつことが出来るのである。されば、之を姦邪なる英雄が、代る／＼起つて天下を取つてやつと數百年の間に傳へた者に比較するときは、果していづれが得であらうか、いづれが失であらうか。其優劣は言ふにも及ばぬことである。

日本外史講義卷之五終

日本外史講義卷之六

賴襄子成原著 興文社編輯所講義

新田氏正記

新田氏

外史氏曰。新田足利二氏。皆出於八幡公。其門閥固不相下也。而新田氏爲嫡宗。舊史皆以足利氏承源氏之統。號曰將軍者。以成敗之迹。軒輕之耳。然一家聲威。有優劣者。有由來矣。

【八幡公】……源義家。門閥……音モンバツ。家格。家柄。不相下……兩方とも同じ位にて格別上下は無し。【嫡宗】……本家。【舊史】……古き記録。【成敗之迹】……成功と失敗との事迹。【軒輕】……音ケンチ。軒は輕き也、輕は重き也。輕重する、高低上下を區別する。軒輕の字は、漢書の馬援列傳に見ゆ。【聲威】……名聲勢威。【有由來】……むかしからの譯がある。【論】外史氏論じて曰く、新田氏、足利氏は、いづれも皆、八幡太郎義家から出たもので、その家柄は、もとより、同じ位で、上下の等級は無いのである。そして、新田氏が本家である。然るに、古き記録歴史には、皆、足利氏を以て源氏の血筋を受けた者であるとして、將軍と呼んで居るのは、足利氏が成功し、新田氏は失敗した、その成功と失敗との事迹の爲めに新田氏と足利氏とに輕重の區別を立てたけの事である。然れども、新田氏と足利氏との二家の名聲勢威が、一はずれて居り、一は劣つて居つたのは、むかしからの故のあることである。

蓋一家之所同祖者義國。義國以八幡公之子。而謫於上野。所謂新田郡。其所食也。二子。義重。義康。義康依其外家田原氏。居足利郡。終得分食其

半而義重繼有新田。又襲義國官爵。則義重之爲嫡宗明矣。然及源賴朝起。義重與之有隙。以大炊助終其身。子孫不過曰上野一武族。而義康遭遇事變。頓進官爵。又與源義朝同娶於熱田。故子孫受賴朝親昵。又世結婚於北條氏。互相倚賴。著于鎌倉。後醍醐帝之未起事。蓋稔聞足利氏之爲強宗也。是以及聞其倒戈。遽許寵爵。其褻玩朝廷。覬覦非望。帝有以啓之。而新田氏之功勞。遠出其上者。則待一家交訟之日。然後知之。及尊氏叛逆。乃命義貞宗族以防之。而其勢既成。不可復遏。可勝歎哉。

【詞】音タケ。罰也。罪ありて遠地に徙さるること。【所食】領地、知行所。【外家】母方の家。【足利郡】下野に在り。【繼】父のあとをつぐを云ふ。【頼朝起義重與之有隙】頼朝、義重を招けども答へず、又其女を以て妾とせんと欲す、亦肯はず、故に隙あり。【大炊助】助は頭の次の官。諸國の春米、雜穀の分給、諸司の食料の事を掌る。【遭遇事變】事變は兵亂。保元の變亂を指す。足利記に詳なり。【頓】にはかに、しきりに。【娶於熱田】熱田神社の大宮司季範の女を娶る。【頼朝親昵】親昵は音シンジツ、親しみ睦まじきこと。【頼朝の母も亦大宮司の女なり】音シンブン。よく聞く。【強宗】強盛なる一族。【倒戈】ほこききを倒にする。即ち尊氏が足利氏に叛いて官軍に歸せしを云ふ。【寵爵】尊き爵位。寵は恩なり、尊榮なり。【褻玩】褻は音セツ、狎なり、慢なり。玩は弄なり。【兩方より訟へ出づる】尊氏が義貞を讒し訟ふるにより、義貞も亦尊氏が罪狀を訟ふるを指す。【尊氏叛逆】尊氏が鎌倉に據りて反せるを云ふ。【遏】防ぎ止むる。

【詞】大體、新田、足利の二家が、同じく先祖として居るところの者は、義國であるが、義國は、八幡太郎義家の子でありながら、罪を以て上野に流され、いはゆる新田郡と云ふ所は、その領地であつた。義國には二人の子があつて、それは義重、義康である。義康は、その母方の家の田原氏にたより込んで、足利郡に居つて、とうとう足利郡を分けて貰つて其半分を領地とすることが出来た。然るに義重は、父義國に繼いで新田を領地として、又義國の官職爵位を繼いだのである。して見れば、義重が本家であることは明かである。然れども、源頼朝が鎌倉に起るに及んで、義重は、之と仲が悪かつたので、大炊助といふ微官を以て一生を終つて仕舞ひ、その子孫は、上野の國の一武族であると曰ふに過ぎなかつた。しかるに、義康は、兵亂に出合つて、しきりに官職爵位を昇進させられ、又、源義朝と同じく熱田の大宮司の娘を娶つて居つたので、それゆゑに、子孫は頼朝と親しみ睦まじく、又代々北條氏と縁組をして、相互にたよりもたれ合つて居つたので、鎌倉時代に、大分世間に知られて居つた。そこで、後醍醐帝が、未だ北條氏征伐の事を御始めなされぬときから、大體、足利氏が強大なる一族であることを、よく御聞き及びに成つて居つたことであらう。それ故に、帝は、足利氏が戈をさかさまにして北條氏にむいて官軍に付いたといふ事を御聞きなされるに及んで、俄に高い官位に任ずることを許されたのである。されば、足利氏が、朝廷をけがしてあそび、望むまじき事を希望するに至つたのは、帝が之を開き導いて斯く爲させられた點もあるのである。そして、新田氏の骨折が、遙に足利氏よりすすんで居る事は、新田、足利の二家が雙方から訟へ出でた時に至つて、始めて之を御知りになつた位である。尊氏が叛逆するに及んで、そこで、義貞の一族に命令して、之を防禦せしめられたが、けれども、足利氏の勢はずでに出来上つて仕舞つて居つて、再び之を防ぎとめることが出来なかつたのは、まことに嘆息に堪へざることである。

世或謂。義貞族望不及尊氏。故不能獨立。而倚朝廷以爲重。余以爲不然。朝廷倚新田氏。非新田氏倚朝廷也。新田氏將帥材武。部屬精勁。非足利氏所企及。而數奇敗衄。終至消亡者。無他故也。天下厭苦朝政。而謳歌武治。故利尊氏之營私。而不便義貞之奉公。不得已而從之。勉強而赴戰。雜以衣纓之褊裨。畿甸之召募。掣肘牽累。動不如意。爲之將帥者。豈不難哉。嚮使義貞亦出足利氏所爲。則介冑之族。將雲合霧集而歸之。而足利氏焉能加之。天下之事。皆可圖也。何至困踣如此哉。是其禍福利害。雖三尺童子。亦能知之。義貞寧有不知。而終不改其節者。豈非以已任王家倚賴。不忍倍畔也邪。否則源氏之統。其歸新田氏久矣。是寧可以成敗論也。

【族望】……家柄人望。企及……企は音キ。踵を擧げて望む也。くはたておよぶ。【數奇】……音スウキ。又はサクキ。まはり合はせの悪き也。【敗衄】……音ハイヂク。敗軍すること。敗北して血まみれになるを云ふ。【消亡】……身も家もともに滅びて無くなる。【厭苦朝政】……朝延の御政に失策があつた爲めに、厭ひ且つ苦む。【謳歌武治】……武家の政治を慕はしく思ふ。長聲を歌となし、短聲を謳となす。謳歌とは、思慕するを云ふ。【利】……都合好しとする。【營私】……一己の利益をはかり求める。【不便】……都合宜しからずとする。【奉公】……公事の爲めに盡力する。【勉強】……いや／＼ながらつとめる。【雜】……まじふる。【衣纓之禮】……纓は音エイ。冠のひも。束帯したる公卿方を副將とす。【畿甸之召募】……五畿内地方から召しあつめたる兵士。甸は音デン。王制に、千里の内を甸服と云ふとあり。【製肘】……音セイチウ。出さんとするひぢを引き止めることにて、檢束して其人の思ふまゝにさせぬ事。孔子家語の宓子賤の故事より出づ。【奉累】……音セイキウ。出さんとするひぢを引き止めることにて、檢束して其人の思ふまゝにさせぬ事。孔子家語の宓子賤の故事より出づ。【牽累】……音ケンレイ。引きわづらひする。邪魔をして自由にさせぬこと。【介冑之族】……鎧かぶとを著たるものがら、即ち武士を云ふ。【雲合霧集】……雲の如く霧の如く澤山に集まる。【困路】……くるしみたふる。路は音ボク。僮る、也。仆と同じ。【三尺童子】……七八歳の童子。小供といへども東西を知るくちの者はこの意。【倍畔】……そむきさる。倍は音ヘイ。畔は音ハン。畔は叛と通ず。

世間では、或は謂ふには、義貞の家柄人望が尊氏に及ばないので、それ故に獨立して大事を成すことが出来ぬので、そこで朝廷にたよつて自分の重きを爲したのであると、謂ふ者もある。余が思ふには、決して左様では無い。朝廷こそ新田氏にたよるか、られたのであつて、新田氏が朝廷にたよるか、つたのでは無いのである。そも、新田氏の部下の大將の材藝武略あること、その部下の兵士がすくりに拔きの強いものであることは、足利氏のとて、遠く及ぶことでは無いが、それにも拘らず、新田氏は運が悪くして敗北して、仕舞には身も家も残りず亡びて仕舞ふに至つたのは、これは他の譯があるの無い。この頃は、天下の人々は、朝廷の御政治を嫌ひ且つそれに難儀して、かへつて武家の政治を慕はしく思つて居つたので、それ故に、尊氏が一己の私利を謀るのを都合好しとして、そして、義貞が公事の爲めに盡力して居るのを都合宜しからずと思つて居つたのであるが、致し方なくして義貞に付き従ひ、いや／＼ながら勉めて戦争に出掛けて行つたのであつて、その上に、義貞の軍には、武人としての訓練無き公卿出身の副將軍だの、五畿内地方から召し募られた兵士だの、雜つて居ることであり、又、朝廷から色々な御指圖などがあつて自由にさせられぬので、やゝもすれば自分の思ふ通りになることが出来なかつたのである。之れが大將たるものは、まことに六かしいでは無い。さきに、若し、義貞をして亦足利氏が爲した様な事を爲さしめたならば、天下の武人のともがら、まことに雲の如く霧の如く夥しく集まつて義貞に付き従はんとして、足利氏の力では、どうすることも出来なかつたのであらう。さうしたならば、天下の事は、皆思ふ儘になつたであらう。どうして金崎に籠城し足羽に戦死せしが如く困りみたふれるに至ることがあらうか。されば、朝廷に背くと背かざるとの、いづれが福で、いづれが不利で、いづれが不利であるかと云ふ事は、七八つ位の小供と雖も、之を知ることが出来ること、義貞が、どうして之を知らぬはずがあらうか。それにも拘らず、仕舞まで其節操を變じなかつたのは、これは、自分の一身が王室の御依頼を引き受けて、それを任務として居つて、たとひ利益があるとしても、背き去るに忍びなかつたからではあるまいか。若しさうでなくして、義貞が王室に背き去つたならば、源氏の系統が、新田氏に歸して仕舞ふことは、久しい以前の事であつたであらう。斯る譯であるから、この新田氏と足利氏との事は、成功と失敗との事跡のみを以て論ずることの出来ることは無いのである。

且夫將門之有統。非必如帝室也。況足利氏之所謂將軍者。始於其第三

世。如其父其祖。皆非受命於正統之朝也。受命於正統之朝。而爲將軍者。乃護良。成良。二親王。而非必有其實。至於中興總戎之寄。固屬義貞云。余之列敘兩家也。以此。然新田氏起義。由於護良親王。而足利氏謀逆。亦以此爲首。故附見焉。

【非必如帝室】……帝室は萬世一系なれども、將門は、彼亡べば此起り、固より定まらざるを云ふ。【第三世】……義滿。【其父】……義隆。【其祖】……尊氏。【正統之朝】……南朝。【非必有其實】……將軍の名あれども其實なかりしを云ふ。【總戎之寄】……軍事を總督する大將の任務。【兩家】……新田、足利兩氏を云ふ。【由於護良親王】……義貞は護良親王の命令を受けて義兵を起せり。【亦以此爲首】……足利氏の叛するは、護良親王を讒殺するを以て手はじめとする也。【附見】……親王の事をこゝに一處に附屬して書き載せ置く。

其目、將門に系統がある事は、必ずしも帝室の如くに一定したる者では無いのである。ましてや、足利氏の將軍といふのは、その第三代目の義滿の時から始まつたので、その父義隆、その祖父尊氏の如きは、いづれも、血筋の正しい朝廷（即ち南朝）から任命せられたものでは無い。その時に、血筋の正しい朝廷から任命せられて、將軍となつた者は、すなはち、護良親王、成良親王の御二方であつた。けれども、これは、名ばかりで、必ずしも其實があつたのでは無い。されば、建武の中興の軍事を總督する大將の任務に至つては、固より義貞に屬して居つたのである。余が新田、足利兩家の事を列記し敘述するは、此故である。然れども、新田氏が義兵を起すに至つたのは、護良親王に由つたのであり、そして足利氏が叛逆を企てたのも亦、護良親王の事を以て手始めとして居るのであるから、それ故に、護良親王の事を、こゝに附記してあらはして置いた。

新田氏。出於源義家。義家第三子曰義國。敘從五位下。任式部大輔。嘗入朝。途遇右大臣藤原實能。實能從者叱辟之。墮馬。義國隸士怒。焚實能宅。義國坐謫。上野生二子。義重。義康。義重食新田郡。義康食足利郡。治承中。平氏失政。源氏競起。義重集兵。據寺尾城。源賴朝起於鎌倉。招之不答。

及賴朝定關東。與義康子義兼等。竝往歸焉。賴朝欲娶義重女爲妾。又不肯。遂與有隙。及奏請諸源官爵。義重纔得襲父爵。任大炊助。有七子。其第二義包爲嗣。義包生義房。義房生政氏。政氏生基氏。基氏生朝氏。凡六世。皆襲邑新田。遂以爲氏。旗用白。旗號中黑。脇屋。里見。大館。堀口。鳥山。羽川。山名。桃井。一井。金谷。細谷。江田。大井田。徳川。世良田諸族。皆新田氏自出。分處上野。越後。而皆役屬於北條氏。

【此辟之】……聲をかけて人拂ひする。辟は避と通ず。【隸士】……音レイシ。家來。【坐】……まきぞへになつて。【足利郡】……下野に在り。【治承】……高倉帝の時の年號。【競起】……我がちにおこり立つ。【寺尾】……上野に在り。【父爵】……從五位下。【自出】……これから分れ出る。

新田氏は、源義家から出たものである。義家の第三男は、義國と曰ひ、從五位下に叙せられ、式部大輔に任ぜられた。あるとき、入朝する途中で、右大臣藤原實能に出つゝはずと、實能の御伴の者が、聲をかけて、よけさせたが、その拍子に、義國は馬から落ちた。義國の家來は腹を立て、實能の屋敷に火を付けて焼いた。義國は、そのまきぞへになつて、上野國に流された。其處で、義重と義康との二人の男子を生んだ。義重は新田郡を領地とし、義康は足利郡を領地とした。治承年間、平氏は政治上に失策があつたので、諸方の源氏が、われがちにと争うて兵を起した。そこで、義重は、兵士を集めて、寺尾城に立て籠つた。源賴朝が、鎌倉に起つて、之を呼び寄せたけれども、何等の挨拶をもしなかつた。賴朝が關東を平定するに及んで、義重は、義康の子義兼等と、一處に出掛けて行つて之に附いた。賴朝は、義重の娘を娶りて妾となさうと思つたけれども、義重は、賴朝と仲が悪かつたので、わづかに、父義國の位（即ち從五位下）を繼いで、大炊助に任ぜられることが出来た。義重には、七人の男子があつたが、第二子義包を後嗣とした。義包は義房を生み、義房は政氏を生み、政氏は基氏を生み、基氏は朝氏を生み、すべて六代の間、いづれも皆、新田郡の領地を相續して居つた。とう／＼郡名を以て氏となし、新田と云ふことになつた。旗は白色を用ひ、旗じるしは、中黒であつた。脇屋、里見、大館、堀口、鳥山、羽川、山名、桃井、一井、金谷、細谷、江田、大井田、徳川、世良田などの諸族は、皆新田氏から分れて出たもので、分れて上野、越後に居つて、そして皆、北條氏の配下となつて附き従つて居つた。

北條高時之遷後醍醐天皇於隱岐也。楠氏起兵于金剛山。高時遣關東

將士攻之。朝氏有子。曰義貞。亦在遣中焉。已而城固不拔。東兵多逃亡。義貞召其家宰舟田義昌。語之曰。源平相制。竝護王家。自古之爲然。吾雖無似。忝列源氏胄裔。特以時勢爲北條氏所驅使。遂敵官軍。豈其本心也。吾視高時近狀。亡滅非遠。吾欲歸我國。舉義兵。上以除宸憂。下以興家聲。而非有所受命。不可。安得大塔宮令旨。則吾事成矣。大塔宮者。帝第三子護良也。

【金剛山】……河内。【遣中】……派遣せられたる仲間の中。【家宰】……家の執事。家臣の長にして萬事を取りあつかふもの、即ち家令を云ふ。【相制】……相互に制し合ふ。【無似】……不肖。ふつ、かもの。【忝】……かたじけなくも。【胄裔】……音チウエイ。胄は長なり、裔は子孫なり。嫡流、本家。【近狀】……近來の有様。【宸憂】……天子の御心配。宸は天子の居。【家聲】……家名。家の評判。【令旨】……東宮、親王の命を令旨と云ふ。

北條高時が、後醍醐天皇を隱岐に遷した時に、楠正成が、兵を金剛山に起したので、高時は關東の將士を派遣して之を攻めさせた。朝氏に義貞と曰ふ男子があつたが、義貞も亦派遣せられたる仲間の中にあつた。とかくする中に、金剛山の城は要害堅固にして攻め落されなかつたので、關東の兵士には逃げ出す者が多かつたので、義貞は、其家の執事なる舟田入道義昌を召し寄せて、之に語つて曰ふには、源氏と平氏とが互に制し合つて、一所に王室を護衛することは、昔から左様であつた。われは、ふつ、かではあるけれども、かたじけなくも源氏の嫡流に列して居るのであるが、たゞ時勢の爲めに止むを得ずして、北條氏に追ひ使はれて、とう／＼官軍に敵對するに至つて居るので、これは、どうして、わが本來の志望であらうか。われ、高時の近頃の様子をつく／＼見るに、滅亡して仕舞ふことは、遠き未來の事ではあるまいと思はれる。そこで、われは、我が本國に歸つて、正義の兵を擧げて、上は天子様の御心配を除き、下は我が家の名譽を揚げやうと思つて居る。けれども、上の命令を受けて居なくては、無名の軍であつて、宜しくない。どうかして、大塔宮の令旨を受くことが出来るならば、吾が事は成就するに相違ないと曰つた。大塔宮といふは、後醍醐帝の第三皇子護良親王の御事である。

護良初疾。北條氏專權。與帝密謀討滅之。敍二品。任兵部卿。充山門座主。號尊雲。居大塔宮。世因稱大塔宮。及謀泄。東兵來執帝。護良先謀知之。

教^メ帝^チ逃^ケ笠^カ置^ギ山^ニ而^シ自^ラ與^ニ弟^ニ宗^ナ良^ヲ將^シ兵^ヲ邀^ヒ擊^チ破^ル賊^ヲ已^ニ而^シ兵^ヲ潰^ス與^ニ宗^ナ良^ヲ分^テ路^ヲ走^リ匿^ル南^ノ都^ノ般^ノ若^ノ寺^ニ笠^カ置^ギ既^ニ陷^ル宗^ナ良^ハ就^テ擒^ム賊^ヲ遣^ヒ兵^ヲ圍^ム寺^ヲ護^ル良^ハ潛^リ經^ル函^ノ中^ニ而^シ免^ル遂^ニ與^ニ從^ニ士^ニ九^人爲^シ道^ノ士^ト裝^フ負^テ笈^ヲ南^ニ走^リ至^リ十^津川^ニ依^リ土^ノ豪^ノ戶^ノ野^ノ兵^ノ衛^ヲ蓄^ヘ髮^ス娶^フ兵^ノ衛^ノ族^ノ女^ヲ賊^ノ聞^キ之^ヲ購^フ其^ノ頭^ヲ千^金護^ル良^ハ逃^レ入^リ吉^ノ野^ノ山^ニ明^ニ年^ニ五^月起^シ兵^ヲ吉^ノ野^ニ據^リ寺^ヲ爲^シ城^ト又^ニ遣^ヒ從^ニ士^ニ赤^松則^祐諭^シ其^ノ父^ヲ則^祐村^ヲ起^シ兵^ヲ播^磨已^ニ而^シ賊^將二^階堂^貞藤^等大^兵來^攻護^ル良^ハ親^戰不^支城^ヲ遂^ニ陷^ル從^ニ士^ニ村^上義^光僞^稱護^ル良^ハ死^セ護^ル良^ハ竟^ニ匿^ル高^野山^ノ谷^ノ間^ニ指^シ使^シ山^ノ寇^ヲ以^テ助^ケ楠^氏又^ニ奪^フ賊^ノ糧^ヲ餉^ヲ義^貞頗^ル知^ル其^ノ蹤^跡而^シ未^ダ詳^シ所^レ在^也故^ニ謀^ル於^テ義^昌義^昌乃^チ使^シ三^十人^ヲ爲^シ山^ノ寇^ノ狀^ヲ而^シ自^ラ爲^シ亡^ノ卒^ト關^ヲ于^ニ山^ノ下^ニ山^上寇^見之^ヲ下^ニ援^ク義^昌生^シ得^ル之^ヲ縱^シ其^ノ一^人通^シ意^ヲ於^テ護^ル良^ハ護^ル良^ハ素^ニ知^リ新^田氏^ノ名^ヲ族^ヲ大^喜卽^チ爲^シ令^ヲ與^フ之^ヲ權^ヲ用^シ詔^ヲ辭^シ義^貞感^喜出^テ意^外翌^日稱^シ病^ヲ東^歸與^ニ子^ニ義^顯弟^ニ脇^屋義^助等^ヲ謀^ル討^シ高^時

賞何淺。早運。關東征討策。可致天下靜謐之功。者。繪旨如此。仍執達如件。

關東 護良親王は、はじめ、北條氏が政權をほしいままにするを御惡みなされ、後醍醐帝と、もに、之を討ちほろぼすを、人知れず企てられ、二品に敘し、兵部卿に任ぜられ、やがて、叡山の座主に當てられ、尊雲と號して、叡山の塔に居られたので、世間では、それで、大塔宮と稱して居つた。帝と護良親王との北條氏討滅の御企が泄れるに及んで、關東の兵士が來つて、帝を捕へんとした。護良親王は、先づ忍びの者を入れて置いて之を知られたので、帝をして御所を出で笠置山に逃げ込ませしめ、そして、御自分は、弟宗長親王と、もに、兵士を引き連れて、迎へ撃つて賊を破つたが、とかくする中に、兵士がぐれ散らばつたので、宗長親王と、相異なる路から逃げて、奈良の般若寺に隠れなされた。その中に、笠置山は攻め落されて仕舞ひ、宗長親王は賊に生捕られ、賊は兵士を派遣して般若寺を圍んだ。護良親王は、御經を入れる箱の中に隠れて、幸にして免れ、とうく、從者九人と一處に、山伏のいでたちをしておひを負うて、南の方へ向つて逃げ、十津川に至つて、土地の豪族なる戸野兵衛と云ふ者にたより、御髪を延ばして、兵衛の親類の女を娶られた。賊は此事を聞いて、護良親王の御首を持つて來た者には金子を與ふべしと云つて、之を求めた。そこで、護良親王は、逃げて吉野山に入り込まれた。明年五月に、親王は、兵を吉野に起され、寺に立て籠つて其處を城と爲し、又、從者の赤松則祐を派遣して、其父則村を諭して、兵を播磨に起さしめられた。とかくする中に、賊の大將二階堂貞藤等が、大兵を引き連れて攻め寄せた。護良親王は、御自身に戦はれたが、持ちこたへることが出来ずして、城は、とうく、攻め落された。從士の村上義光が、いつはつて護良親王であると稱して、死んだ。そこで、護良親王は、とうく、高野山の谷の間に隠れて、山賊どもを指圖して使つて、以て陰ながら金剛山の楠氏を助け、又、賊の兵糧を奪ひ取りせられた。義貞は、餘程、親王の様子を知つて居つたけれども、居らせられる處をば、未だ十分には知つて居なかつた。それ故に、義昌に相談した。義昌は、そこで、三十人の者をして山賊の出で立をなさしめ、そして自分は逃亡した士卒の様なふりをして、山の下で打ち合つて居つた。すると、山の上の山賊どもは、之を見て、山から下つて來て、三十人の山賊らしい者を援けた。そこで、義昌は、山の上から下つた者を生捕つて、其一人を解放して、義貞の意志を護良親王に通じさせた。護良親王は、平生から、新田氏が有名な家柄であることを御承知であつたので、大に喜んで、すなはち、令旨をつくりて之に與へ、かりに詔勅の文を用ひられた。義貞は、それを見て、感激して大に喜び、まことに意外の幸であると思つて、明る日、病氣であると申立て、關東に歸つて、子義顯、弟脇屋義助等と、ともに高時を征伐することを相談した。

高時未^ダ之^ヲ覺^ス也^ト以^テ金^ノ剛^ノ山^ニ久^ク不^レ拔^ケ官^軍竝^チ起^リ益^シ調^シ發^シ兵^ヲ食^ヲ新^田素^多豪^戶一^ニ因^テ課^シ六^十萬^ノ錢^ヲ限^リ以^テ五^日縱^シ吏^ヲ卒^ヲ催^シ迫^シ義^貞曰^ク奴^レ輩^ノ亡^ク狀^ヲ敢^テ踏^シ藉^シ我^ノ地^ヲ遣^ヒ兵^ヲ捕^ム其^ノ吏^ヲ梟^シ首^ヲ里^ノ門^ニ高^時聞^キ而^シ大^ニ怒^リ下^ニ令^ヲ擊^ツ新^田氏^ヲ新^田氏^ハ會^シ議^シ或^ク曰^ク拒^シ利^根川^ニ或^ク曰^ク赴^キ越^後依^リ其^ノ宗^ノ族^ヲ義^助進^テ而^シ言^フ曰^ク一^ニ者^ハ皆^シ非^シ計^也坐^シ待^テ強^ク敵^ヲ情^ヲ見^ル形^ヲ屈^セ則^チ我^ノ兵^ヲ内^潰一^ニ敗^テ塗^シ地^ヲ使^シ人^ヲ曰^ク新^田氏^ノ狀^ヲ使^シ者^ヲ而^シ誅^ス死^ス一^也

寧死於王事。今雖匹馬單兵。出徇於國中。衆附則進攻鎌倉。不則戰死。孰與坐取誅殺乎。衆以爲然。乃起兵。大館宗氏。堀口貞滿。岩松經家。里見義氏。江田行義等。百五十騎。推義貞爲將。豎旗于邑生品祠前。以舉義焉。實元弘三年五月八日也。

【調發兵食】…兵糧を割り當て、取り立てる。【豪戸】…財産家。【課】…割りつける。【催促する】…奴輩…やつぱら。【亡】…亡は無と同じ。行ふ所善状なきを云ふ。無作法、無禮。【蹈藉】…音タウセキ。ふみあらず。【利根川】…武藏、上野の界。【赴越後依其宗族】…越後の宗族は里見、鳥山、田中、大井田、羽川氏等なり。【情見形風】…實際の様子に知られ、勢が衰へ、こむ。【一敗塗地】…一度の戦で直に敗れて血を流す。【戕】…音シャウ。殺す。【匹馬單兵】…一匹の馬、一人の兵。人馬の数の極めて少きを云ふ。

高時は未だ義貞に此事あるを感付かずして、金剛山が久しく攻め落されず、官軍が方々から並び起るによつて、ますます兵糧を割り當て、徴發した。義貞の領地の新田には、素より財産家が多いので、そこで、六十萬錢を割り當て、五日間を日限として是非とも差出せよと命令し、役人士卒を遣はして、きびしく催促させた。義貞が曰ふには、奴等は無禮至極にも、ずう／＼と我が領地を踏み荒らすことであるといひ、兵士を派遣して、其役人を捕へ、首を斬つて村の入口に獄門にかけた。高時は之を聞いて大に怒つて、命令を下して新田氏を撃つことにした。新田氏は、一族集會して評議した。すると、或は、利根川に於て拒がよといふものもあり、或は、越後に下掛けて一族の撃つたよるが宜しいといふものもあつた。義貞が進んで曰ふには、兩方とも、善いばかりでは無い。じつとして、強大なる敵の攻め寄せるのを待つて居つて、我が軍の實際の様子がすつかり顯はれて、勢が衰へかゝるときは、我が軍勢は内部から崩れ潰えて、一戦して直に敗れて血を流すことにも成つて、世間の人々をして、新田氏は北條氏の使者を殺したので誅殺せられたといはせることになるだらう。死ぬることは同じ事であるから、一層の事、天子様の事の爲めに死ぬる方が宜しい。今は、極めて少數の人馬ではあるけれども、出掛けて行つて國中に觸れまはつて、若し大勢の人が附き従つたならば、進んで鎌倉を攻めることにしやうし、若し附き従ふ者が無かつたならば、討死することにしやう。これは、居ながら誅殺せられるのと、どちらが善いかといつた。大勢の者は、いかに尤至極であるとして、そこで兵を起した。大館宗氏、堀口貞滿、岩松經家、里見義氏、江田行義等、百五十騎が、義貞を推して大將として、旗を領地の生品神社の前に立て、大義を擧げた。實に元弘三年五月八日の事であつた。

義貞拜讀詔書畢。進陣于笠懸野。比日暮。利根河側塵起。有兵至。可二千騎。衆謂敵來矣。漸近則越後宗族來援也。義貞驚喜曰。諸君來何速。何以

知吾舉義。大井田經隆伏鞍而對曰。今日羽黑俊賢來徇國中。是以馳至。在遠境者。明日當至。俊賢。經隆弟。善走者也。明日。越後全兵。及甲斐。信濃諸源。以五千騎至。乃合兵進入武藏。近國將士。不期而會者。一日二萬人。軍于入間河北。高時聞義貞起事。不以爲意也。發兵十一萬。以族貞國。貞將將之。前後來擊。貞國抵河南。望見新田氏軍甚盛。乃不敢進。而義貞已亂流而至。大戰于武藏野。兩軍皆東國驍兵。素習騎戰。地亦平曠。射戰罷。卽相馳突。凡三十餘合。乃交退。且日。又戰于久米河。每戰。鎌倉兵死傷輒倍。高時使弟泰家以生兵數萬來援。夜抵其軍。義貞不察。侵晨又戰。不利而退。

【伏鞍】…馬上にて禮をなす様なり。【今日】…今朝。【徇】…となふ。宣合なり。觸れまはる。【不期】…言ひ合はせずして。【入間河】…武藏に在り。【平曠】…曠は空なり。平かにして廣き野原。【久米河】…武藏に在り。【生兵】…新手の兵士。【侵晨】…あかつきかけて。夜の未だ明けないうちに。

義貞は、詔書即ち例の護良親王の令旨を拜讀してから、進んで笠懸野に陣取つた。日暮れ方になつて、利根河の傍に塵が立ち上つて、兵士が二千騎ばかり來た。皆々、敵が來たのであると思つて居つたが、だん／＼に近づいて見ると、敵にあらずして、越後の一族の者共が來つて援けるのであつた。義貞は、驚き且つ喜んで曰ふには、諸君は、どうして斯く早く來られたのか。どうして、吾が義兵を擧げたことを知られたのかと問ふと、大井田經隆が、鞍の上によつて禮をなして、答へて曰ふには、今朝、羽黑俊賢が來て、國中に觸れまはりましたので、それで駆け付けて參つたので御座る。遠き處に居る者も、明日は到着すべき筈で御座ると曰つた。俊賢は經隆の弟で、足の速者な者である。明日、越後の兵士殘らず、及び甲斐、信濃の諸の源氏が、五千騎を引き連れて到着した。そこで、兵士を一處にして、進んで武藏の國に入つた。近國の將士の、言ひ合はせて置かずして來り會せし者が、一日に二萬人にも及んだので、進んで入間河の北に陣取つた。一方に於ては、高時は、義貞が事を起したと聞いたけれども、格別氣にかけて居らずして、十一萬人の兵士を繰り出して、一族なる貞國、貞將を以て、之

が大將として、前後して來り撃たせることにした。貞國は、入開河の南に至つて、新田氏の軍勢が甚だ盛なるを望み見て、そこで、むざと進まなかつた。然るに、義貞は、すでに河を横切り渡つて押し寄せて、大に武藏野で戦つた。敵軍も味方の軍も、皆、關東の強き兵士で、平生から馬上にての戦に慣れて居り、其土地も亦平かに廣い野原であつたので、弓を射合ふ戦が濟むと、即座に相互に馬にて駆け寄せ進んで、凡そ三十餘度も戦つて、そこで、兩軍とも相引きに退いた。あくる日に、又、久米河に於て戦つた。戦ふたびごとに、鎌倉の兵士(即ち北條方の兵士)の死傷者が、いつで、我が軍の死傷者に倍して居つた。高時は、弟泰家をして新田の兵士數萬人を引き連れて來つて援けさせたが、その兵士は、夜、其軍に到着した。義貞は、此事を知らずして、夜の未だ明けぬうちに、又戦つたけれども、勝利を得ずして退却した。

泰家益輕新田氏。曰。敵中必有斬致義貞者。皆釋甲飲酒。相模人三浦義勝。心素嚮義貞。率兵六千來屬之。義貞禮而詢計焉。義勝曰。方今天下分崩。勝敗互變。而天命所歸。終有在焉。公幸并僕兵。可以一戰。義貞曰。以疲兵當新勝之衆。若何。曰。戰勝而將驕。卒懈者敗。泰家之謂也。敗兆已備。不足畏耳。詰朝之事。僕請爲公先焉。日日。卷旗徐進。敵相指語曰。嚮聞三浦氏應徵而至。是也。俄而義貞等翼而進。三面掩擊。泰家軍大敗。貞將一軍。與小山千葉氏戰于鶴水。亦大敗。皆走入鎌倉。八州豪傑響應。爭歸義貞。

【詢】……問ふ。【分崩】……分れつづける。【終有在焉】……仕舞には勝利を得るに相違なしとの意。【戰勝而將驕卒懈者敗】……もと史記の項羽本記に在る語。項梁、東阿より起り、西定陶に至るに比んで、再び秦軍を敗る。項羽等、又李由を斬る。益々秦軍を輕んじ驕色あり。宋義乃ち項梁を諫めて曰く、戰勝つて將驕り卒懈る者は敗る。今、卒少しく情り、秦兵は日に益す。吾、君の爲めに之を畏ると。項梁聽かず。秦の將軍邯と戦ひ敗れ死せり。【敗兆已備】……敗北する前表がはやく十分完備して居る。【詰朝】……明朝。【翼而進】……鳥の羽翼の如く左右より進む也。【三面掩擊】……三方から取り込めて、おそひ撃つ。【小山】……秀朝。【千葉】……貞胤。【鶴水】……武藏に在り。大日本史には鶴見に作る。【響應】……響の聲に應ずるが如く、早速味方に附く。

泰家は、ますます新田氏を輕んじ侮つて曰ふには、敵の中に、屹度、義貞を斬つて其首を持參する者があるだらうと曰つて、皆鎧を脱ぎ棄て、酒を飲んで居つた。相模の人三浦義勝は、その心、はじめから、義貞に向つて居つたが、兵士六千人を引き連れて來つて義貞に附いた。義貞は、禮して計を問うた。義勝が曰ふには、只今の世は、天下は、めちやくに、分れ崩れて、勝敗がはるく變化して、勝つたり負けたり致します。けれども天命の歸するところは、つまりは官軍が勝利となるに相違ありません。貴殿、どうか、私の兵士を一處にして、一戦をやつて御覽なさいと曰つた。義貞が曰ふには、我が疲れたる兵士を以て、新に勝利を得て元氣の善い多數の兵士に敵對するのは、如何なるもので御座らうかと曰つた。義勝が曰ふには、戦争に勝つて大將が驕り士卒がなまけて居る者は敗軍すると云つてある語は、丁度泰家の事でも御座ります。かれは、敗北すべき前表が、すでに、悉く具足して居りますから、畏れるほどの事は御座りませぬ。明朝の戦に於ては、私は、どうか、貴殿の先陣となりたく御座りますと曰つた。そこで、明くる日、義勝は、旗を卷いて、そろそろと進んだ。敵軍、相互に指し示して語り合つて曰ふには、さきに、三浦氏が徵集に應じて來ると云ふ事を聞いたが、これが其れであると曰つて、平氣で居つた。忽ちにして、義貞等が、義勝の左右に、翼の如くにして進んで、三方から包み込んで、襲撃した。泰家の軍は大に敗れた。貞將の引き連れて居る一軍は、小山、千葉氏と、鶴水に戦つて、これも亦大に敗れた。いづれも、逃げ走つて鎌倉に入り込んだ。そこで、關東八州の豪傑どもは、響の聲に従ふが如く、我先きにと争うて、義貞に附いて味方となつた。

義貞進至關戸。兵凡十二萬騎。分爲三軍。三道攻鎌倉。大館宗氏。江田行義。自極樂寺堀口貞滿。大島守之。自兒囊坂。義貞。義助。自率諸將。自假糶坂。縱火五十餘所。而進。鎌倉震駭。而北條氏見兵猶十餘萬。分拒三道。義貞。貞滿。進入山内。而宗氏戰死。其兵皆卻。義貞以選兵二萬。乘夜赴之。則敵大兵據海岸。樹柵。兵艦列其南。以備傍射。義貞下馬。免胄向海。拜曰。天子爲逆臣所遷。越在西海。臣義貞不忍坐視。提兵討賊。伏願海神眷臣忠義。退潮以開道。因釋所佩金裝刀。投之海中。比曉潮大退。兵艦皆漂去。義貞大喜。麾衆而進。諸軍從之。直入府中。乘風縱火。烟燄漲天。義貞縱兵鏖戰。高時舉族遂伏誅。自舉兵至此。蓋十五日矣。義貞因居鎌倉。誅餘黨。撫新附。威振關東。

【關戸】……武藏に在り。極樂寺……相模に在り。假糠坂……相模に在り。【見兵】……音ケンヘイ。現在あり合はせの兵士。【山内】……相模。備傍射……横から矢を射るべき手筈をなす。【越在西海】……越は遠き也。踰ゆる也。後醍醐帝、高時に遷されて、遠く隱岐に在ります。【提兵】……兵を率ゐる。【海神】……わたつみの神。【管】……かへりみる。【潮】……海潮なり。月に隨つて消長す。早を潮と云ひ、晚を汐と云ふ。うしほ。【金裝刀】……装飾なり。黄金作りの大刀。【漂】……たよふ。【府中】……鎌倉。【烟燄漲天】……漲は大水の貌。以てけむりと云ふ。その盛なるに喩ふ。【饜戰】……音アウセン。敵を皆殺しにして戦ふ。【新附】……近頃附き従へる味方。【關】義貞が、進んで關戸まで行くと、兵が凡そ十二萬騎あつた。それを分つて三軍となし、三道から鎌倉を攻めることにした。即ち大館宗氏、江田行義は、極樂寺より進み、堀口貞満、大島守之は、兒養坂から進み、義貞、義助は、自身に諸將を引き連れて、假糠坂から進むことにし、五十餘箇所に火を附けて進んだ。鎌倉は震ひおそれ驚いた。然れども、北條氏の現在あり合はせの兵士は、まだ十餘萬あつたので、それを分つて三道を拒いだ。義貞、貞満は、進んで山内に入り込んだ。しかるに、宗氏は戦死して、其兵士は皆退却した。そこで、義貞は、より拔きの兵士二萬騎を引き連れて、夜の間に、其處に出掛けて行つて見ると、敵北條氏の大軍は、海岸に陣取つて、逆茂木を立てつらね、兵船を其南にならべつらねて、そして、横矢を射るべき用意をしてあつて、我が軍の進むことは大かしの様子であつた。義貞は、そこで、馬から下りて、兜を脱いで海に向つて禮拜して曰ふには、今や天子様は、逆亂の臣の爲めに遷されて、遠く西海の孤島に居らせられるので、臣義貞は、それを居ながら視て居るに忍びずして、兵士を引き連れて賊を征伐いたすので御座ります。願はくは、海の神様よ、私が忠義をかへりみて、この潮を引き退かせて、私共の通行することの出来る道を開いて下されよと曰つて、そこで、腰に帯びて居つたところの黄金作りの大刀を解いて、之を海の中に投げ入れた。夜の明けける頃に、潮が大層引いて、横矢を射んと構へたる兵船が皆たようて、遙の沖へ去つて仕舞つた。義貞は大に喜んで、部下の人々を指揮して進んだ。諸軍も之に従つて進み、直に鎌倉に入り込んで、風の吹くに附け込んで火を附けたので、煙や燄が空に一ぱいになつた。義貞は、兵士を繰り出し進ませて、敵を皆殺しにして戦つた。高時の一族残らず、とうとう誅に伏して仕舞つた。義貞が兵を起してから、これまで、大體、十五日であつた。義貞は、そこで、鎌倉に居り、北條氏の残れる一味の者を誅し、近頃新に附き従へる味方を撫でなづけ、其威勢は、關東に振つて居つた。

先是、天子在伯耆。聞京師平。將還關。或諫曰。雖京師平。金剛山攻兵。猶滿畿内。且諺曰。八州敵海内。鎌倉敵八州。承久之役。誅伊賀光季。甚易。而與東兵鬪。乃取敗衄。今天下十得一二耳。宜暫居此。以視東國之變。諸公卿皆然之。帝不聽而發。至兵庫。得義貞捷書。上下大喜。詔以義貞爲左馬助。義助爲兵庫助。賜使者爵。建武元年。舉族入朝。義貞敘從四位上。

任左兵衛督兼播磨守領上野守護。義助任兵部少輔。充武者所頭人。領駿河守護。義顯領越後守護。竝宿衛京師。

【義】……ことわざ。【承久之役】……後鳥羽上皇、城南寺の流瀆馬に託して兵を徴し、伊賀光季を召せども至らざりければ、三浦胤義と藤原秀康とをして之を討たしむ。光季、手光綱と、奮闘して死せり。十得一二……十の中で一つか二つかを得たけなり。【居此】……此處即ち伯耆に居る。【兵庫】……攝津に在り。左馬助……權頭の次の官。【兵庫助】……頭の次官。【領】……その事を統理する。ある人が御諫め申上げて曰ふには、京都は平定したと云ふ事を御聞きになつて、まさに御所に御還りになうとした。の上、世俗のことわざにも、關東八州は日本國中に敵對するものが出来、鎌倉は關東八州に敵對することが出来ると申して居ります。その久の戦役の時にも、伊賀光季を誅することは、大層容易かつたが、關東の兵士と打ち合つて、そこで敗北いたしました。今日は、天下の中に一二を得たけで御座りますから、暫くの間、此地に御留まりになつて、そして關東地方の事變の起るのを視て居られるが宜しう御座りますと曰つた。諸の公卿たちは、皆、尤至極と思はれたが、帝は御聞き入れにならずして、御出發なされ、兵庫に御著きになつて、義貞が關東に於て勝利を得たとの報告が著いたので、上下大に喜ばれ、詔して義貞を以て左馬助となし、義助を兵庫助となし、その使者に位階を賜はつた。建武元年に、義貞は、一族残らず、入朝した。義貞を從四位上に敘し、左兵衛督に任じ、播磨守を兼ね、上野の守護の事を任じしめ、義助を兵部少輔に任じ、武者所の頭人に當らしめ、駿河の守護の事を任じしめ、義顯をして越後の守護の事を任じしめ、いづれも留まつて京都を護衛せしめられた。

足利尊氏者。義兼遠孫也。地望素著。佐攻京師。首蒙寵爵。官祿皆遠出新田氏之上。遂陰蓄異圖。而忌義貞及皇子護良。初帝之歸關。護良居志貴山。近畿兵爭歸之。將率以入朝。而不果。帝使參議藤原清忠就言曰。天下既定。汝將何爲。蓋削髮復舊。護良對曰。高時雖伏誅。餘黨未殲。宜嚴武備。以絕覬覦。且陛下之德。微臣之謀。以致有今日。而足利尊氏攘爲己功。彼觀其志。有不可測者。不及其力微而除之。復生一高時也。臣聞佛有

二道。曰攝受。曰折伏。願陛下任臣以戎事。臣將爲陛下折伏焉。帝不懌。勉從之。拜爲征夷大將軍。而不許誅尊氏。護良具駟從入朝。赤松則村爲先驅焉。尊氏深嫉之。乃結於帝寵姬藤原氏。陰謀排陷焉。而護良不察。輒欲除尊氏。多蓄死士。密徵兵。尊氏得其檄。上變告大將軍反。欲廢帝立其子興良爲帝。藤原氏自傍贊之。帝怒。十月。伏甲召護良。執之囚于宮中。

【地望】……門地聲望、家柄と人望。【佐】……たすけて。【蒙寵】……從四位下左兵衛督に任ぜられ昇殿を聽さる。【異圖】……圖は謀なり。謀叛の企。【志貴山】……大和に在り。【絶親】……非分の事を望むの念を絶つ、謀叛の念を絶たしむる也。【擲】……ぬすむ、横取る。【有不可測者】……何を仕出かすか分らぬ。【攝受】……音セフシユ。柔和慈悲の相を以て衆生を愛護する也。【折伏】……音シヤクブク。猛勢忿怒の相を現じて、剛惡の衆生を折伏する也。【擲】……よろこぶ。【駟從】……音スウシウ。僕御儀從、大勢のともまはり。【寵姬藤原氏】……右近衛中將公廉の女、名は廉子、三位局と稱す。【排陷】……音ハイカン。おしおしのけおとしいれる。【自傍贊之】……御側に居りてそやし立てる。【護良】 足利尊氏といふ者は、義兼の遠い子孫であるが、家柄と人望とが、もとより世にあらはれ、源忠顯、赤松則村などを助けて京都の六波羅を攻めて、第一番に高い位階を授けられ、官等俸祿、いづれも、遂に新田氏よりもすくられて居つたが、とうとう、内々、其心に謀叛の企をたくはへ、そして、義貞及び皇子護良親王を忌み悪んで居つた。はじめ、後醍醐帝が御所に御歸りになつたときに、護良親王は大和の志貴山に居られて、畿内近傍の兵士が、先を争うて之に附いたので、まさに之を引き連れて入朝しやうと思つて居られたけれども、その事を果さなかつた。帝は、そこで、參議藤原清忠をして、其處へ行つて言はしめられるには、天下は最早平定したのに、御前は、そんなに兵士を集めて、何をしやうとして居るのか。なぜ、髪を剃つてもとの通りに坊主にならなかつたか。と仰せられた。護良親王が答へて曰はれるには、高時だけは誅に伏しましたけれども、その殘れる一味徒黨の者は、未だ悉く滅びて仕舞つたといふでは御座りませぬから、武備を嚴重にして其等の者の謀叛の企を絶つて仕舞ふやうにするが宜しう御座ります。其上に、陛下の御徳と、私の謀とで、今日あるを致して、京都に御歸りになるやうになつたので御座りますのに、然るに、足利尊氏は、之を横取りして、自分の手柄と致して居ります。彼れ尊氏は、其志を觀するに、何を仕出かすか測り知ることの出来ないところが御座りますから、今日其力がまだ微弱であるときに之を除き去つて仕舞はぬときは、また、一人の高時を生ずることになりましやう。私聞きますには、佛の道には二つあつて、柔和忍辱の相を以て衆生を慈愛するを攝受といひ、大勢忿怒の相を現じて強惡の衆生を制伏するを折伏といふさうで御座ります。願はくは、陛下、私に委任するに軍事を以てせられよ。私は、陛下

下の爲めに強惡の者共を折伏いたしましやうと曰はれた。帝は、御氣には入らなかつたが、いや／＼ながらその言に従ひ、征夷大將軍に任命せられた。けれども、尊氏を誅することをば許されなかつた。そこで、護良親王は、伴人の行列を整へて入朝せられ、赤松則村が、先拂であつた。尊氏は、深く護良親王を憎んで、そこで、帝の御寵愛の女官藤原氏と結託して、人知れず、護良親王を押しつけて罪に陥れやうとたくんだ。然るに、護良親王は、此事を察せられず、何でもかでも尊氏を除き去つて仕舞はうと思つて、多く命知らずの武士を養つて置き、内々で兵士を集めた。尊氏は、その檄文を手に入れて、變事を訴へ出で、大將軍護良親王は御謀叛を企て、帝を廢して自分の御子興良親王を立てやうと致して居られると申上げた。藤原氏は御側に居つて、之をそやし立てた。そこで、帝は御腹立ちに成つて、十月に、兵士を隠して置いて、護良親王を御召しに成つて、之を召し捕り、宮中に拘置して置かれた。

護良憤怨。因所識宮人。上書曰。臣以罪繫。敢訴冤枉。唯陛下憫察之。臣夙憤武臣專恣。釋法服。被戎衣。寧受世譏。而爲君父忘軀。在廷臣子。莫敢效力。而臣獨張空拳。以抗強敵。賊之耳目。集於臣身。購臣以萬戶。臣晝伏夜行。匿山谷。踐霜雪。殆死而復生者數。焦思運籌。遂得底誅夷之績。而不圖獲罪於此。仰將訴天。日月弗照。不孝之子。俯將哭地。山川弗載。無禮之臣。父子義絕。乾坤共棄。臣不敢復有望於世也。儻宥死刑。削籍歸佛。臣終身母悔。抑申生死而晉國亂。扶蘇刑而秦世傾。聖明盍延古以鑒今焉。涕隕心慙。不終所欲言。書入。莫敢奏達者。諸從護良終始者。皆被誅。赤松則村亦褫其守護職。十一月。勅附護良於足利直義。徙之鎌倉。穿窖于二階堂谷。幽之。縱一宮人侍焉。

【所識宮人】……しるべの宮女。罪繫……繫は音ルキ。囚繫なり。罪ありて囚はれたる身。【冤枉】……音エンリウ。無實の罪。【法服】……

佛者の衣服。袈裟、ころも。【戎衣】……戎は兵なり。軍服、甲冑。【在廷臣子】……朝廷に居る群臣。【效力】……力をいたす。【空拳】……拳は屈手なり。漢書の李陵傳に、士張空拳とあり。空手、素手。【萬戸】……萬戸の封の略語。【焦思】……思をこがす、思をくるしむ。【運籌】……運は行なり、籌は策なり。はかりごとをめぐらす。【底】……致す。【誅夷之績】……北條氏を誅滅するの功績。【乾坤共喪】……乾は天、坤は地。天地に棄てられて身を置くの處なし。【儲】……俗に儲に作る。若し、千に一つ。【削籍】……皇族たる籍をけづる。【申生死而晉國亂扶蘇刑而秦世傾】……晋の献公、寵妾驪姫の讒言を納れて太子申生を殺し、驪姫の子奚齊を立て、晋國大に亂る。扶蘇は、秦の始皇帝の太子なり。始皇三十七年、出遊して沙丘の平臺に崩す。丞相李斯、宦者趙高、秘して喪を發せず、詔を矯めて、扶蘇に死を賜ひ、少子胡亥を立つ、之を二世皇帝となす。而して諸國兵起りて、秦遂に滅びぬ。【聖明】……陛下と言ふが如し。【延古以變今】……むかしの先例を引ききて以て今日の事の手本とする。【涕隕】……なみだおつ。【心惜】……心くらむ。心がくらんで物のあやも分らぬ。【奏達】……取り次いで天子の御手本に差出す。【從護良終始者】……護良親王に常に隨從せし者。【穢】……うばはる、取り上げらる。【附】……附託す、引き渡す。【審】……あなぐら。【幽】……幽閉する、押し込める。【宮人】……南の方と稱す。

護良親王は、殘念でくたまらず、憤り怨んで、知り合ひの宮女にたよつて、上書せられた文句には、私は、罪があつて囚はれて居る身でありながら、敢て無實の罪であることを訴へ申しますれば、どうか陛下は、之をあはれんで御察し下さい。私は、早くから、武家の者が我が儘勝手なるを憤りました、袈裟をぬぎすて、甲冑を着て、むしろ世間の讒を受けても、君たり父たる陛下の爲めにはこの身を忘れて大に盡力しやうと思つて居りました。その時に、朝廷に在る群臣どもは、敢て力を致さうとする者は有りませんでした。然るに、私は、ひとり、素手をもふるつて、強い敵に當りましたので、賊の聞く耳見る目は、皆、私の一身に集まつて、私を得たものには萬戸の封を與へやうと觸れ出して、是非とも私を捕へやうと致しました。そこで、私は晝は隠れて夜あるき、山谷に隠れ、霜や雪をふみ、ほとんど死にかゝつて復た生きかへつたことが度々であつた位で、思を苦しめ、はかりごとを運して、とうとう、賊北條氏を誅滅する功績を致すことが出来ました。然るに、これが爲めに罪を得るやうにならうとは、實にくい思ひも掛けぬことで御座ります。仰いで天に向つて訴へやうすれば、日月は不孝の子を照してくれませぬ、俯して地に向つて泣き叫ばうとすれば、山や川は無禮の臣を載せてくれませぬ。親子の義も、すでに絶えて仕舞ひ、天地ともに棄て、身の置きどころも御座りませぬ。事此に至りました上は、私は、ふた、び此世に人竝の望も御座りませぬ。若し、私の死罪を赦され、皇族たる籍を削り、佛道に歸依することが出来ずならば、私は一生運命を思ひませぬ。そまゝ申生が死んでから晋國は大に亂れ、扶蘇が刑罰にかゝつてから秦の世は傾いたと云ふ事でも御座ります。聖明なる陛下は、如何して、古の先例を引いて今の事の手本と致されませぬのか。私は涙がこぼれ心が昏んで、申し上げたい事を十分に申し上げることは出来ませぬ。唯だ、陛下御推察下さいと曰つてあつた。その上書が宮中に入つたけれども、誰も取り次いで御手許に差し上げやうとする者は無かつたので、親王の意中は貫徹することが出来なかつた。そこで、護良親王に隨從して始終一處になつて居つた者は、皆誅罰せられ、赤松則村も亦、其守護職を取り上げられて仕舞つた。十一月に、勅して、護良親王を足利直義に御引き渡しになり、之を鎌倉に移し、穴を二階堂谷に掘つて、親王を其處に押し込めて置き、一人の宮女(南の方)をゆるして、親王の御側に侍り居らせられた。

二年七月。北條時行作亂。襲鎌倉。直義敗走。臨走召淵邊義博曰。時行不足患。可患者兵部卿。宜乘此時除之。義博往窺窖中。護良方焚燭誦經。顧而蹶起曰。汝欲殺我邪。前奪其刀。義博斫其膝。踏之。跨胸刺吭。護良縮頭嚙其鋒。鋒折。拔貳刀。刺心。一乃絕。年二十八。義博欲以首示直義。見其不瞑而含鋒棄去。所侍宮人收葬之。將歸奏狀。而帝已命尊氏東伐。時行尊氏遂據鎌倉。自稱將軍。奪新田氏邑。在關東者。以分予將士。抗疏罪狀義貞。

【北條時行】……高時の二子龜壽なり。信濃に在りて亂を起す。【兵部卿】……護良親王を指す。【焚燭】……あかりをとます。【蹶起】……音ケツキ。むつくと起ち上る。【斫】……刀にて截る。【踏】……たふす。【吼】……のど。【貳刀】……貳は副なり。さしぞへの刀。【刺心】……刺は音セキ。穿つ也。心は胸なり。胸をさす。【絶】……息がたえる。【不瞑】……目をつぶらぬ。【含鋒】……折れた刀のきつ先を口にくはへて居る。【收葬】……取りをさめて葬る。【狀】……様子。【抗疏】……箇條を書き立て、上書する。【罪狀】……其罪を一々數へ擧げて彈劾する。

二年七月、北條時行が亂をなして、鎌倉を不意撃ちした。直義は敗軍して逃げ走つた。直義が逃げやうとするときに、淵邊義博を呼び寄せて曰ふには、時行は心配するほどの事は無いが、心配すべきは、兵部卿の宮護良親王である。此時につけ込んで之を除く方が善いと曰つた。そこで、義博は、行つて穴の中をのぞいて見ると、護良親王は、折しも、あかりを付けて經を讀んで居られる真最中であつたが、ふり返つて見て、むつくと起ち上つて仰せられるには、貴様は我を殺さうとするのであるかと仰せられて、進んで其刀を奪ひ取らうとせられると、義博は、親王の膝を切り附けて、之を押し倒し、その胸の上に跨つて吭を刺さうとする、護良親王は頭をちぢめて其きつ先を嚙まれたので、きつ先がぼつきと折れた。義博は、差し添への刀を抜いて、胸を刺すこと二回で、そこで、護良親王は息が絶えられた。時に御年は二十八歳であつた。義博は、その首を持って行つて直義に見せやうと思つたけれども、その首が目をつぶらずして、口には刀のきつ先を含んで居るのを見て、棄て、置いて去つた。御側に居つた宮女(即ち南の方)が之を取り收めて葬つて、まさに京都に歸つて其事の様子を奏上しやうとした。然るに、帝は此時已に尊氏に命じて東の方時行を伐たせることになされて居つた時であつた。尊氏は、とうとう、鎌倉に立て籠つて、自分で將軍と稱し、新田氏の領地の關東に在る者を奪ひ取つて、それを部下の將士に分ち與へて、上書して、義貞の罪の次第を數へ立てて彈劾した。

義貞乃上書曰。嚮者當天下大亂。乘輿播遷。楠正成等豪傑竝起。相共勤王。

而足利尊氏首鼠兩端。觀望勝敗。自非賊軍失利。蓋不肯降也。功微賞多。遂冀非望。害臣之忠義。欲詭言陷之。臣以五月八日。起兵上野。彼以其七日。佐攻六波羅。而曰。臣聞京師復乃肯起兵。以欺罔天聽。其罪一也。臣以五月廿二日。率諸軍誅高時。而彼之兒子。率從士百餘人。以六月三日。入鎌倉。而曰。臣賴其兒子以成功。其罪二也。彼在輦下。擅誅親王之卒。其罪三也。征夷之任。在兵部卿親王。而彼輒掠其號。其罪四也。矯稱管領。務張威福。其罪五也。中興之業。雖因天運。抑兵部卿之謀策居多。而彼多方讒構。遂抵流謫。其罪六也。陛下心期。兵部卿之自艾。而彼修私仇。辱之牢狴。其罪七矣。直義乘亂。遂傳刃於兵部卿。大逆無道。其罪八矣。此八罪者。天地所不容。措而不論。百敗將隨而至。後噬臍無及。願陛下照鑒之。速下明詔。以誅伐尊氏兄弟。廷議疑未決。會護良侍婢至奏狀。而尊氏反迹遂暴於天下。

【播遷】……播は音ハ遷る也。御立退。後醍醐帝が高時の爲めに隠岐に遷されしを云ふ。【首鼠兩端】……史記の魏其武安侯列傳の語。鼠の性は疑多く、行くときは且つ進み且つ退く。故に、どちらつかずに様子を見て居ることを首鼠兩端と云ふ。【觀望】……見合はせて居る。【非望】……非分の望。將軍とならんと欲するを云ふ。【詭言】……いつはりごと。【欺罔】……欺は詐る也、罔は誣ふる也。あざむきます。【天聽】……天子の御耳。【彼之兒子】……千壽王を指す。時に年三歳。後、義詮と改む。【輦下】……たよる、依頼する。【輦下】……京都を云ふ。天子の御ひざもと。【親王之卒】……護良親王の從卒。【其號】……征夷大將軍の稱號。【矯稱】……いつはる、詐り稱する也。【張威福】……賞罰等を自由にして威光ふるを云ふ。【讒構】……讒言して無き事を作り出して述べ立てる。【自艾】……艾は治むる也。自ら新にし自ら改心すること。【牢狴】……音ラウヘイ。獄屋。【傳】……さす、刀を挿むなり、つき込む。【百敗】……色々の失敗。【噬臍】……わが口を以て臍をかまんとするも届かぬのなれば、後悔するとも及ばざるに喩ふる也。左傳の莊公六年の條に、若不早圖。後君噬臍とあり。【照鑒】……てらしかんがみる、日月の照らすが如く、明にその事跡の真相を鑑別する。【反跡】……謀叛の跡方。【暴】……顯はる、あらはに知れる、隠れなくなる。【誅】……尊氏が、すでに義貞を彈劾致したについては、義貞も黙つて居ることが出来ないので、そこで、上書して曰ふには、さきに、北條高時が爲めに天下大に亂れ、御乗物が京都を御立退になつた時に當りましては、楠正成などの諸の豪傑が、あちこちに並び起りまして、相共に王事に勤めました。而るに足利尊氏は、どろろつかずの曖昧なる態度を致して、勝敗の様子を眺めて居りました。若し彼の時に賊軍が敗北しなかつたらば、大方、此方へ降参することは無かつたで御座りしやう。尊氏の功勞はわづかばかりでありながら、御賞與は多く御座りましたが、やがて増長して、非分の望を懷くに至りました。就ては私の忠義を邪魔に思ひまして、いつはりの言葉を以て私を罪に陥れやうと致します。私は五月八日を以て義兵を上野に起しました。彼れは同じ月の七日を以て官軍を助けて六波羅を攻めました。京都から上野までは、數百里を隔て、居ること御座りすれば、一日や二日の間に京都の様子を知れることは御座りませぬ。然るに、尊氏は、私が京都の回復されたのを聞いて、そこで兵を起すことに致したと申上げて、天子の御耳を欺きました。これが其罪の一箇條で御座ります。私は五月二十二日を以て諸の軍隊を引き連れて、高時を誅殺いたしました。然るに、尊氏の伴は、從卒わづかに百餘人を引き連れて、六月三日を以て鎌倉に入り込みまして、何の役にも立たぬ位で御座りました。然るに、尊氏は、私が彼の伴にたよつて、それで、北條征伐の功を成就したと曰ふさうで御座ります。これが其罪の第二箇條で御座ります。尊氏は、御膝元の京都に在りて、獨斷で護良親王の從卒を誅殺いたしました。これが其罪の第三の箇條で御座ります。征夷大將軍の任命は、兵部卿の宮護良親王に在るのに、然るに彼れ尊氏は、謬も無く、其稱號を掠め取つて、勝手に征夷大將軍と名乗つて居ります。これが其罪の第四箇條で御座ります。彼れ尊氏は、いつはりて管領と稱して、賞罰などの事を自由にして、我が儘勝手に、威張つて居ります。これが其罪の第五箇條で御座ります。建武中興の事業は、陛下の御運の好い爲めでも御座りませぬけれども、さうく兵部卿の宮護良親王の御謀が、與つて大に力あることで御座ります。然るに、彼れ尊氏は、色々様々と無實の事を作り出して讒言して、とうく流罪に至らしめました。これが其罪の第六箇條で御座ります。陛下の御心では、兵部卿の宮が御自身に御改心なされることを豫期して居らせられたのに、然るに彼れ尊氏は、私の遺恨を晴らさうとして、之を獄屋の中に押し込め奉つて、高貴の御身を辱しめました。これが其罪の第七箇條で御座ります。彼れが弟直義は驕動の時に附け込んで、とうく及を兵部卿の宮の御身にさし込んで、弑し奉つたのは、大逆無道の事で御座ります。これが其罪の第八箇條で御座ります。此八つの罪は、天地ともに容れざるどころの大罪で御座りまして、之をしも差し置いて處分しないときは、色々様々の多くの失敗が、これに引き續いて起つて來るで御座りしやう。後に至つて悔恨しても、到底追ひつかぬことで御座ります。願はくは、陛下、此事の真相を十分に御明察遊ばされて、速に聖明なる詔を下して、尊氏兄弟を誅伐せられんことを希望いたしますと曰つた。朝廷の評議では、まだ義貞の上書を疑つて、未だいづれとも決定せられなかつたが、折しも護良親王の御側に從つて居つた宮女(南の方)が到着して、其様子を申し上げたので、それで、尊氏の謀叛の形迹が、とうく天下に隠れ無く顯はれて仕舞つた。(足利氏記を參看せよ。)

十一月。乃下詔討尊氏。徵兵六萬。陛授節刀於義貞。以總諸將。奉皇子

尊良。自海道進。忠房親王以一軍。自山道進。義貞常檢精強七千。爲中堅。而栗生顯友。篠塚伊賀。畑時能。互忠景。由良具滋。長濱顯寬等十六騎。最精悍。善穀擊。同其徽號。進退與俱。義貞至於矢矧河。河東皆足利氏兵。義貞召顯寬。視津。還報曰。津有二處。然前岸峻絕。敵攢鐵守之。不若誘敵使渡而蹙之。水也。義貞從之。賊分兵。左右渡。戰且卻。終縱萬騎。自中渡。犯義貞。義貞乃以中堅迫擊破之。賊退陣。鷺坂。又進擊破之。足利直義以二萬騎來援。盛兵手越河。義貞望之曰。敗卒在後。必先走。餘衆不能支也。戰而逮夜。夜遣曠騎。循間道。薄射其後隊。後隊擾走。諸營遂大潰。走返鎌倉。尊氏大窘。欲削髮出降。未果也。義貞引降附數萬。至伊豆府。遲山道軍者數日。賊軍復振。凡數十萬人。直義出拒箱根。

【陸授】…天子臨御して、之を陸階の下にて授け賜はるること。【節刀】…大將たる者に征伐の權を委ぬる證據として賜はるる劍。昔は鹿牛尾を以て之を爲る、今は劍を以て之に代ふ、故に節刀と云ふ。【掬】…えらぶ。【中堅】…中軍、本陣。中軍の將、中に居り堅銳を以て自ら輔く、故に中堅と云ふ。【穀擊】…音コクゲキ。穀は弓を控へ也。擊は擊劍なり。【矢矧河】…三河に在り。【津】…音シン。渡場。【櫓鐵守之】…櫓は集むる也。矢矧をそへて守り居る。【蹙之水】…水中にせめつける。【自中渡】…中央の渡場から河を渡る。【鷺坂】…駿河に在り。【盛兵】…兵勢を盛んに見せかける。【手越河】…駿河に在り。【曠騎】…音クワクキ。騎射隊。【循間道】…循は依る也。巡る也。裏道よりまはる。【遲】…待つ。【箱根】…伊豆と相模との界。

十一月に、そこで、詔を下して尊氏を討させることにし、兵士六萬人を徵集し、節刀を義貞に御殿階下に於て授け、以て諸大將を總轄せしめることとし、皇子尊良親王を奉じて、東海道から進み、忠房親王は、別の一軍を引き連れて、東山道から進まれた。義貞は、平生、え

り抜き、強ひ兵七千人を擇び出して、之を中軍として居つた。そして、栗生顯友、篠塚伊賀、畑時能、互忠景、由良具滋、長濱顯寬等の十六騎が、其中でも一番すぐれて勇氣があつて強く、弓を射たり太刀撃ちすることが上手であつて、其紋所を同じくし、進むにも退くにも一處にした。かくて、義貞は、矢矧河に到着した。河の東は皆、足利氏の軍勢であつた。義貞は、そこで、顯寬を召し出して、渡場を見に行かせた。すると、還つて報告して曰ふには、渡場は三箇處御座りますが、けれども、向ふ岸ははしく切り立つたやうであつて、敵が矢をそへて守つて居ります。敵をおびき寄せて河を渡らせて、そして水の中に取りつめる様にしようと思つた。義貞は、その言葉に従つた。賊は、果して、兵士を分けて、左右の渡場から渡つて来たが、戦ひながら退いた。今度、とうとう、萬騎を繰り出し進ませ、中央の渡場から渡つて、義貞を引寄せた。義貞は、そこで、中軍を以て迫り撃つて之を破つた。賊は退却して鷺坂に陣取つたが、又進み撃つて之を破つた。足利直義が、二萬騎を引き連れて來り援けて、手越河に於て兵勢を盛んに見せ掛けて居つた。義貞は、それを望み見て曰ふには、負けた士卒が後に居るから、之を撃つときは、屹度先だつて逃げ出すであらう。さうすると、殘りの軍勢も、持ちこたへる事が出来ぬであらうと曰ひ、戦つて夜に及んだが、夜、騎射隊を派遣して、うら道をまはつて、近くまで追つて後の部隊を射させた。すると、後の部隊は、亂れて逃げ出し、他の諸の陣營も、とうとう大崩れになつて逃げ走つて、鎌倉に引つ返した。尊氏は、そこで、大に閉口して、髪を剃つて坊主になつて出で、降参しやうと思つたが、未だ果さなかつた。義貞は、降参して新に附き従つた兵士數萬を引き連れて、伊豆の國府に至つて、東山道の軍を待つこと數日であつた。其間に賊軍は、また勢力を回復して、凡そ數十萬人となつた。直義は、鎌倉から出て來て、箱根を拒ぎ守つた。

十二月。十二日。義貞令義助奉皇子向竹下。而自攻箱根。登高覽視將士。將士皆奮戰。直義兵沮靡。殆不能支。而尊氏以十餘萬出竹下。竹下官軍七千人。其隸皇子者。先進先走。義助以手兵代之。格鬪交退。其子義治。年甫十三。與三騎陷賊中。撤號被髮。與賊偕退。義助還營。不見義治。復進索之。直冒賊軍。軍潰走。義治知父來救也。佯呼賊兵。盍反戰。一賊從之。比及我軍。義治目從騎。斬其賊。歸獻義助。義助大喜。乃退息。遣鹽谷高貞等。變進。高貞等叛降賊。亂射官軍。義助夜退。欲合於義貞。義貞方克

直義。俟明日進。舟田義昌在前軍。聞直義陣中傳呼將軍捷也。乃巡視我諸營。帷幕儼在。而無復一人。走告之義貞。義貞默然曰。是或降或逃也。吾少退。扼其逃者復戰。乃下山而西。兵僅五百人。聞尊氏兵數十萬充羽伊豆府。栗生顯友。篠塚伊賀。據鞍顧衆曰。一騎當千。諸君之謂矣。乃先衆而前。賊爭薄義貞。伊賀蹴而仆之。立斬九人。餘賊不敢薄。義貞行收散兵。得二千人。至天龍河。造浮橋。濟軍。軍悉濟。義貞乃與義昌濟。有叛者。潛絕其絙。僕牽馬前。輒陷。義昌曰。誰援之者。顯友重鎧沒水。兩手提人馬。達前岸。時橋陷丈餘。義貞。義昌相挈而跳。既濟。或議撤橋沮追兵。義貞曰。我且爲之。彼寧不能爲哉。存橋而去。屯矢矧驛。兵多道亡。宇都宮公綱勸其退阻洲股。義貞從之。朝廷亦以近畿皆叛。四窺京師。急召還義貞。

【竹下】……駿河に在り。【沮】……沮は退なり。靡は披靡なり。氣おくれがして、よどみひるむ。負け色がある。【隸】……附き従ふ。【格闘】……打ち合ひた。かふ。【撤】……笠じるしをかき取り棄て、敵をして知らざらしむ。【被髮】……あらし髪になる。【目】……目くばせする。【亂射】……むやみに射る。【帷幕】……陣屋の幕。【儼在】……儼は莊なる貌。ちやんとしてあるを云ふ。【扼】……止むる也。【下山】……箱根山を下る也。【充切】……切も充つる也。充滿するなり。【天龍河】……遠江に在り。【浮橋】……舟橋。【絙】……音コウ。大綱。【重鎧沒水】……重き鎧を著たるま、水に飛び込む。【人馬】……僕と馬。【挈而跳】……挈は提ぐる也。跳は躍る也。手をひいて飛び越える。【矢矧驛】……三河に在り。【阻】……さ、へ止むる。【洲股】……美濃に在り。

十二月十二日に、義貞は、義助をして皇子尊良親王を奉じて竹下に向はしめ、そして、自分は箱根を攻めることにし、高い處に登つて味方の將士はどんな様子であるかを見おろすと、部下の將士は皆奮つて戦つて、直義の兵士が氣おくれがして負け色があつて、殆んど持ちこたへることが出来ぬほどであつた。然るに、尊氏が、十餘萬の兵士を引き連れて、竹下に打つて出でたが、竹下の官軍は七千人で、その中に

皇子尊良親王に附屬して居つた者が、先だつて進んで先だつて逃げ走つたので、義助は、手勢を引き連れて、之に代り、打ち合ひた、かつて、兩軍とも退却した。義助の子義治は、年がやつと十三歳であつたが、三騎と一處に、賊の軍勢の中に陥つて仕舞つたので、笠じるしをかき取り棄て、あらし髪になつて、賊の軍勢と一處に退いた。義助は、陣屋に還つて見ると、義治が見えないので、また進んで之をさがし求めんとて、直に賊軍に衝きかゝつた。義治は、父義助が救ひに來たことを知つたので、いつはりて賊兵を呼んで、どうして引き返して戦はないのかと曰つたので、二人の賊兵はその言に従つて進んで來た。我が軍に及ばんとする頃に、義治は、その従つて居る騎士に目くばせして、其賊兵を斬らせて、歸つて義助に差出したので、義助は大に喜んだ。そこで、退いて休息し、鹽谷高貞などを派遣して、代つて進ませたが、高貞等は、叛いて賊軍に降参し、官軍をさんぐに射たので、義助は、夜、退いて義貞の軍と一處にならうと思つた。義貞は、折ふし直義に勝ちおほせて、明朝を待つて進まうとして居る時であつた。舟田義昌は、前の部隊に居つたが、直義の陣屋の中で將軍尊氏殿が御勝利であつたと口々に傳へ呼ばるのを聞いたので、そこで、我が諸の陣營を見まはると、陣屋の幕はちやんとして居るけれども、其中にはまた一人も居ないので、走つて行つて、此事を義貞に告げた。義貞はや、しばらく黙つて居つたが、やがて曰ふには、これは降参したり逃げたりしたのであらう。吾は少し退却して、逃げ出した者を引き止めて再び戦ふことにしやうと曰つて、そこで、箱根山を下つて西の方へ向つた。その兵士はわづかに五百人であつた。尊氏の兵士は數十萬となつて伊豆の國府に一ぱいになつて居るといふ事を聞いた。栗生顯友、篠塚伊賀が、鞍によりて馬上から、人々をふりかへつて見て曰ふには、一騎當千といふのは、諸君の事である、何分しつかり頼むぞと曰つて、そこで、人々に先だつて進んで行つた。賊は争うて義貞に追つて來たが、伊賀が、足で蹴倒して、即座に九人を討ち取つたので、残りの賊兵は、むざとは逼り近づかなかつた。義貞は、行くく散亂したる兵士を取りまとめて、二千人になつて、天龍川に至り、舟橋を造つて、軍勢を渡し、残らず渡つて仕舞つてから、義貞は、そこで、義昌と渡らうとした。すると、叛く者があつて、ひそかに、舟を繋ぎとめて置いた大綱を切つたので、義貞の下部が馬を引いて進むと舟と舟との間が離れて、すぐに水の中に落ち入つた。義昌が曰ふには、誰か之を助ける者は無いかと曰つた。顯友は、重い鎧を著たまゝで、水に飛び込んで、兩方の手に下部と馬とをぐら下げて、向ふの岸に到着した。その時に橋が切れて居る處が一丈あまりあつたが、義貞と義昌とは、手を引き合つて飛び越えた。すでに河を渡つて仕舞つてから、或る人は、橋を取りはづして敵の追手をくひ止めるが宜いと評議したが、義貞が曰ふには、我が少數の兵を以てすらすら之を爲すことが出来たのであるから、敵がどうして出来なことがあらうかと曰つて、橋を其儘残して置いて立ち去り、矢矧驛に止まつて居つた。兵士は多く途中から逃げた。宇都宮公綱が、退却して洲股に於て敵兵を喰ひ止めるやうに致されよと勧めたので、義貞は其言に従つて退いた。朝廷に於ても亦、畿内近傍が皆叛いて、四方から京都を附けねらつて居るので、急に、義貞を召し還された。

義貞乃還京師。部署諸將。自以萬人守大渡。義助與權中納言藤原公泰。僧文觀等。以七千人守山崎。江田行義以五千備應援。延元元年正月。行義擊丹後賊兵于峯堂。走之。而尊氏已將數十萬抵大渡。義貞豫撤橋板。

截_レ桁_レ不_レ殊_ニ。樹_ニ柵_ニ水中_ニ。令_ニ兵_ニ呼_ニ于_レ岸_ニ曰_ニ。丹後之兵_ニ。我已_ニ殲_ニ之_ニ矣_ニ。公盍_ニ亦_ニ來_ニ決_ニ死_ニ。賊兵怒_リ。造_ニ筏_ニ以_レ渡_ニ。遇_ニ柵_ニ而_レ止_ニ。我軍亂射_ス。賊紛擾_シ。筏壞_テ而溺者數百人_{ナリ}。又令_ニ呼_ニ于_レ橋_ニ曰_ニ。舟筏母_レ益_ニ。請_ニ由_ニ此_ニ來_ニ。賊千餘人爭進_シ。桁斷_チ皆溺_ル。尊氏遂休_レ戰_ニ不_レ進_ニ。已而賊兵二萬_ニ來_ニ攻_ニ山崎_ニ。公泰_ニ文觀_ニ隸_ニ士_ニ爭_ニ降_ニ賊_ニ。賊即入_リ。義貞聞_ニ山崎軍破_レ。賊兵指_ニ闕_ニ。則馳_ニ援_ニ義助_ニ。將_ニ與_ニ俱_ニ奉_ニ帝_ニ於_レ叡山_ニ。賊將細川定禪將_ニ兵六萬_ニ尾_ニ之_ニ。義顯以_ニ三千騎_ニ不_レ告_ニ而_レ返_ニ射_ニ戰_ニ久_ニ之_ニ。度_ニ義貞_ニ已_ニ至_ニ闕_ニ。則大呼_ニ衝_ニ敵_ニ。大友氏泰_ニ。宇都宮公綱_ニ新降_ニ在_ニ賊中_ニ。識_ニ義顯_ニ欲_ニ必_ニ獲_ニ之_ニ。義顯奮戰_シ八合_ニ。被_ニ大創_ニ數十_ニ。流血淋漓_シ。還_ニ至_ニ紫宸殿前_ニ。帝親臨_ニ勞_ニ之_ニ。遂_ニ與_ニ義貞_ニ義助_ニ俱_ニ扈_ニ乘_ニ輿_ニ赴_ニ叡山_ニ。

【部署】……手くばりする。【大渡】……山城に在り。【僧文觀】……醍醐の座主。【山崎】……山城に在り。【備應援】……加勢の用意として置く。【峯堂】……京都の西に在り。【截桁不殊】……殊は絶なり。橋のゆきげを切つたけれども、全く切り離さずして置く。鋸の目を入れ置き、其上をふめば折れるやうにして置くなり。【柵】……音サク。しがらみ。【筏】……音、いかた。【識】……見知る。【大創】……大なるきず。【淋漓】……血がだらりと流れる貌。【扈】……音コ。扈從する、御ともする。

義貞は、そこで京都に還つて、諸將を手分けして、向ふところを定め、自分は萬人を引きつれて大渡を守つた。義助は、權中納言藤原公泰、僧文觀等と、七千人を引き連れて、山崎を守つて居つた。江田行義は、五千人を以て、加勢の用意をして置いた。延元元年正月に、行義は、丹後の賊兵を峯堂に撃つて之を敗走させた。然るに、尊氏は、すでに數十萬の大軍を引き連れて大渡に到着した。義貞は、前以て橋の板を引き、しがらみ、橋の桁を切つたが全く切り離さず、其上をわたれば折れるやうにして置き、しがらみを水の中に立て、兵士をして岸の上で呼ば、つて曰はせるには、丹後の賊兵は、我すでに之を殺して仕舞つた。貴公も、なせ來つて死を決して戦はないのかと曰はせた。賊兵は、之を聞いて怒つて、筏を造つてそれに乗つて渡つたが、しがらみにぶつかつて進むことが出来なかつた。我が軍はさんぐに射かけ

たので、賊はがやぐと混乱して、筏がこぼれて溺れた者が、數百人であつた。又、我が兵士をして橋の上で呼ば、ちせて曰ふには、舟や筏は役に立たぬから、どうか此處から來れと曰つた。すると、賊兵千餘人が、先を争うて進んだが、橋桁が折れて、皆水に落ちて溺れて仕舞つた。尊氏は、遂に戦を休めて進まなかつた。とかくする中に、賊兵三萬が、來つて山崎を攻めたが、公泰、文觀の部下の者共が先を争うて賊に降服したので、賊はやがて京都に討ち入つた。義貞は、山崎の軍が敗れて賊兵が御所に向つたと云ふ事を聞いて、そこで、馳せて義助を援けて、まことに一處に後醍醐帝を叡山に御連れ申さうとした。賊將細川定禪が、兵六萬人を引き連れて、跡から付いて來た。義顯は、三千騎を引き連れて、告げずして引き返し、や、しばらくいさをして居たが、義貞は、已に御所に到着した時分を見計らつて、大に呼ば、りて敵の陣中に突き進んだ。大友氏泰、宇都宮公綱は、新に降参して賊の中に在つたが、義顯を見知つて居つたので、是非とも義顯を打ち取らうと思つて居つた。義顯は奮ひ戦ふこと八度で、大なる傷を受けること數十箇所に及び、血がだらりと流れて、引き返して紫宸殿の前に至ると、帝は御自身で、其處へ御出ましになつて之を慰勞せられ、とうく義貞、義助と與に、御乗物の御伴して叡山に出掛けて行つた。

細川定禪來據_ニ園城寺_ニ。相持_ニ未_レ戰_ニ。會_ニ陸奥守源顯家_ニ入_ニ援_ニ。新田氏族_ニ在_ニ東國_ニ者_ニ。相率_ニ從_ニ之_ニ。大館氏明_ニ。宗氏子也_ニ。從_ニ至_ニ近江_ニ。攻拔_ニ一城_ニ。遂_ニ來_ニ會_ニ於_ニ義貞_ニ。顯家欲_ニ休_ニ馬_ニ而_レ後_レ戰_ニ。氏明曰_ニ。我馬遠來_ニ。休則足重_シ。不可_レ輒_ニ用_ニ。不_レ若_ニ今夜直_ニ襲_ニ園城寺_ニ。出_ニ其_ニ不_レ意_ニ。義貞然_ニ之_ニ。即夜出_ニ兵_ニ唐崎_ニ。黎明_ニ與_ニ諸將_ニ將_ニ騎_ニ六萬_ニ圍_ニ園城寺_ニ。賊自_ニ門中_ニ叢_ニ槍_ニ拒_ニ之_ニ。互_ニ忠_ニ景_ニ奪_ニ其_ニ十六_ニ槍_ニ。畑時能_ニ舉_ニ足_ニ。蹋_ニ門扇_ニ倒_ニ之_ニ。我軍入_ニ而_レ縱_ニ火_ニ。走_ニ定禪_ニ。斬_ニ首_ニ七千餘_ニ級_ニ。顯家乃_レ退_ニ。義貞亦_レ欲_ニ收_ニ兵_ニ。舟田經政控_ニ馬_ニ說_ニ曰_ニ。兵利_ニ在_ニ乘_ニ勢_ニ。賊兵一敗_シ。魄_ニ褫_ニ氣_ニ沮_ニ。我因_レ躡_ニ之_ニ。乘_ニ勝_ニ連_ニ進_ニ。可_ニ以_ニ終_ニ獲_ニ其_ニ渠_ニ魁_ニ也_ニ。義貞曰_ニ。然_ニ。即率_ニ三萬_ニ騎_ニ追_ニ之_ニ。遇_ニ嶮_ニ逼_ニ擊_ニ。遇_ニ夷遙_ニ射_ニ。賊不_レ得_ニ返_ニ戰_ニ。伏_ニ尸_ニ狼_ニ藉_ニ。餘衆走_ニ歸_ニ京師_ニ。合_ニ於_ニ尊氏_ニ軍_ニ。

【園城寺】……近江の三井寺。【攻拔一城】……六角氏頼の觀音寺城を攻め抜きしを云ふ。【唐崎】……近江に在り。【叢槍】……叢は聚むる

也。槍は稍なり。槍先をそろへる。槍ぶすまを作る。【關門扇】…門の扉を足にて踏み蹴る。【魄魂氣沮】…たましひが奪はれ元氣がどよみ衰ふ。【蹶】…ふむ。跡をつけて急に追ひ撃つこと。【夷】…地の平なる所。【狼藉】…とり乱れる。散亂する。

關門賊將細川定禪は、來つて圍城寺に立て籠つて居つたが、官軍賊軍は互に睨み合つて未だ戦はなかつた。折しも陸奥守源顯家が來つて援けて、新田氏の一族の關東に居つた者共が、引き連れ合つて之に従つて來た。大館氏明は、宗氏の子であるが、矢張從つて近江に來て、一つの城を攻め落して、とうとう來つて義貞に會した。顯家は、遠くから來たことであるから馬を休息させて後に戦はうと思つたが、氏明が曰ふには、さうで御座らぬ。我が馬は遠方から來たのであるから、休息するときは、足が重くなつて、たやすくは役に立てることが出來なくなりましやう。今夜、直に圍城寺を不意撃ちして敵の不意に出るのが、一番宜しい御座ると曰つた。義貞は、此言を尤と思つて、其夜直に、兵士を唐崎に繰り出し、夜明け頃に、諸將と、六萬騎を引き連れて、圍城寺を圍んだ。賊は門の中から槍の穂先を揃へて之を拒いだ。互忠景は、敵の槍十六本を奪ひ取り、畑時能は、足をあげて門の扉を蹴つて之を倒した。そこで、我が軍は入つて、火を附けて、定禪を敗走させ、首を斬ること七千餘級であつた。顯家は、そこで退いた。義貞も亦兵士を取りまゝ退かうと思つた。すると、舟田經政が、義貞の馬を引き止めて説いて曰ふには、兵の利益は勢に乗じて攻め立てるに在ります。今、賊兵は一たび敗れて、たましひ奪はれて身に附かず、元氣はほとんど衰へて居ります。我が兵が之に付け込んで、跡をつけて急に追撃し、勝つた勢に乗じてつけかけ様に進んだならば、仕舞には賊の大將をも討ち取ることが出來ましやうと曰つた。義貞は、さうであるといつて、すぐに、三萬騎を引き連れて、之を追つ掛け、嶮岨なる處に遇へば、近く進んで撃ち、平地に於ては遠くから射かけたので、賊兵は、引つ返して戦ふことも出來ず、たふれたる屍骸は、地上にちらばつて、殘れる者共は、逃げ走つて京都に歸り、尊氏の軍勢と一處になつた。

義貞進上華頂山。望尊氏軍。尊氏軍充塞京師。不知其幾千萬也。義貞計以寡當衆。不可徒戰而勝。乃令我兵略相識面者。每五十爲伍。卷旗撤號。爲敗卒狀。混入彼軍。待戰而起。部二千騎遣之。已而兩軍接戰。六十餘合。我軍每勝。以至日暮。所遣二千騎。在賊軍中。揚旗竝起。賊軍大驚擾亂。自相擊刺。遂大潰奔。我軍乘勝追之。短兵急接。尊氏迫蹙。欲自刃者二。義貞自桂河還。陣京師。其兵四散。鹵掠。在者亦疲。賊軍返襲。不支而退。舟田義昌等戰死之。會山道兵失戰期者還至。諸將又議戰。夜下山陣。日日

楠正成。源顯家。分路進戰。尊氏親與顯家戰于四條。義貞。義助。建旗五十旒。橫擊之。馳出其背。賊軍呼曰。中黑至矣。輒崩駭。義貞獨變服入賊中。索尊氏。不獲。分兵追之。日暮乃退。還軍坂下。誘尊氏還京師。而閉日襲擊之。尊氏大敗。走攝津。義貞率諸將追擊。又大敗之。尊氏狼狽航海。諸軍爭舟。而溺者數千人。委棄鎧仗海濱。二月。乘輿還關。義貞振旅而還。詔遷義貞左近衛中將。義助右衛門佐。時新附兵萬餘。嚮用足利氏旗號。重畫者皆墨。抹其中爲中黑。淡濃可辨。京師傳以爲笑。

【華頂山】…京都の東に在り。【充塞】…音シウソク。充ち塞がる。充滿する。【略】…ほゞ、あちまし。【伍】…組。【混入】…混は雜る也。まじり入る。【自相擊刺】…同士撃をする。【迫蹙】…追ひつめらる。【桂河】…京都の西に在り。【鹵掠】…鹵は音口。搜獲なり。掠は奪取なり。人を生捕り物を掠めること。【在者】…陣營中に残り居る者。【失戰期】…戦の期日に間に合はぬ。【四條】…疑ふらくは三條ならんか。【旒】…音リウ。旗のあし。旗を數へるには旒と云ふ。【中黑】…新田氏の紋所。【崩駭】…不意なるに驚いて隊伍を亂す。【閉日】…一日を隔て。【狼狽】…うろたへる。【振旅而還】…勢揃して還る。【重畫】…足利氏の紋所にて、二つ引。【墨抹】…墨を塗る。【淡濃可辨】…墨の薄いと濃いと見分けられる。二つ引の中を墨にて塗りて中黒としたるなれば、元の濃くして、新に塗りしところは薄き也。京師傳以爲笑。…何人かの歌に「二筋の中の白みを塗り隠し、新田新田しげな笠じるしかな」と。

義貞は、進んで華頂山に上つて、尊氏の軍を望み見ると、尊氏の軍は、京都中に一杯になつて居つて、何千萬あるか分らぬほどである。中であらまし顔を知り合つて居る者を、五十人ごとに一組として、旗を巻きをさめ、笠じるしを取り棄て、敗北したる士卒の様なふりをして、敵の軍勢の中にまぐれ込んで、戦の始まるのを待つて不意に起しめるとし、二千騎を手分けして之を派遣した。とかくする中に、敵味方の兩軍が、打ち合ひ戦ふこと六十餘度で、我が軍が戦ふごとに勝つて、日の暮れ方に至ると、派遣して置いたところの二千騎が、賊の軍勢の中に在つて、旗を指し立て、一齊に起つたので、賊軍は大に驚いて、混雜して、同士討をして、遂に大に隊伍をくづして奔り出した。我が軍勢は、勝つた勢に乗じて之を追つかけて、刀槍などを以て手ひどく打ち合つた。尊氏は、追ひつめられて甚だ閉口して、自殺しやうとしたことが三度もあつた位である。やがて、義貞は、桂川から引つ返して、京都に陣取つた。その部下の兵士は、四方に散らばつて、分

捕掠奪などをして、陣中に留まつて居る者も亦、疲勞して仕舞つて居つた。そこへ、賊軍が引き返して不意撃をしたので、義貞の軍は、持ちこたへることが出来ずして退却した。舟田義昌等が、そこで討死した。折しも、東山道方面の兵士の戦(即ち箱根竹下合戦)の間に合はなかつた兵士が引き返して来たので、諸將はまた戦はんことを評議し、夜、山を下つて陣取つた。明くる日に、楠正成、源顯家は、路を分つて進み戦つた。尊氏は、自身に、顯家と四條に戦つた。すると、義貞と義助とが、旗五十本を建て、横から出て来て、之を撃ち、急ぎ走つて其後へまはつて出たので、賊軍が相呼ば、つて曰ふには、中黒が来た、新田氏の軍勢が来たぞと曰つて、すまに崩れ亂れて仕舞つた。義貞はひとり、衣服を變へて、賊の中に入り込んで、尊氏をさがし求めたけれども、見付からず、兵士を分つて之を追ひかけ、日が暮れたので退いて、引き返して坂下に陣取り、又、尊氏をおびき寄せて京都に還らせ、そして一日を隔て、之を不意撃した。尊氏は、大に敗れて、攝津に走つた。義貞は、諸將を引き連れて、追つかけて撃ち、又大に之を敗つた。尊氏はうろたへて舟にて海に乗り出し、諸の軍勢は舟を争うて、海に溺れた者が數千人あり、鎧や兵器を海濱に棄て、置いた。二月、天子様は叡山から御所に御還りになり、義貞は、勢揃して還つた。詔して、義貞を左近衛中將に、義助を右衛門佐に遷して、その戦功を賞せられた。その時に、新に降参して来た兵士萬餘人、以前に足利氏の旗じるしの二つ引を用ひて居つた者が、皆、二つ引の中を墨で塗つて中黒としたが、墨色の薄いと濃いと見分けられるので、京都では、言ひ傳へて、笑ひ草として居つた。

已而足利氏保聚西土。勢復大振。赤松則村。石橋和義。及菅某等。竝起應之。三月。詔義貞。管領山陽。山陰十六國。西伐。會有疾。遣江田行義。大館氏明。將二千騎。先發。遇赤松則村兵于書寫山下。擊走之。義貞疾愈。將五萬騎。出次鹿子河。并降附萬人。進至斑鳩驛。且攻則村白旗城。城壁未成。則村請降。義貞喜。爲請於朝。比朝旨至。壁成。則村乃不降。義貞大怒曰。吾寧禽之。而後前行。合軍圍之。城險不下。義助諫之。乃分二萬人附義助。進攻石橋和義。和義據三石。拒舟坂。義助得兒島高德鄉導。乃留一軍于舟坂。而一軍銜枚縛馬舌。自閑道出舟坂之背。賊顧而驚駭。義助夾擊。

拔舟坂。遂攻三石城。遣江田行義。攻菅氏菩提城。遣大井田經隆孫氏經。以二千人進。據福山城。城未修。而尊氏直義舉九國兵而來。城兵欲避之。氏經不肯。

【保聚】……根據を持ちかためて人を集める。【書寫山】……播磨に在り。【鹿子河】……播磨に在り。【斑鳩驛】……播磨に在り。【白旗城】……播磨に在り。【朝旨】……朝廷よりの御命令。【禽】……獲と同じ。【三石】……備前に在り。【舟坂】……備前に在り。【郷導】……案内。【枚】……形は箸の如く、口に横にはへて、聲の出ぬやうにする者。音バイ。【縛馬舌】……馬の舌をしばつて嘶かぬ様にする。太平記には、其勢皆響の七寸(ミツツキ)を紙を以て巻いて馬の舌根を結うたりけるとあり。【菩提城】……美作に在り。【福山城】……備後に在り。【未修】……普請が出来上らぬ。

とかくする中に、足利氏は、西國を根據として持ち固めて、人數を聚め勢が再び大に盛んになつた。赤松則村、石橋和義、菅某などが、竝に兵を起して之に味方した。三月に、義貞に詔して、山陽、山陰十六箇國を支配して、西の方へ下つて征伐させられた。折しも、義貞は病氣であつたので、江田行義、大館氏明を派遣して、二千騎を引き連れて、先づ出發させた。赤松則村の兵に、書寫山の下で出遇つて、撃つて之を敗走させた。その内に、義貞の病氣が全快したので、五萬騎を引き連れて、出で、鹿子河に陣取り、降参して附き従つた者萬人を一處にして、進んで斑鳩驛に至つて、まさに則村の白旗城を攻めやうとした。その時に、白旗城の壁は未だ普請が出来上らなかつたので、則村は降参することを請うた。義貞は、喜んで、爲めに朝廷に願ひ出でた。そして、朝廷の御命令が到着する頃には、城の壁の普請が出来上つたので、則村はもはや降参しなかつた。義貞は大に怒つて曰ふには、吾、むしろ之を獲にして、それから後に前進しやうと曰つて、軍を合はせて之を圍んだが、城は要害堅固にして、なかく、落城しなかつた。義助が之を諫めた。そこで、二萬人を分けて義助に附託して、進んで石橋和義を攻めさせた。和義は、三石に立て籠つて居つて、舟坂に於て我が軍を拒いだ。義助は、兒島高德の案内を得て、そこで、一軍をば舟坂に留め置き、そして、一軍は、人は枚を口にへ、馬をば舌をしばつて、聲を出さぬやうにして、うら道から舟坂の背後に出でた。賊兵は、振りかへつて之を見て大に驚いた。義助は、兩方から夾み撃ちにして、舟坂を攻め落し、遂に三石城を攻め、江田行義を派遣して、菅氏の菩提城を攻めさせ、大井田經隆の孫氏經を派遣して、二千人を引き連れて進んで、福山城に立て籠らせた。福山城は未だ修復が出来上らなかつた。然るに尊氏、直義は、大に九州の兵士を引き連れて進んで来たので、城兵は之を避けて城を立ちのかうと思つたけれども、氏經は承知しなかつた。

五月。直義將兵數萬圍之。氏經出擊。潰圍東走。合於義助。義助馳使告義貞。義貞答曰。敵海陸竝進。即扞陸者。則海者直犯闕矣。吾欲退屯兵庫。

合捍海陸。於是白旗三石。菩提三城圍皆解。義貞先至鹿子河。河水方漲。衆以敵逼於後。請將帥先濟。義貞曰。敵來則背水決戰。吾殿而濟耳。乃令創病者先濟。明日水減。而義助。行義亦至。遂濟至兵庫。則其兵亡者過半。帝遣楠正成來援。義貞迎問曰。朝議如何。曰。吾欲召還公。奉駕叡山。不聽也。義貞曰。驅敗卒。當銳師。吾知其必敗耳。顧去歲敗於關東。今復未拔一城。何以復命。吾故欲決死一戰。正成曰。進退從宜。是謂良將。公且徐計之。且前殪高時。後攘尊氏。公武多矣。衆言何足恤哉。義貞色釋。

【潰圍】潰は衝き散らす也。圍を突きくづす。【扞】防く。【捍】扞と同じ、防く。【創病者】手負の者、負傷者。【願】願ふ。【慮】慮なり。【あ】を振りかへつて考へるに。【復命】還つて事の次第を報告する。【且徐計之】ゆつくりと思案せよ。【殪】殺す也。たふす。【擄】はらふ。はらひ退ける。【武多】武功なかく多し。【何足恤哉】心に掛けるに及ばぬ、心配するほどの事では無し。【色釋】思ひつめたる顔色が常に復すること。多少安心すること。

五月に、直義は、數萬の兵士を引き連れて、福山城を圍んだ。氏經は、城を出で、之を撃ち、圍を突きくづして、東の方へ向つて走り、義助と一處になつた。義助は、使を馳せて義貞に此事を告げた。義貞は答へて曰ふには、敵は海と陸と兩方から攻んで進むのであるから、若し陸なる者を防ぐときは、海なる者が直に京都を犯すであらう。されば、吾は、退却して兵庫に屯營して海陸兩方から進んで来る敵を一處に防がうと思ふと曰つた。こゝに於て、白旗三石、菩提の三つの城の圍は、皆、解けて仕舞つた。かくて、義貞が先づ鹿子河に行き著くと、河の水が丁度漲つて居つた。部下の人々は、敵が近く後に逼つて居るので、大將が第一番に河を渡られるやうにと請うたが、義貞が曰ふには、敵が若し来たならば、水を後にして、勝敗を一舉に決するの戦をしよう。吾は、しんがりとなつて渡ることにしやうと曰つて、そこで、負傷した者先づ渡らせた。明日、水が大分減つた。そして、義助、行義も亦到着した。遂に河を渡つて攝津の兵庫に到着したときには、其部下の兵士の逃げ去つた者が過半數であつた。後醍醐帝は、楠正成をして來つて援けしめられた。義貞は、正成を迎へて問うて曰ふには、朝廷の御評議は如何なる様子で御座つたかと曰つた。正成が曰ふには、吾は、貴殿を京都に召し還して天子様の御乗物(即ち天子)を叡山に奉じてそれから賊を討つやうにしやうと思ひましたけれども、御聞き入れにならなかつたと曰つた。義貞が曰ふには、敗軍したる兵卒を追ひ立て、新田の強い軍勢に向ふので御座るから、吾は、屹度負けることを承知して居ります。けれども、考へて見れば、拙者は、去年は關東に於て敗

軍し、今はまた未だ一城をも攻め落さずして、どうして朝廷に歸つて報告することが出来やうか。吾はそれ故に死を決して一いさ遣つて見やうと思ふので御座ると曰つた。正成が曰ふには、進むも退くも其宜しきに從ふのが、良將で御座りますから、貴殿は、まあよくゆつくりと御考なされ。其上に、貴殿は、前には高時を斃し、後には尊氏を京都から追ひ退けられたので、貴殿の武功はなかく多いこと御座ります。世間の人が兎や角と評判することなどは、氣に掛けるには及ばぬことで御座りますと曰つた。義貞は、顔色がなほつて、やゝ安心したやうであつた。

日日尊氏兵艦蔽海而至。而直義來自須磨。旌旗彌天。義貞令正成拒直義。令義助。氏明拒尊氏。而自居其後。相持未戰。我軍有一騎。挾弓立岸。呼曰。將軍西來。必載津妓。置酒高會。請進一物。佐酒。注箭而俟。適有鸚攫魚而舉。乃馳而射之。斷其隻翼。墮敵舟中。兩軍謹呼。尊氏使人問其名。答曰。東人或識。請投刺焉。復發一箭。軼二百步。貫船舷。尊氏視其箭。彫於筥曰。相模人本閒資氏。敵中傳觀。資氏揚扇呼曰。方今戰國。一矢可愛。願見返賜。賊中有答射者。箭不達岸。我軍齊笑。射者慚憤。以三百人上岸。義助擊殲之。賊先鋒七百艘。過而東。將自西宮上。新田氏軍三萬。欲先往拒之。循岸而馳。騎者如走。舟者如追。而兵庫無人矣。賊後隊六千艘。盡上兵庫。楠正成戰沒。乃與其陸軍合。以躡義貞。義貞曰。吾觀西宮旗幟。支賊耳。自兵庫來者。乃其渠魁。吾所願擊。乃還。背生田林而陣。迎戰。終

不利走。義貞自殿。數返擊。馬殫而徒。上丘待救。敵環射之。義貞揮二刀。截十六箭。小山田高家望見還救。授其馬而留死。初高家從軍。刈民麥。法當斬。義貞使人視其營。則鎧馬鮮而無粒粟。義貞曰。吾罪也。士不可亡。法不可亂。乃爲償田主。而賜粟於高家。高家感愧。故死之。義貞因得脫。自丹波。以殘兵六千歸京師。上下失色。天子復幸叡山。

【敵海】海の見えぬほど多きを云ふ。【須磨】攝津に在り。【瀨天】天にわたる。空一ぱいにつゞく。【津妓】播磨の室津に妓あり。【佐酒】酒の肴を差し上げる。【鶺鴒】一名は魚鷹。水上に翔り、魚を捕へて食ふ。【擲】擲なり。つかむ。【隻翼】片羽。隻は奇なり。【護呼】音クワンコ。唯し立て、はめ呼ばる。【投刺】投は致す也。刺は音シ。名刺なり。名刺を差し上げる。【軼】過ぐる。【貫船舷】舷は船べり。船べりをつらぬく。【影於箭】箭は音カ。箭幹なり。箭がらにはりつける。【可愛】惜むべし。【答射者】射かへす者。佐々木筑前守顯信なりと云ふ。【不達岸】海岸まで届かぬ。【西宮】攝津に在り。【循岸而馳騎者如走舟者如見たりける】とあり。【楠正成】湊川に於て戦死す。【親】見る。【支賊】支は枝なり。枝葉の賊軍。本軍に非ざるもの。【巢魁】かしら。尊氏等を指す。【生田林】攝津に在り。【上丘】求馬塚といへる丘に上る。【環射】四方から取り巻いて弓を射る。【二刀】鬼切、鬼丸の二刀にて、源氏の寶刀なりと云ふ。【截】切り落す。【鮮】あざやか。美麗なり。【無粒粟】一粒の米無し。少しの兵糧も無きを云ふ。【償田主】高家の刈り取りし麥の價を田の持主に償ふ。【調】調明くる日に、尊氏の兵船は、海を蔽ひかざるほどにて進んで來た。そして、直義は、須磨から進んで來て、旗が空に一ぱいにつゞいて居るほどである。直義は、正成をして直義を拒がしめ、義助と氏明をして尊氏を防がしめることにし、さうして自分は其後に陣取つて、敵味方兩軍ともに睨み合つて未だ戦はなかつた。その時に、我が軍に一人の騎士があつて、弓を挟み岸に立つて呼ば、つて曰ふには、將軍は西の方から來られたから、きつと、室の津の遊女を舟に載せて、宴會をして居られることで御座らう。どうか、一つの物を差上げて御酒の肴にしたいと思ひますと曰つて、弓に箭を番へて待つて居つた。折ふし丁度、一羽の鶺鴒が魚をつかんで舞ひ上がったので、そこで、駈けて行つて之を射た。するとその矢は鶺鴒の片羽を射切つて、鶺鴒は敵の舟の中に落ちた。餘りに見事な手ぎはであつたので、敵味方兩軍ともに、はめはやし立て、呼ば、つた。尊氏が、人をして其姓名を問はせた。すると、答へて曰ふには、關東の人の中に或は知つて居る者も御座らうが、名札を差し上げましたと曰つて、また一本の箭を射たが、その箭は三百歩を過ぎて、舟べりを貫いた。尊氏が其箭を見ると、其箭がらに、相模國の住人本間資氏とほりつけてあつた。敵軍の中で、この矢をあれからこれへと渡して見た。やがて、資氏が肩をさつと開いて、呼ば、つて曰ふには、當今は戰國のことで御座れば、一本の矢といへども、惜むべきで御座る。どうか其矢を返して下されと曰つた。賊軍の中で、射か

へした者があつたけれども、その箭が岸まで届かなかつた。我が軍勢は一齊に笑つた。射かへした者が慚ぢ且つ憤つて、三百人を引き連れて岸に上陸した。義助が、撃つて之を殺さず殺して仕舞つた。かくて、賊の先陣七百艘は、こゝを通り越して東へ向つて進み、將に西宮から上陸しやうとした。新田氏の軍勢三萬人は、敵よりも先に西宮に行つて之を拒がうと思つて、岸に沿つて駈け出した。あつたと見ると、馬に乗つて居る我が軍勢は、逃げ走るが如く見え、舟に乗つて居る敵の軍勢は、追つ掛けるが如く見えた。かくて我が軍勢はすべて西宮へ向つて行つたので、兵庫には、残つて居る軍勢は無かつた。そこで、賊の後隊六千艘は、残りず兵庫から上陸して仕舞つた。楠正成は戦死して仕舞つたので、そこで、その陸軍と一處になつて、義貞の後を追つかけた。義貞が曰ふには、吾、西宮の旗差し物を見るに、枝葉の賊である。兵庫から進んで來るのが、賊の大將であつて、吾が撃たうと思ふところの者であるといつて、そこで、引き返して生田の森を後にして陣取つて、迎へ戦つたが、とうとう敗軍して逃げ走つた。義貞が自身にしんがりをして、度々引つかへして撃つたが、馬が驚れて仕舞つたので、徒歩して、小高い丘の上に登つて救を待つて居つた。敵は、義貞を取り巻いて射かけたが、義貞は、二振の刀を振りまはして、十六本の箭を切り落した。小山田高家といふ者が、之を望み見て引き返して救うて、自分の乗つて居る馬を義貞に與へて、自分は其處に留まつて戦死した。はじめ、高家は、戦争に従つたときに、百姓の夢を刈り取つたので、軍法として斬罪に處せらるべきであつたが、義貞が、人をして高家の陣屋を改め見させると、鎧や馬はまことに立派ではあるが、兵糧が少しも無かつたので、義貞が曰ふには、これは吾が行届の罪である。かゝる立派なる侍は、無くなすことは出来ぬ。けれども、軍法をば亂すことは出来ぬといつて、そこで、田の持主に麥の價を拂つて、麥を買ひ取つたことにし、そして兵糧を高家に賜はつたので、高家は感じ且つ愧ぢたことであつたから、それ故に、ここで討死したのである。義貞は、これに因つて難を遭れることが出来たので、丹波路から、残れる兵士六千を引き連れて、京都に歸つた。朝廷に於ては、上下皆驚き恐れて、顔色を變へられた。やがて、天子は、ふたゝび叡山に行幸になつた。

六月。尊氏入京師。使高師重等來攻。分陣三百餘所。義貞、義助以諸將拒。東坂。使公卿僧徒守西坂。賊乃先攻西坂。二卿戰死。僧徒力不支。告急於義貞。義貞與紀清兩黨赴援。擠賊於谷。殺數千人。因陣于大嶽。賊又攻東坂。義助擊卻之。賊復欲攻西坂。以熊野兵五百爲前鋒。皆被黑甲。自雲母坂上。本間資氏。相馬忠重。在義貞側。瞰而笑曰。今日之事。不復煩諸君。下百餘步。相命各射一賊。貫甲穿冑。賊不敢前。二人顧我軍曰。戰且

合矣。爲吾立的。吾將習射。我軍植畫月扇。二人相誠勿射月。乃發。兩箭夾月。乃解。箠鼓弦。自名於敵曰。蓋受吾箭。試甲堅脆。賊懼。不戰而卻。會山徒光澄叛。夜啓賊兵。紀清兩黨覺而鑿之。

【東坂】... 叡山の東坂。【西坂】... 叡山の西坂。即ち雲母坂なり。【二卿】... 參議源忠顯、少將藤原雅忠。【紀清兩黨】... 楠氏記を見よ。【大嶽】... 叡山に在り。【敵】... 俯視なり、見おろす。【相命】... 申し合はせる。【貫甲穿胃】... 資氏は鎧の胸を貫き、忠重は胃を射ぬ。【的】... まと。【植】... 立つる也。【畫月扇】... 月を畫きたる扇。【解箠】... 箠は音フク。えびら、箠を盛る器。箠(エビラ)と胡録(ヤナグヒ)とは本と一器なりしを、其製と名とを別けて、公家にては胡録と云ひ、武家にては箠と云ふ。箠の中に束ねし矢をほどく。【鼓弦】... 弓の弦(ツル)をすびきして鳴らす。【脆】... 音ゼイ、堅からざる也。【光澄】... 金輪院の律師。【啓】... 開く、導き案内する。

六月に、尊氏は京都に討ち入つて、高師重等をして來つて叡山を攻めさせ、分つて三百餘箇所に陣取つた。義貞、義助は、諸將を引き連れ、東坂を拒ぎ、公卿と僧徒をして西坂を守らせた。賊は、そこで、先づ西坂を攻めたが、公卿二人討死し、僧徒の力では持ちこたへること出来なかつたので、使を馳せて、甚だ危急なるを義貞に告げた。すると、義貞は紀の黨、清の黨の者と共に、出掛けて行つて援け、賊を谷の中に押し落し、數千人を殺して、そこで大嶽に陣取つた。賊は、又東坂を攻めたが、義助が、撃つて之を退却させた。賊は、今一度西坂を攻めやうと思つて、熊野の兵士五百人を以て先陣となし、皆、黒絲織の鎧を着て、雲母坂から上つて來た。本間資氏と相馬忠重とは、義貞の側に居つたが、見おろして笑つて曰ふには、今日の事は、諸君の御厄介になるに及びませぬと曰つて、百餘歩を下つて、申し合はせて、各々一人の賊兵を射て、資氏は鎧の胸を射通し、忠重は兜を射通したので、賊兵は、進んで來やうとはしなかつた。二人は、我が軍を振り返つて見て曰ふには、我が軍は、月を畫いハ扇を立てた。二人の者は、互に誠めて、月を射ぬやうにしやうと曰つて、そこで、射たが、二人の放つた二本の箭が、月をはさんで、中つた。そこで、箠の中に束ねたる矢を解いて、弓の弦をすびきして鳴らして、自分で、敵に向つて名乗つて曰ふには、御前等は吾が箭を受けて鎧が堅いか堅くないかをためて見てはどうだと曰つたが、賊は懼れて、戦はずして退却した。折しも、叡山の僧徒光澄が叛いて、夜、賊兵を導き入れやうとしたが、紀の黨、清の黨の二黨が、其事を感じて、その賊兵を皆殺しにして仕舞つた。

初我軍約有急撞鐘相報。一日有羣猿撞鐘。諸營皆警。賊兵以爲官軍下擊。乃大騷。官軍遂開諸門。一時竝下。縱火賊營。擊大走之。生擒高師重。義貞附山僧斬梟其首。賊兵四潰。既而又聚。官軍猶謂賊兵寡也。出攻之。尊

氏挾光嚴帝。據東寺爲城。出兵京師。要擊官軍。官軍敗還。七月。藤原師基以北兵三千入援。諸將議曰。前日之戰。取路京中。所以敗也。不若由内野。磧二道赴之。已而有叛者。泄其議。尊氏乃以大兵邀擊焉。官軍復敗還。天子乃賜邑於叡山僧徒。以獎激之。令招南都。南都輒應之。畿内兵聞之。所在相聚。各請將帥。四塞糧道。賊窮困。至粥。鎧馬。遂大出鹵掠。

【附】... 引き渡す。藤原師基... 前大納言。【磧】... 河原。【泄】... 漏らす。【獎激】... 勸勉なり。引き立てはげます。【四塞】... 音シツク。四方からふさぐ。【粥】... ひき、賣る。糶と同じ。

【附】はじめ、我が軍では、約束して、何事か急變があるときは鐘をついて互に知らせ合ふことにしてあつたが、ある日、猿の一群がいたづらに鐘を撞いたので、我が諸の陣屋では皆用心をして居つた。すると、賊兵は、官軍が山を下つて攻め寄せるのであると思つて、そこで、大に騒いだ。官軍は、とうとう、諸の門を開いて、一時に共々に下つて、賊の陣屋に火を附けて、撃つて大に之を敗走させ、高師重を生捕つた。義貞は、叡山の坊主に引き渡して、斬つて其首を獄門にかけさせた。かくて、賊兵は大に崩れて四方に散らばつたが、其うちに又ぞろ聚まつた。然るに、官軍は、まだ、賊兵は少數であると思つたので、出掛けて行つて之を攻めた。尊氏は、北朝の光嚴帝を御連れ申して、東寺に立て籠つて城と爲し、兵士を京都に繰り出して、官軍をさへぎり撃つたので、官軍は負けて引返した。七月に、藤原師基が、北國の軍兵三千人を引き連れて入つて援けたので、諸將が評議して曰ふには、先達ての戦には、路を京都の町中にとつたのが、敗軍した譯である。今度は、西は内野から、東は河原から、二つの道に分れて出掛けて行くが、一番宜しいと曰つた。とかくする中に、叛く者があつて、其評議を賊軍に漏らして知らせた。尊氏は、官軍の策戦計畫が知れたので、そこで、大軍を以て官軍を迎へ撃つた。官軍は、また敗軍して引き返した。天子は、そこで、領地を叡山の僧徒に下し賜はつて、之を引き立てはげまし、又、奈良の僧徒を招かせられると、奈良の僧兵は、すくなく味方した。畿内の兵士は、此事を聞いて、どこでもかきこも、相集まつて、各々將帥を派遣せられんことを請うて、賊の兵糧運搬の道を四方から塞ぎ止めて仕舞つた。賊は兵糧が乏しくなつたので、大に困却して、鎧や馬などを賣り拂つて兵糧に換へて居つた程であつたが、とうとう大に四方へ出掛けて分捕掠奪をした。

義貞於是議出戰。遣四國兵。列炬于阿彌陀峯。約諸將帥齊進。天子親臨。勞軍。剪所御紅裳。分賜之。以爲登識。義貞臨發。白曰。勝敗天也。不可逆。

睹今日之戰。所不送箭尊氏營者。毋復生還矣。已而北白河失火。藤原隆資以爲戰合也。先期自八幡入。敗走。南都兵亦失期不至。義貞以二萬騎。行破賊軍。終抵東寺。執弓注矢。呼尊氏。語之曰。天下擾亂久矣。雖曰皇統之爭。抑由公與義貞而已。與其爲一身苦萬民。寧各以單騎決鬪。決雌雄。請送一箭。箭軼門樓。入尊氏帳中。尊氏不出。時諸公卿軍。及四國兵。皆爲賊所破。賊兵悉萃於義貞。義貞返擊。奮戰破之。至五條。賊復四合。義貞額中流矢。流血被面。乃令其騎皆西。其馬首欲決死。紅笠識者八百騎。來救之。擁義貞。潰圍歸山門。於是諸將帥皆棄守走歸。

【四國兵】……南海道四國の兵。【炬】……松明、たいまつ。【阿彌陀峯】……京都の東に在り。【剪所御紅笠】……御着用になつて居る緋の袴を小切に剪る。【笠識】……識は音シ、記なり。笠じるし。【逆晴】……逆は事に先ちて之を度る也。晴は見なり。あらかじめみる、前以て考へ知る。【決雌雄】……勝負をつける。【擁】……抱くなり、取り込む。

義貞は、こゝに於て、京都に出で、戦はんことを評議し、四國の兵士を遣はし、松明を阿彌陀峯に立て列べさせて、諸將帥に約束して、同時に一齊に進むことにした。天子様が、親しく其場に御出掛けなされて、軍隊を御慰勞なされ、御召になつて居る緋の御袴を剪つて、少しづつ分けて之を兵士に賜はり、以て笠じるしとした。義貞は出發しやうとする時に、天子に申し上げて曰ふには、戦に勝つか負けるかは天運で御座りますから、前以て考へ知ることとは出来ませぬ。けれども、今日の戦に於て、箭を尊氏の陣營に射込みませぬならば、再び生きて還ることは御座りませぬと申し上げた。とかくする中に、北白河の百姓家に於て火事が起つたので、藤原隆資は、戦が始まつたのであると思つて、約束したる時よりも早く、八幡から討ち入つて、敗軍して走つた。奈長(ななが)の僧徒も亦、約束したる時を誤つて到着しなかつた。義貞は、二萬騎を引き連れて、路すがら賊軍を破り、とうとう東寺に行き著いて、弓を手に持ち矢を番へて、尊氏の名を呼び掛けて、之に告げて曰ふには、天下が騒ぎ亂れて居ることは久しい間であるが、これは天子様の御系統の争であるとは曰ふけれども、そもく貴殿と拙者との争で御座る。されば、わづかに一身の爲めに天下の萬民を苦しめるよりは、いつその事、御互に一騎打をして、勝負をつけやう。さあ、矢一つ送りましやうと曰つて、弓を射たが、その矢は門の高櫓の上を通り越して、尊氏の居る帳の中に入つたけれども、尊氏は出掛けて來なかつた。その

時分に、諸公卿の軍勢及び四國の軍勢は、いづれも皆、賊に破られて仕舞つたので、賊兵は残りず義貞に向つて集まつて來たが、義貞は引き返して撃ち、力を奮つて戦つて之を破り、五條に至ると、賊がまた四方から集まつて來た。義貞は額に流れ矢が中つて、血が流れて顔にかゝつて居つた。そこで、其従つて居る騎士をして皆其馬の首を西へ向けさせて、再び帳中に切り込んで、死を決して戦はうと思つたが、幸にして、紅い笠じるしをつけて居る者八百騎が、來つて之を救うて、義貞を中に取り込んで、圍を突きくづして、叡山に還つた。こゝに於て、諸の將帥は、皆其の守つて居つた場所を棄て、逃げ歸つて來た。

八月。足利高經。佐佐木高氏等。絶我糧食。九月。遣兵擊高氏。敗歸。我軍多逃亡。尊氏佯乞降。請帝歸闕。密使人致款。帝信而聽之。尊氏又陰招諸將。諸將多應之。十月。左衛門督藤原實世。使人來告義貞營曰。尊氏納款。車駕赴其營。公知之乎。義貞時延見將士。得報不信。曰。是使者誤聽耳。美濃守堀口貞満曰。今日氏明。行義無故赴中堂。吾固怪之。請往調焉。馳至行在。則乘輿方駕矣。貞満指進攀其轅。泣曰。臣聞道路之說。未知信否。今乃信矣。不審義貞有何罪。而陛下乃回其聖眷。以庇反賊邪。當元弘初。義貞奉辭伐罪。殪元兇於旬日。以除宸憂。雖古忠臣。恐不能過。自尊氏反以來。又舉族勤王。爲陛下數冒萬死。宗族死義者八千餘人。而賊勢滋熾。王師失利者。豈盡戰之罪哉。蓋天未眷聖德焉耳。今日西駕之轅。竟不可還乎。則召義貞以下族屬見在者。五十餘人。賜死於御前。然後發。帝憮然。

頃焉義貞與義助義顯率三千人入列階下。色愠而禮恭。上前義貞兄弟慰諭之曰。當尊氏反。卿爲其同宗。乃挺歸義。支傾扶廢。終始不渝。朕深嘉之。欲仗卿宗族以鎮平四海。天運未會。兵疲勢蹙。是以權講和議。以待時焉耳。本宜謀及而慮於漏泄。欲臨期相告。顧貞滿未之察也。然由其言。亦有所省。朕聞越前地方多歸順者。又有前所遣將士。卿宜赴彼。經略北陸。以圖恢復。以朕還京師。恐卿得賊名。今特以太子相附。卿視之猶朕軍國之事。無小大。當由卿處分。朕已爲卿忍恥。卿亦爲朕努力。言畢垂淚。將士皆泣。莫能仰視。於是遂令義貞奉皇太子赴越前。義貞即夜造日吉祠。納寶刀。禱曰。神鑑吾忠義。使吾行無恙。得發兵滅賊。即不得然。猶使子孫有再起者。明日奉東宮及皇子尊良北行。舉族從之。獨大館氏明。江田行義。及宇都宮公綱。本間資氏等。從乘輿入京師。尊氏囚帝及從者。殺資氏。以報兵庫。雲母坂之役。

【致款】……款は音クワン、誠なり。降參を申し出づる。【納款】……上に同じ。【調】……うかふ。様子を伺ひまゐる。【乘輿方駕】……丁度御出ましの支度をして居つた。【揖進】……揖とは手を胸に著くる也。揖進とは、挨拶して進むこと。【攀轅】……車のながえに取り付く。【道路之説】……風説、ふはさ。【不審】……合點が行かぬ。【回其聖旨】……これまで目をかけたまひし義貞をうとんじて、尊氏に見かへる。【庇】

……おほふ、かばひたくする。【元兇】……元は首、兇は悪。首惡。高時を斥す。【宗族】……一に宗黨に作る。【賊勢滋熾】……尊氏の勢がますます盛んなるを云ふ。【眷】……顧みる。【西駕之轅】……西の方京都へ還られる御車。此時帝叡山に在り、故に都に還幸したまふを、斯く云ふ。【無然】……意を失ふ貌、あきればはてたる様子。【色愠而禮恭】……顔色は怒氣を含んで不満に見ゆれども禮義は恭し。太平記には、其氣色皆忿れる心ありといへども、而も禮義みだりならずと云へり。【前】……進める。御前に召し寄せる。【卿】……汝。【同宗】……同じ一族。尊氏も義貞も共に源氏なり。【挺】……ぬきんづ、衆に先だつて云ふ。【支傾扶廢】……支は柱ふる也、扶は持つ也、傾きたるをさへ、すたれたるをもちこたへる。【不渝】……變らず。【仗】……よる、たよりする。【權講和議】……權は權宜の權にして、かりにと訓ず。講は、謀る也。【本宜謀及】……本より卿と共に此事を相談すべかりしなり。謀汝に及ぶべしとの意。【漏泄】……洩れる。【有所省】……成る程と思ひ當るところあり。【經略】……切り取り從へる。【恢復】……もとの有様にかへす。賊を亡ぼして朝廷の威光を回復する。【太子】……恒良親王。【相附】……附託する、渡して預ける。【努力】……努力は力を用ふる也。力を盡して勉強する。【造】……至る。【日吉祠】……比叡山に在り。祭神は大物主神、國常立神、八幡大神、國狹穗神、菊理姫神、宇賀姫神、豐斟神なり。【無恙】……無事に。【東宮】……皇太子。【皇子尊良】……中務卿親王。【兵庫雲母坂之役】……兵庫にては鶴を射、雲母坂にて一賊を射、足利氏をばかしめし故なり。

八月、足利高經、佐々木高氏等が、我が兵庫運送の路を絶つた。九月に、兵士を派遣して、高氏を撃つたけれども、敗軍して歸り、いよいよ兵庫攻となりか、つたので、我が軍勢は逃げ出した者が澤山あつた。尊氏は、いつはりて降參することを申込み、後醍醐帝に京都の御所に御遷りになると請ひ、ひそかに人をして異心なき事を申入れたので、帝は之を信用して御開き入れになつた。尊氏は、又、内々諸將を招いたが、諸將は多く之に味方することになつた。十月に、左衛門督藤原實世が、人をして義貞の陣屋に來らせて告げて曰ふには、尊氏が降參を申込んで、天子様は其陣屋に御出でにならうとして居るが、貴殿は之を知つて居られませうかといつた。義貞は、其時に、諸將士を召し寄せて居たが、此報告を得たけれども信用せずして曰ふには、これは使者の何か聞き違ひをして居るのであると曰つた。美濃守堀口貞満が曰ふには、今朝、氏明と行義とが、譯も無いのに、中堂なる行在所に赴いたので、吾はもとより之を怪しんで居つたが、して見ると、どうも變にも思はれるから、私出掛けて行つて様子を見て來ませうと曰つて、急いで行在所に至つて見ると、天子の御乗物は今や用意が出來上つたところであつた。貞満は會釋して進んで、御乗物の轆(ナガエ)に取り付いて、泣いて曰ふには、私は、世間のうはさを聞きませうかといつたけれども、本當であるか本當でないかを知りませんでした。今、御様子を見ると、本當の事で御座ります。私に合點の行きませぬのは、義貞に如何なる罪がありましたので、陛下は、今までの御ひいきを外の者に移して、謀叛したる亂賊をかばひなされるので御座りますか。元弘年間の初に當りまして、義貞は、詔を奉じて罪ある者を伐ち、首惡を十日ばかりの間に斃して、陛下の御心配を除きました。古の忠臣といへども、大方、これよりも過ぐることは出來ませぬ。尊氏が叛きましてから以來、又、一族殘らず、王事の爲めに骨折り、陛下の爲めに、萬々死ねべき危険を度々冒し、一族の者が正義の爲めに死んだ者は、八千餘人で御座りました。然るに賊の勢は、ますます盛んで御座りまして、朝廷の軍勢が勝利を得ませんでした。これは、これは、どうして戦の罪ばかりで御座りましたやうぞ。大體、上天が未だ陛下の御聖徳を顧みられぬからで御座ります。今日西の方京都に御歸りなされる御乗物をば、どうして、還すことが出來ませぬことならば、義貞以下の一族徒黨の現在こゝに居ります者五十餘人を御召し出しになつて、陛下の御前に於て死を賜はりて、然る後に御出發なされよと曰つた。帝は、あきれぬ様子であつたけれども、禮はなかく、恭しくあつた。帝は、義貞兄弟を前に進ませて之を慰め諭して仰せられるには、尊氏が謀叛したときに當つて、汝は、其一族でありながら、身を拔んで、正義に附いて、朝廷の傾かんとするを助へ、倒れんとするを助け、始めから終りまで、

少しも變らなかつたのは、朕深く之を感賞する。朕は、汝が一族にたよつて天下を鎮め平らげやうと思ふけれども、天運が未だ廻り来らずして、兵士は疲れ勢は縮まつて、どうも致し方が無いので、それ故に、假りに和議を講じて置いて、時の到るのを待たうとするのである。この事は、本来、汝に相談すべきことであつたけれども、事情の漏れ聞えんことを心配したので、其場合に立ち至つてから談さうと思つたのである。思ふに、貞満は、未だ此事を十分に推察して居らないので、前の様な事を申ししたのである。けれども、朕も、貞満の言によつて成程と思ひ當るところもあつた。朕聞くに、越前の地方には、逆を去つて順に附く者が多いと云ふ事であり、又、以前に派遣して置いた將士もあることなれば、汝、彼の地に出掛けて行つて、北陸道を切り取り平らげて、以て皇室を本の様に回復することを謀るやうにするが宜しい。又、朕が京都に還るに就いては、汝が逆賊の名を得ることに成ることを氣遣ふから、今、特に、皇太子を汝に預け置くことにする。汝は皇太子を視ること、朕がこゝろ思へよ。軍國の事は、小大と無く、汝が處分にまかせることにする。朕も、已に汝が爲めに恥辱を堪へ忍ぶことである。汝も亦朕が爲めに恥辱を堪へ忍べよと仰せられ、御言葉が終ると、涙を御落しになつた。將士はいづれも皆泣いて、仰ぎ見ることに出来る。汝は無かつた。こゝに於て、とうとう、義貞をして皇太子を奉じて越前に赴かせることに致された。義貞は、直に其夜、日吉神社に参詣して、寶刀を奉納して禱つて曰ふには、神様よ、我が忠義を御照覽下されて、吾が今度の道中に於て何事も無く、兵士を徴發し賊を滅ぼすことを得しめたまへ。若し左様いたすことが出来ませぬならば、せめては、吾が子孫の中に再び起つて此志を成就する者あらしめたまへと曰つた。明日、皇太子恒良親王及び皇子尊良親王を奉じて、北へ向つて出掛けて行つた。一族残らず之に従つた。ひとり、大館氏明、江田行義、及び宇都宮公綱、本間資氏等は、天子の御供して京都に入つた。尊氏は、帝及び之に従へる者を拘留し、資氏をば殺して、兵庫、雲母坂の役に於て足利氏を辱しめた其怨に報いた。

【参考】左に太平記の二章を抄録して参考に資す。

山門より還幸の事

斯る處に、將軍より内々使者を主上へ進じて申されけるは、去々年の冬、近臣の讒に依りて、勅勅を蒙り候ひし時、身を法體に替へて、死を罪なきに賜らんと存じ候ひし處に、義貞、義助等、事を逆鱗に寄せて、日來の鬱憤を散せんと仕り候ひし間、止む事を得ずして、此亂天下に及び候、是全く君に向ひ奉りて、反逆を企てしに候はず、只義貞が一族を亡して、向後の讒臣をこらさんと存ずるばかりなり。若し天鑒誠を照されば、臣が讒におちし罪を哀み思召して、龍駕を九重の月に廻され、鳳曆を萬歳の春に復され候へ。供奉の諸卿、竝に降参の輩に至るまで、罪科の輕重をいはず、悉く本官本領に復し、天下の成敗を公家に任せ進らせ候ふべしと、且は條々御不審を散せんために、一紙別に進覽候ふなりとて、大師勸請の起請文を副へて、淨土寺の忠圓僧正の方へ進らせられける。主上是を觀覽ありて、告文を進らせ上は、偽りてはよも申されじと思召されければ、傍の元老智臣にも仰合されず、總て還幸成るべきよしを仰出されけり。將軍勅答の趣を聞き、さては觀智淺からずと申せども、欺くに安かりけりと悦びて、さもありぬべき大名の許へ、縁に觸れ趣を伺ひて、潛に狀を通じて語られける。去程に還幸の儀、事潛に定りければ、降参の志ある者ども、かねてより今路、西坂本邊まで、抜けくに行き設けて、還幸の時分をぞ相待ちける。中にも、江田兵部少輔行義、大館左馬助氏明は、新田の一族にて何時も一方の大將たりしかば、安否を當家の存亡にこそ任せらるべかりしか。いかなる深き所存ありけん、二人共に降参せんとて、九日の曉より先づ山上に登りてぞ居たりける。義貞朝臣斯る事とは知り給はず、参仕の軍勢に對面して、事なき様にておほしける處へ、洞院左衛門督實世卿の方より、只今主上京都へ還幸成るべしとて、供奉の人を召し候、御存知候ふやちんと告げられたりければ、義貞さる事やあるべき、御使の聞誤にてぞあるらんとて、いと騒がれたる氣色もなかりけり。

るを、堀口美濃守貞満、聞きもあへず、江田、大館が何の用ともなきに、此曉中堂へ参るとて、登山仕りつるが怪しく覺え候、貞満先づ内裏へ参りて、事の様を見奉り候はんとて、耶等に著せられたる鑑取りて、肩に投げ懸け、馬の上にて上帯を締め、諸燈合せて参られたる。皇居近くなりければ、馬より下り、甲を脱きて中間に持たせ、四方を屹と見渡すに、臨幸只今の程と見えて、供奉の月卿雲客、衣冠を帯せり、未戎衣なるもあり、鳳輦を大床に差し寄せて、新典侍、内侍所の櫃を取り出し奉れば、頭辨範國、劍樂の役に隨ひて、御簾の前に跪く。貞満左右に少し揖して御前に参り、鳳輦の轅に取りつき、涙を流して申されけるは、還幸の事、兒女の説幽に耳に觸れ候ひつれども、義貞存知仕らぬよしを申し候ひつる間、傳説の誤かと存じて候へば、事の儀式早誠に候ひける。抑義貞が不義何事にて候へば、多年の粉骨忠功を思召し捨てられて、大逆無道の尊氏に親慮を移され候ひけるぞや。去ぬる元弘の始、義貞不肖の身なりといへども、奈くも輪旨を蒙りて、關東の大敵を數日の中に亡し、西海の宸襟を三年の間に休め進らせ候ひし事、恐らくは上古の忠臣にも類少く、近日の義卒も皆功を讓る處にて候ひき。其後尊氏が反逆願しより以來、大軍を靡して其師を處にし、萬死を出で、一生に逢ふこと、勝て計ふるに違あらず。されば義を重じて命を墜す一族百三十二人、節に臨みて尸を曝す耶從八千餘人なり。然れども今洛中數箇度の戰に、朝敵勢盛にして、官軍頻に利を失ひ候ふ事、全く戰の咎にあらず、唯帝徳の欠くる處に候ふか。仍りて御方に参る勢の少き故にて候はずや。詮ずる處、當家累年の忠義を捨てられて、京都へ臨幸なるべきにて候はず、唯義貞を始として、當家の氏族五十餘人を御前へ召し出され、首を刎ねて伍子胥が罪に比し、胸を割きて比干が刑に處せられ候ふべしと、忿る面に涙を流し、理を碎きて申しければ、君も御誤を悔いさせ給へる御氣色になり、供奉の人々も皆理に服し義を感じて、首を低れてぞおほせられける。

立儲君一被著于義貞一事附鬼切被進日吉事

暫くありて、義貞朝臣父子兄弟三人、兵三千餘騎を召具して参内せられたり。其氣色皆忿れる心ありといへども、しかも禮儀みだりならず、階下の庭上に袖を連ねて竝み居たり。主上例よりも、殊に玉顔を和げさせ給ひて、義貞義助を御前に近く召され、御涙を浮べて仰られけるは、貞満が朕を恨み申しつる處、一儀其謂あるに似たりといへども、猶遠慮の足らざるに當れり。尊氏、超涯の皇澤に誇りて、朝家を傾けんとせし刻、義貞も其一家なれば、定めて逆黨にぞ與せんと覺えしに、氏族を離れて志を義におき、傾廢を助けて命を天に懸けしかば、觀感更に淺からず、唯汝が一類を四海の鎮衛として、天下を治めんことを思召しつるに、天運時未だならずして、兵疲れ勢廢れぬれば、尊氏に一旦和睦の議を謀りて、且くの時を待たんと欲し、還幸のよしをば仰出さるなり。此事かねて内々知らせたくはありつれども、事遠聞に達せば、却つて難儀なる事もありぬべければ、期に臨みてこそ仰られめと打ち置きつるを、貞満が恨み申すに付きて、朕が謬を知れり。越前の國へは、河島の維頼先立ちて下されつれば、國の事定めて仔細あらじと覺ゆる上、氣比の社の神官等、致賀の津に城を拵へて、御方を仕るよし聞ゆれば、先づ彼へ下りて、且く兵の機を助け、北國を打ち隨へ、重ねて大軍を起して、天下の藩屏となるべし。但し朕京都へ出でなば、義貞却つて朝敵の名を得つと覺ゆる間、春宮に天子の位を譲りて、同じく北國へ下し奉るべし。天下の事小大となく、義貞が成敗として、朕に替らず、此君を取立て進らせし。朕已に汝がために勾踐の恥を忘る、汝早く朕がために范蠡が謀を廻らせと、御涙を抑へて仰せられければ、さしも忿れる貞満も、理を知らぬ夷ども、頭を低れ涙を流して、皆鐙の袖をぞぬらしける。九日は事騒がしき受禪の儀、還幸の粧に日暮れぬ。夜更くる程になりて、新田左中將、潛に日吉の大宮權現に参社し給ひて、靜に啓白し給ひけるは、臣苟くも和光の御願を憑みて日を送り、逆縁を結ぶ事日已久し。願くは征路萬里の末までも、擁護の御眸を廻されて、再び大軍を起し朝敵を亡す力を加へ給へ。我縦令不幸にして、命の中に此望を達せずといふとも、祈念冥慮に違はずは、子孫の中に必ず大軍を起すものありて、父祖の尸を清めんことを請ふ。

此二の中一も違ふことを得ば、末葉永く當社の檀度となりて、靈神の威光を耀し奉るべしと、信心を凝して祈誓し、當家累代の重寶に、鬼切といふ太刀を、社壇にぞ籠められける。

義貞以七千騎至鹽津。聞足利高經大兵塞途。轉由木芽嶺行。會大雪。士卒凍飢。燎弓箭。相抱取煖。土居得能氏。遇賊兵自殺。千葉氏舉其衆。叛降於賊。義貞行三日。纔至敦賀。河島維賴。氣比氏治。迎入金崎。遣義顯。義助於越後。至杣山。杣山城主瓜生保厚待之。而高經詐傳詔旨討新田氏。檄至。保信之。閉闕自守。其弟僧義鑑來謁曰。臣兄愚魯。輕信賊計。雖然。苟曉是非。終歸順耳。臣願得擁戴一公子。候時乃起。義助察其無他。遂以其子式部少輔義治託之。而引兵還金崎。兵道亡。有一百騎。會今莊淨慶聚兵塞道。淨慶父嘗屬我軍者。義助乃令由良光氏往說之。淨慶答曰。臣去就與父異。不得不沮。願得部下一名士以藉口。光氏歸報。義顯曰。諸君從我至此。情同父子。寧我代士。莫士代我。往復告之。弗聽。則齊戰死耳。光氏往告焉。淨慶不決。光氏下馬。坐曰。將帥身係天下輕重。猶欲以身代吾輩。吾其可不致命。拔刀將自殺。淨慶感歎。遽止之曰。吾寧當罪耳。開道跪伏。義助。義顯。撫勞而過。其兵又亡。在者僅十六騎。而聞敵以

三萬騎圍金崎。欲衝圍入城。衆難之。栗生顯友出策。夜使衆解衣帶。挂之樹。爲旗幟狀。以張疑兵。武田與一傷右手。約木刀于腕。顯友亡副刀。斫木爲槌。乘曉薄敵。呼曰。杣山援兵至矣。敵駭顧。義貞因出擊走之。納義助。義顯。於是相與奉東宮。皇子於船。置酒奏樂。以慰藉之。

【鹽津】……越前に在り。【木芽嶺】……越前に在り。【杣山】……越前に在り。【閉闕】……關は一に門に作る。關を閉ぢて新田氏を入れじとする也。【愚魯】……愚癡遲鈍。おろかにして智慧なきこと。【苟曉是非】……曉は開明なり。まことに是非善惡の道理を開き諭して理解せしむるときは。【歸順】……逆を捨て、順道に歸する。【候時乃起】……然るべき時期を待ち合はせて義兵を起す。【無他】……異心なき也。【式部少輔】……大輔の次の官。【淨慶父】……久ときは、恐らくは罪を得んとす。【藉口】……口實とする。言ひ譯とする。淨慶、一名士の首を得て足利氏への言譯とせんとす也。【係天下輕重】……その生きるゝと死ぬるとは、天下をして或は重からしめ或は輕からしめ、關係するところ實に重大なり。【當罪】……罰を引き受け。足利氏に罪せらるゝを云ふ。【撫勞而過】……ねんごろに挨拶して通り過ぎる。義顯、佩ぶるところの金裝刀を淨慶に與へて曰く、我若し戰没せば、他日此を以て子が功を證せん。終に城に入る。【難】……はかばか。六かしいとする。【挂】……かける。【約】……くくりつける。【副刀】……差し添への刀。【槌】……音テイ。杖。【慰藉】……音キシヤ。慰は安なり、藉は薦なり。なぐさめおちつかせる。

かくて、義貞は、七千騎を引き連れて、鹽津に至つたが、足利高經が大軍を引き連れて路を塞いで居ると云ふ事を聞いたので、路を變へて、木芽嶺から行くことにした。折悪しく大雪が降つたので、士卒は凍え且つ飢ゑたので、弓矢を火に燃やし、相互に抱き合つて煖まつたほどであった。土居氏、得能氏は、賊兵に出つてはして自殺して仕舞ひ、千葉氏は、其部下の士卒を残りず引き連れて、賊軍に降参した。かくて、義貞は行くこと三日にして、やつと敦賀まで到着した。河島維賴、氣比氏治が、迎へて金崎に入つた。義顯と義助とをば越後に派遣することにして、此二人は杣山に到着した。杣山の城主瓜生保が、手厚く之を待遇した。然るに、高經が、詐つて、後醍醐帝は已に足利氏と和して詔を下して新田氏を討つとの觸れ文を廻してよこしたので、保は、おろかに此事を信じて、關所を閉ぢて自ら守つて、新田氏を通行させぬやうにした。其弟の僧義鑑が來つて謁して曰ふには、私の兄は愚にして智慧鈍く、かるゝしく賊のはかりごとを信じたので、こんな事に立ち至りました。けれども、まことに是非善惡の道理を論し聞かせましたならば、仕舞には、逆を捨て、順道に附くに相違御座りませぬ。私願は、一人の若様を守り立て、然るべき時期を待ち合はせて義兵を起したいと思ひますと曰つた。義助は、義鑑が他心無きとを察して、とうとう其子式部少輔義治を之に預けてゐて、兵を引き上げて金崎に還ることにした。兵士は途中で逃げ去つて、二百騎となつた。折しも今莊淨慶といふ者が、兵士を集めて道を塞いで居つた。淨慶の父は、以前に我が軍に附いて居つた者であつたので、義助は、そこで、由良光氏をして行つて之に説かしめて、道をあけて通してくれろと曰つた。淨慶が答へて曰ふには、私が身の振り方は父とは違つ

て居りまして、足利氏に附いて居る者の事でありませうから、御通行を留めない譯には行かないので御座る。どうか部下の一人の名士の首を得て、それで以て足利氏に對する言ひ譯といたしましやう。さうなるならば、路をあけて通しましやうと曰つた。宗氏は歸つて此事を報告した。すると、義顯が曰ふには、諸君は我に附き従つて此に至られたので、其情は親子と同じ位である。されば、いつその事、我自ら部下の士卒に代るとも、部下の士卒をして我に代りしめることを致すことは無い。行つて今一度之を淨慶に告げられよ。それで聞き入れないならば、一所に討死するばかりであると曰つた。光氏は行つて此事を告げた。淨慶は、どちらとも心が決定しない。そこで、光氏は馬から下りて地に坐して曰ふには、大將の一身の生死は、天下をして輕からしめ又は重からしめるほどの重大なるものであるのに、それでも猶ほ、其一身を以て吾等に代らうと思はれるのである。して見れば、吾は生命を投げ出さないで居ることが出来やうぞと曰つて、刀を抜いて將に自殺しやうとした。淨慶は、之を見て、大に感動し嘆息して、あはて、之を止めて曰ふには、大將といひ貴殿といひ、實に天晴の人達であつて見れば、拙者とても餘りに無情なる振舞をするとは出来ぬ。それよりは、いつその事、拙者が足利氏から罪を受けることに致さうと曰つて、道を開き、跪いて地に伏した。義助、義顯は、叮嚀に挨拶して通つた。其部下の兵士は又逃げ出して、殘つて居る者は、わづかに十六騎となつた。そして、敵は三萬騎を以て金崎城を圍んで居るといふ事を聞いて、その圍を衝き崩して城に入り込まうと思つたが、皆々は、それを六かしい事と思つた。栗生顯友が、一策を案出して、夜、人々をして帶を解いて之を樹に掛けさせて旗差し物の様に見せかけて、兵士があると思はれるやうにして置いた。武田與一は、右手に負傷して刀を持つことが出来ないもので、木刀を腕にくくり附け、顯友は、差し添への刀を失つたので、木を切つて棒となし、夜明けの頃物の色などの未だ明に見えぬ時に乗じて、敵軍に近く迫り、大に呼ば、つて曰ふには、杣山からの援兵が來たと曰つた。敵は振り返つて見ると、例の帯が掛かつて居るのを見て、まこと、思うて、驚いた。義貞は、そこで、城から出て撃つて之を敗走させ、義助、義顯を城に入れた。こゝに於て、相與に、皇太子恒良親王、皇子尊良親王を舟に御連れ申上げて、酒宴を開き音楽を奏して、陣中の無聊を慰め申し上げた。

尊氏又遣高師泰等將兵六萬海陸來攻城負山臨海城兵拒戰日斃千餘人十一月城兵望見海上有人泅者望城而來至則互忠景也結詔書於髻進之蓋天皇逃於吉野建行宮詔義貞攻京師也義貞等大喜時瓜生保屬賊軍在城下而其諸弟起杣山以應義貞保將拔還思得同志者宇都宮泰藤天野政貞與保鄰營一日有客問二人曰重畫中黑孰美泰藤曰中黑哉三鱗廢而重畫興代重畫者非中黑乎三鱗者北條

氏徽號也政貞曰然保聞而竊喜寢與一人款因告其志二人同之時高師泰四設關以符出入保詐請以百五十人歸邑取菽吏給符如其言保削符改書三百人與泰藤政貞俱出關入杣山義鑑及三弟源淋重照皆大喜推義治爲將舉旗招兵兵聚千餘扼守北道師泰聞之遣六千騎來擊保悉焚聚落故遺湯尾一驛以誘敵敵至宿驛中保與泰藤遣輕兵夜襲敗之聞足利高經引兵歸國府又要擊破之旁近望風爭附義治義治有不豫色義鑑曰郎君可喜而憂何也曰思金崎城守之苦焉爾義鑑泣下泰藤政貞隔牆聞之曰此子有心腸如此吾曹曷可不出力

【等】……音ケイ。……と。……髪結び目。【吉野】……大和に在り。【拔還】……引き拂つて還る。【三鱗】……みつうろこ。【寢款】……寝は漸く也。……ひく。……懸心を通ずる。【菽】……豆。馬の飼料にする也。【源淋】……一に源淋に作る。【扼守】……番兵を置いて喰ひとめ守る。【聚落】……村里。【不豫色】……楽しまざる色。不機嫌なる様子。【郎君】……若様。【有心腸】……思慮行きわたりて情深きこと。【曹】……輩。……ともがら。【詔書】……尊氏は、又、高師泰等を派遣して、兵士六萬人を引き連れて、海と陸と兩方から來つて攻めさせた。金崎の城は、後には山を負ひ、前は海に臨んで、要害堅固であつて、城兵は拒ぎ戦つて、日々千餘人の敵兵を斃した。十一月に、城兵が海上を望み見ると、一人の泳いで居る者があつて、城の方を目標けて來たが、到着して見ると、巨忠景であつた。忠景は、後醍醐帝の詔書を髪のもとに結び付けてあつたのを取り出して、之を差出した。大體、それは、天皇が吉野に御逃げになつて、行宮を御建てになつて、義貞に詔して京都を攻めさせなされやうとの詔書であつた。義貞等は、大に喜んだ。その時に、瓜生保は賊軍に附いて居つて、金崎の城下に居つた。そして、その弟共は杣山に旗擧げして、義貞に應援した。そこで、保は、引き拂つて還らうとして居つて、同志の者を得たいと思つて居つた。宇都宮貞藤と天野政貞とは、保の隣の陣屋に居つたが、ある日、客があつて、話のついでに、二人に問うて曰ふには、足利氏の紋所なる二つ引と新田氏の紋所なる中黒とは、どちら

ちが立派であるかと問うた。すると、泰藤が曰ふには、それは中黒である。三つ鱒が廢れて仕舞つて二つ引が盛んになつたが、今度、二つ引に代る者は、中黒ではあるまいかと曰つた。三つ鱒と云ふのは、北條氏の紋所である。すると、政貞が曰ふには、いかに左様であるかといつた。保は、隣の陣屋から之を聞いて、心の中で喜んで、おひく二人と懇心を結んで、そこで自分の志望を告げた。二人は之に賛成した。その時に、高師泰が、四方に關所を設けて置いて、切手を以て出入を許して居つた。保は、詐りて、百五十人を引き連れて、領地に還つて、馬の飼料にする豆を取つて來たいと請うた。すると、役人は、保の言ふ通りに切手をくれた。保は切手を削つて、百五十人とあつたのを、三百人と書き直し、泰藤、政貞と一所に、關所を出で、杣山に入つた。義鑑及び三人の弟の源林、重、照は、いづれも皆大に喜んで、義治を推して大將とし、旗を擧げて兵士を招き寄せた。兵士の聚まるもの千餘人あつた。それを以て、北陸の道を喰ひ止めて守つて居つた。師泰が之を聞いて、六千騎を派遣して來り撃たしめた。保は、残りず村を焼き拂つて、わざと、湯尾の驛一つを残して置いて、以て敵をおびき寄せた。利高經が兵士を引き纏めて國府に歸らうとして居ることを聞いて、又、さへぎり撃つて之を敗つた。そこで、近傍の者は風を望んで争うて義治に附いたので、大分勢が盛んになつた。然るに義治は、樂まざる様子をして居つたので、義鑑が曰ふには、若くは御喜びになるべき筈であるに、御心配に御見えなさるは、如何なる譯で御座りますかと曰つた。義治が曰ふには、金崎城の籠城は嗚呼しからうと思ひ遣つて居るからであるといつた。義鑑は之を聞いて覺えず涙を落した。泰藤と政貞は、牆を隔てたる別室に於て之を聞いて曰ふには、此人が情深く思ひ遣りのあること此の如くであつて見れば、われは、どうして奮發して力を盡さず居られやうかといつた。

明年正月。推里見時成爲將。以五千騎救金崎。師泰遣兵二萬逆戰。諸將敗走。時成爲賊所圍。保義鑑挺身赴援。其二弟欲從之。義鑑叱曰。吾兄弟皆死。誰翼式部君者。三弟乃止。時成。保義鑑皆死。餘衆走歸杣山。保有老母。酌酒獻義治曰。兒輩不力。乃亡里見公。然使兒輩盡還。則妾心云何。今二兒致命。足慰妾心耳。將士爲之奮激。然力不能再舉。

【異】……輔くる。【式部君】……義治は式部少輔なるが故にかく云ふ。【不力】……つとめず、力を出して働かぬ。

【訓】 明年正月に、里見時成を推し立て、大將となし、五千騎の兵士を引き連れて、金崎城を救はうとした。すると、師泰が、兵士二萬人を派遣して途中に迎へ撃つたので、諸將は敗軍して走り、時成は賊兵の爲めに圍まれたので、保と義鑑とが、身を抜き出して援けやうとした。その三人の弟が、之に従つて行かうとしたが、義鑑が叱り付けて曰ふには、吾が兄弟が皆討死して仕舞つたならば、誰か式部少輔を輔けるものがあるか、皆様等は残り留まつて居れといつたので、三人の弟は、そこで、止めた。かくて、時成、保、義鑑は皆死んで仕舞ひ、残つて居る者

共は、逃げ走つて杣山に歸つた。保には、年老いた母があつたが、此老母が酒を酌んで義治に進めて曰ふには、伴どもが十分に働かせんで、そこで里見殿を討死させて仕舞ひました。けれども、伴どもが残り生きて還りましたならば、妾の心に於て里見殿に對して何とも相濟まぬことで御座います。が、それでも、二人の伴が討死いたしましたので、妾の心を慰めることが出来ますと曰つた。諸の將士どもは、これが爲めに感心して奮發した。けれども、何しろ力が弱くして、再び打つて出ることは出来なかつた。

金崎城中日望杣山援不至。已而糧竭。義貞。義助殺所愛馬。以食士卒。將士皆勸其出赴杣山。以計夾攻。義貞。義助從之。三月。以河島維賴爲鄉導。乘夜出城。潛入杣山城。城兵大喜。日議援金崎。而賊兵乘暖來聚。至十萬騎。杣山兵僅五百人。甲馬不備。逗撓二旬。金崎兵食馬。馬盡。無可食者。賊候知之。四面齊登。城兵力竭不能戰。外城既破。由良具滋。長濱顯寬。入見義顯曰。事已至此。脫東宮而留死。臣等請拒戰。君徐爲計。率五十人出。割死尸。相共食之。力拒前門。義顯謂皇子尊良曰。臣將種。不可不死。殿下與臣異。勿遽自殘。皇子笑曰。吾視卿死。豈可獨生。因問義顯自殺之方如何。義顯曰。視臣所爲。即拔刀。自樹左脇。劃至其右。奉刀於皇子而伏。皇子取刀。血滑不可握。握以衣袖。自刃而死。藤原行房。里見時義。武田與一。氣比氏治等。皆殉死之。

【逗撓】……音トウタウ。たゆむ、ひるむ、おくれが出てたゆみて居る也。逗は曲り行きて敵を避くる也。撓は屈む也。【候】……何ふ。【割死尸】……屍骸を割いて料理する。【殿下】……陛下に次ぐの稱。皇子を指して云ふ。【自殘】……みづからそなたを、自殺也。【方】……方

法、しかた。〔樹左脇〕……左の脇腹に刀をつき立てる。割……音クワク、刀を以て割破する也、一文字に引きまはすこと。〔血滑〕……滑は、なめらかと訓ず。血がぬる／＼とぬめる。〔殉死〕……主君の死にたるとき、其臣たるもの、後を追ひて従ひ死すること。追腹を切る。

關 此の時に、金崎の城中に於ては、日々、山崎の援兵が来るのを待ち望んで居つたけれども、なかく、来ない。とかくする中に、兵糧がなくなつて仕舞つたので、義貞、義助は、自分の愛して居るところの馬を殺して、それを士卒に食はせた。將士は皆、此城から出掛けて山に赴いて挟み撃ちをすることを勧めたので、義貞、義助は、之に従つて、三月に、河島維頼を案内者として、夜の暗闇につけ込んで城を出たので、來り集まり、十萬騎に及んだ。山崎の城兵は、大に喜んで、日々、金崎城を援けることを評議した。然るに、賊兵は、氣候がだん／＼暖かくなつたので、來り集まり、十萬騎に及んだ。その間に、金崎の城兵は、馬を食べて居つたけれども、馬も盡きて仕舞ひ、食ふ可き者が全くなくなつた。賊兵は、之を伺ひ知つて、四方から一齊に城壁へ攀ぢ登つて來たけれども、城兵は糧食が無くて餓えて居つたので、力は盡き果て、戦ふことが出来なかつた。かくて、外城はすでに破られて仕舞つたので、由具具滋、長濱顯寛が、内に入つて義貞に見えて曰ふには、事は、或は此の如き情態に至りました。もはや如何とも致し方は有りませぬから、皇太子殿下をば御逃げなされるやうにして、こゝに留まつて死にましやう。我等、その間、拒ぎ戦ふことに致しませぬ。貴殿は、其間に、そろ／＼と御覺悟をなされよと曰つて、五十人の兵士を引き連れて城の外に出で、屍骸の肉を割いて、相共にこれを食べ、少し力を附けて、力を盡して前の門を拒いで居つた。義貞は、皇子尊親王に向つて申上げるには、私は武將の身分で御座りますれば、死なぬわけには参りませぬ。殿下は、私とは御身分が違つて居られますこと故、あはてて自殺などなされませぬと申上げた。皇子が笑つて仰せられるには、われは、御前が死ぬるを視て居つて、どうして自分獨り生きて居ることが出来やうかと仰せられて、そこで、義貞に、自殺する方法を御尋ねになつた。義貞が申上げるには、私が致しますところを御覽なされませと申上げて、即座に刀を抜いて、自分で左の脇腹に突き立て、一文字に引き廻して、右の脇腹に届かせて、其刀を皇子に差上げて、うつ伏しになつた。皇子は、刀を御取りになつたけれども、血がぬる／＼として、握ることが出来なかつたので、衣服の袖で握つて、自殺して御仕舞なされた。藤原行房、里見時義、武田興一、氣比治等、皆追腹を切つて死んで仕舞つた。

氣比齊晴有、善泐舟載太子。無楫櫓。施綆于舟。執之而游。游千餘步。至蕪木浦。託土人使奉之。山崎而歸。死于金崎。具滋顯寛謂事畢矣。開門冒陣。進薄師。賊認其疲羸。觀輒殺之。凡城兵八百。降者十二人而已。其餘皆死。栗生顯友、船田經政等四人。匿岩穴免焉。太子匿蕪木浦。浦人叛告之。賊取太子。問義貞兄弟所在。太子給曰。昨自殺矣。其兵火之

賊乃押送太子於尊氏。傳義顯首而不問義貞。

〔齊晴〕……大宮司太郎。〔善泐〕……音ヨリヨク。腕の力。〔楫櫓〕……かぢろ、舟を進むる道具。〔綆〕……音コウ、大綱。〔游〕……およぶ。〔蕪木浦〕……越前に在り。〔謂事畢矣〕……自殺すべきは自殺し落ち延びべきは落ち延び、萬事最早済んだと思ひし也。〔託〕……みとめる、辨識なり。〔疲羸〕……音ヒルキ。疲れ弱る。〔觀〕……見る、出遇ふ。〔給〕……欺く、だます。〔押送〕……押は音ア、櫓也。牢輿に載せて送る。〔氣比齊晴〕……腕力が強くて、およぶことが上手であつたが、舟に皇太子恒長親王を御載せ申上げたけれども、楫（カチ）も櫓も無くて舟を漕ぐことが出来なかつたので、大きい綱を舟にくくり付けて、それを持って泳いで行つた。泳ぐこと千餘歩にして、蕪木浦に到着して、土地の人に皇太子を御預け申上げて、之を山崎に御連れ申させることにして、自分は金崎に歸つて死んで仕舞つた。具滋顯寛は、皆々も自殺して仕舞はれたことであらうから、もう是れまでだと覺悟して、門をさつと押し開いて、敵陣を冒し、進んで師泰の近くまで追つた。賊は、二人が疲れ弱つて居るのを見とめて、出遇ふと、すべに之を殺して仕舞つた。金崎の城兵は總て八百人あつたが、賊に降参した者は、僅に十二人のみで、其他は皆死んで仕舞つた。栗生顯友、船田經政等の四人は、岩の穴に隠れて居つて、幸にして免れた。皇太子は蕪木浦に隠れて居られたが、浦の人が背いて、此事を賊に告げ知らせたので、賊は皇太子を迎へ取つて、義貞兄弟の居る所を御尋ね申したが、皇太子は、わざと欺いて仰せられるには、昨日自殺して、其部下の兵士が焼いて仕舞つたと仰せられた。賊は、そこで、皇太子を牢輿に載せて尊氏の許に送り、義貞の首を傳へ送つて、そして義貞の事をば格別穿鑿しなかつた。

義貞在。山崎常欲一戰雪恥。以爲行宮聲援。開招聚義故。夏。大館氏明白。京師逃。伊豫江田行義逃。丹波金谷經氏逃。播磨竝起兵。義貞次子德壽。在上野。聞源顯家西上。聚兵應之。欲先發攻鎌倉。及顯家至。合兵攻拔之。於是歸義貞者頗多。尊氏聞義貞未死也。冬遣足利高經。舉北陸兵來擊。據越前府。出兵交戰。義貞遣畑時能。糾加賀兵。攻拔大聖寺城。遣義助及細谷秀國。入越前。築三砦。與高經相持。明年。二月。雪釋。義助欲益築城逼敵。率百餘騎。相地於鯖江。遇賊將細川孝基。以五百騎奄至。

義助擊走之。因舉火招援。義貞來援。高經又以數千騎來。夾水而陣。我兵亂流大戰。擊破高經。高經走。保足羽。賊望風解走者二十餘城。義貞因據國府。事聞京師。尊氏直義怒曰。太子給我至此。遂鳩殺之。

【雪恥】……雪は洗ふ也。はぢをす。【聲援】……加勢の評判を立て、勢をつける也。援くるに聲のみを用ひて手を下さざるを聲援と云ふ。【閉】……ひそかに。【義故】……義奮と云ふが如し。舊恩を忘れぬもの共。【德壽】……後、義興と稱す。【糾】……音キウ。寄せ合はす。【大聖寺城】……加賀に在り。【音】……音サイ。とりで。【相地】……相は視る也。土地を見立つる。【鯖江】……越前に在り。【奄至】……たちまち至る。不意に攻め寄せ。【足羽】……越前に在り。【鳩殺】……音チンサツ。毒殺する。

義貞は、山に居たが、常に、一たび戦争をして先達ての敗軍の恥辱をす、ぎ、そして、吉野の行在所の加勢をするとの評判を立て、勢を附けやうと思つて居たので、ひそかに、恩義を忘れざる故舊を招き集めた。夏、大館氏明は京都から伊勢に逃げ、江田行義は丹波に逃げ、金谷經氏は播磨に逃げ、相並んで義兵を起した。義貞の第二子德壽は、上野に居たが、源顯家が西の方京都へ向つて上らうとして居ると聞いて、兵士を召し集めて之に味方して、先づ出發して鎌倉を攻めやうと思つたが、顯家が到着したので、兵士を一所に合はせて、鎌倉を攻め落した。こゝに於て、官軍の景氣が大分善くなつたので、義貞に附く者が随分多かつた。尊氏は、義貞が未だ死な、かつた云ふ事を聞いたので、冬、足利高經を派遣して、北陸道の軍勢を擧げて來り撃たしめ、越前の國府に立て籠つて、兵を繰り出してかばるゝ戰つた。義貞は、畑時能を派遣して、加賀の兵士を寄せ合はせて、攻めて大聖寺の城を抜き取り、義助及び細谷秀國を派遣して、越前の國に討ち入り、三箇所のとりでを築いて、高經と、睨み合つて居た。明年二月に、雪が解けたので、義助は、まずく城を築いて敵に近づき迫らうと思つて、百餘騎を引き連れて、地所を鯖江に見立て、居たが、賊の大將細川孝基が五百騎を引き連れて不意撃をして來るのに出遇つて、撃つて、之を敗走させ、そこで、烽火(ノロシ)を擧げて救援の兵を招き呼んだので、義貞が來つて援けた。高經が、又、數千騎を引き連れて來つた。河を閉に置いて相對して陣取つた。我が兵士は河を横切り渡つて、大に戰つて、撃つて高經を破つた。高經は、敗れ走つて、足羽に立て籠つた。賊兵が、其の様子を見て、これでは迎へ叶はぬと思つて、解散して逃げ走つたのが、三十餘城もあつた。義貞は、そこで、國府に立て籠つた。此事が京都に聞えると、尊氏と直義とは大に怒つて曰ふには、皇太子が、義貞は死んだなど、云つて自分を欺いたので、此の如き事に立ち至つたのであると云つて、とうとう、皇太子恒良親王を毒殺して仕舞つた。

當是時。官軍頗振。德壽從顯家至美濃。堀口貞滿亦附之。皆願與義貞合軍。以入京師。而顯家欲獨專其功。遂引兵回出南都。時叡山僧徒又多望義貞來。而義貞欲必拔足羽。而後西。是時。顯家敗死和泉。其弟顯信與

德壽等。據男山。帝手書諭義貞。援男山。時大井田氏經等。發越後兵。擊破普門。富樫二氏。七月。進至越前。義貞并其兵將攻高經。而詔書適至。義貞感奮曰。自有源平氏。未聞得天子親書詔者也。因欲直赴援。用兒島高德策。自以兵二千備高經。以一萬附義助。至敦賀。聞男山陷。引還。於是合兵專攻高經。

【貞滿】……新田氏の一族、美濃守たり、故に之に附く。【獨專其功】……自分一人で手柄を立てやうと思ふ。【男山】……山城に在り。【普門富樫】……普門藏人俊清、富樫介二氏は並に加賀に邑す。【適至】……丁度其時に到着せり。

この時分には、官軍は餘程景氣が善かつた。德壽は、顯家に附き從つて美濃に到着した。新田氏の一族なる美濃守堀口貞滿も亦之に附き、とうとう兵を引き連れて、廻つて奈良に出掛けた。その時に、叡山の僧徒には、又、義貞が來ることを待ち望んで居るものが多かつた。然るに、義貞は、是非とも足羽を攻め落して仕舞つてそれから後に西の方京都に向はうと思つた。この時に、顯家は和泉國に於て敗軍して死んで仕舞ひ、其弟顯信は、德壽等と與に、男山に立て籠つて居た。後醍醐帝は、御親筆の書面を以て、義貞に御諭しに成つて、男山を援けるやうにと仰せられた。時に、大井田氏經等は、越後の軍勢を繰り出して、普門、富樫の二氏を撃ち破つて、七月には進んで越前に到着したので、義貞は、其軍勢を一所に立て、まことに高經を攻めやうとして居るところであつた。然るに、御詔の書面が、丁度其時に到着したので、義貞は、大に感動し奮激して曰ふには、源氏平氏といふ者があつてから以來、未だ天子様の御親筆の御詔を戴いた者を聞いたことは無い。實に有りがたい事であるといつて、そこで、直に出掛けて行つて援けやうと思つた。そこで、兒島高德のばかりごとを用ひて、自分は兵士三千人を引き連れて、高經の方に備へ、二萬の兵士を以て義助にあづけて、敦賀まで至つたが、男山はすでに落城したといふ事を聞いて、引き還した。こゝに於て、兵を合はせて、専ら高經を攻めることとした。

高經誘平泉寺僧兵。修藤島以下七寨。守之。義貞在河合城。夢已爲龍臥地。高經駭走。衆以爲吉夢。或曰。龍爲陽物。方陰而見。是凶兆也。是月二日。義貞以諸軍攻足羽。至燈明寺前。分兵爲七隊。以當七寨。藤島兵擾動。

我共因疾攻不能拔。義貞望見。遽以五十餘騎赴之。遇賊兵二百于田中。矢下如雨。我兵無楯。以身蔽義貞。中野宗昌勸義貞獨身遁逃。義貞曰。失士而獨免。非吾志也。鞭馬且進。馬被箭殪。義貞欲起。有白羽箭。中其眉間。乃拔刀自刎而死。年二十八。賊未知其何人也。見宗昌等環屍自殺。又檢尸得錦囊書。書辭曰。討賊之役。朕一煩卿。蓋帝手書。乃知其義貞也。時日暮。我軍無赴救者。已而見數騎還河合也。以爲義貞。各自退還。義助還至河合。求義貞不在。久而知實。將士惶惑。有叛者。夜將火城者。二天明。檢其兵。則二千而已。義助乃走歸國府。使河島維賴保三峯。畑時能保湊城。瓜生照保。山。

【平泉寺】……越前に在り。【河合城】……越前に在り。【或曰】……ある人とは齋藤道成なり。【方陰而見】……陰の時。當つて地上に見はれる。龍は陽物にして、陽氣に向ひては威を震ひ、陰の時に至りては蟄居するものなるに、時は今七月にして陰の初なるに當りて陽物たる龍を見るは凶兆なりと云ふ也。【自刎】……みづからちりくびはぬ、自分で自分の首をはね落す。越前國足羽郡に義貞の墓あり。【環屍】……四方から義貞の屍骸をとりまいて死んで居る。【錦囊書】……錦の囊に入れたる書付。【煩卿】……すべて汝に世話をかける。【久而知實】……餘程時がたつてから、義貞が討死した事を知つた。【三峯】……越前に在り。高經は、平泉寺の僧徒の兵士を誘うて、味方に附かせ、藤島以下の七箇所のとりでを修復して、これを守らせて居つた。義貞は、河合城に居つたが、自分が化して龍となつて地上に臥して居ると、高經等は驚いて走つたといふ夢を見た。多くの人々は、それを目出たき夢であると曰つたが、ある人が曰ふには、龍は陽物であつて、陽氣の盛んにならうとする時に出来るものであるのに、それが、今、陰氣の初めの七月に當つて、見はれるのであるから、此夢は不吉の前表であるといつた。この月二日に、義貞は、諸軍を以て高經の本城たる足羽を攻めやうとして、燈明寺の前に至つて、兵士を分けて七隊として、それで、七箇所の取手に當つた。藤島城の敵兵が、騒ぎ亂れたので、我が兵は、そこできびしく攻め立てたけれども、攻め落すことが出来なかつた。義貞は、それを望み見て、あはて、五十餘騎を引き連れて、その方に出掛

けて行かうとしたが、途中の田の中で、三百人の賊兵に出遇ひ、矢の下ることが雨の降るが如くであつた。然るに、我が兵士は楯を持つて居なかつたので、自分の身を以て義貞を蔽ひかばつて居つた。中野宗昌が、義貞に、其身一つで遁れ逃げるやうにと勧めたが、義貞が曰ふには、部下の士卒を無くして仕舞ひ自分一人で難をのがれるとは、吾が欲するところでは無いと曰つて、馬に鞭をあてながら進んで行くと、馬は矢の中つて斃れて仕舞ひ、義貞は轉げ落ちた。義貞が、起き上らうとする、白羽で切れた箭が飛んで来て、義貞の眉間に中つたので、そこで、逆も助かることは出来ぬと思つて、刀を抜いて、自分で自分の首をはねて死んで仕舞つた。年は三十八歳であつた。賊兵は、この死んだ人が誰であるかと云ふ事をば未だ知らなかつたが、宗昌などが此屍骸を取り巻いて死んで居るのを見、又、屍骸を檢査して、錦の囊に入れてある書付を得たが、其文句に、賊軍を征伐する事は、朕は、専ら汝に厄介を掛けると書いてあつた。大方、後醍醐帝が御自身に御書きになつたものであると、そこで、此人は義貞であると云ふ事を知つたのである。其時分には、もはや日が暮れかゝつて居て、我が軍には、行つて救ふ者が無かつたので、むづくと義貞を討死させたのである。とかくする中に、數騎の兵士が河合に還つて来るのを見たので、それが義貞であると思つて、各々自分で退軍して還つた。義助は、還つて河合に到着して、義貞をさがし求めたけれども、義貞は居なかつた。やゝしばらくしてから、眞實の事情が知れた。そこで、將士は恐れまどうて、如何して善いやら分らず、叛く者さへもあつて、其夜の中に、城に火を附けやうとすること三度にも及んだ。夜明け頃に、其兵士をしらべて見ると、僅に二千しか残つて居りなかつた。義助は、そこで、走つて國府に歸り、河島維賴をして三峯に立て籠らせ、畑時能をして湊城に立て籠らせ、瓜生照をして山に立て籠らせた。

照歸。遇藤原氏于淺津橋。藤原氏者。中納言行房妹。而義貞夫人也。初爲勾當内侍。延元初。義貞夜入直。見其彈箏。心慕焉。帝聞而憐之。召義貞。賜酒。因賜内侍爲妻。伉儷甚篤。義貞之受詔北行。置之於近江。居一歲。迎致山山。既至。聞義貞在足羽。轉赴之。途遇照。照下馬。跪與前曰。夫人安往。公已戰沒矣。夫人大慟。殆絕。歸山山。欲執喪于義貞舊居。以敵來逼。遂歸京師。是時義貞首傳至京師。足利氏君臣相慶。終梟之。藤原氏聞之。即夜削髮。遂匿西山終身。

【淺津橋】……越前に在り。【勾當内侍】……凡そ内侍と云ふは掌侍を指すなり。内侍は四人あり。その内の第一なるを勾當内侍と云ふ。宣傳奏請を掌る。【延元初】……太平記には、建武の初に作る。【入直】……宮中に入りて宿直する也、との也。【彈箏】……琴をひく。箏は十三絃

の琴なり。仇儂……音カウレイ。配耦なり。夫婦の間柄の極めて睦まじきを、仇儂甚篤と云ふ。【大團圞絶】……儂は哀過ぐる也。度に過ぎて大に哀む也。大になげき哀んでほとんど氣絶せんとするほどなること。【執喪】……喪に服する、忌服を受けて引き籠る。【驚】……悦び祝ふ。
【開】かくて、照は山に歸らうとして、途中の淺津橋に於て、藤原氏に出つくはした。藤原氏と云ふのは、中納言藤原行房の妹であつて、義貞の奥方である。はじめ、勾當の内侍といふ女官であつた。延元年間の初めに、義貞が夜、宮中に入つて宿直したときに、内侍が琴をひいて居るのを見て、心に慕はしく思つて居つた。後醍醐帝は、之を御聞きになつて、義貞の心根を不便と思召して、義貞を御召しになり、酒を賜はり、そこで、内侍を賜はつて、義貞の妻となさしめられたが、夫婦の仲は大層睦まじくあつた。義貞が詔を奉じて北國へ向つて出掛けるときに、之を近江國に置いた。その後二年たつてから、山に呼び寄せたことにした。かくて山に行き著いて見ると、義貞は足羽に居ると云ふ事を知つたので、轉じて其處に赴かうとしたが、その途中で照に出つくはしたのである。照は馬から下りて、奥の前に跪いて曰ふには、奥方は何處に御出でになるので御座りますか。義貞公は最早討死致されましたと曰つた。奥方は、之を聞いて、大に哀み歎いてほとんど氣絶しやうと致された。それから、引きかへして、山に歸つたが、義貞がもと住んで居つた場處で喪に服して引き籠らうと思つたが、敵兵が來つて近づき逼つて居るので、とうとう、京都に歸つた。この時、義貞の首は、送られて京都に到着した。足利氏の君臣は、互に喜び祝つて、仕舞に之を獄門にさらした。藤原氏は、此事を聞いて、その夜に、髪を剃つて、尼となつて、とうとう、京都の西山に隠れて、一生を終つた。
【参考】左に太平記の一章を録して參考に資す。

義貞首懸獄門一事附勾當内侍事

新田左中將の首京都に著きければ、是れ朝敵の最、武敵の雄なりとて、大路を渡して、獄門に懸けらる。此人、前朝の寵臣にて、武功世に蒙らしめしかば、天下の依頼として、其芳情を悦び、其恩顧を待つ人、幾千萬と云ふ數を知らず、京中に相交はりたれば、車馬路に横はり、男女岐(チマタ)に立つて、是れを見るに堪へず、泣き悲む聲嗚々たり。中にも彼の北の臺勾當の内侍の局の悲を傳へ聞くこそあはれなれ。此女房は、頭の大奉行の女にて、金屋の内に粧を閉ぢ、雞障の下に媚を深くして、二八の春の比より、内侍に召されて、君王の傍に侍り、羅綺にだまされ、椒房の三十六宮、五雲の漸くに遠ることを祈(イタ)み、禁漏の二十五聲、一夜の正に長きことを恨む。去んぬる建武の始、天下又亂れんとせし時、新田左中將常に召されて、内裏の御警固に候はせられたる。或る夜、月冷(スサマ)じく風ひや、かなるに、此勾當の内侍、半ば簾を捲きて、琴を弾じたまひけり。中將、其怨聲に心引かれて、覺えず禁庭の月に立吟(サマヨヒ)、あやなく心を著るに、あこがれがたければ、唐垣(カラカキ)の傍に立ち紛れて伺ひける。内侍、見る人ありと物怪しげにて、琴をば引かずなんぬ。夜痛く深けて、在明の月のくまなく差し入りたるに、たゞひまでやはつちからめと打ち詠(ナガメ)、しを伏したる氣色の、折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなん玉篠(タマサ)、の、あられより猶あだなれば、中將、行く末も知らぬ道に迷ひぬる心地して、歸る方もさだかならず、淑景舎(シゲイシヤ)の傍にやすらひ兼ねて立ち明かす。朝より夙に歸りて、ほのかなりし面影の、なほこゝとに在る心迷ひに、世の態(ワザ)人の云ひかはす事も、心の外なれば、いつとなくおきもせず寝もせず夜を明かし日を暮らして、若し知るべする海人(アマ)だにあらば、忘れ草のおふと云ふ浦のあたりにも、尋ね行きなましと、そらるるに思ひしづみ給ふ。あまりにせん方なきま、に、媒(ナカダチ)すべき人を尋ね出して、そよとばかりを知らずべき、風のたよりの下萩の、穗に出づるまではなくともとて。

我が袖の泪に宿る影とだに、知らず雲井の月やすむらん。

と讀みて遣はされたりければ、君の聞し召されんとも憚ありとて、よにあはれげなる氣色に見えながら、手にだに取らずと、使歸つて語りければ、中將いとと思ひしをれて、云ふべき方なく、有るを憑(タノミ)の命とも覺えずなりぬべきを、何人か奏しけん、君等閑(ナホザリ)ならずと聞し召して、夷心(エビスゴ、ロ)のわく方なきに思ひそめけるも理(コトワリ)なりと、哀れなる事に思し召されければ、御遊の御次(ツイデ)に左中將を召され、御酒(オホホキ)たばせ給ひけるに、勾當の内侍をば、此孟に付けてとぞ仰せ出されける。左中將限りなく奈しと悦んで、翌(ツギ)の夜聽て牛車さわやかにして、かくと案内せさせられたるに、内侍もはや此年月の志に、誘ふ水あらばと思ひけるにや、さのみ深げ過ぎぬ程に、車のきしる音して、中門にながえを指しませば、侍兒(オトモビト)一人二人、妻戸をさしかくして、そよめきあへり。中將は此幾年を戀ひ忍んで、相逢ふ今の心の中、優曇花の春待り得たる心地して、珊瑚の樹の上に、陽臺の夢長くさめ、連理の枝の頭(ホトリ)に、驪山の花自ら濃(コマヤカ)なり、あやなく迷ふ心の道、諷むる人も無かりしかば、去んぬる建武の末に、朝敵西海の波に漂ひし時も、中將此内侍に暫しの別れを悲みて征路に滞り、後に山門臨幸の時、寄手(ヨセテ)大獄(オホダケ)より追ひ落されて、其ま、寄せば京を落さんとせしかども、中將此内侍に迷ひて、勝に乗り疲を攻むる事をせず、其弊(ツヒエ)果して敵の爲めに國を奪はれたり。誠に一たび笑んで能く國を傾くと、古人の是れをいましめし理(コトワリ)なりとぞ覺えたる。中將、坂本より北國へ落ち給ひし時は、路次の難儀を顧みて、此内侍をば、今堅田と云ふ所にぞ留め置かれたりける。か、ちぬ時の別だに、行くには跡を顧みて、頭(カウベ)を家山の雲に回らし、留まるは末を思ひやりて、泪を天涯の雨に添ふる。況んや中將は行く末とて、憑み無き、北狄の國に赴き給へば、生きて再び廻りあはん後の契りもいさ知らず。又内侍は、都近き海人の磯屋に、身をかくし給ひければ、今もやさがし出されて、憂き名を人に聞かれんずらんと、一方ならずなき給ふ。翌年の春、父行房朝臣金崎にて打たれ給ひぬと聞えしかば、思の上を悲をそへて、明日までの命もよしや何かせんと、歎き沈み給ひしかども、さすがに消えぬ露の身なれば、起ち居に袖をほしわびて、二年あまりに成りにけり。中將も越前に下り著きし日より、聽て迎をも上せばやと思ひ給ひけれども、道の程もたやすからず、又人の云ひ思はんずる所憚りあれば、只時々音信(オトツレ)ばかりを、互に残る命にて、年月を送り給ひけるが、其秋の始に、今は道の程も暫く靜に成りぬればとて、迎の人を上せられたりければ、内侍は、此三年が間、暗き夜の闇に迷へるが、俄に夜の明けたる心地して、頓て先づ山まで下り著き給ひぬ。折節中將は足羽と云ふ所へ向ひ給ひたりとて、爰には人も無かりければ、山より奥の嶽(ナガエ)をまはして、淺津の橋を渡り給ふところに、瓜生彈正左衛門尉、百騎ばかりにて行き合ひ奉りたるが、馬より飛んでおり、奥の前にひれ伏して、これはいづくへとて御渡り候ふらん。新田殿は昨日の暮に、足羽と申す所にて討たれさせ給ひ候と申し候はらず、涙をばらりとこぼせば、内侍の局、こは如何なる夢のうつ、ぞやと、習ふさがり肝消えて、なかく、泪も落ちやらす。奥の中にふし洗ひて、せめてはあはれ其人の討たれ給ひつらん、野原の草の露の底にも、身をすて置きて歸れかし。このみは後れ先だ、じ、共に消えも果てなんと、泣き悲み給へども、早や其興かき返せとて、急いで又山へぞ返し入れまらせける。これぞ此程中將殿の住み給ひし所なりとて、色紙押し散らしたる障子の内を見給へば、何となき手ずさみの筆の跡までも、唯都へいつかと、あらまされたる言の葉をのみ書きおき、讀みすてられたり。かゝる空しき形見を見るにつけても、いと悲の深くなり行けば、心少しも慰むべき方ならねども、中將の住みすて給ひし跡なれば、爰にて中陰のほどをも過して、亡き跡をも弔はゞやと覺しけるに、頓て其邊(ホトリ)も騒がしく成りて、敵の近付くなど聞えしかば、城の籠はあしかるべしとて、頓て又京へ上せ奉り、仁和寺のあたり、幽(カスカ)なる宿の主(アルジ)だに住まざるなりぬる蓬生の宿に送り置き奉る。都も今は返りて旅なれば、住みかき定まらず、心うかれ袖しをれて、いづく

にか身を浮舟のよるべし有るべきと、昔見し人の行くへを尋ねて、陽明のあたりへ行き給ひける路に、人あまた立ちあひて、あなあはれなると云ふ音するを、何事にかと立ち留まつて見給へば、越路はるかに尋ね行きて、あはで歸りし新田左中將義貞の首を、獄門の木に懸けられて、眼塞がり色變せり。内侍の局、是れを二目とも見給はずして、傍なる築地(ツイヂ)の陰に泣き倒れ給ひけり。知るも知らぬも是れを見、共に涙を流さぬはなかりけり。日已に暮れけれども、立ち歸るべき心地もなければ、遂が本の露の下に、泣きしをれておはしけるを、見邊なる道場の聖(ヒシリ)餘りに御いたはしく見えさせ給ひ候にとて、内へいざなひ入れ奉れば、其夜やがて緑の髪を剃り下し、紅顔を墨染にやつし給ふ。暫しが程は、なき面影を身にそへて、泣き悲み給ひしが、會者定離の理に愛別離苦の夢を覺して、厭離穢土の心は日々に進み、欣求淨土の念時々増さりければ、嵯峨の奥往生院のあたりなる樂の扉(トボリ)に明け暮れを行ひすましてぞおはしける。

藤原氏無子。義顯、義興、義宗。皆産於東國。義顯先義貞殉難。義興妾出。故義宗代義顯爲嗣。六歲爲左兵衛佐兼武藏守。義興即德壽。男山之陷。走歸吉野。帝壯其貌曰。汝興乃父家者。因賜名義興。授右兵衛佐。義貞沒而二旬。令義興與北條時行從。皇子宗良赴東國。遇颶相失。漂至武藏。於是與義宗皆匿東國。

【産】……生る、也。【殉難】……金崎にて自殺せしを指す。【妾出】……出は生なり。めかけ腹。【左兵衛佐】……督の次の官。【颶】……海中の大風。音ケ「漂」……たよふ。浮なり、流なり。

義貞の夫人藤原氏には、子が無かつた。義顯、義興、義宗は、いづれも皆關東に於て生まれたのである。義顯は、義貞より先きに、國難に殉じて自殺して仕舞つた。義興は妾腹であつた。それ故に、義宗が、義顯に代つて、義貞の跡つぎとなつて、六歳にして、左兵衛佐となつて、武藏守を兼ねて居つた。義興は、即ち德壽のことであるが、男山が攻め落されたときに、走つて吉野に歸つた。帝は、其容貌を逞ましく御思ひになつて、仰せられるには、汝は、汝が父義貞の家を興すべきものであると仰せられて、そこで、名を義興と賜はつて、右兵衛佐を授けられた。義貞が死んでから後二十日たつて、義興をして、北條時行と共に、皇子宗良親王に從つて、關東に出掛けて行かしめられた。すると、海中で大風に出つてはして、相互にはぐれて、浮びたよようて武藏國に到着した。こゝに於て、義宗と興に、皆、關東地方に隠れて居つた。

義助。義治。在北國。七月。義助稍收敗軍。與畑時能。由良光氏。一井氏政等。

各屠諸城。而會河合。以兵六千攻足羽。時能先行。夜薄城挑戰。足利高經。火城而走。是歲。帝崩。後村上天皇即位。十二月。詔義助代義貞統師。義助聞先帝臨崩特眷眷新田氏也。方思報效焉。而尊氏發七國兵來攻。諸城悉陷。義助走美濃。獨畑時能以殘兵二十七人。據鷹巢城。城甚險固。賊不能拔。足利高經。高師治合兵圍之。結二十七營。互進迭攻。時能幼喜。角觝材武絕人。姪僧快舜善戰。僕惡八郎缺臂而有力。又畜一狗。名犬獅子。三人者。夜出襲賊。每向一營。輒使狗先往。賊有備則吠。不則搖尾還報。三人者乃斫營入。大呼奮擊。賊輒委甲走。各潛賂時能曰。願勿襲我營。時能驍名震敵中。呼曰。畑將軍。會一井氏政來入城共守。時能乃畱氏政于城。而自以十六人。夜出伊地山。高經以爲平泉僧徒來援。城兵也。將三千騎邀擊。時能鮮甲鐵馬。躍出曰。畑將軍在此。高經陣動。時能馳而乘之。高經潰走。而快舜被七創。即日死。時能甲隙皆創。飛鏃沒肩。病三日死。自是北國無復官軍矣。

【屠】……はふる、殺なり、剽なり、殺すところ多きを屠と云ふ。【薄】……せまる。【統師】……軍勢を總轄せしむる也。【眷眷】……音ケンケン。顧みる貌、御心に掛けたまふを云ふ。【報效】……御恩がへしの爲めに力を盡す。【鷹巢城】……越前に在り。【迭】……たがひに、かはるが

はる。【角觚】……音カクケイ。兩人力をくちべて相抵觸する也、すまふ。【絶人】……人にすくられて居る。【缺唇】……缺は虧なり。又、兎唇に作る、兎の口には缺あり、故にかく云ふ。いもち、みつ口。【犬獅子】……猛烈なること獅子の如し、故に名づく。【伊地山】……越前に在り。【鮮甲】……鮮は明なり、麗なり。はなやかなる鎧。【鐵馬】……鐵は鐵と通ず。黒色の馬なり。一説は、鐵の甲を著せたる馬なりと云へども、今、前説に従ふ。【甲障皆創】……よろひの隙間はきずだらけ也。創は疵。【飛鏃没肩】……飛び來れる矢の根が肩の肉の中に埋まつて居る。【義助】義助、義治は、まだ北國に居つたが、七月に、義助は、ぼつくと、だんぐんに、敗北したる軍勢をまとめて、畑時能、由良光氏、一井氏政など、與に、各々、諸城を攻め平らげて、多く賊兵を殺し、そして河合に於て會合し、兵士六千人を引き連れて、足羽を攻めた。時能が、先づ出かけて行き、夜、城の近くに迫つて戦を仕掛けた。すると、足利高經は、城に火を附けて逃げ走つた。この年に、後醍醐帝は崩御になつて、後村上帝が位に御即きになつた。十二月、義助に詔して、義貞に代つて、軍隊を統轄せしめられた。義助は、先帝（即ち後醍醐帝）が崩御なされたんとするときに、特別に新田氏の事を御心に掛けて居られたといふ事を聞いて、丁度、御恩遇に報い力を盡さうと思つて居つたのである。然るに、高氏が、七箇國の兵士を繰り出して來り攻めさせたので、諸城は残らず皆攻め落されて堅固であつたので、賊軍は攻め落すことが出来なかつた。足利高經と高師治とが、兵を合はせて之を圍んで、三十七箇所の屯營を結んで、かほるべく進んで攻めた。時能は幼少の時から、相撲を取ることが好きであつて、材藝武勇が人にすぐれて居つた。その勇なる僧の快疑は、戦争することが上手であつて、下部の悪八郎は、みつ口ではあるけれども、力が強かつた。又、一匹の犬を飼つて居たが、犬獅子と名づけて居つた。三人の者が夜出掛けて賊を不意撃するときは、一つの屯營に向ふたむちと、いつでも狗をして先づ往かしめると、賊が用心をして居るときは、犬が吠えし、賊が用心をして居ないときは、犬が尾をふり動かして引き返して知らせるので、三人の者は、そこで、賊の陣營に斬り込んで入つて、大聲に呼ば、奮つて攻め立てるので、賊兵は、いつでも直ぐに鎧を棄て、逃げ走つた。賊兵は各々ひそかに時能に賄賂を贈つて曰ふには、どうぞ我が陣屋を不意撃して下さるなと曰つた。時能の武勇の名聲は、敵軍の中に震ひ、呼んで畑將軍と曰つて居つた。折しも、一井氏政が、來つて鷹巢城に入つて共に守つたので、時能は、そこで兵政を城の中に留めて置いて、そして自身は、十六人を引き連れて、夜、伊地山に出掛けた。高經は、平泉寺の僧徒が來つて城兵を援けるのであると思つて、三千騎を引き連れて、迎へ撃つた。すると、時能は、はなやかな鎧を著て、黒い馬に乗つて、躍り出で、曰ふには、畑將軍が、こゝに居るぞと曰つたので、高經の陣は、自然に動いた。時能は之に付け込んで馳せて攻め入ると、高經の兵は陣立を崩して亂れ走つた。然れども、快疑は七つの手創を負つて居つたので、其日に死んで仕舞つた。時能は、鎧の隙間は皆創だらけであつて、飛び來つた矢の根が肩の肉に埋まつて居つたので、病むこと三日にして死んで仕舞つた。これからは、北陸地方に於ては、復た官軍は無いやうになつて仕舞つた。

賊乃攻義助於根尾城。城陷。義助以族從數十人。微服投尾張氏。雷十餘日。道伊賀。伊勢。而至于行宮。帝延見。泣而勞之。詔加一級。且賞從者。藤原實世竊言曰。是何異平維盛敗歸而加爵哉。藤原隆資折之曰。義助之敗。

非其罪也。近日北國將士。不由大將。而取裁於南山。南山臣僚。以服微勞。而得邑於北國。將權以輕。士心以驕。而義助受其敗。豈其罪也。主上察之。乃有此命。猶秦穆勞孟明耳。子何失喻。實世不能答。帝遂拜義助刑部卿。興國元年。三月。伊豫官軍請得將帥。朝議擬義助。而海陸皆敵。會備前人飽浦信胤應官軍。道乃開。於是義助以兵五百發。四月。至伊豫國府。遇大館氏明。氏明初逃京師。詣行宮。得爲伊豫守護。與土居得能氏。保守諸城。及得義助軍益振。議者皆謂西南可復也。

【賊】……土岐頼遠、頼康なり。【根尾城】……美濃國本巢郡神所村春日社の側に古墟あり。【族從】……一族と從兵。【微服】……卑しき服裝をする。【尾張氏】……熱田大宮司を指す。大日本史によれば、藤原昌能と云ふ。【道】……道を取る。【勞】……慰勞する、ねぎらふ。【加一級】……位を一階上げる。【是何異平維盛敗歸而加爵哉】……維盛、富士川より敗れ歸りしとき、權亮少將より右近衛中將に遷任せり。【折】……少しばかりの骨折を爲す。【將權以輕】……將とは義助を指す。【主上】……後村上帝を指す。【秦穆勞孟明】……左傳の文公三年の條に、秦の穆公、孟明視を遣はし、鄭を襲はしむ。因つて滑を敗る。晉襄公、之を殺り、孟明を擒す。後ち之を秦に送り歸す。秦伯、素服して、郊に次りて之を迎へ、復た政を爲さしむ。後、晉を伐ちて志を得たり。遂に西戎の覇となる。【失喻】……たとへ様が間違ふ。【興國】……後村上帝の時の年號。【疑】……あてがふ、善からうと思ふ。

賊軍は、そこで、義助を根尾城に攻めたが、城が攻め落されたので、義助は、一族從者數十人を引き連れて、微者の服裝をなして、尾張の熱田大宮司の家に泊り、留ること十餘日であつたが、伊賀、伊勢に道を取つて、吉野の行在所に至つた。すると、後村上帝は、之を召し寄せて御面會になつて、泣いて之を慰勞せられ、詔して位を一段昇進させ、其上、從者をも賞せられた。藤原實世が、ひそかに悪口をいつて曰ふには、これは、平維盛が富士川で敗北して歸つて爵位の昇進したのと、同じ様な事で、まことに詰らぬ事だといつた。藤原隆資が、之をやりこめて曰ふには、義助が敗北したのは、義助が悪いのではなく、御座らぬ。近頃、北國地方の將士どもは、大將の命令を奉ぜずして、さばきを吉野の皇居に仰いで居り、吉野の臣僚どもは、少しばかりの骨折を致したといふので、領地を北國に貰ひ、大將の威權はその爲めに輕くなり、士卒の心はその爲めに驕つて居るので、そして、義助は、其れで敗北したので御座る。どうして義助が悪いのであらうぞ。主上に於ては、此事を

御察しなつて居るので、そこで、今度の御恩命があつたので、丁度、秦穆公が孟明視を慰勞せられたのと同じことで御座る。貴公は、何といふ取り違へた諭を致されるので御座るかといふ。實世は、之に對して何とも返答することが出来なかつた。帝は、とうとう、義助を兵部卿に拜命いたされた。興國元年の三月に、伊豫の官軍は、大將を下し賜はらんとを請うたので、朝廷の御評議では、義助を適任者であると思はれた。然れども、海も陸も皆敵ばかりであつたので、行くことが六かしかつた。折ふし、備前の人飽浦信胤と云ふ者が官軍に味方することに成つたので、道がそこで開いて、通行することが出来るやうになつた。こゝに於て、義助は、兵士五百人を引き連れて出發した。かくて、四月に、伊豫の國府に到着して、大館氏明に遇つた。氏明は、初め、京都を逃げ出して、吉野の行宮に詣り、伊豫の守護となることが出来たので、土居得能氏と與に、諸城を持ちこたへて居つたが、義助が到着するに及んで、其軍ますく、景氣が善くなつた。そこで、論者は皆、西南地方をば回復することが出来るだらうと言つて居つた。

五月、義助疾作。七日而卒。將士祕喪。而賊已知之。來攻河江城。金谷經氏統伊豫兵救之。大戰海上。會風起。我船漂去。賊船達岸。我兵欲冒風返之。經氏曰。我軍數奇至此。返不必利。唯當前至山陽。取一城據之。乃上備後。攻鞆城。拔而據之。山陽賊兵來戰。未決。聞賊將細川賴春圍氏明于世田城。經氏乃將數百人赴救。與賊兵數千戰。敗。率殘兵歸備後。賴春乃以萬騎攻世田。三旬。城內食竭。氏明以下悉自殺。篠塚伊賀在城中。開門。提鐵槌而出。呼曰。吾新田公親兵篠塚也。盍殺我以得賞。賊皆披靡。乃徐行而去。賊不敢追躡。至今治浦。見賊空船。獨有舟人。篠塚游而達之。跳入船。自名曰。送吾於隱岐。手拔錨。樹桅。登船屋。鼾睡。舟人畏怖。送至隱岐。以終焉。篠塚有女。仕皇太后。曰伊賀局。後嫁楠正儀。勇力類父云。

【義助】……伊豫國越智郡に義助の墓あり。【祕喪】……死んだことを知れぬやうに隠して置く。【河江城】……伊豫に在り。【欲冒風返之】……むかひ風を乗り切り引返して戦はうとする。【前】……進んで。【世田城】……伊豫に在り。【提鐵槌】……提は撃琴なり。鐵槌は、鐵の棒なり。鐵棒をひつさげる。【披靡】……震伏の貌。さつと両方へ開き靡く。【徐行】……ゆつくりと歩行する。【追躡】……音ツキセフ。追つかける。【今治浦】……伊豫に在り。【拔錨】……舟のいかりを上げる。【樹桅】……桅は音キ、帆柱。舟に帆柱を立てる。【船屋】……船やかた。【鼾睡】……音カンスキ。いびきをかいて睡る。【以終】……命を終る。【伊賀局】……父伊賀の名を取りて稱する也。

然るにその年五月に、義助は、病氣が起つて、七日にして死んで仕舞つた。將士どもは、義助が死んだことを隠して居つた。然るに、賊兵は、もはや其事を知つて仕舞つて、來つて河江城を攻めた。金谷經氏が、伊豫の兵士を統轄して、之を救はうとして、大に海上に於て戦つた。折しも風が吹き起つたので、我が船は浮び漂うて沖の方へ去り、賊軍の船は岸に到着した。我が軍兵は、むかひ風をおかし進んで其處へ引き返して戦はうとしたが、經氏が曰ふには、我が軍は運が悪くして此の如き事に立ち至つたのであるから、引き返したとて、必ずしも勝利を得るとも限るまい。たゞ進んで山陽道に至つて一城を攻め取つて之に立て籠る方が善いと曰つて、そこで、備後に上陸して、鞆の城を攻め之を抜き取つて其處に立て籠つた。山陽道の賊兵が來り戦つたが、未だ勝負が決しなかつた。その中に、賊將細川賴春が氏明を世田城に圍んで居るといふ事を聞いたので、經氏は、そこで、數百人の兵士を引き連れて、出掛けて行つて救うたが、賊兵數千人と戦つて、敗北したので、残りたる兵士を引き連れて、備後に歸つた。賴春は、そこで、一萬騎を引き連れて世田を攻めたが、三十日にして、城の内では兵糧が盡きて仕舞つたので、氏明以下悉く自殺して仕舞つた。篠塚伊賀は城の中に居つたが、門を開いて、鐵の棒をひつさげて出掛けて、大きい聲で呼ば、つて曰ふには、吾は新田殿の親兵なる篠塚である。我を討ち取つて賞與を貰ふことには、どうかと曰つた。賊は皆、其勢におそれて、さつと両方に披きなびた。篠塚は、そこで、ゆつくりと歩行して去つた。賊はあとから追つ掛けやうとも致さなかつた。篠塚は、今治の浦に至つて、賊の乗り棄てた舟があつたが、たゞ船頭が居つたばかりである。篠塚は、海の中を舟におよいで其舟に到着して、跳つて舟に乗り込んで、自分で名乗つて曰ふには、吾を隱岐まで送り届けよと曰つて、手づから錨を抜き、帆柱を立て、船やかたの上に登つて、高いびきをかいて睡つた。船頭は、心に畏れ怖れて、とうとう送つて隱岐まで送り届けた。篠塚は、やがて、其處で一生を終つた。篠塚には、娘があつて、皇太后に宮仕して、伊賀局と曰つて居つたが、後に、楠正儀に嫁した。その勇力は、女ながらも、父伊賀に似て居つたと云ふことである。

篠塚勇力の事

【参考】左に太平記の一章を抄録して参考にあずす。

(前略)かやうに人々自害しけるの中に、篠塚伊賀守一人は、大手の一二の木戸残り無く押し開いて、唯一人を立ちたりける。降人に出づる敵と見れば、左は無く、紺糸のよろひに、鐵形打ちたるかぶとの緒を縮(シ)め、四尺三寸ありける太刀に、八尺餘りの金操棒(カナサイボウ)脇に挿みて、大音揚げて申しけるは、よそにては定めて名を聞きつらん、今近づいて我を知れ。高山庄司次郎重忠に六代の孫、武藏の國に生長(ツダ)つて、新田殿に一人當千と憑まれたりし篠塚伊賀守、今に在り。討つて勳功に預れと呼び、りて、百餘騎ばかり控へたる敵の中へ、あつとも擬議せず走り懸る。その勢、柄勇銳たるのみならず、兼て開えし大力なれば、誰かは是を遮り止むべき。百餘騎の勢、東西へ颯と引き退(ノ)いて、中を開いてぞ通しける。篠塚馬にも乗らず、弓矢を持たず、而も唯一人なれば、何程の事か有るべき。唯近づくとなく、遠矢に射殺せ。返し合はせば懸け懸りて討てとて、藤、橘、伴の者共、二百餘騎、跡に付いて追ひ懸くる。篠塚、些しも騒がず、小歌

にて閑々(シヅカ)と落ち行きけるを、敵餘すなど追ひ懸くれば、立ち止つて、嗚呼御邊達、痛く近づいて、頭の中違ひすとあざ笑うて、件の金棒を打ち振りければ、脚の子を散らすが如く、颯とは逃げ、又村立つて跡に集り鱗(ヤシリ)を汰(ソロ)へて射れば、其がよろひには、方々のへろく、矢はよも立ち候はじ。すは此處を射よとて、後ろを差し向いてぞ休みける。されども、名譽の者なれば、一人なりとも若しや打ち止むると、追ひ懸けたる敵二百餘騎に、六里の道を送られて、其夜の夜半ばかりに、今張の浦にぞ著きたりける。此れより舟に乗つて、隠岐の島へ落ちばやと志し、船やあると見るに、敵の乗り棄て、水主(カコ)ばかり残り残る船あまたあり。是れこそ我が物よと悦んで、よろひ著ながら浪の上五町ばかりを遊ぎて、ある船にがばと飛び乗る。水主梶取驚きて、是はそも何者ぞと咎めければ、さな云ひそ。是れは宮方の落人篠塚と云ふ者ぞ。急ぎ此船を出して、我を隠岐の島へ送れと云つて、二十餘人してくり立ちける碇を、やすくと引き挙げ、四十五尋(ヒロ)ありける橋を、軽々と推し立て、屋形の内に高枕して、船(イビキ)かきてぞ臥したりける。水主梶取ども是れを見て、あなぢただし凡夫のわざにはあらじと恐怖して、則ち順風に帆を懸けて、隠岐の島へ送つて後、暇を請ひてぞ歸りにける。昔も今も勇士多しといへども、かゝる事をば聞かずとて、篠塚を譽めぬ者こそ無かりけれ。

義貞。義助既死。足利氏無復忌憚。兒島高德在備前。招新田義治於上野。謀起兵。不克。乃閒入京師。欲襲尊氏。又不克。義治走。匿東國。與從兄義興。義宗。皆潛圖復父仇。窺覺未發也。正平六年。尊氏與直義有隙。使長子義詮守京師。而自東擊直義。殺之。入居鎌倉。立次子基氏。管領東國。義詮偽請降。帝許之。兒島高德與由良信阿。至自行宮。諭旨於新田氏。曰。天子納義詮降。北還京師。其實乘虛行誅也。尊氏在彼。公等圖之。機不可失矣。因進義宗左近衛少將。義宗乃徇東國。義貞。義助遺臣。奮起來從。得數萬人。直義故黨石堂義房。三浦高通等又爲內應。約戰酣起刺尊氏。尊氏覺而逐之。而義宗等未知也。

【不克】…能はず。【閒】…ひそかに。【從兄】…いとこ。【窺覺】…すまを伺ふ。【正平】…後村上帝の時の年號。【諭旨】…天子の思召を言ひ聞かず。【機】…機會。【故黨】…むかしの一味の者。【戰酣】…戦たけなはなるとき、戦の最中に。義貞、義助は、もはや死んで仕舞つたので、足利氏は、忌憚るものは無かつた。兒島高德は、此時、備前に居つたが、新田義治を上野から招き寄せて、兵を起さうと企てたけれども、うまく行かなかつた。そこで、ひそかに京都に入つて、尊氏を不意撃しやうと思つたけれども、又、うまく行かなかつた。そこで、義治は、逃げ走つて、東國に隠れて居つて、從兄なる義興、義宗と、皆、父の仇を復したため、長男の義詮をして京都を守らせて置いて、そして自身は、東の方に下つて直義を撃つて之を殺し、入つて鎌倉に居り、次男の基氏を立て、關東地方の諸國を管領させることにした。義詮は、偽つて、降参することを願ひ出たので、後村上帝は之を御許しになつた。兒島高德は、由良信阿と與に、吉野の行在所から、遙々と東國に下つて、陛下の思召を新田氏の者どもに言ひ聞かせて曰ふには、天子様が義詮の降参することを御許しになつて、北の方京都に御還りになつたのは、其實は、隙間に附込んで誅罰を行はうとの御思召である。尊氏は彼處(即ち鎌倉)に居るから、貴公等之を討ち取ることを企てられよ。この好機會を失つては成らぬと曰つた。そこで、義宗を左近衛少將に昇進させられた。義貞は、そこで、東國に觸れまはつたが、義貞、義助の遺つて居る家来どもが、奮ひ起つて來り従つたので、數萬人となつた。直義のむかしの一味の者なる石堂義房、三浦高通等が、又裏切をなして、戦の真最中に起つて尊氏を刺し殺さうと約束した。尊氏は、それを感附いて之を逐つ拂つて仕舞つた。然るに、一方に於ては、義宗等は、義房、高通等の裏切が發覺して放逐された事を、未だ知らなかつたのである。

閏正月。勒兵于武藏野。義興居左。義治居右。義宗自將中軍。在其後。尊氏兵十餘萬。義興先合。義治次之。殺傷相當。敵將饗場某。率六千騎。更進。義宗麾兒玉黨。擊走饗場。饗場走入尊氏陣。尊氏陣大亂。義宗直前。指其牙旗。大呼曰。吾今日爲天下討賊。爲一家復仇。奮擊破之。追北。馳者三十餘里。至石濱。尊氏欲自殺。其兵返戰死之。尊氏得閒。濟達前岸。收兵三萬。壓水而軍。而義宗騎能屬者五百人。時已昏黑。無來助者。義宗切齒而止。乃還。求義興。義治。義興。義治。見白旗兵三萬北走。以爲尊氏也。合兵。

追之。降者屬路。一人駐馬指之者數。其兵不顧而前。雷從者僅三百。遇伏兵數千圍之。二人苦戰而出。甲冑皆破。刀刃如鋸。身各被數創。亡百餘騎。乃議曰。我既與武藏守相失。以此寡羸。將安歸也。不若遇基氏決死。衆然之。進至關戸。會石堂二浦氏以五千騎西行。并其兵襲鎌倉。基氏悉甲出拒。義興鬪於海濱。斬三騎。馳貫賊陣。左韞斷委地。乃挾刀于脇。俯結之。賊羣至。擊其項及背。義興不爲動。結畢應賊。賊驚走。遂與義治合。擊走基氏。仍據鎌倉。

【閏正月】... 閏二月の誤なるべし。正平七年の事なり。【勒】... 音ロク、控制なり。人數をそろへること。【先合】... 眞先に打ち合ふ。【殺傷相當】... 殺されたり傷つけられたりした者が兩軍とも同じ位なり。五角の勝負。【鑿場某】... 賊將鑿場氏直が所部六千皆少壯なり。梅花を兜蓋に挿み、號けて花隊と云ふ。我が兵兒玉の黨七千餘人、皆團扇を畫いて旗號と爲す。義宗曰く、扇には風あり、以て花を散らすべしと。塵きて之を進む。氏直果して敗走せり。悉くは、太平記の武藏野合戰事の條を見るべし。【兒玉黨】... 武藏の七黨の一。【牙旗】... 大將の旗。【石濱】... 武藏に在り。【壓水而軍】... 軍は一に陣に作る。川に臨んで陣取る也。【能屬者】... つまき従ふことが出来た者。【切齒】... 齒をしりする。【北走】... 北に向つて走る。【刀刃如鋸】... 刀の刃がこぼれて鋸の齒のやうになる。【亡】... うしなふ。【武藏守】... 義宗先に武藏守に任せらる、故にかく云ふ。【寡羸】... 音クワルキ。寡は少き也、羸は弱き也。人數少くして且つ疲れ弱りたること。【關戸】... 武藏に在り。【悉甲】... ありたけの兵士を練り出す。【左韞斷委地】... 韞は音キヤウ。馬の手綱なり。委は猶ほ垂の如し。左の手綱が切れて下に垂れて地につく。【項】... 頭の後、うなじ。【閏正月】... 閏正月に、軍勢を武藏野にそろへて、義興は左に居り、義治は右に居り、義宗は自身に本陣の大將となつて、其後に居つた。尊氏の軍勢は、十餘萬人あつたが、義興はまつ先に之と打ち合ひ、義治は之に次ぎ、死傷者の數が双方とも同じ位で、五角の勝負であつた。敵の將鑿場某は、六千騎を引き連れて、代つて進んで來ると、義宗は兒玉の黨を指揮して、擊つて鑿場を敗走させた。鑿場は走つて尊氏の陣に逃げ込んだので、尊氏の陣中は、大に混雜した。義宗は、之につけ込んで、直に進んで、其本陣に立つて居る旗を指して、大きい聲で呼はりて曰ふには、吾、今日、天下の爲めには賊を討ち、わが新田の一家の爲めには仇を復すのであると曰つて、奮撃して、尊氏の軍を破り、敗走するのを追つ掛けて、馳すること坂東道三十餘里であつて、石濱に至ると、尊氏は、とても堪まらぬとて、自殺しやうとしたが、其部下の兵が引

き返して戰つて討死したので、尊氏は、すき間が出来たので、河を渡つて向うの岸に到達し、三萬人の兵士を取りまとめて、河に望んで陣取つた。然るに、義宗の騎士の義宗につくことが出来た者は、わづかに五百人であつて、時刻はもはや夕暮で暗くなりかゝつて居たので、來つて助ける者は無かつた。義宗は、殘念で齒をくひはつて止まり、そこで、引き返して、義興、義治をさがし求めた。一方に於ては、義興と義治とは、白旗を立てたる兵士が三萬ばかり北の方へ向つて逃げ走つて見ると、尊氏であると思つたので、兵士を合はせて之を追ひかけた。降参する者が路に引きつゞくほどで、二人は馬をとめて、之に會釋する態度であつた。然るに其部下の兵士は之に頼著せずして前へ進んだので、留まつて居る者は三百人であつたが、伏兵數千人起つて義興、義治を取り圍むに出つた。二人は苦戰して切り抜けて出でると、鎧や兜は皆破れ、刀の刃はこぼれて鋸の齒のやうになつて居るし、身體には二人とも多數箇所の手創を受けて居るし、百餘騎の兵士を失つた。そこで、二人は相談して曰ふには、われ等すでに武藏守を見失つたのであるから、この人數も少く且つ疲れ弱つて居る兵士を以て、どこへ行かうぞ。いつその事、基氏に出つて死を決して戦ふが宜しいと曰つた。部下の者共も、如何にも尤であると言つたので、進んで關戸に至つた。折しも石堂、三浦氏が五千騎の兵士を引き連れて、西の方へ向つて行くのに出つたので、其兵を合はせて、鎌倉を不意撃した。すると、基氏は、ありたけの兵士を練り出して、義興を拒いた。義興は海濱に於て打ち合ひをして、敵三騎を斬り落し、馳せて賊の陣立を貫いて過ぎたが、左の手綱が切れて、下に垂れて地に引きつたので、そこで刀を脇にかき挟んで、うつ向いて之を結び付けた。其間に、賊兵は羣がり至つて、義興の首筋及び背を撃つたけれども、義興は、じつとして居つて、少しも動かさず、結んで仕舞つてから、賊兵に應戦した。賊兵は、驚いて逃げ走つた。かくて、とうく義治と一處になつて、基氏を撃つて敗走させて、そこで、そのまゝ鎌倉に立て籠つて居つた。

義宗時據碓氷嶺。越後。信濃兵二萬。奉皇子宗良來會。上杉憲顯等又屬焉。尊氏收兵八萬。欲復鎌倉。聞義宗軍復振。乃先攻碓氷。碓氷地負山帶川。便於據守。而義宗年少氣銳。數出戰於平地。敵變兵交進。自午至酉。義宗終敗走。上嶺而陣。既夜。足利氏軍舉炬。布滿山澤。顧視我軍。炬如燭火。義宗驚曰。晝日所失亡。未至如此。得非有逃者。前有勁敵。後有鄉土。衆疑我退走也。乃自釋鎧卸鞍。以示不走。衆稍定。夜半。上杉氏望見炬火。數千復屬賊軍。則遽走。信濃。於是。走者相踵。義宗不得獨留。比曉。退入

越後。八州兵盡附尊氏。還向鎌倉。義興。義治欲迎戰。決死。將士諫止。乃走信濃。義宗既歸越後。聞帝猶在行宮。欲赴援之。收兵七千。入越中。桃井。吉良。石堂。小山。宇都宮諸族皆應之。奉皇子宗良。西上。途聞行宮已陷。乃解歸。

【確氷】……上野に在り。【年少氣銳】……年がまだ若くして血氣にはやる也。【午】……正午。【酉】……午後六時頃。【布滿山澤】……山や澤に一面に滿ちわたる。【烽火】……音シヤククワ。炬火の小光なり。ほそくとしたる火を云ふ。【勁敵】……勁は強き也。強き敵。足利氏を指す。【郷土】……故郷。越後を指す。【卸】……おろす。【桃井】……直常。【吉良】……満貞。【石堂】……入道義房。【小山】……五郎。【宇都宮】……三郎。

義宗は、その時に、確氷嶺に立て籠つて居つたが、越後、信濃の兵士が二萬ばかりで、皇子宗良親王を奉じて、來つて會した。上杉憲顯等が、又、附いた。尊氏は兵士八萬人を取りまとめて、鎌倉を回復しやうと思つたが、義宗の軍が復た盛んになつたと云ふ事を聞いたので、そが、先づ確氷を攻めた。確氷の土地は、後には山を負ひ、前には川をめぐらして、立て籠つて居るに便利なる土地である。然るに、義宗は、年がまだ若くして血氣にはやるので、度々出掛けて行つて平地に於て戦つた。敵、即ち足利氏は兵士を入れかへて、かはるゝ進んから、午の刻(正午)から酉の刻(午後六七時頃)まで戦つたが、義宗は仕舞に敗戦し逃げ走つて、嶺上にのぼりて陣取つた。かくて、夜になつて細としたる哀れなる者であつた。義宗が驚いて曰ふには、晝間、戦争をして失つたところだけでは、未だ此れほどの事には成らないのである。これは、逃げ出した者が有るからであるかも知れぬ。今、我は、前には強敵があるし、後には故郷の越後があることであるから、多くの人は、我が退却して逃げ走るか、知れぬと疑つて居るのであらうと曰つて、そこで、自ら鎧をぬぎ、鞍を馬からおろして、それで、退き走ることとは無いと云ふ事を示した。多くの人は、漸く落ち著いた。夜半頃になつて、上杉氏は、松明の火數千がまた敵軍に附いたのを望み見ると、出来なかつたので、夜明け頃に、退却して越後に入つた。こゝに於て、逃げ走る者が、引き續いた。そこで、義宗も、自分一人留まつて居る。すると、義興と義治とは、途中に於て迎へ戦つて死を決しやうと思つたが、將士が諫め止めたので、そこで、信濃に走つた。義宗は、すでに越人を取りまとめて、越中に入つた。桃井、吉良、小山、宇都宮等の諸氏が、皆、之に味方した。そこで、皇子宗良親王を奉じて、西の方京都に向つて上らうとしたが、其途中で、京都の行在所はすでに敵の爲めに攻め落されたといふ事を聞いたので、そこで、解散して歸つて仕舞つた。

是役也。赤松則祐亦就行宮降。請奉將軍興良。興良。故護良子也。材武類父。則祐思護良舊恩。欲擁據播磨以爲聲援。帝許之。及則祐敗叛去。興良拘於京師。但馬人本莊某奪之。與則祐戰。敗死。興良走歸吉野。後十餘年。赤松氏範屬官軍。復奉興良爲主。已而叛。應義詮。帝遣兵擊走氏範。興良奔南都。不知所終。人譏其辱護良也。

【護良舊恩】……則祐は、はじめ、護良親王の從者より起りて立身せしなり。【擁】……より立てる。【本莊某】……平太及び其弟平三。【辱護良】……護良親王は皇室の爲めに盡せしが、その子興良親王は、賊軍に味方して、父親王の名譽をばつかしむ。

この戰爭に於て、赤松則祐も亦、行在所に參つて降參して、將軍興良親王を奉じて一旗擧げたいと請うた。興良親王は、故の護良親王の御子であつて、材藝武勇が父親王に似て居られた。則祐は、護良親王の昔の御恩を思つて、より立て、播磨に立て籠つてそれで遙かに南朝の爲めに聲援をしやうと思つたのであるが、後村上帝は之を御許しになつた。後に則祐が敗れて叛き去るに至つて、興良親王は、京都に拘禁せられて居つた。但馬の人本莊某が、之を奪ひ取つて、則祐と戦つたが、敗軍して死んだ。興良親王は、逃げ走つて、吉野に歸られた。後、十餘年たつてから、赤松氏範が官軍に附いて、また興良親王を奉じて大將と爲したが、とかくする中に、叛いて、義詮に味方した。帝は、そこで、兵士を派遣して、擊つて氏範を敗走させた。興良親王は、南都に奔られたが、どこで死なれたか分らない。世間の人は、興良親王が賊に味方して父親親王の名譽を辱しめられたことを譏つた。

義宗與義興。義治。俱匿越後。居數年。武藏。上野將士連署。來請一人。奉戴舉義。義宗。義治皆疑。不敢往。義興奮而往。足利基氏發兵來捕。國人相俱匿之。或以兵圍義興。輒潰圍逃。不可蹤迹。基氏患之。我故將竹澤良衡。與族江戸堯寬叛。降基氏。基氏宰畠山國清。囑二人。圖義興。乃爲獲罪。

亡來索義興仕之。昭以美姬。漸得狎近。因誑之曰。鎌倉可襲。義興遣衆先往。與親信繼之。路由矢口渡。堯寬教舟人鑿舟腹而柄之。載至中流。拔柄。泗去。伏兵夾河起。舟將沒。井伊直秀手掀義興。義興瞋眼曰。悔。豎子計。割腹死。直秀與世良田由良。大島等。皆自刃。土肥市川等。啣刀而泗。與堯寬鬪。殺傷十餘人而死。時正平十三年十月也。基氏重賞二人。堯寬赴邑。復由矢口。天俄雷雨。顧覩義興。追己墮馬。疾作死。鎌倉人又夢義興來襲也。矢口民立祠祀義興。

【連署】…連名連判する。不可隠述…尋ね出すことが出来ぬ。【昭】…くらはす。利を以て人に餌す。【美姬】…名は少将某宮の上臈女房なり。亂により賊兵衛に奪ひ取られ、遂に殺さる。【狎近】…なれ馴染みてその側近く寄る。【誑】…あやむき惑はす。【矢口渡】…武藏に在り。【柄】…柄は音ゼイ、木崩鑿に入る所以なり。【鑿】…音ケン、手を以て高くさし擧げる也。【舟腹】…下耶といふが如し、人を罵る語也。【舟腹を鑿して言ふ也】…【世良田】…右馬助。【由良】…兵庫助。及び其父新左衛門。【大島】…周防守。由良の子。【土肥】…三郎左衛門。【市川】…五郎。【啣刀】…啣は銜と同じ、口に物を含むを云ふ。刀を口にくはへる。【正平】…後村上帝の時の年號。【立祠】…新田社と號す。方今、東京府社の一なり。

【義興】義興は、義興、義治と、もに、越後にかゝれて居つた。かくて數年たつと、上野の將士が連名連判の書面を以て、來つて、一人自分等の方へ來て貰つて、それを守り立て、義兵を擧げたいと請うたけれど、義興は、怒つて眼をむき出して曰ふには、下耶奴の計略に落ち入つたのは残念であるといつて、腹を切つて死んで仕舞つた。直秀は、世良田、由良、大島等と一處に、いづれも皆自殺して仕舞つた。土肥、市川等は、刀を口にくはへて泗いで渡つて、堯寬と打ち合つて、十餘人を殺したり傷つけたりして死んで仕舞つた。時に正平十三年十月であつた。基氏は重く兵衛、堯寬の二人に褒美を與へた。その後、堯寬が、自分の領地に赴かうとして、また矢口にかゝつたが、天俄に雷が鳴り雨が降り出し、振り返つて見ると、義興が自分を追つて掛つて來るのを見て、馬から落ちて、病氣が起つて死んで仕舞つた。鎌倉の人は、又、義興が來つて不意撃すると云ふ夢を見たこともあつたので、其た、りを恐れて、矢口の人民は、御宮を立て、義興を祀つた。

【参考】左に太平記の一章を抄録して以て參考に資す。

新田左兵衛佐義興自害の事

去る程に、尊氏卿逝去あつて後、筑紫はかやうに亂れぬといへども、東國はいまだ靜なり。爰に故新田左中將義貞の子息に左兵衛佐義興、其弟武藏少將義宗、故脇屋刑部卿義助の子息右衛門佐義治三人、此三四年が間、越後の國に城郭を構へ、半國ばかりを打ち隨へて居たりけるを、武藏上野の者共の中より、ふた心無き由の連署の起請を書いて、兩三人の御中に、一人東國へ御越し候へ。大將にし奉つて、義兵を揚げ候はんとぞ申したりける。義宗、義治二人は、思慮深き人なりければ、此頃の人の心、左右無く恐み難しとて、許容せられず。義興は大早りにして、忠功人に先立たんことを、いつも心に懸けて思はれければ、是非の遠慮を廻らさるゝまでも無く、繼に即從百餘人を行き連れたる旅人の様に見せて、竊に武藏國へぞ越えられける。元來張本の輩(トモガラ)は申すに及ばず、古へ新田義貞に忠功ありし族(ヤカラ)、今島山入道道誓に恨を含む兵(ツハモノ)、竊に音信を通じ、頼に頼を入れて、催促に隨ふべき由を申す者多かりければ、義興、今は身を寄する所多く成つて、上野武藏兩國の間に、其勢ひ漸く萌せり。天に耳無しといへども、是れを聞くに人を以てする事なれば、互に隱密しけれども、兄弟に語り、子は親に知らせる間、此事程無く鎌倉の管領足利左馬頭基氏朝臣、島山入道道誓に聞えてけり。島山大夫入道是れを聞きしより、敢て寢食を安くせず、在所を尋ね聞きて、大勢を差し遣はせば、國內通計して行くへを知らず。又五百騎、三百騎の勢を以て、道に待つて夜討に寄せて討たんとすれば、義興更に事とせず、蹴散らしては道を通り、打ち破つては圍を出で、千變萬化、總て人の態(ワザ)に非ざると申しける間、今はすべき様なしとて、手に餘りてぞ覺えける。さて、此事如何かすべしと、島山入道道誓、晝夜案じ居たりけるが、或夜潛に竹澤右京亮を近づけて、御邊は先年武藏野の合戦の時、彼の義興の手に屬して思ひありしかば、義興も定めて其舊好を忘れじと思はるらん。されば此人を偽つて討たんとする事は、御邊に過ぎたる人有る可からず。いかなる謀をも運らして、義興を討つて左馬頭殿の見參に入れ給へ。恩賞は宜しく請ふに依るべしとぞ語られける。竹澤は元來欲心熾盛にして、人の嘲をも顧みず、古への好みを思はず、情無き者なりければ、曾て一義をも申さず。左候は、兵衛佐殿の疑を散じて、相近づき候はん爲めに、某態と御制法候はん事を背いて、御勘氣を蒙り御内を罷出でたる體にて、本國へ罷下つて後、此人に取り寄り候べしと、能く々々相謀つて、己が宿所へぞ歸りける。兼ねて謀りたる事なれば、竹澤翌日より宿々の傾城共を數十人呼び寄せて、遊び戯れ舞ひ歌ふ。是れのみならず、相伴ふ傍輩共、二三十人招き集めて、博奕(バクチ)を晝夜十餘日までせしたりける。或る人は是を島山に告げ知らせたりければ、島山大に偽り忿りて、制法を破る罪科一に非ず、凡そ道理を破る法はあれども、法を破る道理なし。況んや有道の法をや。一人の科(トカ)を誡むるは、萬人を助けん爲め也。此時緩々の沙汰致さば、向後の狼藉斷ゆ可からずとて、則ち竹澤が所帯を沒收して、其身を追ひ出されけり。竹澤一言の陳謝にも及ばず、あなことをくし。左馬頭殿に

仕はれぬ侍は身一つは過ぎぬ歎と、飽くまで廣言吐き散らして、己が所領へぞ歸りにける。かくて數日あつて、竹澤潛に新田兵衛佐殿へ、人を奉つて申しけるは、親にて候ひし入道、故新田殿の御手に屬し、元弘の鎌倉合戦に、忠を抽で候ひき。某亦先年武藏野の御合戦の時、御方の命を助かりて、御代を待ち候はんために、高山禪門に屬し候ひつるが、心中の趣、氣色に顯はれ候ひけるに依つて、差したる罪科とも覺えぬ事に、一所懸命の地を没收せらる。結句討つ可しななどの沙汰に及び候ひし間、則ち武藏の御陣を逃げ出で、當時は深山幽谷に隠れ居たる體にて候。某が此間の不義をだに、御免あるべきにて候は、御内奉公の身と罷成り候て、自然の御大事には、御命に替り進ませ候ふべしと、ねんごろにぞ申し入れたりける。兵衛佐殿は聞き給ひて、暫くは申す所誠しからずとて、見參をもし給はずして、密議などを知らる、事も無かりければ、竹澤潛も心中の偽らざる處を顯はして、近づき奉らん爲めに、京都へ人を上せ、ある宮の御所より、少將殿と申しける上藤女房の、年十六ばかりなる、容色類無く、心機優にやさしくおはしけるを、とかう申し下して、先づ己が養君にし奉り、御裝束女房達に至るまで、様々に立立て、潛に兵衛佐殿の方へぞ出したりける。義興もより好色の心深かりければ、類無く思ひ通はして、一夜の程の隔ても、千年を経る心地に覺えければ、常の隠れ家を替へんとし給はず、少し混(ヒタタ)けたる式にて、その方様の草のゆかりまで、心置可き事とは露ばかりも思ひ給はず。誠に褒め一たび笑んで、幽王國を傾け、玉妃傍らに媚びて、玄宗世を失ひ給ひしも、かくやと思ひ知られたり。されば、太公望が好利者、與三財珍(三迷)之、好色者、與美女感(感)之、敵を謀る道を教へしを、知らざりけることを愚かなれ。かくて、竹澤、奉公の志切なる由を申しけるに、兵衛佐殿は心打ち解けて、見參し給ふ。體て鞍置きたる馬三匹、唯今藏し立てたる鎧三領、召し替へ、の爲めとして引き進らす。是れのみならず、越後より著き纏ひ奉つて、此處彼處に隠れ居たる兵(ツハモノ)共に、皆一獻を進め、馬、物具、衣裳、太刀、刀に至るまで、用々に随つて、漏らさず是れを引きける間、兵衛佐殿も竹澤を他に異なる思をなされ、傍輩共も皆是れに過ぎたる御要人ある可からずと、悦ばぬ者は無かりけり。か様に朝夕宮仕の勞を積み、晝夜無二の志を顯はし、半年ばかりに成りにければ、佐殿今は何事に付けても、心を置き給はず、謀反の計略、與力の人數、一事も残らず、心底を盡して知らされけることを淺猿けれ。九月十三日夜は、暮天雲晴れて、月も名におふ夜を顯はしぬと見えければ、今夜明月の會に事を寄せて、佐殿を我が館へ入れ奉り、酒宴の砌にて討ち奉らんと思はして、無二の一族、若黨三百餘人催し集め、我が館の傍にぞ籠め置さける。日暮れば、竹澤急ぎ佐殿に參つて、今夜は明月の夜にて候へば、恐ながら私の茅屋へ御入り候て、草深き庭の月をも、御管候へかし。御内の人々をも慰め申候はん爲めに、白拍子共少々召し寄せて候へ申しければ、興ある遊ありぬと、面々に皆悦んで、體て馬に鞍置かせ、即從共召し集めて、己に打ち出でんとしたまひける處に、少將の御局よりとて、佐殿へ御消息あり。披いて見給へば、過ぎし夜に、御事を悉しき様なる夢に見進らせ候ひつるを、夢説きに問ひ候へば、重き御慎にて候。七日が間は、門の内を御出で有る可からずと申候也。御心得候べしとぞ申されたりける。佐殿是れを見給ひて、執事井彈正を近づけて、如何有るべきと問ひ給へば、井彈正、凶を開きて慎まらずと云ふ事や候べき。唯、今夜の御遊をば、止めらる可しとぞ存じ候へどぞ申しける。佐殿げにもと思ひ給ひければ、俄に風氣の心地ありとて、竹澤をぞ歸されける。竹澤は、今夜の企案に相違して、安からず思ひけるが、抑佐殿の少將の御局の文を御覽じて止まり給ひつるは、如何様我が企を、内々推して告げ申されたる者也。此女姓を生けて置いては叶ふまじとて、あすの夜、潛に少將の局を、門へ呼び出し奉つて、差し殺して堀の中にぞ沈めける。痛はしいかな、都をば打ち續きたる世の亂れに荒れのみまさる宮の中に、年経て住みし人々も、秋の木の葉の散りゆくに、おのが様々に成りしかば、恐む影なき成りして、身を萍(ウキクサ)の寄るべとは、此竹澤をこそ慰み給ひしに、何故と思ひ分けたる方も無く、見てだに消えぬべき秋の霜の下に伏して、深き淵に沈められ給ひける。今はのきはの有様を、思ひ遣るだに哀れにて、よその袖さへしをれにけり。其後より、竹澤、我が力にては猶ほ討ち得じ

と思ひければ、高山殿の方へ使を立て、兵衛佐殿の隠れ居られて候所をば、委細に存知仕つて候へども、小勢にては討ち漏らしぬと覺え候。急ぎ一族にて候江戸遠江守と下野守とを下さされ候へ。彼等に能く評定して、討ち奉り候はんとぞ申しける。高山大夫入道大に悦んで、體て江戸遠江守と、其甥下野守を下さされ候が、討手を下す由、兵衛佐傳へ聞かば、在所を替へて、隔つる事も有りとして、江戸伯父甥が所領稻毛の莊十二郷を關所になして、則ち給人をぞ付けられける。江戸伯父甥大に偽り忿つて、體て稻毛の莊(馳せ下り、給人を追い出し、城郭を構へ、一族以下の兵(ツハモノ)五百餘騎招き集めて、唯高山殿に向ひ、一矢射て討死せんとぞ言(シ)りける。程経て後、江戸遠江守、竹澤右亮を縁に取つて、兵衛佐に申しけるは、高山殿、故無く懸命の地を没收せられ、伯父甥共に牢籠の身と罷成る間、力及ばず、一族共を引率して、鎌倉殿の御陣に馳せ向ひ、高山殿に向つて、一矢射しずるにて候。先づ忍びて鎌倉へ御越し候へ。鎌倉中に當家の一族いかなりとも二三千騎有る可候。其勢を付けて、相模國を打ち隨へ、東八箇國を推して、天下を覆す謀を運らし候はんと、誠に容易げにぞ申したりける。さし志深き竹澤が執し申すなれば、疑ふ所に非ずと懸まれて、則ち武藏、上野、常陸、下總の間に、内々與力しつる兵どもに、事の由を相觸れて、十月十日の曉に、兵衛佐殿は、忍びて先づ鎌倉へとぞ急がれる。江戸、竹澤は、兼ねて支度したる事なれば、矢口の渡りの船の底を、二所あり貫(ヌ)いて、のみを差し、渡りの向うには、宵(ヨヒ)より江戸遠江守、同下野守、混物具(ヒタモノノグ)にて、三百餘騎、木の陰岩の下に隠れて、餘る所あらば、討ち止めんと用意したり。跡には竹澤右亮、究竟の射手百五十人ずつて、取つて歸されば、遠矢に射殺さんと巧みたり。大勢にて御通り候は、人の見尤も奉る事も候へとて、兵衛佐の郎從共をば、兼ねて皆抜けて、鎌倉へ遣はしたり。世良田右馬助、井彈正忠、大島周防守、土肥三郎左衛門、市河五郎、由良兵庫助、同新左衛門、南瀬口六郎、僅に十三人を打ち連れて、更に他人をば難(ナ)ず、のみを差したる船にこみ乗つて、矢口の渡りに押し出す。是れを三途の大河ぞと思ひ寄りぬぞ哀なる。つら、是れを譬ふれば、無常の虎に追はれて、煩惱の大河を渡れば、三毒の大蛇浮き出で、是れを呑まんと舌を暢べ、其冷害を遁れんと、岸の額なる草の根に命を係けて取り付きたれば、黑白二つの月の鼠が、其草の根をかざるなる、無常の喩へに異ならず。此矢口の渡りと申すは、面(オモテ)四町に餘りて、浪嶮しく底深し。渡り守已に櫓を押して河の半ばを渡る時、取りはづしたる由にて、櫓かいは河に落し入れ、二つののみを同時に抜いて、二人の下手、同じやうに河にがばくと飛び入つて、うぶに入つてぞ逃げ去りける。これを見て向うの岸より、兵四五百騎懸け出で、時をどつと作れば、跡より時を合はせて、愚なる人々哉。斬(タ)バカるとは知らぬか。あれを見よと欺いて、籠(エビラ)を叩いてぞ笑ひける。去る程に、水船に浦き入つて、腰中ばかりに成ける時、井彈正、兵衛佐殿を抱き奉つて、あうに差し掲げたれば、佐殿、安からぬ者かな。日本一の不道人共に、折られつる事よ。七生まで汝等が爲めに恨を報すべき者をと、大に忿つて、腰の刀を抜き、左の脇より右のあばら骨まで、掻きまはしく、二刀まで切り給ふ。井彈正、腸を引き切つて、河中へがばと投げ入れ、己が喉笛二ところさし切つて、自らかうづかを颯(ツカ)み、己が首を後ろへ折り付くる音、二町ばかりを聞えける。世良田右馬助と大島周防守とは、二人刀を柄口(ツカゲチ)まで、突き違へて、引つ組んで河へ飛び入る。由良兵庫助、同新左衛門は、舟の櫓軸(トモ)に立ち上り、刀を逆手に取り直して、互に己が首を掻き落す。土肥三郎左衛門、南瀬口六郎、市河五郎三人は、各袴の腰引きちぎりて、裸に成り、太刀を口にくはへ、河中に飛び入りけるが、水の底を潛(ク)つて、向うの岸へかけあがり、敵三百騎の中に走り入り、半時ばかり切り合ひけるが、敵五人打ち取り十三人に手負はせて、同じ枕に討たれにけり。其後水練を入れて、兵衛佐殿並に自害討死の首十三求め出し、酒に浸して、江戸遠江守、同下野守、竹澤右亮五百餘騎にて、左馬頭殿のおはします武藏の入開河の陣へ馳せ參る。高山入道斜ならず悦んで、小俣少輔次郎、松田、河村を呼び出して、此れを見せらるゝに、子細無き兵衛佐殿にておはします候ひけりとして、此三四年が先に、數日相馴れ奉りし事共申出で、皆涙をぞ流しける。見る人悦の中に哀れを添へて、共に袖をぞぬらしける。此義興と申すは、故新田左中將義貞の妾(オモヒモノ)の腹に出来たりしかば、兄越

後守義顯が討たれし後も、親父猶ほ是れを嫡子には立てず、三男武藏守義宗を、六歳の時より昇殿せさせて、時めきしかば、義興は有るにも非ず、孤(ミナシゴ)にて上野國に居たりしを、奥州の國司顯家卿、陸奥國より鎌倉へ責め上る時、義貞に志ある武藏上野の兵共、此義興を大將取り立て、三萬餘騎にて、奥州の國司に力を合はせ、鎌倉を責め落して、吉野へ参じたりしかば、先帝御覽ありて、誠に武勇の器用たり。尤も義貞が家をも興す可き者也として、童名徳壽丸と申し、を、御前にて元服させられて、新田左兵衛佐義興とぞ召されける。器量人に勝れ、謀巧みに心飽くまで早かりしかば、正平七年の武藏野の合戦、鎌倉の軍にも大敵を破り、萬卒に當る事、古今未だ聞かざる處多し。其後、身を側め、唯三三人武藏上野の間に、隠れ行き給ひし時、宇部宮の清の黨が、三百餘騎にて取り籠めたりしも、討ち得ず、其振舞恰も天を翔り、地を滑る術ありと、怪しき程の勇者なりしかば、鎌倉の左馬頭殿も、京都の宰相中將殿も、安き心地をばせざりつるに、運命窮りて、短才庸愚の者共に所られ、水に溺れて討たれ給ふ。かゝりし程に、江戸竹澤が忠功拔群なりとして、則ち數箇所の恩賞をぞ行はれける。あはれ弓矢の面目かなと、是れを羨む人もあり。又きたなき男の振舞かなと爪弾きをする人もあり。竹澤をば、猶も謀反與同の者共を、委細に尋ねらるべしとして、御陣に留め置かれ、江戸二人には、暇たびて恩賞の地へぞ下されける。江戸遠江守喜悅の肩を開きて、則ち拜領の地へぞ下向しける。十月二十三日の暮程に、矢口の渡に下(オ)り居て、渡の舟を待ち居たるに、兵衛佐殿を渡し奉りし時、江戸が語らひを得て、のみを抜いて舟を沈めたりし渡守が、江戸が恩賞給ひて下ると聞きて、種々の酒肴を用意して、迎の舟をぞ漕ぎ出ししける。此舟已に河中を過ぎける時、俄に天搖り曇りて、雷鳴り、水風烈しく吹き漲りて、白波舟を漂はす。渡守あわて騒いで漕ぎ戻らんと、櫂を押して舟を直しけるが、逆巻く浪に打ち返されて、水手棍取一人も残らず、皆水底に沈みけり。天の忿たゞ事に非ず、是れはいか様義興の怨靈なりと、江戸遠江守懼れおののきて、河端より引き返し、餘の處をこそ渡さめとて、此れより二十餘町ある上の瀬へ、馬を早めて打ちける程に、電(イナビカリ)行くさきに閃きて、雷(イカヅチ)大に鳴り響(ハタ)めく。在家は遠し、日は暮れぬ。只今雷神に蹴殺されぬと思ひければ、御助け候へ兵衛佐と、手を合はせ虚空を拜して、逃げたりけるが、とある山の辻堂を目に懸けて、あれまでと馬をあをりける處に、黒雲一村江戸が頭(カウベ)の上を落ちさがりて、雷電耳の邊に鳴り閃きける間、餘りの怖しさに、後ろを吃と顧みれば、新田左兵衛佐義興、火藏の鎧に龍頭の五枚甲の緒を縮(シ)めて、白栗毛なる馬の、額に角の生ひたるに、乗りあひの鞭をしと、打つて江戸を弓手の物になし、鐙の鼻に落ちさがりて、わたり七寸ばかりなる鷹俣(カリマタ)を以て、かひかねより乳の下へ、かけずふつと射とほさる、と思ひて、江戸馬より倒に落ちたりけるが、やがて血を吐き、悶絶僻地しけるを、輿に乗せて江戸が門へ昇き著けたれば、七日が間、足手をあがき、水に溺れたる眞似をして、あち堪へがたや、是れ助けよと、叫び死に、死に、けり。有爲無常の世の習、明日を知らぬ命の中に、僅の欲に就り、情なき事共を巧み出し振舞ひし事、月を隔てず、因果歴然、乍ちに身に著きぬる事、是れ又未來永劫の業障也。其家に生れて、箕裘を繼ぎ、弓箭を取るは、世俗の法なれば、力なし。ゆめく、人はか様の思の外なる事を、好み翔(フルマ)ふ事有るべからず。又、其翌(アス)の夜の夢に、高山大夫入道の見給ひけるは、黒雲の上に大鼓を打つて、時を作る聲しける間、何者の寄せ来るやらんと怪しく、音する方を遙に見遣りたるに、新田左兵衛佐義興、長二丈ばかりなる鬼に成つて、牛頭馬頭阿放羅刹共、十餘人、前後に隨へ、火車を引き、左馬頭殿のおはする陣中へ入ると覺えて、胸打ち騒いで夢覺めぬ。禪門風に起きて、斯る不思議の事を見て候へと、語り給ひける言はの未だ終(ハ)てざるに、俄に雷火落ち懸り、入間河の在家三百餘宇、堂舎佛閣數十箇所、一時に灰燼と成りにけり。是れのみならず、義興討たれし矢口の渡に、夜々光り物出で来て、往來の人を惱ましける間、近隣の野人村老集つて、義興の亡靈を、一社の神に崇めつ、新田大明神とて、常盤堅盤の祭禮、今に絶えずとぞ承はる。不思議なりし事共なり。

義興既死。義宗。義治仍在越後。二十二年。足利義詮死。子義滿猶幼。明年。七月。義宗。義治起兵越後。上野。與足利氏將上杉義憲戰。不克。義宗死之。義治走出羽。建德元年。正月。義治收兵。出武藏。上野。與上杉朝房戰。復不克。走匿信濃。不知所終。

【仍】……なほ。【建德】……長慶帝の時の年號。

義興はすでに死んで仕舞つたけれども、義宗、義治は、まだ越後に居つた。正平二十二年に、足利義詮は死んで、子の義滿は、まだ幼少であつた。明年七月に、義宗、義治は兵を越後、上野に起して、足利氏の大將上杉義憲と戦つて、勝つことが出来ずして、義宗は討死し、義治は出羽國に逃げ走つた。建德元年正月に、義治は、兵を取りまとめて、武藏、上野に出掛けて、上杉朝房と戦つたけれども、また勝利を得ずして逃げ走つて信濃に隠れて居つたが、其後何處で死んだか分らない。

義宗子貞方爲相模守。義治子義隆爲刑部少輔。後龜山天皇。元中二年。二人竝匿信濃浪合。潛集宗族。足利氏滿管領鎌倉。遣兵鑿之。貞方。義隆脫走入陸奥。九年。天皇納足利義滿劫和。北入京師。義滿購天下。索新田氏族。先是。小山義政據小山城。爲新田氏。爲氏滿所攻破死。義政子穉狗復起兵據男體城。年餘。城陷。走入陸奥。依田村清包。於是。相共舉義。推貞方。義隆爲將軍。軍于白河。氏滿將十一州兵來擊。吾衆潰。貞方。義隆復逃走。是歲。丙子也。歲癸未。義隆匿箱根山中。竹下人安藤某。告之鎌倉。來捕。

義隆鬪死。歲庚寅。貞方在鎌倉。陰糾合義故事。爲千葉兼胤所捕。斬于七里濱。新田宗統於是而絕。而其支族匿參河者。歲再周庚寅。而後大興事詳于末編。

【劫和】...劫は強取なり。無理おしつけの和睦を云ふ。【購天下】...懸賞を以て天下にさがす。【小山】...下野に在り。【男體城】...下野に在り。【白河】...今の磐城に在り。【丙子】...後小松帝の應永三年なり。南北朝合一の後、別に南朝の年號なき故に、干支を紀する也。【癸未】...應永十年なり。【庚寅】...應永十七年なり。【糾合】...音キウカフ。集め寄せる。【義故】...恩義を忘れぬ故舊の人々。【七里濱】...相模に在り。鎌倉と江の島との間の濱なり。【宗統】...本家の血筋。【支族】...分れ出でた一族の者。【匿參河者】...徳川氏を指す。義重の四男義季の後裔。【歲再周庚寅】...こゝに庚寅といふは、前に歳庚寅とあるに應じたる也。これより二度庚寅の歲にめぐり來りて後、即ち百二十年後なり。後奈良帝の享祿三年にあたる。徳川家康は天文十一年壬寅の歲に生る、享祿三年庚寅の歲を去ること十三年なり。【末編】...この外史の末の卷、徳川記を指す。

義宗の子貞方は相模守となり、義明の子の義隆は刑部少輔となつた。後龜山天皇の元中二年に、此二人は一所に、信濃國の浪合に隠れて、ひそかに一族の者を集めて居つたが、足利氏滿が其時に鎌倉を管領して居つて、兵士を派遣して之を皆殺しにした。貞方と義隆とは、身を脱して逃げ走つて、陸奥國に入つた。同九年に、天皇は、足利氏滿の無理おしつけの和議の申込を御聞き入れになつて、北の方京に御歸りになつたので、南北兩朝は合一した。義隆は、天下中に觸れ出して、金を懸賞として、新田氏の一族をさがし求めた。これより先して、男體城に立て籠つたが、一年ばかりにして、城が攻め落されて、逃げ走つて陸奥國に入つて、田村清包にたよつて居つた。南北合一になつたときに、種狗、清包は、一處に義兵を擧げて、貞方、義隆を推して大將として、白河に陣取つた。氏滿が十一箇國の兵士を引き連れて來り撃つた。吾が軍勢は崩れて仕舞つて、貞方、義隆は、また逃げ走つた。この歳は、丙子の歲で、即ち後小松帝の應永三年である。癸未の歳、即ち應永十年には、義隆は箱根の山中に隠れて居つたが、竹下の人なる安藤某が、この事を鎌倉に告げたので、やがて來つて捕へやうとすると、義隆は闘つて死んで仕舞つた。庚寅の歲即ち應永十七年に、貞方は鎌倉に居つて、ひそかに、恩義を忘れざる故舊の者共を寄せ集め居つたが、其事が露顯したので、千葉兼胤に捕へられて、七里濱に於て斬られて仕舞つた。新田氏の自家の血筋は、こゝに於て絶えて仕舞つたのである。然れども、新田氏の分れの一族にして、參河國に隠れて居つた者は、これから、二度庚寅の歲にめぐり來つた後、即ち凡そ百二十年の後に、大に興つて盛んになつた。それは、即ち徳川氏である。此事は、この外史の末の卷に於て詳しく述べてある。

外史氏曰。余見義貞手記者。蓋其未舉事時。語家子弟武門法戒。淺近而已。然有言曰。爲將者。奉上撫下。決志而行。聽運於天。勿尤人也。義貞成於元弘。而敗於延元。亦時運有不可邪。將上之人有負之邪。至叡山之事。可謂負之甚矣。帝蓋前此未曾面議事。至此亦嘗試兩端。僥倖孰成。以是待將帥。惡濟時難哉。

【手記】...自分で書き付けし者。義貞軍記と云ふ。【未舉事時】...義貞が未だ北條を討つ義兵を擧げざる時。【語】...告ぐ。【武門法戒】...武家の法度訓誡。【淺近】...淺薄にして卑近。其意味淺はかにして世俗に近き也。【聽】...まかす。【尤】...とがむ。【元弘】...元弘三年五月、義貞、鎌倉を攻めて、高時を誅す。【延元】...元年、足利尊氏、京都を攻めて、義貞敗る。【負】...そむく。【叡山之事】...尊氏伴り降り、帝の闕に歸るを請ふ。帝信じて之を聽す。堀口貞満、其職に攀ぢ、泣いて諫むれども、帝聽かず。遂に義貞をして皇太子を奉じて越前に赴かしむ。【面議】...まのあたり事を相談する。【嘗試】...こゝろみる。【兩端】...兩天秤。どちらか甘く行けばよいと思ふ也。【僥倖】...し也。後醍醐帝が、義貞に皇子を托して北國地方を経略せしめ、而して御自身は尊氏の請を許して京都に遷られしを云ふ。【待】...待遇する。【惡】...いづくんぞ、どうして。【濟時難】...時の艱難を救濟する。

外史氏論じて曰く、余、山陽自ら云ふ。義貞が自身で書き附けたといふ者を見たことがある。大體、其書は、義貞が未だ北條氏討伐の義兵を擧げない時に、自分の家の子弟に、武家の法度訓誡を語り聞かせたものであつて、まことに淺はかにして世俗に近いもので、格別すぐれた者では無い。然れども、其書の中に言つてある言には、大將たる者は、上に御奉公し、下たる者を撫でやすんじ、斷然として志を決して事を實行し、運をば天に御任せ申して、決して人を咎めては成らぬと曰つてある。義貞は、元弘の時には成功したけれども、延元の時には失敗したのであるが、これも亦、時の運命に善いと惡いとが有つたからであるか、たゞし又、上たる御方(即ち天子様)が義貞に背かれたからであるか、どちらであらうか。叡山の事に至つては、天子が義貞に背くこと實に甚しいと謂ふことが出来るのである。後醍醐帝は、大體、これより以前に、未だかつてすべての事を面をあたりに義貞に相談をなされたことは無く、此度の事に至りても、亦、兩天秤を掛けて見て、義貞か尊氏かのどちらかが成功すれば善いと、まぐれ幸をねがうて居られたのである。此の如き仕方をして、大將達を待遇せられるのであるから、どうして、其時の艱難を救濟して、動亂を鎮定して泰平の治に至らしめることが出来るやうかと、とても出来ぬ事である。

吾嘗咎義貞之東伐。不按兵持重。俟奥兵擾其内。而後應之。懸軍長驅。一敗成賊勢。及賊西奔。則不捲甲窮追。頓兵堅城。以致賊再燃。是緩急兩失。

機也。然當時主聰壅蔽。國論苟媮者如此。蓋雖有善謀難於輒行。則不可。實罪其戰也。是故爲官則敗。爲私則成。寧敗而忠義。不成而奸賊。義貞之志亦可悲矣。

【義貞之東伐】……尊氏鎌倉に據りて叛く。帝、節刀を義貞に賜うて之を征せしめらる。【按兵持重】……按兵の二字、史記の周本紀に出づ。按は抑ふるの義なり。兵を抑へ止めて、輕々しく進撃せずして、大事を取るを云ふ。【奧兵】……奥州の兵、即ち北畠顯家の兵を云ふ。【擾】……亂す、かきみだす。【其内】……關東八州を指す。【懸軍長驅】……あとに續く軍勢も無くして遠く敵地に乗り込むこと。【成賊勢】……賊軍に勢をつける。【賊西奔】……延元元年に尊氏京師に敗れて九州に走りしを云ふ。【捲甲】……鎧を卷きをさめて、身輕にする。【窮追】……どこまでも追ひ詰める。【頓】……とむる也、次る也。一所にとむる。【堅城】……赤松則村の立て籠れる白旗城を云ふ。義貞、白旗城を攻めたれども、城兵善く拒ぎて、終に陥らず。【賊再燃】……賊の勢が、火の再び燃えあがる如く、また盛んになる。尊氏が九州より再び起りしを云ふ。【緩急兩失機】……前には緩にすべきを急にし、後には急にすべきを緩にし、緩急ともに好機會を取り外したりとの意。【主聰壅蔽】……天子の御耳が塞がり蔽はる。【國論】……朝廷の議論。【苟媮】……苟且媮安なり。その場の難儀さへどうにか遁れ、ば善いと云ふ道口を云ふ。音コウトウ。【輒】……たやすく。【實】……たゞに。但と通ず。

吾、かつて、義貞を告むる議論をしたことがあるが、それは、尊氏が鎌倉に在つて叛いたときに、義貞が東して之を征伐するには、兵を抑へ止めて大事を取つて、北畠顯家の率ゐて居る奥州の兵が關東八州をかき亂すのを待つて、然る後に之に應じて攻撃することを爲さずして、あとから引き續いて来る軍勢も無いのに、深く敵地に攻め入つて、とうとう一たび敗れて、賊の勢を増加することになつた。又、賊尊氏等が京都に於て敗れて西の方九州に向つて逃げ走る時に及んで、は、鎧を卷きをさめて身輕に出で立つて、どこまでも追ひ詰めることを致さずして、堅固にして抜き難き白旗城に兵士をとめて置いて、それで以て、譬へば消えかゝつた火が再び燃え上るが如く、賊の勢が再び盛に成ることにならしめたのである。これは、前のときには緩なるべきを急にして誤り、後のときには急なるべきを緩にして誤り、緩も急も兩方ともに好機會を失つたのである。これはどうも義貞が善くなかつたことと云ふ議論である。然れども、其當時には、朝廷に於て内訌などが行はれて、天子の御耳が其爲めに塞がれ蔽はれて、朝廷の議論は、たゞ一時通れさへすれば宜しいと云ふ有様であること、此の如くであつたので、大體、善い謀が有つたとしても、たやすく之を行ふことが六かしい有様であつたのであるから、たゞに其戦争の仕方ばかりを惡いと云つて非難することは出来ないものである。それ故に、朝廷の爲めにするときは失敗し、一己の私の爲めにするときは成功すると云ふ様なる時であつたのに、義貞は、いつその事、失敗して忠義であるとも、成功して奸賊となることを致さなかつたので、義貞の志も亦、氣の毒であるとする可きである。

吾居平安。每觀東山岡阜起伏。指義貞力戰處。仰觀叡山。又念其拜辭北

行時也。帝及南遷。蓋深悔此舉。下哀痛詔而已無及矣。噫君臣際會難矣。可不慨歎歟。

【平安】……京都。山陽は京都の三本木に住す。【岡阜】……丘なり。二百尺以上の高さを岡と云ひ、向ふ高く、上平なるを阜と云ふ。【起伏】……或は高くなり或は低くなつて連なつて居る。【北行】……義貞が越前へ向ひしを云ふ。【南遷】……後醍醐帝が吉野に遷りたまひしを云ふ。【已無及矣】……もはや追つ付かぬ。【際會】……際も亦會ふ也。相遇ふ、出合ふ。

吾、京都に居つて、東山の丘が高くなつたり低くなつたりして相連なつて居るのを見る度に、義貞が力を盡して戦つた場所を指さし、仰いで叡山の高きを見ると、又、義貞が後醍醐帝に御暇乞申上げて、北の方越前に向つて行つた時の事を思ひ遣るのである。帝が南の方吉野に御遷りなされるに及んで、大體深く此事を御後悔なされて、哀しく痛ましげなる御詔を下されたれども、もはや追ひ付かぬことであつた。あゝ、君と臣とがうまく出合ふことは、まことに六かしい事である。慷慨して歎息しないわけには行かぬことである。

假令義貞有霸心。當其初克鎌倉。北條氏餘燼未滅。而足利氏反迹已形。義貞以此爲請。坐鎮舊府。蓄力養威。與護良親王。東西合謀。請清君側。朝廷不敢不聽。使尊氏或挾天子以臨我。其逆節漸長。天子終不能堪。必將引我以自援。猶後白河之近疎義仲。而遠款賴朝耳。是新田氏上計也。不然。當其始授鉞。進據信濃。上野。連之奧羽。俯瞰八州。扼賊之吭。而拊其背。賊形格勢禁。必不棄我以犯闕。是又其次也。及其辭叡山。則事不可爲矣。然得擁太子。進退自如。爲赴越前。而潛歸上野。勢或可達。收合舊部。奪賊巢窟。據以爲根本。進則成恢復。退則圖翼戴。又可以展其才而得其志。計不出於此。以無根之兵。奔走東西。而謀與戰皆不由己。宜

其困屈無所成也。雖然奉令周旋。銳意勤王。不暇占便利。所以爲義貞也。觀其死時。猶佩錦囊詔書。見其報國之志。百敗不挫。至今凜有生氣。而老賊之骨朽腐已久。十三世之室町。徒見市塵迷離。索其斷礎。不復可識矣。義貞之聽運於天。其以此邪。

【假】……もし、かりに。【霸心】……覇業を成さんと志。將軍となつて天下の實權を握らんとする野心。【餘燼】……燼は火の燃え残り。殘燼に喩ふ。【反跡】……謀叛の様子。【形】……あらはる。【爲請】……申し立てとする。【舊府】……鎌倉を云ふ。【逆節】……惡逆無道の振舞。【款頼朝】……頼朝に心を寄せる。【上計】……最上の計畫。【始授錢】……錢は斧錢なり。古昔支那に於て征討の時に天子より將軍に賜はりし者也。建武二年十一月、義貞詔を奉して尊氏を鎌倉に討ちしを云ふ。【扼】……握なり、おさへる。【吼】……うづ。【形格勢禁】……格は強なり、禁は止なり。形阻格して勢自由ならず。形は邪惡をされ勢は止められて自由にならぬ。【自如】……自在。勝手次第なり。【收合】……收は欲なり、まとめ集め寄せる。【舊部】……もとの部下の者共。【巢窟】……鎌倉を指す。【翼戴】……輔翼して尊戴する。たすけいたす。【王室の爲めに盡す】王室を尊崇する。【無根之兵】……根據の無い、つゞく味方の無き軍勢。【奉令周旋】……周も亦旋なり。命令を受けて立ち振舞ふ。【便利】……己が爲めに都合好き事。【觀其死時】……觀は一に觀に作る。【挫】……毀折なり。くじける。【稟】……稟清の貌、りしき也。【有生氣】……生きて居るやうに思はれる。【老賊】……尊氏を指す。【十三世】……足利氏は十三代つゞきたる也。【室町】……京都の町の名。足利氏が幕府を開きしところ。【市塵迷離】……町中の塵ほこりがちらくする。【斷礎】……斷は絶なり、礎は柱下の石なり。こわれ残りたる石す。

【關】若しも、義貞をして將軍となつて天下の實權を握らうとの野心が有らしめたならば、義貞がはじめに鎌倉に於て北條氏に勝ちおぼせた時に當つて、北條氏の殘黨は未だ全く滅びて仕舞はず、そして足利氏が謀叛の様子にあらはれたときに於て、義貞は、此事を以て申し立てと致して、じつとして鎌倉を鎮撫することにして、勢力をたくはへ、威權を養つて、義貞親王と、東の鎌倉と西の京都とに在つて謀を打ち合はせて、天子の御側に居る好物を掃き除くことを請うたならば、朝廷では、此請を聞き入れないわけには行かなかつたであらう。たとひ、尊氏が、ひよつと天子を挾んで新田氏の方へ向ふことがあつたとしても、尊氏の亂逆無道の振舞がだんぐりに増長して、天子が仕舞にこれを堪へ忍びなざるに出来なれば、屹度、新田氏を引きつけて御自分の御助となされるに成つたであらう。それは、ちやうど、後白河法皇が、近く京都に居る木曾義仲を疎んじて、遠く鎌倉に居る源頼朝に御心を寄せられた様な事に成つたであらう。これが、新田氏の最上の計略である。若し左様致さないならば、義貞が、始めて尊氏を討伐すべき御詔を受けたときに當つて、義貞は、進んで信濃、上野に立て籠つて、奥羽に居る北島氏と連合して、高きところに居つて關東八州を見おろし、賊の喉元を握りしめて、そして其首領を打ちちた、く様な事を致したならば、賊は形はこたはり、勢は止められて自由ならずして、屹度、新田氏を棄て、置いて西の方の上つて京都を犯すやうな事をば致さなかつたであらう。これが又第二の計策である。又、義貞が叔山に於て御暇乞をして天子に御別れする時に及んで

は、最早致方の無い事に成つて居つたのである。然れども、義貞は、皇太子をより立てることが出来て居るのであるから、進退が自由であることなれば、越前に出掛けて行くやうな風をして、そして、ひそかに上野に歸つたならば、勢がひよつとしたりは甘く往くことが出来たかも知れぬ。そこで、もとの部下の者共をまとめ合はせて、賊の巢窟たる鎌倉を奪ひ取つて、其處に立て籠つて根本の地として、進んでは恢復を成し、それが出来ずして退いては、皇室をたすけ奉戴することを企てたならば、また、それでいて、思ふ存分に自分の才能を揮ひ展ばして自分の志望を成就することが出来たであらう。これが第三の計略である。然るに義貞の計畫は、上の三つの計策に出でずして、根據の無い兵士を引き連れて、東西にかけまはつて、そして又、謀も戦闘も、いづれも皆、自分の思ふ様にすることが出来なかつたのである。根拠ら、義貞が困却し屈伏して成功したところの事が無かつたのは、尤至極の事である。然れども、義貞は、朝廷の命令を受けて立ち振舞ひ、熱心に王事の爲めに勤勞して居つて、自分の都合の善い事を爲すに暇あらざりしは、これが、義貞たることである。義貞が死ぬる時にも、熱だ錦の囊に入れたる御詔の書付を持つて居つた事を見るときは、義貞が國家の爲めに報いやうとする志が、いくたび失敗しても挫けて仕舞はなかつた事が分かるので、今日に至つても、凜然として、生きて居るやうに思はれるのである。然るに、老賊尊氏の骨は朽ち腐つて仕舞てからもはや久しいことで、十三代の間續いたところの足利幕府の在つた室町は、今はたゞ町中の塵埃がちらくとして居るだけで、その切れこわれた石すをば探し求めても、もう分らないやうに成つて仕舞つて居る。義貞が、運命を天に任せると言つたのは、それ、大方、此様な譯で言つたのであらうか、左様であるかも知れぬ。

余嘗謂。新田。足利之兵爭。猶朱李之於唐季。義貞忠勇勝於克用。而義興等英邁不讓。存勗存勗覆滅汴梁。而義興等不克報室町者。亦非有所牽制。故歟。抑我東北形勝。同於河北太原。而新田氏不能據有也。然義貞祈山靈。以其子孫再起滅賊。又猶遜佶烈祝天。願生眞主安天下也。世稱趙藝祖。應祝而生。我二百年後。代足利氏而興者。實出於新田遠裔。亦烏知非應義貞之祈哉。則天運果有復時。勝敗之數。未可以歲月較也。

……くつがへし亡ぼす。音フクメツ。汗梁。……朱全忠の都せし處。報室町。……仇を足利氏に報ゆること。奉制。……朝廷が軍事を將帥に專任せざるを云ふ。河北太原。……李克用父子の據る所の地。山靈。……叡山の日吉神社を云ふ。遺信烈。……晋王李克用の養子嗣源なり。存島が弑に遇ひし後、叛卒に推されて即位す。是れを明宗となす。即位の年、已に六十に踰ゆ。毎夕、宮中に於て香を焚き天に祈りて曰く、某は胡人なり。國亂れたるに因りて衆の推す所となる。願はくは天早く聖人を生じて生民の主と爲せと。趙藝祖。……宋の太祖、姓は趙、名は匡胤、周に代りて天下を有つ。廟を藝祖と號す。後唐の明宗の登極の年に生る。故に祝に應ずと云ふ也。祝。……祈なり。代足利氏而興者。……徳川氏を指す。數。……命數。まはり合せ。未可以歲月較也。……歲月の前後遲速を以て勝敗得失の命數を比較し評論することとは出来ぬ。

余かつて思ふに、新田氏と足利氏とが兵事上の争は、ちやうど、朱氏と李氏とが唐の末に於て争うたのと同じ様である。義貞の忠義武勇なることは、李克用よりもすぐれて居つて、義貞の子の義興等が人竝すぐれて居ることは、李克用の子の存島に劣つて居らぬのであるが、然るに、存島は朱氏の都なる汴梁をくつがへし亡ぼしたけれども、義興等は足利氏に仇を報ゆることが出来なかつたのは、これ亦、例によつて朝廷から束縛せられて自分等の思ふ様に事が出来なかつた事があるからではあるまいか。左様であるかも知れぬ。そもく、例に於て國の東北の要害の善い事は、支那の河北太原と同じ事である。しかるに、新田氏は其處に立て籠つて守つて居ることが出来なかつたのである。斯く新田氏は其時に於ては失敗したけれども、義貞は、比叡山の日吉の神に祈るに、自分の子孫が再び起つて賊軍を滅すやうにと祈つた。これは又、ちやうど遺信烈即ち後唐の明宗が天に祈つて、眞の天子を生じて天下を安泰ならしめるやうにと願つたのと同じ様である。世間で云ふには、趙藝祖即ち宋の太祖はその祈に應じて生れたのであると云つて居る。わが國に於ても、其後二百年たつてから、足利氏に代つて興つた者(即ち徳川氏)は、實に新田氏の遠い子孫から出たものである。これも亦、どうして、義貞が日吉の神に向つての祈願に感應した者でないか、が知れやうか、義貞の祈願に感應したものであるかも知れぬ。して見れば、天運は、果して、めぐりめぐつてまた元へかへる時があるのである。勝敗得失の命數は、歲月の前後遲速だけを以て比較論評することは出来ないのである、とこのつまりまで行つて見ねば勝敗得失の命數は分らぬのである。

日本外史講義卷之六終

日本外史講義卷之七

賴襄子成原著 興文社編輯所講義

足利氏正記

足利氏上

足利氏。出於源義家。義家在京師。其子義國。以事謫關東。居上野。生二子義重。義康。義康食下野足利郡。因氏焉。爲檢非違使左衛門尉。保元之亂。從源義朝於京師。衛守大内。捕平家弘。補藏人。聽昇殿。生三子義清。義長。義兼。義兼雄偉而循謹。其二兄皆爲源義仲將。西與平氏戰水嶋。死之。而義兼從征夷大將軍源賴朝于鎌倉。最見親待。從擊平氏筑紫。又從擊藤原氏陸奥。陸奥再亂。義兼統諸將往討之。賴朝因定天下。奏授之上總介。使北條時政以女妻之。生義氏。義氏數助北條氏。靖其家難。爲正四位下左馬頭。義氏生泰氏。泰氏生賴氏。賴氏生家時。家時生貞氏。皆居足

利。旗用白。旗號重畫。細川。畠山。仁木。岩松。桃井。吉良。今川。斯波。石橋。澀川。石堂。一色諸族。皆出於足利氏。

【以事請關東】...義國嘗て入朝する途にして、右大臣實能に遇ふ。その從者の爲めに馬より墮さる。義國の隸士怒つて實能の宅を焚く。義國坐して上野に謫せらる。事は、新田氏正記に詳なり。謫は音タク、罪あるによりて遠地に遷さる、を云ふ。【雄偉】...雄武偉大。武勇があつて身體が大きい。【循謹】...すなはに道を守つて謹み深い。【水島】...備中に在り。【親待】...親しみて待遇する。【藤原氏】...泰衡を云ふ。【陸奥再亂】...泰衡の舊臣大河兼任、詐りて源義經、木曾義高と稱して亂を起したるを云ふ。【以女妻之】...政子の妹を以て義兼に妻はす。【靖其家難】...その家の難義な場合をやすんじ治むる。建保の和田氏の難、承久の都攻の時等に、義氏は、北條氏に従ひ、頗る功ありしを云ふ。【重畫】...二引兩(フタツビキリヤウ)。

足利氏は、源義家の血筋から出たものである。義家が京都に居つたとき、其子の義國が、ある事の爲めに罪を得て關東の地に遷され、上野に居つたが、二人の男子、義重、義康を生んだ。義康は、下野國足利郡を領地として居つたので、それで足利氏を以て氏となした。檢非違使左衛門尉となつた。保元の亂のときに、源義朝に京都に從つて、御所を護衛し奉つて、崇徳院方の平家弘を捕へ、その功によつて、藏人に補せられ、昇殿を許された。三人の子、義清、義長、義兼を生んだ。義兼は、武勇にして身體が大きく、そして、法度にしたがひ謹み深くあつた。其二人の兄即ち義清と義長とは、皆、源義仲の部下の將となつて、西の方、平氏と水島に戦つて、討死した。而るに、義兼は、征夷大將軍源頼朝に鎌倉に從つて、一番、親密に待遇せられて居つて、頼朝の軍に從つて、平氏を筑紫に撃ち、又、其軍に從つて、藤原泰衡を陸奥に撃つた。其後陸奥が再び亂れたときには、義兼は、諸將を統轄して、出掛けて行つて之を討つた。頼朝はその爲めに天下を平定するに及び、朝廷に奏上して、義兼に上總介を授けることにし、北條時政をして其娘を以て之に妻はさせて、義氏を生んだ。義氏は、たゞく北條氏を助け、其家の驍勇を鎮め安んじたが、正四位下左馬頭となつた。義氏は泰氏を生み、泰氏は頼氏を生み、頼氏は家時を生み、家時は貞氏を生んだが、皆、足利に居つた。其旗の色は白色を用ひ、其旗じるしは二引兩であつた。細川、畠山、仁木、岩松、桃井、吉良、今川、斯波、石橋、澀川、石堂、一色等のもろくの氏族は、皆、足利氏から分れて出たものである。

足利氏世與北條氏婚。娶相倚頼。然家時。貞氏自負門地。恥立人下。思俟時滅之。貞氏娶上杉氏。生一子。曰高氏。曰直義。高氏稱又太郎。任治部大輔。直義任兵部少輔。高氏爲嫡嗣。娶赤橋守時妹。生子千壽。赤橋北條氏族也。元弘元年。後醍醐天皇起兵。據笠置山。討北條高時。高時乃遣高

氏。直義等。往攻之。高氏兄弟。時丁外憂。強起而西城陷。乃返。

【自負門地】...自分の家柄を尊に掛けて居る。【娶上杉氏】...上杉頼重の女を娶る。【直義任兵部少輔】...源氏系圖、公卿補任には竝に、兵部大輔に作る。【赤橋守時】...相模守。【丁外憂】...丁は當る也、外憂とは父の喪を云ふ。父貞氏、此年九月五日を以て卒す、故に云ふ。【強起】...喪中にて引き籠り居るに拘らず、無理に出發を命ぜしなり。

足利氏は、代々北條氏と縁組をして、互に相たのみ合ひ力と合つて居つた。けれども、家時、貞氏は、自ら其家柄が北條氏よりも餘程すゝめて居るのを自慢し、人の下に立つて使役せられて居るを恥かしく思つて居つて、時節の來るを待つて北條氏を滅ぼして仕舞はうと思つて居つた。貞氏は、上杉氏の女を娶つて、二人の男子を生んだ。一人は高氏と曰ひ、一人は直義と曰つた。高氏は、通稱は又太郎と曰つて、治部大輔に任せられた。直義は兵部少輔に任せられた。高氏は、總領で跡嗣であつて、赤橋守時の妹を娶つて、子の千壽を生んだ。赤橋といふのは、北條氏の一族である。元弘元年に、後醍醐天皇は、兵を擧げさせられて笠置山に立て籠つて、北條高時を征伐せられた。高時は、そこで、高氏、直義等を派遣して、往きて之を攻めさせることした。高氏兄弟は、其時に、父貞氏の喪に當つて、引き籠つて居つたが、無理に強ひて出發することを命じて、西の方京都に向はせられた。そのうちに、笠置の城が落城したので、そこで引き返した。

二年。高時流。天皇子隱岐。立光嚴帝。已而帝歸。伯耆。官軍竝起。攻六波羅府。府帥北條仲時。北條時益。數戰不利。高時遣高氏及名越高家。赴援。高氏有疾。不欲往。強之再三。高氏大慍。乃答使者曰。當不日發矣。因陰謂其親信曰。彼舊爲我家臣隸。時遷勢變。乃至僕役我。我欲以今日歸官軍。以興我家。如何。上杉憲房。細川和氏等。皆贊成之。高氏乃欲挈家行。或說高時曰。源氏失天下。兵權久矣。今日之勢。焉知其無異圖。宜質其孥。且要其誓。高時然之。以溫言來請焉。高氏患之。謀於直義。直義曰。公欲誅無道。神豈不右焉。要盟。神所不蠲也。宜畱親信。護孺子。而夫人則屬

赤橋氏。當無所憂。公第聽彼所言。亟成大事。高氏從之。高時祖道。取一白旗。授高氏曰。是自八幡公。傳至右大將。而我受之者。請以爲贖。八幡公謂義家。右大將謂賴朝也。高氏受之。心竊喜焉。乃率直義以下宗族三十二人。兵三千。而西。至參河。告謀於其故黨吉良貞義。貞義曰。臣固將言焉。高氏意益決。抵京師。乃密使使伯耆。請降。帝素聞其家聲。則大悅。賜使者以邑。敕曰。諸國官軍。汝其帥之。以滅國賊。賊滅之後。賞當從所請。

【温】……いさよとほる、心の中に怒を含む也。【不日】……近日。爲我家臣。北條氏は始め源氏に服屬せし故に斯く云ふ。【僕役】……家來と同じやうに使役する。【上杉憲房】……兵庫頭。【細川和氏】……阿波守、もと八郎と稱す。【贊成】……同意してたすくこと。【聖家】……家族を引き連れる。【實】……音チ。人質とする。【擊】……要其誓。……起請文を是非とも差し出せよと要求する。【温言】……温順なる口上。おたやかなる言葉。【右】……佑と同じ、たすくも。【要盟】……要は勸なり。無理おし付けの盟。【所不備】……いさよとせざる所。神の受納せざる所なるを云ふ。【孺子】……子供。高氏の千壽を指す。【聽】……まかす、ゆるす。【亟】……すみやかに。【祖道】……宴を設けて行を送る也。送別の宴會。【馳】……音ジン、はなむけ。行を送る幣物。故黨……舊き縁ある徒黨。【固將言】……その仰が無くとも、私から申上げやうと思つて居ました。【抵】……至る。【家聲】……家の評判。【賜使者以邑】……使者海老名季行に備中國井原莊を領地として賜はりし也。

二年に、高時は、後醍醐天皇を隠岐に流し、その代りに光厳帝を立てた。とかくする中に、後醍醐帝は隠岐を逃げて伯耆に御歸りになつた。官軍は、あちこち同時に起つて、六波羅の役所を攻めた。役所の頭領たる北條仲時と北條時益とが、たび／＼戦つたけれども、勝利を得なかつた。そこで、高時は、高氏及び名越高家を派遣して、出掛けて行つて之を助けさせた。高氏は其時に病氣であつたので、出掛けて行くことを欲しなかつた。高時が無理に命ずると南三度に及んだので、高氏は心の中で大に怒つて、そこで使者に返答して曰ふには、近日中に出發する筈で御座ると曰つた。就ては、ひそかに、自分が親密に信用して居る者に向つて曰ふには、彼れ北條氏は、むかひは、我が源氏の家來筋の者であつた。然るに歲月を経過し、時勢が變化したので、今では我が家來同様に使役することになつて立ち至つたのである。我は、今日を以て官軍につき従ひ、それで我が家を興し盛んにしやうと思ふが、どうであらうかといつた。すると、上杉憲房、細川

和氏等は、皆、之に同意して、それが宜しう御座りますと曰つた。高氏は、そこで、家族があとに残つて居つて禍に遇ふことを恐れて、之を引き連れて行かうと思つた。すると、ある人が高時に説いて曰ふには、源氏が、天下の兵馬の權を失つたことは、こゝに年久しき間であるから、屹度、不平の念が有ることで御座りませぬ。されば、今日の形勢に於ては、どうして高氏に謀叛の企が無いことが知れませぬ。謀叛の企が有るまいもので御座りませぬ。されば、高氏の妻子を人質として置かうにし、其上に起請文を要求しなされるが、宜しう御座りますと曰つた。高時は、此言を成程尤と思つたので、おたやかなる口上を述べて、使者をして來つて其様にするやうにと請はしめた。すると、高氏は、ひどく之を心配して、直義に相談した。直義が曰ふには、貴殿は、惡逆無道なる北條氏を誅伐せんと致されるのであるから、神様が、どうして、貴殿を御助けなされぬことが御座りませぬ。必ず神の御助があることで御座りませぬ。無理おしつけの盟は、神様に於ても潔しとせられぬところの事。御座りませぬ。起請文を書いたところで構ひませぬ。さうして、夫人をば、里方の赤橋氏に頼んで置いたならば、格別心配することは無い筈で御座りませぬ。貴殿は、彼れ高時が言ふところになかせて、すみやかに大事業を成し遂げなされまといつた。高氏は此言に従つた。高時は、送別の酒宴をなして、一流の白旗を取り出して、高氏に與へて曰ふには、これは八幡公から、だん／＼に傳はりて右大將に至り、そして、我が家にて貰ひ受けて、大切にして居る者であるが、之を以て錢別と致さうと曰つた。八幡公と云ふのは、義家のことで、右大將と云ふのは、賴朝のことである。高氏は、此白旗を貰ひ受けて、源家の重寶が手に入つたので、心の中にひそかに喜んだ。そこで、直義以下一族の者共三十二人、兵士三千人を引き連れて、西の方京都へ向つて出發し、參河に至つて、舊き縁ある一味の者吉良貞義に、今回の企を告げた。貞義が曰ふには、私は、貴殿の仰がなかつとも、自分から此事を申上げやうと思つて居りましたと曰つた。そこで、尊氏の意は、ます／＼、官軍の爲めに盡すことに決定し、それから京都に到着して、そこで、ひそかに使を伯耆國の行在所に遣はして、降参することを請うた。後醍醐帝は、平素から、足利氏の家の評判を御聞きに成つて居つたので、そこで、大に御悦びになり、尊氏からの使者にまでも領地を賜はり、敕して仰せられるには、諸國の官軍をば、汝が之を指圖して、そして國賊たる北條氏を滅ぼすやうにせよ。賊が滅びた後には、恩賞は、いくらでも汝が請ふ所に従つて與へるであらうと仰せられた。

足利殿上洛の事

先朝船上に御座りて、討手を差し上げられ、京都を責めらる。由、六波羅の早馬頼に打つて、事既に難儀に及ぶ由、關東に聞えければ、相模入道大に驚いて、さらば重ねて大勢を指し上げて、半は京都を警固し、宗徒は船上を責む可しと評定あつて、名越尾張守を大將として、外様の大名二十人を催さる。其中に足利治部大輔高氏は、所勞の事あつて、起居未だ快からざりけるを、父上洛の其數に入つて催促度々に及べり。足利殿、此事に依つて心中に憤り思はれるは、我、父の喪に居て、三月を過ぎざれば、悲歎の涙未だ乾かず、又病氣身を侵して、負薪の憂未だ休まざる處に、征討の役に隨ひて、相催さる。事こそ遺恨なれ。時移り事變じて、貴賤位を易ふといへども、彼は北條四郎時政が末孫なり。人臣に下つて年久し。我は源家業の族なり。王氏を出で、遠からず。此理を知るならば、一度は君臣の儀をも存すべきに、是れまでの沙汰に及ぶ事、偏に身の不肖による故なり。所詮重ねて尙上洛の催促を加ふるほどならば、一家を盡して上洛し、先帝の御方に参つて、六波羅を責め落して、家の安否を定む可き者を、心中に思ひ立たれるをば、人更に知る事無かりけり。相模入道は、斯る可き事とは思ひ寄らず、工藤左衛門尉を使にて、御上洛延引心付られずと、一日の中に兩度まで責められければ、足利殿は、反逆の企、已に心中に思ひ定

められてければ、中々異議に及ばず、不日に上落仕る可しと返答せられける。則ち夜を日に繼いで打ち立たれけるに、御一族郎従は申すに及ばず、女姓幼稚の君達迄も、残らず皆上落あるべしと聞えければ、長崎入道圓喜怪み思うて、急ぎ相模入道の方に参つて申けるは、誠に御心置かれ候べし。況んや源家の貴族として、天下の權柄を捨て給へる事年久しければ思召し立つ事もや候らん。異國より吾が朝に至るまで、世の亂れたる時は、霸王諸侯を集めて、性を殺し血を吸つて、ふた心無からんことを盟ふ。今の世の起請文是れ也。或は又其子を質に出して、野心の疑を散す。木曾殿の御子、清水冠者を大將殿の方へ出されき。か様の例を存候にも、如何さま足利殿の御子息と、御臺とをば、鎌倉に留め申されて、一紙の起請文を書かせ進らせらる可しとこそ存候へと申ければ、相模入道に思召し進らせられ候べし。次に兩家の體を一にして、水魚の思を成され候上、赤橋相州御縁に成り候。彼れ此れ何の不審か候べきなれども、諸人の疑を散せん爲めに候へば、恐ながら一紙の誓言を留め置かれ候はん事、公私に付いて然る可くこそ存候へと仰せられたりければ、足利殿體胸いよく深かり候れども、憤を押へて氣色にも出されず、是れより御返事を申すべしとて、使者をば返されたりければ、足利殿體胸いよく深かり候此事如何ある可きと意見を訪はるに、且く思案して申されけるは、今此一大事を思食し立つ事、全く御身の爲めに非ず、只天に代つて無道を誅し、君の御爲めに不義を退けんと也。其上誓言は神も受けずとこそ申習はして候へ。たとひ偽つて起請の詞載せられ候とも、佛神なとか忠烈の志を守らせ給は候べき。就中、御子息と御臺とは鎌倉に留め置き進らせられん事、大儀の小事にて候へば、あながち御心を煩はさるべきに非ず。公達未だ幼稚に候へば、自然の事もあらん時は、其爲めに少々殘し置かる、即従共、いづかたへ抱きかへて、隠し奉り候ひなん。御臺の御事は、又赤橋殿とておぼはしし候はん程は、何の御痛はしき事か候べき。大行は細謹を願みずとこそ申候へ。此等程の小事に猶豫ある可きに非ず。兎も角も相模入道の申さん儘に隨つて、其不審を散せしめ、御上洛候て後、大儀の御計略を伺はる可くとこそ存候へと申されければ、足利殿此道理に服して、御子息千壽王殿と、御臺赤橋相州の御妹とをば、鎌倉に留め置き奉りて、一紙の起請を書いて、相模入道の方へ遣はさる。相模入道、是れにて不審を散じて、喜悅の思を成し、高氏を招請有つて、様々賞賚共有りしに、御先祖累代つ所なり。希代の重寶と申ながら、他家に於て其詮無く候歟。是れを今度の餞送(ハナムケ)に進じ候なり。此旗をさへせて、凶徒を急ぎ御退治候へとて、錦の袋に入れながら、自ら是れを進らせらる。其外に乗り替への御馬にとて飼うたる馬に白鞍置いて、十四匹の白帽輪の鎧十領、金作りの太刀一つ副へて引かれたりけり。足利殿御兄弟、吉良、上杉、仁木、細川、今河、荒河以下の御一族三十二人、高家の一類四十三人、都合其勢三千餘騎、元弘三年三月二十七日に、鎌倉を立ち、大手の大將と定められ、名越尾張守高家に、三日先だちて、四月十六日京都に著き給ふ。

已而名越高家後至。與官軍將源忠顯。赤松則村。戰于狐川。敗死。高氏方張宴于桂川西。指一佛舍。問其名。或答曰。勝持寺。高氏哂曰。吾將勝而持。

之矣。乃聲言往攻。行在。遂上馬。行入丹波。三年。四月。廿七日。至篠村。建旗于八幡廟前。州人久下時重。以二百騎先至。旗號一番字。高氏見之。問故。對曰。右大將之起。臣祖重光先衆而至。右大將親書賜焉。遂以爲號。高氏大喜曰。我家之嘉兆也。五月。七日。高氏引兵。南攻六波羅。自祈戰勝。納一矢於廟。直義以下宗族皆倣之。矢積成堆。乃發。沿道兵皆附之。比入京師。凡五萬人。軍于神祇官址。府帥遣兵二萬來拒。我軍擊大破之。與忠顯則村合兵。圍府。細川和氏說曰。圍之者。固彼志。而損我兵也。不若誘而走之。高氏乃闕其一角。果多逃降者。府帥遂奉新帝走。死近江。高氏乃奏捷於行在。帝乃還闕。廢新主而復位。即日以高氏叙從四位下。任左兵衛督。聽昇殿。直義叙正五位下。任左馬頭。以甲士五千扈乘輿後。

【狐川】……山城に在り。【桂川】……山城に在り。【佛舍】……寺。【哂】……わらふ。微笑する。【州人】……丹波の人。【嘉兆】……目でたき前表【成堆】……堆は音タイ、聚土なり。高くなる。【神祇官】……シンギクワン。天津神國津神を祀る官なり。郁芳門の南に在り。其趾は今の二條城の西北に當る。【誘引】……誘引。【闕其一角】……敵をして逃げしめんが爲めに、圍の一隅を開くなり。【新帝】……光嚴帝。還闕……闕は宮門なり。皇居に還らせたまふを云ふ。【扈】……音コ、扈從、御伴すること。

は一番と云ふ字であつた。高氏は、これを見て其故を問うた。時重が答へて曰ふには、右大將頼朝公が始めて旗擧げなされたときに、私が先祖の重光が、衆くの人々より先きに到著したので、右大將殿が御自身に一番といふ字を書いて賜はつたことが御座りますので、とうく一番といふ字を旗にすることになり、高氏は大に喜んで曰ふには、これは我が家に取りては目出たい前表である、奉納すると、直義以下の一族の者共が、皆之を真似したので、矢が積りてうづたかく成つた。そこで、出發したが、道すがらの兵士どもは、いづれも皆之に付き従つたので、京都に入る頃には、凡そ五萬人と成つて、神祇官の跡に陣を取つた。六波羅の役所の頭領が、兵士二萬人を派遣して、來つて拒がしめたが、我が足利氏の軍は撃つて、大に之を破つて、忠顯、則村と兵を一處にして、六波羅の役所を圍んだ。細川和氏が、高氏に説いて曰ふには、之を圍むときは、敵をして、逃げるとは出来ぬと思はせ、死ぬまでも堅く守つて居らうとの志を固くさせることになつて、そして我が兵士を損ずることに成ります。されば、それよりは、これをおびき出して逃げ走りしめるやうにするが、宜しう御座りますと曰つた。高氏は、成程と思つて、そこで、わづと其圍の一隅を明けると、案の如く、逃げ出し降参する者が多かつた。六波羅の役所の頭領は、これではたまらぬと思つて、とうく新帝(即ち光厳帝)を奉じて逃げ走つて、近江に至つて死んで仕舞つた。高氏は、そこに勝利を得たことを伯者なる行在所に奏上したので、帝(後醍醐帝)は、そこで、御所に御歸りになり、新帝を廢して御位に復られ、其日引き連れて、御乗物の後に扈從せしめられた。

於是高氏遣細川和氏與弟頼春將兵往定關東。先是千壽逃歸下野。聞新田義貞起兵往從之。義貞義重遠孫也。北條高時伏誅。鎌倉平。義貞閱源氏故器得白旗。旗號重畫。新田氏號中黑。故不可用。和氏聞之。以其有足利氏之號。就而求之。義貞不與也。和氏乃大稱高氏在京師得寵。遇狀以搖將士。將士稍稍去義貞。就千壽。新田氏於是與足利氏有卻。而帝方寵高氏。進從三位參議。賜御諱尊字。改名尊氏。十二月。遣皇子成良。鎮鎌倉。直義執權焉。建武元年。廷論戰功。尊氏爲首。管武藏。常陸。下

總守護。直義管遠江守護。

【閱】…簡閱、よりわけて調べる。【寵遇】…天子の御氣に入つて厚く待遇せられる。【搖】…うごかす、ゆする。【稍稍】…ぼつぼつとだんぐに。【有卻】…卻は隙と同じ。仲が悪くなる。【賜御諱尊字】…後醍醐天皇は御諱(イミナ)を尊治と云ふ。天皇、高氏を殊遇し給ひ、餘り、尊の字を賜はりて、高氏を改めて尊氏とせられし也。【皇子成良】…第八の皇子。【廷論】…朝廷に於て評議せらる。【關東】…に於て、高氏は、細川和氏と弟頼春とを派遣して、兵士を引き連れて、出掛けて行つて關東を平定せしめることにした。これより先に、千壽(尊氏の子)は鎌倉を逃げ出して、その本國なる下野に歸つたが、新田義貞が義兵を擧げたといふ事を聞いたので、出掛けて行つて義貞に付き従つた。義貞は、義重の遠い子孫である、北條高時が誅に伏して、鎌倉は平定したので、義貞は、鎌倉に在る源氏の古き道具類をより分けて取り調べて見たが、其中に白旗が有つた。その白旗は、旗に伏して、二引兩であつたが、新田氏の旗は、中黒であるので、それ故に折角見附かつた白旗を用ふることは出来なかつた。和氏は此事を聞いて、其旗には足利氏の旗に似し(即ち二引兩)があるので、新田氏の處では無用であるとして、足利氏に取つては此上も無き重寶であるといふので、義貞の處へ出掛けて行つて之を譲り與へんとを請うたけれども、義貞は、如何なる故があつたか、之を與へなかつた。和氏は、大に不満に思つて、そこで、高氏が京都に居つて、天子様の御寵愛御厚遇を受けて居つて威權のすばらしい有様を、大に吹聴して、將士の心をゆすり動かしたので、景氣の善い方に附くが世の常に、將士どもは、ぼつとだんぐに、義貞を去つて、千壽に付き従ふやうになつた。新田氏は、こゝに於て、足利氏と仲が悪くなつた。しかるに、後醍醐帝は、その時度、高氏を御寵遇なされて居る眞最中で、從三位參議に昇進させ、御諱の尊の字を賜はつて、高氏といふ名を尊氏と改めさせられた。十二月に、皇子成良親王を御派遣なされて鎌倉を鎮撫せしめられ、直義が執權となつた。建武元年に、此度の戦功を朝廷に於て評議せられて、尊氏を以て戦功第一とせられ、武藏、常陸、下總の守護を管理せしめ、直義は、遠江の守護を管理せしめられた。

時關東承大亂之後。人心未定。直義修北條氏舊政。招散亡。撫瘡痍。遠近歸心焉。而京師之政。務改其舊。徵守護地頭食邑二十分一。以修大内。又造交鈔。民不便之。朝廷臣僚。異時爲武人所輕侮者。至是競驅役武人。武人效力於興復者。奉狀冀賞。群聚闕下。有司不能甄別。月餘乃定。十餘人。而內敕已以北條氏邑。分給於妃藤原氏。皇子護良等。其餘悉散。賜京官內臣歌童舞妓。六十餘州。無復遺地。當是時。朝議內旨相爲柢梧。往

往數人同爭一邑。許食邑如故者。旋被沒收。赤松則村授播磨守護。已而
 褫之。僅食佐用一莊。時有綸旨翻覆之譏。諸武人私相語曰。如是而不止。
 我輩皆奴虜矣。安得戴一將種。執天下權。尊氏聲望素著。衆屬意焉。皇子
 護良爲大將軍。心深疾尊氏。尊氏之初定京師也。護良將殿良忠。不戢其
 下。尊氏捕十餘人。梟之。護良怒。欲誅尊氏。帝不聽。護良耽聲色。又喜客。
 客多奸豪。酗而殺人。又私徵兵圖尊氏。尊氏得其徵兵書。上焉。誣以謀反。
 帝乃使人執護良。流於鎌倉。直義迎而幽之。

【散亡】……散亂逃亡。大亂の爲めにちりちりになつて逃げた人民。撫……いたはる。慰撫する。瘡痕……音サウイ。手創を負うた者。
 【交鈔】……紙幣。【臣僚】……役人ども。【異時】……これまで。從來。但し他日、異日などの如く、後日の義にも用ひらる、ことあり。【輕侮】……
 輕しめあなどる。【驅役】……追ひまはし使ふ。【興復】……中興復古。一旦廢れたる朝廷の政權を引き起し回復する。【奉狀】……功勞あり
 たる様子を書き立て、申し出す。【甄別】……音ケンベツ。甄は明なり。明に見分ける。【月餘乃】……一箇月餘りもかゝつて漸く。【内勅】……
 内々の御勅命。【妃藤原氏】……三位局。名は藤子。帝の寵姫なり。後皇后となる。【京官】……京都の中に出動して居る役人。【内臣】……宮中
 に居る臣下。【歌童】……歌をうたふ童子。【舞妓】……舞をまふ女。白拍子の類を云ふ。【六十餘州】……日本全國を云ふ。【朝議】……朝廷に於
 ての評議。【内旨】……内々の御勅命。【御勅命】……音アノイゴ。抵は觸る、也。梧は逆ふ也。衝突矛盾する。彼れと此れと相乖き舛ふ
 を云ふ。【旋】……また。一度定まりたるものが、また引つくりかへつてと云ふ意。【沒收】……取り上げる。【獲】……奪ふ。取り上げる。【綸旨】……
 ……音リンシ。勅諭の旨。禮記の繡衣篇に、王言は絲の如く、其出づること綸の如しとあるより、天子の勅命を綸言と云ふ。【翻覆】……音ハン
 ン。【聲望】……名聲人望。【屬意】……心を寄せる。【殿良忠】……法印なり。【不戢其下】……戢は、をさむる也。戒め慎ましむる也。部下の者を
 取り締らぬ。【耽聲色】……音樂や女色に耽りおぼれる。【喜客】……客をこのむ。浮浪の人を養うて置くことを中心から好む。【奸豪】……性
 質が横しまにして仕末に終へぬほど強い。【醜】……音ク。醜と同じ。酒に酔うて狂ひ怒る也。【幽】……押し込める。二階堂谷に幽せし也。
 【關】この時分には、關東地方は、大亂の後であつたので、人々の心がびくびくして居つて未だ落ち著いて安心して居なかつたが、直義は、
 北條氏の昔の政治を修め整へて、戰亂の爲めに散りくになつて逃げかくれて居つた者どもを招き寄せ、手傷を受けた者どもをいたはつ

たので、遠い處の者も近い處の者も、皆、直義に心を寄せて、人望があつた。然るに、京都なる朝廷の政治は、出来るだけ、昔の制度を改め、守
 護地頭の領地の收入二十分の一を徵發して、それを以て御所の修復をなし、又、紙幣を造られたが、人民は之を便利とは思はなかつた。朝廷
 の役人の、これ迄は武士の爲めに輕んじ侮られて居つた者どもが、こゝに至つて、競うて武士を追ひまはしこき使つた。武士どもの中で、中
 興復古、即ち北條氏を滅ぼして朝廷の政權の興起恢復する事の爲めに、力を盡した者どもは、自分々々の手柄あつた様子を申し出で、早
 く恩賞に預りたいと賞與を望んで朝廷に群り集まつて來たが、朝廷の役人どもは、それを明瞭に見分けることが出来ずして、一箇月餘りもか
 かつて、やうやく十餘人の事を取りきめたゞけであつた。しかるに、後醍醐帝の内々の御勅命では、已に北條氏の領地をば、御寵愛の妃なる
 藤原氏や皇子護良親王などに分けて給はり、其餘は、残らず皆、京都に在勤せる役人や、宮中の臣下や、歌をうたふ小供や、舞をまふ白拍子
 などに、分けて賜はりて、日本全國六十餘州の中に、最早殘つて居る土地は無いほどであつた。この時に當りて、朝廷の評議と、天子の内々
 の御勅命とが、互に喰ひ違ひが出来て居つて、どうかすると、數人で、同一の土地の所有權を争ふことが度々あつた。又、領地は以前の通で
 職を授けられたが、兎角する中に之を奪ひ取られ、僅に佐用といふ一箇所の莊園を領地とすることとなつた様な事もあつて、一貫して變ず
 ることあるまじき答の御勅命の旨趣が變化して一向にあてにならぬといふ譯さへあつた。そこで、諸の武士どもは、ひそかに語り合つて曰
 ふには、か様な調子で止まずに何處までも進行しては、我々仲間、皆奴僕や捕虜のやうな取扱を受けるに至ることであらう。實につまら
 ぬことだ。どうかして一人の大將たる人を上に戴いて、天下の政權を取らしめたいものであると曰つて居つた。尊氏は、名聲人望が、も
 から著はれて居つたので、多くの人々を望を此人にかけて居つた。皇子護良親王は、大將軍であつたが、その御心の中に、深く尊氏をにく
 らなかつたので、尊氏は、その臣下十餘人を捕へて、その首を斬つて、獄門にかけたので、護良親王は、御腹立になつて、尊氏を誅殺しやうと
 思はれたけれども、帝は御聞き入れにならなかつたのであつた。護良親王は、歌舞女色に耽りおぼれて、又、浮浪の人を養ふことを心から好
 んで居られたが、その人々は多くは、性質惡くして手強いものであつて、酒に酔うて狂ひまはりて人を殺したりすることさへもあつた。護
 良親王は、又、ひそかに兵士を徵集して、尊氏を滅ぼさうと御企てなされた。尊氏は、親王が兵士を徵集せられる觸れ文を手に入れたので、
 それを天子にたてまつり、親王が御謀叛を企てられたのであると、無實の事を申し立てた。帝は、そこで、人をして護良親王を執へさせて、
 鎌倉に流罪にいたされた。すると、直義は、親王を迎へ取つて、之を押し込め奉つた。

是歲。北條氏餘黨。本間。澀谷作亂。直義遣兵擊夷之。二年。北條時行起兵。
 數攻鎌倉。直義迎擊不利。遂奉成良西走。使人陰害護良。報急京師。尊
 氏請自將東伐。被許。又請任征夷將軍。管領關東。不許。曰。俟事平議之。
 尊氏怒。不告而發。諸武人奮躍。爭起從之。至矢矧驛。合於直義。自海道

進。與時行兵。七遇七捷。遂入鎌倉。時行兵奔潰。詔敕尊氏從二位。敕義詮從五位下。義詮千壽也。又詔趣其西歸。直義說尊氏曰。朝廷與義貞。皆忌公。公免而至。此天也。何再赴虎口。爲尊氏從之。於是自稱征夷將軍關東管領。曰。帝所許也。開府于源賴朝故基。賞有功。納降附。收新田氏邑在關東者。割予將士。將士爭附之。

【夷】……たひらも。【使人陰害護良】……親王を我せし者は、淵邊伊賀守義博なり。その事は、前の新田氏記に詳なり。【奮躍】……ふるひをとりて勇み立つ。【矢羽驛】……三河に在り。【海道】……東海道。【趣】……うながす。【虎口】……おそろしき危険なる場所に喩ふ。【故基】……もとの屋敷の跡。【割予】……さき與ふ。

この歳に、北條氏の殘黨なる本間、澁谷などが亂を作したが、直義が、兵士を派遣して、撃つて之を平定した。二年に、北條時行が、兵を起して、たゞ鎌倉を攻めたが、直義は迎へ撃つたけれど、勝利を得なかつたので、とうとう成良親王を御連れ申上げて西の方へ逃げ走り、人をして、ひそかに護良親王を弑せしめて、關東の情況の危急なる事を京都に報告した。尊氏は、そこで、自身に大將となつて關東を討伐せんことを請うたが、之を許された。又、征夷大將軍に任命せられて關東を支配せんことを請うたが、これは許されずして、仰せられたには、關東の騒動が平定するのを待つて、改めて此事を相談しやうと仰せられた。そこで、尊氏は、怒つて、朝廷に申上げずして出發した。諸の武士どもは、勇み立つて奮ひをどり、我先にと争ひ起つて尊氏に從つた。かくて尊氏は、矢羽驛に至つて、直義と一所になつて、東海道より進んで行つて、時行の軍勢と、七たびも出遇つて七たびも勝利を得て、とうとう鎌倉に入り込んだ。時行の軍勢は、逃げ散つて仕舞つた。そこで、詔して尊氏を從二位に敕せられ、義詮を從五位下に敕せられた。義詮といふは、千壽のことである。又、詔して、尊氏が西の方京都に還つて來ることを催促せられた。すると、直義は尊氏に説いて曰ふには、朝廷と義貞とは、皆、あなたを忌み嫌つて居られるので、あなたに其危難をうまく免れて、こゝに來られたのは、天の助と云ふべき事で御座ります。然るに、どうして、再び虎の口に喩ふべき危険極まる處に出掛けて行かれることがあらうぞと曰つた。尊氏は此言葉に從つた。こゝに於て、自身で、征夷大將軍關東管領と稱して、之を曰ふには、これは天子様が御許しになつたのであると曰つた。そこで、尊氏は、幕府を源賴朝のもとの屋敷の跡に開いて、手柄のあつた者を賞し、降参して新に附き從つた者を受け納れ、新田氏の領地の關東に在る者を取り上げて、それを將士どもに分け與へた。將士どもは我先にと争つて尊氏に附き從つた。

京師傳言尊氏反。帝使人往詞焉。而細川和氏齋尊氏劾新田氏書至。曰。

嚮當東藩之爲逆。臣尊氏以身爲倡首。奮臂一戰。決勝瞬息。義貞舉事於不得已。及聞臣定京畿。乃以討賊爲名。三戰不克。纔爲守計。臣長男義詮起下野。遠邇爭歸。義貞憑之。以得克賊。遂攘其功。敢要重賞。是國之蠹也。今臣勞苦於外。而內有讒諛之臣。是非趙高專秦。章邯降楚之謂乎。願得明詔。以誅義貞。義貞聞之。亦收足利氏邑在其管内者。上書告護良。遭害狀。時直義密徵諸道兵。西國得其檄。上之。十一月。遂詔削奪尊氏。直義官爵。遣皇子尊良來討。義貞爲副焉。

【詞】……うかふ、様子をうかひさぐる。【劾】……音カイ。罪の次第を取り調べて書き立てること。【東藩】……東方の藩屏、北條氏を指す。【倡首】……音シヤウシユ。第一番に言ひ出す者。【瞬息】……目ばたきする間、一呼吸する間。暫しの間と云ふがごとし。【京畿】……京都畿内。【遠邇】……音エンシ。遠近と云ふが如し。【憑】……音ヒ。依頼する、たよりにする。【攘】……ぬすむ。【要】……要求する、もとむる。【蓋】……音ト。木の中に生じて木を食ふ蟲。害を爲す悪人に喩ふ。【勞苦於外】……關東征伐を云ふ。【讒諛之臣】……義貞を指す。【趙高專秦】（キヨロク）の戰に敗れて、棘原（キヨクゲン）に退きしとき、二世人をして章邯（シヤウカン）楚を撃つて、しばく之を敗りしが、鉅鹿門に留まること三日に及びしかども、趙高これを見ず。欣恐れて走り歸り、邯に説いて曰く、今や趙高、事を内に用ふ。將軍、功あるも誅せられ、功無きも亦誅せられんと。邯乃ち兵を以て楚に降れり。事は史記に見ゆ。趙高を以て義貞に比し、章邯を以て自ら比したるなり。【義貞上書】……新田氏記に見ゆ。【尊良】……一宮中務卿親王。

すると、京都に於ては、尊氏が謀叛したといふ風聞があつたので、後醍醐帝は、人をして出掛けて行つて様子をうかひさぐるせうれした。しかるに、細川和氏は、尊氏が新田氏の罪状を述べ立て、彈劾する書面を持参して、京都に到着した。その書面に曰つてあるには、さきに、東方の藩屏たる北條氏が逆亂を爲した時に當つて、私尊氏は、この身を以て勤王のさきがけとなり、臂を奮つて一たび戦つて、しばしの間に勝利を得たので御座ります。しかるに、義貞は、已むを得ざる場合に立ち至つて始めて兵を起し、私が京都近傍を平定したといふ事を聞くに及んで、そこで、國賊北條氏を討伐するといふ事を名目として言ひ立てたが、三たび戦つたけれども勝利を得ることが出来ず、わづかに、自ら守るの計を爲して居るに過ぎなかつた。しかるに、私の長男なる義詮が、下野から起りしに、遠近の者共が先を争うて來り附

いたので、義貞は之をたよりにして、それで以て賊に勝ちおぼせることが出来たので御座ります。然るに、義貞はとうとう其功を盗んで自分の功勞であるとして、憚る所も無く、重き恩賞を要求いたしまするので御座ります。これは、國家を害する蠹賊で御座ります。今や、私は、關東征伐の爲めに外に出掛けて骨折つて居りますのに、しかるに、内には讒言をの上に誦ふところの臣があるの御座ります。これが、趙高が秦の政權を專にしたので章邯が楚に降参するに至つた様な者では御座りませぬか。願はくは、御詔を戴きまして、それで以て義貞を誅伐いたしたう御座りますと曰つてあつた。義貞は此事を聞いて、亦、足利氏の領地の自分の管轄の内在る者を取り上げ、又、書面を上つて、護良親王が直義の爲めに弑害された次第を申上げた。この時に、直義は、ひそかに、諸道の兵士を徵集して居つたが、西國では、其觸れ文を手に入れて之を朝廷に奉つた。そこで、十一月に、とうとう、詔して、尊氏、直義の官職爵位を削り奪つて、皇子尊良親王をして來り討たしめられ、義貞は、その副大將となつた。

【参考】左に太平記の一章を抄録して参考に資す。

新田足利確執奏狀の事

去る程に、足利宰相尊氏卿は、相模次郎時行を退治して、東國總て靜謐しぬれば、勅約の上は何の子細がある可きとて、未だ官旨をも下されざるに、押して足利征夷將軍とぞ申しける。東八箇國の官領の事は、勅許ありし事なればとて、今度箱根相模河にて合戦の時、忠ある輩に恩賞を行はる。先だつて新田の一族共拜領したる東國の所領共を、悉く關所に成して、給人をぞ付けられける。義貞朝臣是れを聞き、安からぬ事に思はれければ、其替りに我が分國越後、上野、駿河、播磨などに、足利の一族共の知行の庄園を押へて、家人共にぞ行はれける。之に依つて新田、足利中惡しく成つて、國々の確執休む時無し。其根元を尋ねれば、去んぬる元弘の初、義貞鎌倉を責め亡して、功諸人に勝れたりしかば、東國の武士共は、皆我が下より立つ可しと思はれける處に、尊氏卿の二男千壽王殿三歳に成り給ひしが、軍散じて六月三日、下野國より立ち歸つて、大坂の谷におはしましける。又、尊氏卿部にて抽賞他に異なりと聞えて、是れを輒く上聞にも達し、恩賞にも預らんと思ひければ、東八箇國の兵共、心替りして、大半は千壽王殿の手をぞ付きたりける。しかのみならず、義貞若宮の拜殿におはして、首共實檢し、御池にて太刀長刀を洗ひ、結局神殿を打破つて、重寶共を披見し給ふに、錦の袋に入りたる二引兩の旗あり。是れは墨祖八幡殿、後三年の軍の時、願書を添へて籠められし御旗なり。奇特の重寶と云ひながら、中黒の旗にあらざれば、當家の用に詮無しと宣ひけるを、足利股方の人は是れを聞き、彼の旗を乞ひ奉る。義貞此旗出さざりしかば、兩家確執合戦に及ばんとしけるを、上聞を恐れ憚つて黙止(モダシ)けり。加けるこそ淺猿しけれ。これに依つて、護口傍らに有つて、眞を亂る事多かりける中に、今度尊氏卿、相模次郎時行が討手を承つて、關東を平らけて後、今隱謀の企ある由、報聞に達しければ、主上逆鱗有つて、縱ひ其忠功莫大なりとも、不義を重ねば逆臣たる可き條、勿論なり。則追伐の宣旨を下さる可しと御憤り有りけるを、諸卿會議有つて、尊氏が不義報聞に達すと雖も、未だ其實を知らず、罪の疑はしきを以て、功の誠あるを棄てられんとは、仁政に非ずと、親房、公明、頻に諫言を上られしかば、さらば法勝寺の慧鎮上人を鎌倉へ下し奉り、事の様を尋ね窮む可きに定まりにけり。慧鎮上人、勅を奉じ、關東へ下らんと欲し給ひける其日、尊氏卿、細河阿波守和氏を使にて、一紙の奏狀を捧げられたり。其狀に曰く、

參議從三位兼武藏守源朝臣尊氏誠恐謹言
早く義貞朝臣の類を誅罰して天下の泰平を致さんと請ふ狀

右謹んで往代列聖の四海に徳するを考ふるに、賞其忠を顯はし罰其罪に當らずといふこと無し。若し其道違ふときは則ち纒に草創を建つと雖も、遂に守文を得ず。かるがゆゑに君子の慎む所、庸愚の輕んずる所なり。去んぬる元弘の初、東藩の武臣恣に逆威を振つて、頻に朝憲を無いたしにす。禍亂並に起りて、國家安きことを獲ず。爰に尊氏、不肖の身を以て、同志の師を麾き、是れより死を一途に定むるの士、戈を倒にするの志を運らし、勝を兩端に卜するの輩、議に與するの誠あり。聿(ツヒ)に臂を振つて一戰を致すの日、勝つことを瞬目の中に得て、敵を京畿の外に攘ふ。此時、義貞朝臣、雞肋の貪心を忿り鳥使の急課を戮すること有り、其罪大にして身を遺(ノカ)るゝに據無し。止むを獲ずして、軍、不慮に起る。尊氏已に洛陽に於て逆徒の者を退くることを聞いて、虎尾を履んで魚麗に就く。義貞始めて朝敵を誅するを以て名と爲す。而も其實は、窮鼠却て猫を噛み、鬪雀人を辭せざるに在り。斯の日、義貞三たび戰つて勝つことを得ず、屈して城を守り壁を深くせんと欲するの處に、尊氏が長男義詮、三歳幼稚の大將として、下野國に起る。其威遠きを動かし、義卒招かざるに馳せ加はる。義貞巖沙背水の謀一たび成りて、大に敵を破ることを得たり。是れ則ち戰は他に在りと雖も、功は隠れて我に在り。而るに義貞上聞を掠め、抽賞を貪り、下愚を忘れて、大官を望む。世の殘賊、國の蠹害なり。之を誡めずんばある可からず。今、尊氏、再び、先亡の餘殃を鎮めんが爲めに、久しく東征の間に苦しむ。佞臣朝に在りて、護口眞を亂る。是れ偏に義貞が阿黨の裏に生ず。豈に趙高内に謀り章邯楚に降るの謂に非ずや。大逆の基、是れより甚しきは莫かる可し。兆前に亂を撥(ヲサ)むるは、武將の全く備ふる所なり。乾臨早く勅許を下され、彼の逆類を誅伐して、將に海内の安靜を致さんとす。懇歎の至に堪へず。尊氏誠恐謹言

建武二年十月日

とぞ書かれたりける。此奏狀未だ内覽にも下されざりければ、遍く知る人も無き處に、義貞朝臣、是れを傳へ開きて、同じく奏狀をぞ上つりける。其詞に曰く、

從四位上行左兵衛督兼播磨守源朝臣義貞誠恐謹言

早く逆臣尊氏直義等を誅伐して天下に徇へんと請ふ狀
右謹んで當今聖主天地を經緯するを案するに、徳古今に光り、化三五を蓋ふ。神武鋒端を搖かし、聖文字宙を定むる所以なり。爰に源家末流の昆弟尊氏直義といふもの有り、散木の陋質を恥ぢず、竝に青雲の高官を蹈む。其の功とする所を聽くに、掌を拍つて一咲するに堪へたり。太平の初、山川震動し、地を略し敵を拉ぐ。南に正成あり、西に圓心あり。しかのみならず、四夷蜂のごとく起り、六軍虎のごとく窺ふ。此時、尊氏、東夷の命に隨つて族を盡して上洛す。潛に官軍の勝に乗るを見て、死を免れんとするに意あり。然れども猶ほ心を偏に決せず、運を兩端に相窺ふの處に、名越尾張守高家、戰場に於て命を墜すの後、始めて義卒と丹州に軍だちす。天誅、命を革むるの日に、忽ちに鷓蚌の弊に乗じて、快く狼狼の行を爲す。若し夫れ義族、京を約(ツク)め高家、死を致すに非ずんば、尊氏獨り鐵鉞を把りて強敵に當らんや。退いて之を憶ふに、渠(カレ)が忠は彼れに非ず、須く亡卒の遺骸を羞愧すべし。今、功の微にして爵の多きを以て、頻に義貞の忠義を猜む。刺(シ)へ讒口の舌を暢べ、巧に浸潤の語を吐く。其怨(ウツタ)一として邪路に入らずといふこと無し。義貞、朝敵追討の綸旨を賜はりて、初めて上野に起るは、五月八日なり。尊氏、官軍の殿(シリ)へに付いて六波羅を攻むるは、同月七日なり。都鄙相去ると八百餘里、豈に禁せんや。其罪一つ。尊氏が長男義詮(ヲツカ)に百餘騎の勢を率して鎌倉に還り入るとは、六月三日なり。義貞、百萬騎の士を隨へて、立ちどころに凶黨を亡すことは、五月廿二日なり。而るに義詮、三歳幼稚の大將として、合戦を致すの由、上聞を掠むるの條、雲泥萬里の差違、何ぞ言ふに足らんや。其罪二つ。仲時時益等敗北の後、尊氏未だ勅許を被らず、自ら京都の法禁を專にし、親王の卒伍を誅し、司

に非ずして法を行ふの咎、太だ以て淺からず。其罪三つ。兵革の後、變夷未だ心服せず、本枝猶ほ根を堅くせざるの間、竹苑を東國に下し奉り、已に柳營を塞外に苦ましむる處に、尊氏、超涯の皇澤に誇りて、與に立たんと欲す。僭上無禮の過(トガ)過る、に據(ヨシ)無し。其罪四つ。前亡の餘黨の纒に存して、蟻螂が忿を揚ぐるの日、尊氏、東八箇國の管領を申し賜はりて、以在の勅裁を教用せず、寇を養うて恩澤を堅くし、民を害して利欲を事とす。違勅悖政の逆行、焉(コレ)より甚しきは無し。其罪五つ。天運循環、往いて還らざるに無しと雖も、成敗、一統に歸し、大化、萬葉に傳はることは、偏に兵部卿親王の智謀に出でたり。而るに尊氏種々の讒を構へ、遂に流刑に陥れ奉り終らぬ。讒臣、國を亂る、暴逆誰か之を惡まざらん。其罪六つ。親王刑を贖ふ事は、侈を押へ正に歸らしめん爲めのみ。古、武丁を桐宮に放つ、豈に此謂に非ずや。而るに尊氏奸(カタマ)しく宿意を公議の外に假り、尊體を圍圍の中に苦しめ奉る。人面獸心の積惡、是れ忍ぶ可くんば、孰れか忍ぶ可からざらんや。其罪七つ。直義朝臣、相模太郎時行が軍旅に劫されて、戦はずして鎌倉を退くの時、竊に使者を遣はし、兵部卿親王を誅し奉る。其意、偏に、將に國家を傾けんとするの端に在り。此事隠れて未だ叡聞に達せずと雖も、世の知る所、遍界何ぞ藏さん。大逆無道の甚しきこと、千古未だ此類を聞かず。其罪八つ。斯の八逆は、乾坤且くも其身を容れざる所なり。若し刑措いて用ひずんば、四維方に絶え、八柱再び傾きて、臍を噬むに益無かる可し。抑も義貞一たび大軍を擧げ、百戰、堅きを破り、萬卒、死を顧みずして、逆徒を干戈の下に退け、靜謐を尺寸の中に得たり。而るに尊氏、驥尾に附して險雲を超え、彈丸を控(ヒ)いて飛鳥を殺す。大功の建つる所、論言の最とする所に孰れぞ。尊氏漸く天威を奪はんが爲めに、義士の朝に在るを憂へて、義貞を誅せんと請ふ。而るに義貞、忠心を傾け正義を盡して、朝家の爲めに命を輕んじて、勾萌に先だつて、尊氏を罰せんと奏す。國家の用捨、理世安民の政に孰れぞ。望み請ふ乾臨明に中正を照らし、斷割を昆吾の劍に加へ、尊氏直義以下の逆黨を誅罰せしむ可きの由、宣言を下し賜はし、忽ちに浮雲の擁蔽を拂うて、將に白日の餘光を耀さんとす。義貞誠感誠恐謹言。

建武二年十月日

とぞ書かれたりける。則ち諸卿參列して、此事如何有る可きと、會議有りけれども、大臣は祿を重んじて口を閉ぢ、小臣は聞を憚りて言を出さざる處に、坊門宰相清忠、進み出で、申されけるは、今、兩方の奏表を披いて、情(ツラ)一致の道理を案するに、義貞が差し申す處の尊氏が八逆、一々に其罪輕からず。就中、兵部卿親王を禁殺し奉る由、初めて上聞に達す。此一事申す處實ならば、尊氏直義等が罪實遺れ難し。但し片言を以て訟を獄(キハ)むる事、率爾に出で、制すも止む可からず。暫く東説の實否を待つて、尊氏が罪科を定めらるべき歟と申されければ、諸卿皆此議に同ぜられ、其日の議定は終(ハ)てにけり。かゝる處に、大塔宮の御始めに付き進らせ給ひし、南の御方と申す女房、鎌倉より歸り上つて、事の様有りの儘に奏し申させ給ひければ、さては尊氏直義が叛逆仔細無かりけりとして、叡慮更に穩ならず。是れこそ不思議の事と思食す處に、又、四國西國より足利殿の成さる、軍勢催促の御教書とて、數十通進覽す。之に就いて諸卿重ねて會議有つて、此上は疑ふ處非ず、急に討手を下さるべしとして、一宮中務卿親王を、東國の御管領に成し奉り、新田左兵衛督義貞を大將軍に定めて、國の大名共をぞ添へられける。元弘の兵亂の後、天下一統に歸して、萬民無事に誇るといへども、其弊猶ほ殘りて、四海未だ安堵の思を成さざる處に、此事出で來て、諸國の軍勢共催促に隨へば、こは如何なる世の中ぞやとて、安き意も無かりけり。

當是時。諸國兵士赴關東者。與歸京師者。東西旁午。道路如織。直義以

下將校。盡戎裝入見。請邀擊官軍。尊氏默然。良久曰。我官位顯達。得伸宿憤。雖由微功。豈非君恩。恩可背乎。今之所以觸宸怒。曰。我親王也。曰。徵兵也。二者。非尊氏所爲。詳訴其寃。猶得霽威。即不被許。有削髮遁世而已。諸君好自爲計。尊氏終不能西向關弓矣。作色而入。諸將愕眙。居二日有來告曰。義貞至參河矣。上杉憲房。其子憲顯。細川和氏。其族賴春等。竝謂直義曰。將軍所言。非無理也。然天下武士翹足思亂。一聞將軍起。則雲合景附矣。將軍豈不辨禍福乎。今曠日彌久。使敵過要害。悔莫及焉。直義乃使諸將先發。再戰皆敗。直義自以二萬騎赴援。亦敗。

【旁午】……一縱一橫之を旁午と云ふ。縱横十文字に入れ違つて往來すること。【如織】……往來するもの、繁きを云ふ。【將校】……大將分を云ふ。【戎裝】……軍服、軍の服裝【顯達】……身分の高くなる。【得伸宿憤】……多年北條氏の下に使役せられて居つた年來の鬱憤をはらすことが出來た。【觸】……あたると。【宸怒】……天子の御腹立。【我親王】……我は殺す也。護良親王を殺したるを云ふ。【寃】……無實の罪。【霽威】……御怒のとけ止むこと。霽は雨止むなり、雨霽る、ときは雷霆も亦威を收むるが如く、怒の晴る、を云ふ。漢書の魏相傳に、霽威嚴の語あり。【即】……即ち。【愕眙】……音ガクチ。驚視の貌。きよつと驚いて目を見つむること。【其族賴春】……族の字は當に弟に作るべし。蓋し傳寫の誤なるべし。【翹足】……足をあげて。足をたつて立て、望む。【雲合景附】……雲の如く集り影の如く附き従ふ。景は影なり、音エイ。【要害】……箱根足柄の險阻なる地を指す。要害とは、地形險阻にして、我にありては要となり、敵に在りては害となるの義なり。

【關】この時に當りて、諸國の兵士は、自分々々の心に從つて、足利方とならうと思つて、關東に出掛けて行く者と、官軍方とならうと思つて、京都に歸つて行く者とが、東西から來つて、縱横に入れ違つて、道路は、ちやうど機を織るが如く往來頻繁であつた。直義以下の將校どもは、いづれも皆、軍の裝束を著して、内に入つて、尊氏に面會して、官軍を迎へ撃たうと請うた。すると、尊氏は、默然として、口を開かず、や、暫くたつてから曰ふには、我が官職位階が高く進んで、北條氏に追ひ使はれて居つたところの年來の鬱憤をはらすことが出來たのは、これは、我が少しばかりの功勞があつたからである、と云ふもの、これは全く天子の御恩では無いか。此御恩には背くことは相成らぬ。今日天子の

御怒に觸れた譯は、一つには護良親王を殺したからである、二つには兵士を徴集したからである。けれども、此二つの事は、我尊氏が致した事では無いのである。それ故に、くはしく無實の罪である次第を申述べたならば、それでも、御怒の止むことが出来るかも知れぬ。若し許さなかつたならば、我は、髪を剃つて坊主と成つて浮世を遁れるまでである。そこで諸君には氣の毒であるが、銘々で、よく自分の考をつけられよ。我は、どうして、西天子の居ます方に向つて弓を引くとは出来ないのであると曰つて、顔色を變へて内に入つて仕舞つたので、諸將は、ぎよつと驚いて目を見つめて居つた。かくて、二日たつと、來り告げた者があつて、曰ふには、義貞は三河まで到着しましたと曰つた。上杉憲房、その子憲顯、細川和氏、その一族の頼春などが、もろもろに、直義に向つて曰ふには、將軍尊氏殿の言はれた事は、道理の無いことでは御座りませぬ。然れども、天下の武士どもは、皆、足をつまんで、騷動の起らんことを願うて居りますこと故、一たび、將軍尊氏殿がお立ちになつたといふ事を聞きましてならば、雲の如く集り影の如く附き従ふことで御座りませぬやう。將軍とて、何れが禍であるか何れが福であるかを辨へ知つて居られぬ筈は御座りませぬから、いづれ打つて出られるで御座りませぬやう。けれども、今若し無駄に日を送つて久しく時を過して、敵をして箱根足柄の要害堅固な處を越さしめましたならば、その時に至つて後悔しても追つ付かないことで御座ります。されば、何は兎もあれ防禦の方法を講じなければなりませんと曰つた。直義は、成程と思つたので、そこで、諸將をして先づ出發させて、二度戦つたけれども二度共に負けた。そこで、直義は、自身に三萬騎を引き連れて、出掛けて行つて援けたけれども、これも亦負け

【参考】左に太平記の一章を抄録して参考に資す。

節度使下向の事

か、りける程に、十一月八日、新田左兵衛督義貞朝臣、朝敵追討の宣旨を下し給ひて、兵を召し具して參内せらる。馬物の具誠に爽に勢有つて、出で立たれたり。内辨、外辨、八座、八省、階下に陣を張り、中議の節會行はれ、節度を下さる。治承四年に、權亮三位中將維盛を、頼朝追討の爲めに下さる。時、鈴ばかり賜はりたりしは、不吉の例なればとて、今度は天慶、承平の例をぞ追はれける。義貞、節度を給はりて、二條河原へ打ち出で、先づ尊氏卿の宿所二條高倉へ、舟田入道を進ませ給ひて、時の聲を三度擧げさせ、流鏑(カブラ)三矢射させて、中門の柱を切り落す。是れは嘉承三年、讀岐守正盛が、義親追討の爲めに、出羽國へ下りし時の例なりとぞ聞えし。其後、一宮中務親親王五百餘騎にて、三條河原へ打ち出でさせ給ひたるに、内裏より下されたる、錦の御座を指し上げたるに、俄に風烈しく吹いて、金銀にて打ち著けたる月の御紋されて、地に落ちたりけるこそ不思議なれ。是を見る者、あな淺猿や、今度の御合戦は、かゝりしからじと、思ひ思はぬ者は無かりけり。去る程に、同じき日の午の刻に、大將新田左兵衛督義貞、都を立ち給ふ。元弘の初に、此人さしもの大敵を亡して、忠功人に超えたりしかども、尊氏卿、君に咫尺し給ふに依つて、抽賞さまで無かりしが、陰徳遂に露れて、今天下の武將に備はり給ひければ、當家も他家も推しなべて偏執の心を失ひつ、付き隨はずと云ふ者無かりけり。先づ當家の一族には、舍弟脇屋右衛門佐義助、式部大輔義治、堀口美濃守貞満、綿打刑部少輔、里見伊賀守、同大膳亮、桃井遠江守、島山修理亮、細屋右馬助、大井式部大輔、大島讀岐守、岩松民部大輔、籠守澤(コモリザハ)入道、額田(ヌカダ)掃部助、金谷治部少輔、世良田兵衛助、羽川備中守、一井兵部大輔、堤宮内卿律師、田井藏人大夫、是等を宗との一族として、未々の源氏三十餘人、其勢都合七千餘騎、大將の前後に打ち圍うたり。他家の大名には、千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重、大友左近將監、厚東駿河守、大内新介、佐々木藤治判官高貞、同加治源太左衛門、熱田攝津大宮司、愛曾伊勢三郎、遠山加藤五郎、武田甲斐守、小笠原信濃守、高山遠江守、河越三河守、兒玉庄左衛門、杉原下總守、高田藤原守義遠、藤田三郎左衛門、難波備前守、田中三郎右衛門

舟田入道、同長門守、由良三郎左衛門、同美作守、長濱六郎左衛門、山上六郎左衛門、波多野三郎、高梨、小國、河内、池、風間、山徒には、道場坊昇等を宗徒の兵として、諸國の大名三百二十餘人、其勢都合六萬七千餘騎、前陣已に尾張の熱田に著きければ、後陣は未だ相坂の關、四宮河原に支へたり。東山道の勢は弱手なれば、大將に三日引き下つて都を立ちけり。其大將には、先づ大智院宮、彈正尹宮、洞院左衛門督實世、持明院兵衛督入道道應、園中將基隆、二條中將爲冬、侍大將には、江田修理亮行義、大館左京大夫氏義、島津上總入道、同筑後前司、饗庭、石谷、猿子(マシコ)、落合、仁科、伊木津志、中村、村上、編織、高梨、志賀、眞壁十郎、美濃權介助重、是等を宗徒の侍として、其勢都合五千餘騎、黒田の宿より東山道を経て、信濃國へ入りければ、當國の國司堀河中納言、二千餘騎にて馳せ加はる。其勢を合はせて、一萬餘騎、大井の城を責め落して、同時に鎌倉へ寄せんと、大手の相圖をぞ待ちたりける。討手の大勢已に京を立ちぬと鎌倉へ告げたる人多ければ、左馬頭直義、仁木、細河、高、上杉の人々、將軍の御前へ參じて、已に御一家を傾け申されん爲めに、義貞を大將にて、東海、東山の兩道より、攻め下り候なる。敵に難所を超えられぬば、防ぎ戦ふとも甲斐あるまじ。急ぎ矢羽、薩埵山の邊に馳せ向つて御支へ候へかしと申されければ、尊氏卿黙然として、暫しは物も言はず、其有つて、我譜代弓箭の家に生れ、僅に源氏の名を残すといへども、承久よりこのかた、相模守が順命に隨つて、家を汚し名を差しむる恨を積んだりしを、今度絶えたるを繼ぎ職征夷將軍の望を達し、廢れたるを興し位從上三品を極む。是れ臣が微功に依ると雖も、豈に君の厚恩に非ずや。恩を戴いて恩を忘る、事は、人たる者の爲ざる所なり。抑々今君の逆鱗ある處は、兵部卿親王を失ひ奉りたるも、諸國へ軍勢催促の御教書を下したると云ふ兩條の御告め也。是れ一つ、尊氏が所爲(シツヤ)に非ず。此條謹んで事の仔細を陳じ申さば、虛名遂に消えて、逆鱗など静かならざらん。方々は兎も角も身の進退を計らひ給へ。尊氏に於ては、君に向ひ奉りて弓を引き矢を放つ事有る可からず。さて猶も罪科過る、所無くは、剃髮染衣の貌にも成つて、君の御爲めに不忠を存せざる處を、子孫の爲めに殘す可しと、氣色を損じて宣ひはせず、後の障子を引きて立て、内へぞ入り給ひける。かゝりしかば甲冑を帶して參り集りたる人々、皆興を醒まして退出し、思の外なる事かなと、私語かぬ者ぞ無かりける。かくて一兩日を過ぎける處に、討手の大將一宮を始め進らせ、新田の人々三河遠江まで進りぬと騒ぎければ、上杉兵庫入道道勤、細河河波守和氏、佐々木佐渡判官入道道譽、左馬頭殿の御方へ參つて、此事如何ある可きと評定しけるに、將軍の仰もさる事なれども、今の如く公家一統の御代とならんには、天下の武士は、指したる事なき京家の人々に付き順ひて、唯奴婢僕従の如くなるべし。是れ諸家の地頭御家人の心に憤り望を失ふといへども、今までは武家の棟梁と成りぬべき人なきに依つて、心ならず公家に相順ふ者なり。されば此時御一家の中に、思召し立つ御事ありと聞きたらんには、誰か馳せ參らで候べき。是れこそ當家の御運の開かる可き初に候へ。將軍も一往の理の推す處を以て、か様に仰候とも、實に御身の上に禍來らば、よもさてはおはしませ候はじ。兎やせまし角や有る可きと長倉議して、敵に難所を越されぬば、後悔すとも益あるまじ。將軍をば鎌倉に残し留め奉つて、左馬頭殿御向ひ候へ。我等面々に御供仕つて、伊豆駿河邊に相支へ、合戦仕つて運の程を見候はんと申されければ、左馬頭直義朝臣、斜ならず喜んで、聽て鎌倉を打ち立つて、夜を日に繼いで急がれけり。相隨ふ人々には、吉良左兵衛尉、同三河守、子息三河三郎、石堂入道、其子中務大輔、同右馬頭桃井修理亮、上杉伊豆守、同民部大輔、細河陸奥守顯氏、同刑部大輔頼春、同式部大輔繁氏、島山左京大夫國清、同宮内少輔、足利尾張右馬頭高經、舍弟式部大輔時家、仁木太郎頼章、舍弟二郎義長、今河修理亮、若松禪師頼有、高武藏守師直、越後守師泰、同豊前守、南部遠江守同備前守、同駿河守、大高伊豫守、外様の大名には、小山判官、佐々木佐渡判官入道道譽、舍弟五郎左衛門尉、三浦因幡守、土岐正少弼頼遠、舍弟道謙、宇都宮遠江守、佐竹左馬頭義教、舍弟常陸守義春、小田中務大輔、武田甲斐守、河越三河守、狩野新介、高坂七郎、松田、河村、土肥、土屋、坂東の八平氏、武藏の七黨を始めとして、其勢二十萬七千餘騎、十一月二十日、鎌倉を打ち立ちて、同二十四日、三河國矢羽の東の宿に著きにけり。

十二月。諸將還詣尊氏第。第門閉矣。衆亂敲之。有一人出曰。將軍逃建長寺。欲削髮。我曹百方止之。切髻而未剔也。將士大沮。憲房義子重能。僞作官檄十餘紙。曰。尊氏族類。罪惡深重。雖遁世晦迹。而勿得有釋。直義持至建長寺。泣曰。獲之敵死尸中。尊氏熟視。大息曰。誠如是乎。則吾亦當從諸君。執弓箭與義貞決死也。乃釋法衣。穿錦袍而出。諸軍大喜。驩呼。皆自切髻。以亂其狀。將逃降者。四面來還。一日號二十萬。直義先將六萬。拒義貞于箱根。東軍稍卻。尊氏聞之。以十八萬騎繼進。曰。拒其面不若出其背。引兵出竹下。竹下官軍呼譟而進。赤松貞範等。爲我先鋒。望其陣曰。是京兵耳。乃聯鋒馳下。官軍敗走。尊氏追北至伊豆府。義貞西走。乃使義詮守鎌倉。而合軍追躡之。京畿震駭。帝遣榜朝堂。能拒賊者。有重賞。無復應者。

【亂敲】…音ランカウ。無暗矢響にたゞく。【一人】…須賀公能と云ふ。【建長寺】…鎌倉に在り。【百方】…色々様々。【切髻】…髪を切る。髪を結んだところから切る。【未剔】…剔は剃る也。まだ剃刀で剃つて坊主頭にはならぬ。【官檄】…朝廷よりの觸れ文。【晦迹】…迹をくらます。山林などに入りて其居所をかす。【宥釋】…音イウセキ。罪をゆるす。【大息】…ためいきする。【釋法衣】…坊主の衣服を脱ぎ棄てる。【錦袍】…音キンパウ。錦の直垂。【驩呼】…驩は歡と同じ。喜んで呼ぶ。【亂其狀】…尊氏の姿にまぎらす。かくして、尊氏一人を目立たせぬやうにする也。【四面】…四方。【而】…表面。【呼譟】…呼ばりさわぐ。【聯鋒】…聯は連ぬる也。兵端を鋒と云ふ。はこ先を描へる。【榜朝堂】…朝廷に掛け札をして揭示する。

十二月に、諸將は鎌倉に引き返して尊氏の屋敷に到着して見ると、屋敷の門がしまつて居つたので、多勢の人々は、滅多無性に門を叩いた。すると、一人の者が門に出て來つて曰ふには、將軍尊氏殿は建長寺に御逃げになつて、髪を剃らうと思召されたけれども、我々仲間の方が、色々様々として之を御止め申し上げたので、もとより御切りになつたけれども、未だ剃つて坊主頭には成られぬので御座ると曰つたので、將士どもは、大に氣落ちした。そこで、憲房の養子の重能が、僞つて朝廷の觸れ文十餘枚を贋造して、その文句に曰つてあるには、尊氏の一族同類の者共は、罪惡が深くして重きゆゑ、たとひ、彼等が浮世を遁れ山林に入つて行方をくらましたとて、罪を赦しては相成らぬと書き付けて置いた。直義が、それを持つて建長寺に行き、尊氏に面會して、泣いて曰ふには、此觸れ文を敵の屍骸の中から見付け出したと曰つた。尊氏は、つくづくと眺めて溜息をして曰ふには、ほんたうに、斯様な事であるか、それでは、吾も亦、各々方に従つて弓矢を執つて義貞と死を決して戦争すべき筈であるといつて、そこで、僧服を脱ぎ棄て、錦の直垂を著して、出掛けて來た。諸軍は大に喜んで、叫び呼ばり、皆自分で髻を切つて、そして、尊氏一人の姿を可笑しく目立つことの無い様にした。まさに逃げ走つて官軍に降参しやうとして居つた者共が、四方から引き還して來て、一日の中に、三十萬と號するほどの大勢となつた。そこで、直義が先づ六萬の兵士を引き連れて、義貞を箱根に拒いだ。東軍即ち足利方の軍が、や、退きかゝつた。尊氏が、之を聞いて、十八萬騎を引き連れて、後から繼いで進んで、そして曰ふには、敵に對して表面から拒ぐよりは、その背後に出た方が善いと曰つて、兵士を引き連れて、竹下に出掛けた。すると、竹下の官軍が鳴物を鳴らして大に謀ぎ立て、進んで來た。赤松範貞が、我が足利方の先陣であつたが、官軍の陣を望み見て曰ふには、これは京都近傍の弱い兵士であるといつて、そこで、はこ先をそろへて、足柄山を駆け下つた。官軍は敗戦して逃げ走つた。尊氏は其逃げ走るのを追つかけて、伊豆の國府まで行くと、義貞は、とてつ叶はないと思つて、西へ向つて逃げ走つた。尊氏は、そこで、義詮をして鎌倉を守らせ置いて、そして、諸の軍勢を一處に合はせて、之を追ひ詰めて行つた。京都五畿内近傍は、身をふるはして驚き怖れた。後醍醐帝は、あはたゞしく、朝廷に掛け札をして、敵を拒ぐことの出來た者には、重き恩賞を與へやうと揭示せられたけれども、最早、其御命令に應ずる者は丸で無かつた。

【参考】左に太平記の一章を抄録して参考に資す。

矢矧鷲坂手越河原の闘の事

(前略)さる程に、足利左馬頭直義朝臣は、鎌倉に打ち歸つて、合戦の様を申さん爲めに、將軍の御屋形へ參られたれば、四門空しく閉ぢて人もなし。あち、かに門を敲きて、誰か有ると問ひ給へば、須賀左衛門出で合ひて、將軍は矢矧の合戦の事を聞き召し候ひしより、建長寺へ御入り候て、已に御出家候はんと仰せ候ひしを、面々様々申し留めて置き進ませ候。御本結は切らせ給ひ候へども、未だ御法體には成らせ給はずとぞ申しける。左馬頭、高、上杉の人々、是れを聞き、かくては彌々軍勢共憑みを失ふべし。如何せんと仰天せられけるを、上杉伊豆守重能且く思案して、將軍総ひ御出家あつて、法體に成らせ給ひ候とて、勅勸進るまじき様をだに聞き召し候は、思召し直す事などか無くて候べき。謀に論旨を二三通書き、將軍に見せ進らせ候は、やと申されければ、左馬頭兎も角も事よからん様に計らひ沙汰候へとぞ任せられたりける。伊豆守さらばとて、宿紙を俄に染め出し、能書を尋ねて、職事(シキジ)の手に少しも違はず是れを書き。其詞に云、

足利宰相尊氏、左馬頭直義以下一類等、誇武威、輕朝憲之間、所被征罰也。彼輩縱雖爲隱遁身、不可寬刑伐。深尋彼在所、不日可令誅戮。於有戰功者、可被抽賞者、論旨如此。悉之以狀。

建武二年十一月二十三日

武田一族中

小笠原一族中

右中辨光守

へと、同じ文章に名字を替へて、十餘通書いてぞ出したりける。左馬頭直義朝臣、是れを持ちて、急ぎ建長寺へ参り給ひて、將軍に對面有つて、泪を押へて宣ひけるは、當家勅勸の事、義貞朝臣が申し勸むるに依つて、則ち新田を討手に下され候間、此一門に於ては、縦ひ遁世降参の者なりとも、求め尋ねて誅す可しとも議し候なる。叡慮の趣も又同じく通る、所候はざりける。先日矢羽手越の合戦に討たれて候ひし敵の膚の守りに入れて候ひし繪旨共、是れ御覽候へ。か様に候上は、逆も遁れぬ一家の勅勸にて候へば、御出家の儀を思召し召され候ひし敵の陸沈を御助け候へかしと申されければ、將軍此繪旨を御覽じて、謀書とは思ひも寄り給はず、誠にさては一門の浮沈此時にて候ひける。さらば力無し。尊氏も方々と共に弓矢の義を専らにして、義貞と死を共にすべしとて、忽ちに道服を脱ぎ給ひて、錦の直垂を召されける。されば其比鎌倉中の軍勢共が、一束切とて警を短くしけるは、將軍の髪を紛らかさんが爲めなりけり。さてこそ事叶はじとて、京方へ降参せんとしける大名共も、右往左往に落ち行かんとしける軍勢も、俄に氣を直して馳せ参じければ、一日も過ぎざるに、將軍の御勢は三十萬騎に成りにけり。

延元元年。正月。尊氏攻義貞于大渡。我軍多溺。先是。赤松則村叛。應尊氏。徇下山陽。細川和氏從弟定禪。顯氏。並在讚岐。徇下南海。至是。定禪等與赤松範資合兵。攻山崎。尊氏聞之。遣貞範。助攻破之。義貞顧而敗走。奉乘輿。據叡山。尊氏乃入京師。範資。貞範。皆則村子也。於是。尊氏誘園城寺。下之。遣定禪據焉。以逼叡山。會北畠顯家舉陸奥兵。入援行在。定禪連請益兵。尊氏不以爲意。旦日。定禪敗還。義貞追至陣于東山。尊氏指語將士曰。聞義貞喜平地騎戰。今負山不出者。意其兵少。使我不識兵數耳。遣一將嘗之。不利。卻尊氏乃親進。會敵兵雜入我軍。軍遂亂走。及日暮。敵亦引去。細川定禪謂其兵曰。敗由於我。我欲一雪其恥。料敵兵皆疲。不疲者出掠。可以襲也。以兵二百夜返。縱火其前。自後襲之。義貞果不備。敗走。定禪追擊。獲其將領數十人。尊氏復入京師。已而官軍復來攻。我軍不利。陸奥兵二萬騎。火粟田口而來。尊氏望之曰。彼其北畠氏也。吾自當之。進鬪于四條。義貞軍大至。我軍顧之。遂敗走。止戰于桂川。鑿其一隊。官軍乃引還。尊氏復入。謬聞義貞等死。其兵逃走也。分兵要之。官軍乘虛來攻。尊氏敗走。丹波。

【大渡】……山城に在り。【徇下】……となへくだす。觸れまはつて降参せしむること。【從弟】……いとこ。【山崎】……山城に在り。【連】……しきりに、引き續いて。【東山】……京都に在り。【喜】……このむ。【嘗】……ころみる、ためす。【敵兵雜入我軍】……義貞相互に顔を知つて居る兵士をして五十人毎に一組として、旗を卷き、號を捨て、敗卒の狀となして、尊氏の軍中に雜り入らしめ、戰を待つて起らしめしこと、新田氏記に詳し。【將領】……大將様。【陸奥兵】……北畠顯家の兵。【誤聞義貞等死其兵逃走也】……義貞が正成の計を用ひ泣男を使つて足利氏を欺きしこと、楠氏記に詳し。謬りて聞くとは、その欺かれたるを知らずして、虚説を眞受けにして之を信じたるを云ふ。

延元元年正月に、尊氏は義貞を大渡に攻めたが、我が足利氏の軍勢は、水に溺れた者が多くあつた。これより先に、赤松則村は、官軍に叛きて、尊氏に味方し、山陽道に觸れまはつて降参させ、細川和氏の從弟なる定禪、顯氏の二人は、ともに讚岐に居つて、南海道に布令をまはして、降参させたが、こゝに至つて、定禪等は、赤松範資と、兵士を合はせ一處にして、山崎を攻めた。尊氏は、此事を聞いて、貞範を派遣して、助けて山崎を攻めさせて、とうとう之を破つた。義貞は、之を顧みて敗軍して逃げ走り、天子様の御供して、叡山に立て籠つた。尊氏は、そこで、京都に入り込んだ。範資と貞範とは、いづれも皆、則村の子である。こゝに於て、尊氏は、園城寺の僧徒を誘うて降参せしめ、定禪を派遣して其處に立て籠らせて、そして、叡山に迫らしめた。折ふし、北畠顯家が、陸奥の兵士を擧げて、入り來つて、叡山なる行在所を援けたので、定禪は、兵數を増してもちひたいと、しきりに請うたけれども、尊氏は、それを格別氣に掛けて居なかつた。あくる日に、定禪は敗戦して還り、義貞は之を追つ掛けて來て、東山に陣取つた。尊氏は、それを指して曰ふには、聞くところによれば、義貞は、平地に於て騎馬で戦ふのが好きであると云ふ事であるが、今、山を後にして出て來ないのは、察するに、其兵數が少いので、我をして其兵數の多寡を知らしめないやうにする爲めであらうと曰つて、一人の大將を派遣して、之をためして見させたが、勝利を得ずして退却した。尊氏は、そ

ここで、自身に進んで行つたが、折しも敵の兵が我が足利氏の軍勢の中に難つて入り込んで居たので、我が軍は、とうとう隊伍を亂して逃げ走つた。けれども、日暮れ方になつて、敵即ち新田氏の軍勢も亦引き上げて去つた。細川定禪は、その部下の兵士に向つて曰ふには、此度の敗軍は、その本は、私の爲めであるから、我は、一たびその恥辱をそそぎたいと思つて居る。我推量するに、敵の兵士は、残らず皆疲勞して居ることであらう、又、疲勞して居ない者は、出かけて分捕でも致して居ることであらうから、不意撃をするに善い時であるといつて、兵士三百人を引き連れて、夜、引き返して、火を敵の陣營の前に附けて、其背後から之を不意撃した。すると、義貞は、案の通り、備をして居らなかつたので、敗戦して逃げ走つた。定禪は追つかけて撃つて、其大將株數十人を討ち取つた。そこで、尊氏は、ふた、び京都に入り込んだ。とかくする中に、官軍が再び來り攻めたが、我が軍が負けた。すると、陸奥の兵士二萬騎、粟田口に火を附けて攻め寄せた。尊氏は之を望み見て曰ふには、彼れは、大方、北畠氏の軍勢であらう。吾自身に之に當らうといつて、進んで四條に闘つた。すると、義貞の軍勢が大勢押し寄せて來たので、我が軍は、之を顧みて、とうとう負けて逃げ走つたが、ふみ止まつて桂川に戦つて、其一隊を皆殺しにしたので、官軍はそこで引き返した。尊氏はまた京都に入り込んだ。しかるに、義貞等は死んで仕舞つて其軍勢は逃げ走るといふ虚説を聞いて信じたので、兵士を分けて之を待ち伏せして居つたので、官軍は、その隙間に附け込んで攻め寄せて來たので、尊氏は負けて丹波に逃げ走つた。

二月。尊氏赴兵庫。熊野道有者在軍中。與廢主臣僚相識。尊氏召而謂之曰。吾之數敗。非戰之罪也。以我負賊名焉爾。吾始欲擁立一皇胤。以其悉在叡山。不可如何。吾意廢帝抑鬱。不得志久矣。汝安爲我得其詔旨。吾將使兩主爭位。以成吾事也。道有諾而去。

【兵庫】…攝津に在り。【熊野道有】…別當四郎法橋。【廢主】…光嚴帝。【臣僚】…日野資名と云ふ。【負賊名】…朝敵と云ふ名を受ける。【抑鬱】…音ヨクウツ。抑は屈なり、鬱は幽なり。心開けず氣引き立たずしてふさぎ居ること。

二月に、尊氏は、兵庫に赴いた。熊野道有といふ者が、その軍勢の中に居つたが、廢主光嚴帝の臣下の者と知り合ひであつたので、尊氏は、召し寄せて之に向つて曰ふには、吾がたび／＼敗戦するのは、戦争の仕方が悪いからでは無いのである、我が朝敵たる悪名を受けて居るからであるのだ。そこで、吾は、はじめ、一人の皇族の御方を守り立てやうと思つて居つたが、悉く後醍醐帝に隨つて叡山に居らせられるので、如何することも出来ないのである。吾もふに、廢帝光嚴天皇様は、御心開けず御塞ぎになつて居つて、失意の境遇に居らせられること久しい間の事である。汝、どうかして、我が爲めに、その御詔を手に入れてはくれまいか。さうすると、吾は、兩主をして御位を争はしめることにして、それで以て吾が事を成就するやうに致したいものであるといつた。すると、道有は、それを承知して立ち去つた。

赤松則村請尊氏入保摩邪城。或曰。是失天下之望也。今見兵猶足以取

京師。乃屬兵於直義。東上。戰于豐島。敗還。會大友貞宗。大内弘世等以兵艦來援。迎擊官軍于湊川。又大敗。則村又說尊氏曰。師不可用。公宜留諸將于中國及南海。而身赴鎮西。以圖再舉。尊氏從之。與書則村呼之爲父。以深結納之。於是尊氏與直義乘貞宗舟而西。諸將士多降義貞。義貞頗驕怠。耽溺女色。不復窮追尊氏。尊氏得達赤閒關。

【摩邪城】…攝津に在り。【見兵】…音ゲンベイ。現在居る兵士。【豐島】…攝津に在り。【呼之爲父】…齊の桓公が管仲を仲父と稱し、楚の項羽が范増を亞父と稱するの類。【結納】…結託する。【驕怠】…敵に勝ちしが爲めに、心おごりてなまけ油断する。【窮追】…追ひつめる。【赤閒關】…長門に在り。

赤松則村は、尊氏に、摩邪城に入つて立て籠らんことを請うた。ある人が曰ふには、それは、天下の人々の待ち設けて居るところとは違ひます。何でも積極的の攻勢を取らねば、いけません。今、現在居る兵士だけでも、まだ、京都を攻め取るに十分で御座ります。といつたので、尊氏は、そこで、兵士を直義に預けて東の方に向つて上らしめて、豊島に戦つたが、負けて引き退いて來た。折しも、大友貞宗、大内弘世などが、兵艦を以て來り援けたので、官軍を湊川に迎へ撃つたけれども、又、大に敗北した。そこで、則村が又尊氏に説いて曰ふには、かく負けて居るは、軍勢を以て來り援けたこととは出来ませぬ。あなたに、諸將を中國及び南海道に留めて置いて、そして御自身に九州地方に御出掛けになつて、それで以て再度の旗揚を御企てになるのが宜しう御座ります。といつた。尊氏は其言葉に従つて、書面を則村に與へて、則村を呼んで父と云ひ、かくて深く心を結び合つた。こゝに於て、尊氏は、直義と與に、貞宗の舟に乗つて西の方に向つた。諸の將士どもは、義貞に降参する者が多かつた。然るに、義貞は、此度の戦争に勝利を得たので、心おごりてなまけて油断して、女色に耽り溺れて、最早尊氏を追ひつめやうとは致さなかつた。そこで、尊氏は、やす／＼と赤閒關に到着することが出来た。

三月。菊池武敏起兵。應官軍。攻殺少貳貞經。貞經遺囑其子賴尙。曰。吾爲三浦義明也。汝體吾志。慎仕將軍。賴尙引兵迎尊氏。尊氏問貞經死否。賴尙恐沮軍氣也。答曰。訛傳耳。因導至宗像氏。會武敏來攻。尊氏上香椎祠。

以望其軍。可四五萬騎。而顧我兵僅五百人。鎧馬不具。曰。吾死矣。乃進陣赤坂。遣直義先進。賴尚曰。彼鬪士不過三百。其餘聞將軍至。皆將降也。進戰于韮濱。仁木義長。細川顯氏等奮搏敵兵。剝鎧奪馬而進。會北風起。沙石皆走。敵兵沮卻。直義憑風縱擊。追至博多。武敏以全軍返戰。直義自慮不支。馳使尊氏。截衣袖遺之。為訣。曰。公亟走長門。直義將留死於此。尊氏得報曰。吾弟如死。吾何生為。親將赴援。松浦氏。神田氏。謂大兵至矣。舉其衆來降。合擊大破武敏軍。追至大宰府。於是聞貞經定死。尊氏直義為之舉哀。尊氏乃遣一色賴行。仁木義長。攻陷菊池。八代諸城。鎮西皆服。

【遺囑】……遺言して言ひ附ける。【三浦義明】……老年の身を以て、相模の衣笠城に留まつて戦死し、其子義澄等を勵まして頼朝の爲めに力を致さしめしを云ふ。事、源氏記に詳なり。貞經自ら義明に比し、頼尚を義澄に比する也。【體吾志】……わが志を篤と覺えて居れよ。【龍傳】……音クワデン。誤りたる風聞。宗像氏……宗像神社の大宮司、名を政福と曰ふ。筑前の宗像郡に在り。【香椎祠】……筑前の糟屋郡に在り。祭神は仲哀天皇なり。【續演】……筑前に在り。【博】……組討すること。【劍鎧】……よろひをはぎ取る。【憑風】……風による。風上に立つて風をたよりにする。【縦撃】……兵士を思ふまゝに出しやりて手あたり次第に撃つてかゝる。【博多】……筑前に在り。【遺之】……遺は賂る也。【大宰府】……筑前に在り。【舉哀】……哀悼の意を表して物忌する。【菊池】……肥後に在り。【八代】……肥後に在り。【遺言】三月に、菊池武敏は、兵を起して官軍に味方して、少貳貞經を攻め殺した。すると、貞經は、死せんとするときに、其子の頼尚に遺言して言ひ附けて曰ふには、吾は、三浦義明となつてこゝに討死するのである。汝は吾が志を汝が身に引き受けて篤と記憶して居つて、慎んで將軍尊氏公に仕へよと曰つて置いた。そこで、頼尚は、兵士を引き連れて尊氏を迎へた。すると、尊氏は、貞經が死んだかどうかと問うた。頼尚は、本當の事を話したならば軍士の志氣を落膽させる事があるかも知れぬと云ふ事を恐れて、答へて曰ふには、私の父貞經が死んだといふ

事は、それは誤つたる風説で御座ります。私の父貞經は、ちやんと生きて居りますと曰つた。そこで、尊氏を案内して、宗像氏の處へ往つた。折節、武敏が攻め寄せて來た。尊氏は、香椎神社に上つて、そして其軍勢を望み見ると、四五萬騎ばかりも有らうといふ大軍である。然るに我が味方の軍勢を顧みれば、わづかに五百人に過ぎず、その上に、鎧や馬も十分に揃つて居なかつた。尊氏が曰ふには、吾はもはや死ぬるのであると曰つて、そこで、陣營を赤坂に進め、直義を派遣して、先づ進ませしめた。頼尚が曰ふには、敵の軍の中で本當に闘ふ者は、三百人位に過ぎませぬ。其餘の大多數の者どもは、將軍が御出でになつたと聞いては、皆、降参しやうとする者で御座りますと曰つた。かくて、進んで韮濱に於て戦つた。すると、仁木義長、細川頼氏などは、奮つて敵兵と組討して、敵の鎧をはぎ取り、敵の馬を奪ひ取つて進んだ。折しも、北風が吹き起つて、沙や小石が皆吹き飛ばされるほどであつたので、敵の軍勢は、向ひ風の事故、勇氣がくじけて退却し出した。直義は、風上に在つて風をたよりにして、兵士を自由に掛けさせて手當り次第に撃ちまくつて、追つかけて博多に至ると、武敏が全軍を引き連れて、引き返して戦つた。すると、直義は、とても敵軍を支へることは出来ないことを、自ら思つたので、使を尊氏の許に走らせ、著物の袖をむしり切つて、之を送り、暇乞をして曰ふには、あなたは、速に長門の方へ御逃げなさい。私は、此處に留まつて討死しやうと思ひますと曰つて遣つた。尊氏は、その報知を得て曰ふには、吾が弟の直義が若し死んだならば、吾はどうして生きて居やうぞと曰つて、自身に大將となつて、出掛けて行つて助けた。松浦氏、神田氏は、大軍が來たのであると思つたので、其部下の者共を盡く引き連れて、來つて降参した。そこで、其兵士を一處にして撃つて、大に武敏の軍を破つて、逃ぐるを追つかけて大宰府まで至つた。こゝに於て、始めて、貞經が死んだに相違ない事を聞いたので、尊氏と直義とは、その爲めに物忌をして哀悼の意を表した。尊氏は、そこで、一色頼行、仁木義長を派遣して、菊池、八代などの諸の城を攻め落させて、九州地方は、皆、尊氏に服従して仕舞つた。

而中國南海諸將又竝起應之。義長兄頼章。與久下時重等據丹波。赤松則村據播磨。石橋和義據備前。於是義貞攻則村白旗城。城壁未成。則村詐遺之書曰。元弘之初。臣數挫強賊。而賞出於降虜下。故背此嚮彼。豈其志也。願得州守護。以圖報效。義貞喜。爲請詔旨。往反旬餘。詔至。而壁成。則村還。詔書不受。曰。守護已獲之於將軍矣。何以此翻覆。論旨爲。義貞大恚。合兵六萬。圍則村。使弟義助攻石橋和義。和義。則村。皆堅守不下。遣使告急於尊氏。

【出於降虜下】……降參した奴原より劣る。【背此嚮彼】……背は反面なり、嚮は向なり。此は官軍、彼は足利氏なり。官軍にそむいて足利氏に附く。【報效】……恩に報いて力を致す。【往反句餘】……往復するの十日餘かゝつた。【志】……恨怒なり。無念に思うて怒る也。【遣使告急於尊氏】……その使となりし者は、則村の三男則祐并に因幡守秀光なり。

【調遣】さうして、中國や南海道の諸將が、又、並び起つて、足利氏に味方した。義長の兄頼章は、久下時重等と、もに、丹波に立て籠り、赤松則村は播磨に立て籠り、石橋和義は備前に立て籠つた。こゝに於て、義貞は、則村の白旗城を攻めたが、其時に白旗城の外壁は未だ出来上つて居なかつたので、何分防戦するに都合が悪かつたから、則村は、詐つて義貞に書面を送つて曰ふには、元弘年間の初めに當つて、私は勤王の兵を擧げて、度々強大なる賊を取り挫きました。然るに、恩賞は降参した奴原より劣つて居りました。それ故に、今、官軍にそむいて足利氏に附いたので、御座りませんが、これは、どうして私の本来の志で御座りませうぞ。何卒、播磨の守護職と成ることを得まして、その上で、御恩に報いる爲めに力を盡すことに致したいもので、御座りませうと曰つた。義貞は、喜んで、その爲めに詔を請ひ受けることにしたが、往復の日数が十日餘かゝつて、御詔が到着したが、すると城壁がすつかり出来上つたので、則村は、その御詔の書面をつき戻して、受け取らずして曰ふには、此國の守護職は、もはや將軍足利殿から貰ひました。どうして此變化して常なき當てにならぬ御詔が入りませうぞと曰つた。そこで、義貞は、大に無念に思うて怒つて、兵士六萬人を合はせて、則村を圍み、弟義助をして石橋和義を攻めさせた。和義、則村は、いづれも皆、堅く守つて落城せず、使を遣はして、危急なる事を九州なる尊氏に報告した。

五月。尊氏使頼行。義長守鎮西。而率諸軍。發大宰府。至嚴島。會僧賢俊。奉廢帝書。至尊氏大喜。令諸將立錦旗。遠近競附。兵艦凡七千餘艘。進至鞆津。以少貳頼尙策。附二十萬人於直義。上陸拔福山。義貞遽釋圍而走。備前。丹波。美作。官軍。望風解去。尊氏至室津。赤松則村出圍迎謁。收敵所遺旗幟百餘于城下。以獻尊氏。視其旗號。多故部屬。曰。避害焉耳。今將來歸。已而來降者果多。而陸軍亦會。夾擊楠氏兵于兵庫。鑿之。合軍擊義貞。義貞走歸。復奉乘輿。據叡山。法皇。廢帝。廢帝弟豐仁親王皆託疾不從。往依尊氏。尊氏據東寺爲城。六月。遣軍仰攻叡山。不利。義貞追入京師。

尊氏伏兵于街巷。而出羸兵。且戰且卻。誘敵入京中。伏起大戰。義貞敗走。又聞義貞計夾攻也。乃遣兵邀擊走之。義貞誘興福寺僧徒。令畿内南海兵絕我糧道。乃遣細川定禪。今川範國。擊走南海兵。

【嚴島】……安藝に在り。【鞆津】……備後に在り。【福山】……播磨に在り。【避害焉耳】……心ならずも一時官軍に従つて、斯くして害に遭ふことを避けたゞけの事である。【兵庫】……攝津に在り。【法皇】……花園帝なり。これより先、建武二年に御落飾せられ、萩原殿におはし、萩原法皇と申し奉りしなり。【東寺】……京都に在り。【街巷】……町。縦なる大通を街といひ、横なるを巷と云ふ。

【興福寺】……音ルキヘイ。弱き兵士。【興福寺】……奈良に在り。

五月に、尊氏は、頼行と義長とをして鎮西を守らせておいて、そして、自分は諸軍を引き連れて、大宰府を出發して嚴島まで至ると、折節賢俊が廢帝光嚴帝の御詔書を奉じて到着したので、尊氏は、大に喜び、諸將をして錦の御旗を立てさせることにしたので、遠近の者共が、先を争うて來り附き従つて、兵艦凡七千餘艘の多數となり、進んで鞆津まで至ると、少貳頼尙の謀によつて、二十萬人を直義に預けて、上陸させて福山城を攻め取つた。すると、義貞は、あはたゞしく白旗城の圍を解いて走り、備前、丹波、美作の官軍ども、風を望んで解散して去つた。かくて、尊氏が室津に至ると、赤松則村は、圍まれて居つた白旗城を出で、迎へて面謁し、敵が置き去りにして往つたところの旗やのぼり百餘本を城の下で拾ひ集めて、それを尊氏に差出した。其旗じるしを見ると、もつと部下であつた者が多かつた。そこで尊氏が曰ふには、これは、一旦の害を避けんが爲めに、心ならずも官軍に附いたゞけのものである。今に來つて降参するであらうと曰つた。とかくする中に、來つて降参する者が、案の通り、多くあつた。さうして、直義の引き連れて居つた陸軍も亦、來りて一處になつて、楠氏の軍勢を兵庫に於て兩方から夾み撃ちにして、之を皆殺しにし、軍勢を合はせて義貞を撃つた。義貞は逃げ走つて京都に歸り、ふたゞ天子様の御供して、叡山に立て籠つた。花園法皇、廢帝即ち光嚴帝、及び光嚴帝の弟君なる豐仁親王は、いづれも皆、御病氣にかこつけて、後醍醐帝には從はせられず、出掛けて行つて尊氏に御たより遊ばされた。そこで、尊氏は、東寺に立て籠つて其處を城となし、六月に、軍勢を派遣して、仰いで下から叡山を攻めさせたけれども、勝利を得なかつた。義貞は、之を追つかけて京都に入り込まうとした。尊氏は、兵を町の中に伏せ置き、そして弱い兵だけを出して、戦ひながら退却して、敵をおびき寄せて京都の中に入り込ませた。すると、伏兵が起つて大に戦つたので、義貞は負けて逃げ走つた。尊氏は、又、義貞が夾み撃ちにしやうと計畫して居るといふ事を聞いたので、そこで、兵士を派遣して迎へ撃つて之を敗走させた。すると、義貞は、興福寺の僧徒を誘うて、畿内、南海道の兵士をして我が足利氏方の兵糧運搬の道を絶ち切らせた。そこで、細川定禪と今川範國とを派遣して、南海道の兵を撃つて敗走させた。

七月。義貞以數不得志。計四面來攻。藤原隆資先至。攻南門。我兵盡北出。拒義貞。獨高師直與弟師泰在焉。出戰而敗。敵焚門樓。城内惶擾。尊氏方

誦經自若。土岐賴氏侍坐。曰。惡源太如在。於拒之何有。惡源太。其子賴直也。適賴直入見。賴氏喜。問曰。北面之戰未乎。曰。不知也。適在三條。望東寺煙揚。乃還耳。師直曰。敵至南門。煩公出拒。賴直諾而出。尊氏呼返之。賜之寶刀。賴直拜而受之。自北門出。於敵左。下馬而射。敵兵亂潰。乃上馬。騎而馳之。手斫六人。師直等復出援擊。遂走隆資。而義貞已至北門。請與尊氏各獨身決鬪。尊氏奮然。起曰。亟開門。吾非敢敵官家。獨欲與義貞決耳。上杉重能諫曰。彼窮而出。於此將軍何自輕也。會土岐賴遠破大宮敵。乘勝踵義貞軍後。義貞大敗。傷其左眉。走歸叡山。足利氏於是議奉廢帝復位。衆以元弘事以為不祥也。八月。乃立豐仁親王。是為光明帝。號用建武。後改曆應。尊氏為權大納言。直義為左馬頭。

【門樓】……門の物見。【惶擾】……音クワウゼウ。おそれ惑うてさわぎ亂れる。【自若】……音ジジャク。もとの如くにして少しも變らず平氣なること。【煩公】……貴殿に御苦勞を掛けたい。【官家】……天朝。【踵】……音シヨウ。追躡なり。あとをつけて追つかける。【以元弘事以為不祥】……光嚴帝は、往時北條氏に立てられしが、海内覆亂し北條氏亡びて、元弘三年に廢され給ひしことある故、縁起が悪いと思ふなり。不祥は不吉なり。

【譯】七月に、義貞は、度々失敗して思ふ様にならなかつたので、四方から攻め寄せられて来ることを計畫した。藤原隆資が、先づ來つて、東寺の南門を攻めたが、我が足利氏方の軍勢は、残らず皆北の方に掛けて行つて義貞を拒いで居つたので、唯高師直が、弟の師泰と共に居つたのであつて、出で、戦つたが、負けた。敵は門の物見に火を附けたので、城内では恐れ惑うて亂れ騒いだ。尊氏は、その時丁度御經を讀んで平氣で居つた。土岐賴氏が其側に侍して坐つて居つたが、賴氏が曰ふには、惡源太が若し居りましたならば、之を拒ぐことは何でも無いことと御座りますと曰つた。惡源太といふのは、賴氏の子の賴直の事である。すると丁度、賴直が入つて尊氏に面謁した。賴氏が喜んで問うて

曰ふには、北の方の戦は未だ始まらないかと曰つた。賴直が曰ふには、存じませぬ。私は折しも三條に居りましたので、東寺に煙が揚つたのを見まして、それで引き返して參つたわけ、御座りますと曰つた。すると、師直が曰ふには、敵兵が南門に押し寄せて來たから、御苦勞ながら、貴殿一つ出掛けて拒いで下さいと曰つた。賴直は、承知しましたと曰つて出掛けた。すると、尊氏が之を呼び返して、之に寶刀を賜はると、賴直は一禮して之を受け取り、北門から敵の左の方に掛けて行き、馬から下りて射かけた。すると、敵の軍勢は混雜して崩れたので、賴直は、そこで、馬に乗り、騎馬でもつて、敵の方に駆け付け、手づから六人を斬り付けた。師直等は、ふた、び出で、助けて撃ち、とうとう隆資を敗走させた。然るに、一方に於ては、義貞は、もはや、北門に到着して、尊氏と各々一人で決闘せんことを申し込んだので、尊氏は奮然として起ち上つて曰ふには、速に門を開けよ。吾は、何も天朝に向つて敵對するのでは無く、たゞ義貞と勝負を決しやうと思つたわけの事であつたと曰つた。すると、上杉重能が諫めて曰ふには、彼れ義貞は、困つたあげくに、かやうな事に及んだので、御座ります。將軍には、どうして自ら御身を輕んぜられるので御座りますかと曰つた。折しも、土岐賴遠が、大宮小路の兵を破つて、勝つた勢に乗じて、義貞の軍の後より追ひかけて來たので、義貞は大に負けて、其左の眉に負傷して、逃げ走つて叡山に歸つた。足利氏は、こゝに於て、廢帝即ち光嚴帝を奉じて再び御位に即け奉らうと相談した。けれども、多くの人々は、廢帝には元弘の時に御位に即かれて開も無く廢せられたまうた事があるもので、縁起が悪いと思つた。八月に、そこで、豐仁親王を立てた。是れは光明帝である。年號は、はじめは南朝の建武を用ひられたが、後に曆應と改元せられた。尊氏は、權大納言となり、直義は左馬頭となつた。

隆資卿自八幡被寄事

京都の合戦は十三日の巳刻と、兼ねて諸方へ觸れ送りたりければ、東坂本より寄する勢、關山今路の邊へ引かれて、時尅を待ちける處に、敵やたばかつて火を懸けたりけん、北白河に焼失出で來て、煙着天に充滿したり。八幡より寄せん宮方の勢共是れを見て、すはや山門より寄せて、京中に火を懸けたるは、今日の軍に爲おくれは、何の面目か有るべきとて、相圖の尅限をも相待たず、其勢纒に三千餘騎にて、鳥羽の作道より、東寺の南大門の前へぞ寄せたりける。東寺の勢は、山門より寄する敵を防がんとて、河合(タマス)北白河の邊へ、皆向ひたりければ、卿相雲客、或は將軍近習の老若兒(チゴ)などばかり集り居て、此敵を防ぐ可き兵は更になかりけり。寄手の足輕共、鳥羽の田の面の畔(クロ)をつたひ、四塚羅城門のくろの上立ち渡り、さんぐに射ける間、作道まで打ち出でたりける高武藏守師直が五百餘騎射立てられて引き退く。敵彌々勝に乗つて、持楯ひしき楯を突き寄せ、かつぎ入れて攻めける程に、坤(ヒツシサル)の角(スミ)なる、出屏(ダシベイ)の上の高橋一つ念なく攻め破られて焼ける。城中是れに躁がれて、聲々にひしめき合ひけれども、將軍はちつとも驚き給はず、鎮守の御寶前に看經しておはしける。其前に問注所の信濃入道大と、土岐伯耆入道存孝と二人俱して候ひけるが、存孝傍(ツバ)を吃と見つと參りたり。存孝うれしげに打ち見て、いかに上の手の軍は未だ始まらぬか。いや、それは未だ存知仕らず候。三條河原まで罷り向つて候軍に討ち負けて引き退くといへども、此御陣の兵多からねば、入り替る事叶はず、已に坤の角の出屏を打ち破られて、楯を焼き落さるゝ上は、將軍の御大事此時なり。一騎なりとも御邊打ち出で、此敵を拂へかし。畏つて承り候とて、惡源太御前を立ちけるを、將軍、暫しとて、いつも帶副(ハキヅ)にし給ひける御所作り、兵庫録(タサリ)の御太刀を引出物にぞせられける。惡源太、此太刀を給はりて、などか心の